

筑波大学博士（文学）学位請求論文

日本近現代文学における羊の表象

江口 真規

2015 年度

## 【目次】

目次	i
凡例	iv
序章	1
第1節 本論文の目的と問題設定	1
第2節 先行研究と本論文の位置付け	3
第3節 本論文の構成と各章の概要	6
第1章 夏目漱石『三四郎』——「 <sup>ストレイシープ</sup> 迷羊」の英文学的背景とその解釈——	10
第1節 はじめに	10
第2節 羊の異質性——日本における羊の歴史	14
第3節 『新約聖書』における「迷える羊」と『トム・ジョウンス』との比較	19
第4節 「墮落女学生」としての美禰子	24
第5節 「書く女」としての可能性の否定——アフラ・ベーンへの言及を通して	28
第6節 漱石の英文学研究と羊	31
第7節 終わりに	35
第2章 江馬修『羊の怒る時』——関東大震災における怒れる民衆としての羊——	48
第1節 はじめに	48
第2節 江馬修の経歴と『羊の怒る時』	51
第3節 「羊の怒る時」と地震の発生——黙示録的解釈	56
第4節 群れるものとしての羊	60
第5節 『台湾日日新報』に掲載された理由	67
第6節 『羊の怒る時』に描かれた社会主義者弾圧の諸相	70
第7節 「羊を怒らすこと勿れ」——羊飼いへの警鐘	74
第8節 終わりに	79

第3章	らしゃめんの変容——唐人お吉物語と戦後占領期における羊の表象——	88
第1節	はじめに	88
第2節	らしゃめんの起源とその変遷	90
第3節	らしゃめんとしての唐人お吉物語	93
第4節	戦後占領期のらしゃめん——パンパンとの比較	99
第5節	高見順『敗戦日記』——去勢された小羊としての日本人男性	104
第6節	大江健三郎「人間の羊」——女性化された日本人男性	111
第7節	終わりに	122
第4章	安部公房作品における羊の表象	
	——「満洲」の緬羊政策と牧歌的風景の構築——	131
第1節	はじめに	131
第2節	変形譚としての「詩人の生涯」	132
第3節	「詩人の生涯」と『詩集下丸子』	139
第4節	戦後日本における緬羊飼育の発展と「満洲」の緬羊政策	144
第5節	安部公房の植民地経験と羊	151
第6節	「盲腸」「羊腸人類」『緑色のストッキング』——羊の腸を移植される人間	157
第7節	終わりに	162
第5章	村上春樹『羊をめぐる冒険』——「迷羊」の継承と三人の「羊つき」——	171
第1節	はじめに	171
第2節	観光牧場の誕生——高度経済成長期におけるイメージとしての羊の消費	172
第3節	『三四郎』からの影響と日本近代の象徴としての羊	177
第4節	羊博士の「羊つき」——憑き物から精神病へ	183
第5節	先生の「羊つき」——身体と精神のコントロール・テクノロジー	190
第6節	「鼠」の「羊つき」——高度資本主義社会へのアンチテーゼ	196
第7節	終わりに	203
結章		211

参考文献一覽	217
図版一覽	242
卷末資料	244
初出一覽	245

## 【凡例】

1. 引用に際して、漢字は原則として新字体に改め、特に必要のない限り原文のルビは省略する。
2. 引用は「」（日本語）と“ ”（英語）で括る。引用中の論者による補足や中略は〔 〕で括る。
3. 『 』は著書の題名および雑誌・新聞名、「 」は作品名や論文、雑誌記事などのタイトルを示す。
4. 引用記号の中に更に「 」が必要な場合にも、同じく「 」を用い、『 』に変化させることはしない。
5. 作品名、引用以外の「 」は、強調または留保を示す。
6. 引用文中、今日では不適切と考えられる語句や表現の使用がみられるが、原文の歴史性を考慮しそのまま用いる。
7. 「満洲」「満洲国」の表記については、時代的な文脈を考慮し批判的な検討を行うため、「 」を付して用いる。

## 序章

### 第1節 本論文の目的と問題設定

本論文の目的は、近年台頭したアニマル・スタディーズの動向を踏まえつつ、日本近現代文学における羊の表象を文化的・社会的権力の変遷を反映するものとして考察することである。

動物の表象を通して人間の文化的営為を検討する試みは、古くはラスコー洞窟壁画の動物や古代ギリシアの動物変身譚を分析の対象として、数多くの研究がなされてきた。その中でも、1980年代以降の「アニマル・スタディーズ」(animal studies)における成果は特筆に値する。アニマル・スタディーズという研究方法が生じた背景を略述すれば次のようになる。1950年代以降の文化研究及び文学研究では、ジェンダー批評やポストコロニアル批評、エスニシティ研究など、支配的言説から疎外されてきた<他者>に焦点を合わせ、人間の社会行為の是非を問う論議が交わされた。1970年代には地球環境の破壊に対する危機感が世界規模で広まったが、これらの批評活動においては、人種・階級・ジェンダーやセクシュアリティの問題が議論の俎上に載せられたものの、自然環境に対する意識はみられなかった。この反省から、自然と文化的構築物との相互関係を射程とする「エコクリティシズム」(ecocriticism)の研究手法が生まれた<sup>1</sup>。上記のような文学批評の系譜を継承し、<他者>表象としての動物に着目したアニマル・スタディーズの研究が精力的に試みられている。

アニマル・スタディーズは、動物と人間の差異や共生のあり方を再考し、生命倫理の立場に基づいた動物の権利・解放の提唱運動と結び付いてきた。この動向は、生物学、動物学、法学、コンピューター科学等、多様な学問分野や社会活動と関連し、学際研究の一領域として地位を築きつつある。アニマル・スタディーズの議論では特に、『動物の解放』(*Animal Liberation: A New Ethics for Our Treatment of Animals*, 1975)の著者であるピーター・シンガー(Peter Singer, 1946-)や、動物と人間とを明確に区別する西欧近代哲学について脱構築的な読解を行ったジャック・デリダ(Jacques Derrida, 1930–2004)、『動物のいのち』(*The Lives of Animals*, 1999)等の作品で動物と人間の生命の根源を問

う J・M・クッツェー (J. M. Coetzee, 1940-) らによる見解が参照されている。

しかし、アニマル・スタディーズの理論的枠組みにおいては、西欧文化や英語圏文学が分析対象の主流を占めており、研究の主体も「白人男性中心的」であるという指摘がみられる<sup>2</sup>。また、植民地支配の歴史やグローバリズムの台頭に伴い、宗主国の家畜を植民地・占領地域に移入し、あるいは農作物を拡張生産することで生態系を破壊する「エコロジカル・インペリアルイズム」(ecological imperialism) に対する意識の高まりを受け、2000 年代後半以降は「ポストコロニアル・エコクリティシズム」(postcolonial ecocriticism) と称される研究方法が模索されてもいる。これにより、非西欧社会や旧植民地、あるいは今日の資本主義グローバル社会の中で環境的負荷を担う地域を描いた文学作品を通して、自然と社会について考究する動きも進んでいる<sup>3</sup>。しかし、各文化における動物観や個々の生物種を扱う議論が深められているとは言い難く、どのような生物を「動物」とみなすのかという点にも諸説あり、分析の対象となる種にも偏向がある<sup>4</sup>。昆虫や魚類・菌類等と比較すると、犬や猫などの愛玩動物や、人間にとって利用価値の高い馬や牛、チンパンジーやオランウータン等の類人猿に関する論考は東西を問わず数が多く、アニマル・スタディーズの研究領域においても種差別 (speciesism) の傾向の残滓が見受けられる。

本論文では、上記のようなアニマル・スタディーズの研究手法と目的意識に基づき、羊の表象について、綿羊飼育の文化的・社会的背景と合わせて考察する。羊と人間との関わりの歴史を概観すれば、羊の原産地は中央アジア地域と想定されるが、羊の牧畜は紀元前 3000 年頃ティグリス・ユーフラテス川流域における定住農耕民の文化から発生し、中央アジア、ヨーロッパへと広まった<sup>5</sup>。これ以降、羊は、人間の経済活動によって利用され馴致される家畜動物として、牧畜・放牧地域における食生活や衣服、宗教的価値観といった文化の形成に大きく関与してきた。近代ヨーロッパ社会における綿羊飼育と羊毛加工技術の発達は、資本主義の勃興と産業革命を導き、植民地政策を担うものでもあった。また、羊毛・羊肉生産のために品種改良を重ねられた羊の身体は、人間の経済価値に利するように変形されてきたものといえる。羊という動物が歩んだ歴史とその表象を究明することは、羊をどのような目的で、いかに利用するかという、産業基盤における技術進歩の理解を促すものである。

日本における羊の文化的・社会的意義については、羊は明治時代以降、欧化政策とアジアへの植民地政策の一環として西欧から輸入され飼育された動物であることがわかる。羊

は近代以前には、主に外国からの貢物としてしか日本に存在していなかった。江戸時代には一部の藩で小規模な飼育が試行されたものの、その数は少なく、キリンなどと同じように「見世物」とされた稀少な動物であった。このため羊は、限られた文献をもとに想像上の生き物であるかのように表象されていた。しかし、1870年代後半からは、軍用衣料生産のために国策として英国から羊が輸入され、その飼育が推進された。このような羊の輸入とともに帝国主義イデオロギーが広まった日清・日露戦争前後には、西欧文化・文学の流入や翻訳活動により、羊のいる牧歌的風景への憧憬と、従順や犠牲者といった羊のイメージが広まっていった。第一次・第二次世界大戦を経て羊の需要はさらに高まり、綿羊飼育事業は特に「満洲」の農業移民政策として奨励された。

戦後の政治的・経済的転換により、オーストラリアやニュージーランドからの羊毛・羊肉の輸入が自由化されて以降、日本における羊の物質的価値は減少した。北海道などの一部地域を除けば、現在ではごく僅かな数の羊が観光牧場で飼育されているに過ぎない。現在では羊は日常的に接する機会の少ない動物ではあるが、純粋・無垢・従順といったイメージは広く定着し、それは「癒し」を謳う商品やポップカルチャーの中で大量に消費されている。

上記のような日本における羊の歴史を辿ることは、西欧の文化的権力の影響を受けた明治の開化政策と植民地主義、そしてこの近代を継承した現代社会の様相を顧みることにつながる。日本において羊は、国家の近代から現代への移行過程を象徴しており、その表象は各時代によって異なる。物理的に不在であるか、または遭遇の機会が限定されているために、日本における羊の表象は時代や社会文化状況に大きく影響を受けた想像力によって構築されてきた。本論文が特に日本の羊に焦点を絞る理由は、このような一連の表象の特異な意味作用や機能を新たに解明するためである。

なお、本論文で分析の対象とする羊は、哺乳類偶蹄目ウシ科のヒツジ(学名 *Ovis Aries*)である。羊の名称については、日本語では羊の他にも「緬羊」「綿羊」「めん羊」等の表記があるが<sup>6</sup>、本論文では「羊」の表記を使用し、特に畜産に関する文脈において羊に言及する場合には適宜「緬羊」の表記を用いる。

## 第2節 先行研究と本論文の位置付け



先述したアニマル・スタディーズの視座からは、近現代日本における動物と人間との関係を、羊の個別例を通して考察する研究として本論文を位置付けることができる。西欧文化を主眼とした研究が支配的である当該分野において、非西欧圏を対象とした研究は、文化人類学等の領域でオリエンタリズム的な視点を免れ得ていない場合が多い。その中でアジア地域の動物について、ヒンドゥー教・ジャイナ教・仏教など比較宗教学の視点から総合的に論じたものとしては、クリストファー・キー・チャプルの研究<sup>7</sup>がある。しかし、チャプルの考察にはアジア各地域での具体的事例が不足しており、西欧に対するアジアという広域な対象が扱われているため、個々の文化が一般化されアジア内部の差異や特異性が見逃されがちである。

アニマル・スタディーズの目的や傾向に即したものととは限定されないが、日本の動物を対象とした研究や、日本で行われている動物に関する研究動向も合わせて確認しよう。近年、日本の動物観や個々の生物種に注目した研究集成としては、*JAPANimals: History and Culture in Japan's Animal Life* (2005) 等が挙げられる。例えばこの論叢の著者の一人であるアーロン・スキュブランドは、1850年代から2000年代の日本における犬の表象を「帝国主義を鼓舞するエージェント」<sup>8</sup>として分析し、日本近現代史を把握し直している。2000年代後半以降には、歴史学、考古学、人類学、社会学、法学、哲学、表象文化論等の様々な学問分野において、動物をテーマとしたワークショップやシンポジウムが日本国内で頻繁に開催されている。文学・文化研究の分野においては<sup>9</sup>、日本では英米文学作品を分析の対象とした環境批評論的読解が行われつつあるが<sup>10</sup>、アニマル・スタディーズの議論の日本文学への応用は十分になされていないのが現状である。

本論文は、このようなアニマル・スタディーズの研究成果を批判的に継承するものである。そして、日本近現代文学における羊の表象を考察することにより、日本の動物の歴史の個別例を提示するだけでなく、そこに反映された社会背景や西欧文化との葛藤の様相も前景化させる。文化圏を越えたグローバルな動物の移動に主眼を置くことで、動物と文化についての研究により多角的な視点を提供し、アニマル・スタディーズの議論に貢献することができる。

動物の中でも、特に日本文化における羊の研究については、犬や猫、馬、牛など、近代以前から生息していた動物と比較すればその数は少ない。日本文学における羊の表象に関しては、作品論あるいは作家論において解釈の一手段として用いられてきた。特に夏目漱

石（1867–1916）の『三四郎』（1908）で描かれる「迷<sup>ストレイシープ</sup>羊」と、村上春樹（1949–）の『羊をめぐる冒険』（1982）を中心として、千種キムラ・スティーブン<sup>11</sup>や柴田勝二<sup>12</sup>等による先行研究がある。その中でも、松枝誠は、「羊をめぐる冒険」論——北海道から満州、そして戦後——（2007）において、日本文学に描かれた羊に関して、江馬<sup>え ましゅう</sup>修（1889–1975）の『羊の怒る時』（1924–1925）や、杉浦明平<sup>みんぺい</sup>（1913–2001）の「小羊をねらう狼」（1954）、大江健三郎（1935–）の「人間の羊」（1958）などを例として挙げている<sup>13</sup>。松枝の論においてはこれらの作品については単なる紹介に留まっているが、羊は被支配者を体現するものであり、それによって支配者の側が批判されていると松枝は述べる<sup>14</sup>。近現代日本文学における被支配者としての羊という表現については、マイク・モラスキーの『占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ』（2006）の一節でも言及されている。モラスキーは、高見順（1907–1965）の『敗戦日記』（1959）にみられるように、戦後日本の小説家が羊という象徴を用いて、日本の軍国主義者とアメリカ占領者に対する日本人の受動的な反応を表していることを指摘した<sup>15</sup>。

しかし、これらの論考では、日本における羊の歴史性に注意が払われることはなく、現在の羊に関する知識や認識が自明のものとされたうえで論が展開されてきた。その意味において、日本文学における羊の表象の変遷を歴史的枠組みから解明する試みは行われておらず、本論文がその嚆矢となる。これまで日本近現代文学の羊に関して分析の対象となってきた上述の作品を中心に、その表象の変遷を時代背景に即して詳細に分析することにより、被支配者や犠牲者の象徴といった一般化されたイメージに留まらない解釈を提示する。

日本における羊と文化の研究について、文学研究以外では、山根章弘による羊の文化誌研究『羊毛の語る日本史——南蛮渡来の洋服はいかに日本文化に組み込まれたか』（1983）が挙げられる。山根は、室町時代以降の日本における羊と羊毛製品の受容の変遷から、貴族や庶民の服飾史を考証している。しかし、山根の研究対象の中心は紡績工業と服飾文化であり、羊肉としての羊の価値や植民地における羊毛生産の歴史は顧みられておらず、文学作品における羊の表象についても資料元として言及されるに留まっている。本論文では、山根の研究成果を参考にし、文学作品の中で記述される衣服やその素材にも注意を払いながら、羊毛製品だけではなく羊という動物と人間との関係性を文学作品から読み取ることにより重点を置く。

上述の目的を達成するため、本論文では、羊を象徴的に用いている文学作品について、

新聞・雑誌等から読み取れる同時代言説や、美術作品・広告等の視覚資料を扱い、学際的な分析を行う。羊が羊毛や羊肉として生産され消費される動物であるという事実を考慮し、畜産、農業、生物学分野のデータを参照し分析する必要もある。また、対象とする作家への影響が指摘される海外文学作品も研究の視野に入れた比較文学の手法を用いることで、異なる文化や言語の影響とその受容・変容を探究する。

### 第3節 本論文の構成と各章の概要

本論文は序章と結章を除いて5章から構成される。第1章から第5章では、分析対象とする文学作品を発表年代順に配置することにより、1900年代から1980年代における羊の表象の変遷を明らかにする。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、明治時代後期に発表された夏目漱石の『三四郎』にみられる羊の表象について考察する。日本において羊の飼育頭数がごく僅かであった時期に、多義的な解釈を提起する羊がテキストに登場する点において、『三四郎』は日本近現代文学における羊の表象を考察するうえで重要な作品である。この作品にみられる「迷<sup>ストレイ</sup>羊」という表現について論じた先行研究では、キリスト教における羊の象徴性に基づいた読解が多い。しかし本論文では、“stray sheep”という語の初出が、漱石の研究対象であった18世紀英文学の一作品、ヘンリー・フィールディング（Henry Fielding, 1707–1754）の『トム・ジョウズ』（*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749）であることに着目する。これにより、英文学をはじめとする西欧の文化的権力の影響下における羊の概念の輸入と、それが明治時代後期の日本の社会言説に適用されていく過程を見出すことができる。

第2章では、1923（大正12）年の関東大震災における被災体験に基づいて執筆された、江馬修の『羊の怒る時』を分析の対象とする。この作品は、震災時に発生した朝鮮人虐殺事件の様子を克明に描いたルポルタージュ作品として読まれてきた。しかし、作者の江馬修については、忘却された大正時代の作家として、これまで十分な考証が行われてこなかった。本論文では、江馬のプロレタリア作家としての経緯や、『台湾日日新報』（1898–1944）に掲載されたという作品発表の背景を分析することにより、羊は哀れな犠牲者を示しているのではなく、朝鮮半島出身者や社会主義者に暴力を行使する日本人民衆を擬えたものであることを明らかにする。

第3章では、日本近現代文学において羊が女性というジェンダーを付与され表象されてきたことを論じる。日本語の「らしゃめん」という言葉は、羊を表すものであったが、開国以降、日本に滞在する西洋人男性を性的サービスの相手とした日本人女性を意味するようになった。第3章前半部では、このようならしゃめんの物語として人口に膾炙している「唐人お吉」の物語を扱った文学作品を中心に、羊の比喻が異文化・異人種間の性交渉を連想させるものへと変容した社会的経緯を辿る。具体的には、1920年代後半から30年代にかけての唐人お吉物語の流行のきっかけとなった、<sup>じゅういち や ぎ さぶろう</sup>十一谷義三郎（1897–1937）の『唐人お吉』（1928）等を分析の対象とする。女性化された羊の表象は、戦後アメリカ兵を相手とした日本人娼婦の「パンパン」に重ね合わせられると同時に、高見順の『敗戦日記』や大江健三郎の「人間の羊」にみられるように、敗戦国民の象徴として「去勢」され女性化して描かれた日本人男性像にも当てはめられた。このように、日本近現代では女性を示すものであった羊が、占領期には被支配者の男性の表象として用いられたことの意義を考察したい。

第4章では、植民地政策の一環として緬羊飼育が大々的に行われていた「満洲」で幼少期を過ごした作家、安部公房（1924–1993）の作品にみられる羊の表象を、「満洲」における羊の歴史性を考慮して解釈する。安部の作品において、動植物や物質への変形は頻繁に用いられるモチーフであるが、「詩人の生涯」（1951）等数作にわたり登場する羊や羊毛製のジャケットの意義については看過されてきた。安部の植民地経験からは、国家による緬羊飼育の軍事的目的に反して、「満洲」の羊を囲む生活風景が牧歌的で郷愁を誘うものとされた背景が、「詩人の生涯」の描写に反映していると考えられる。また安部は、「盲腸」（1955）や「羊腸人類」（1962）、戯曲『緑色のストッキング』（1974）等で、世界の食糧問題を解決するために羊の腸を移植される人間の物語を繰り返し描いている。戦中・戦後の羊をめぐる状況を考慮すれば、羊は身体改造技術の実験材料として、科学技術の恐怖を示す「化物」のような動物でもあったことがうかがえる。

第5章は、1970年代後半を生きる若者がある一匹の羊を探す冒険譚を、明治時代以降の羊の歴史とともに描いた、村上春樹の小説『羊をめぐる冒険』についての論考である。この作品で極めて象徴的に描かれる羊の意味については、特にアメリカのポストモダン文学との比較が行われてきたが、他の日本文学作品と対照させた論は多くはない。本論文では、第1章から第4章の議論を念頭に置き、『羊をめぐる冒険』の羊とそれ以前の日本文

学における羊の表象との関連性を詳らかにする。村上は漱石の『三四郎』における羊の表象や、日本の近代化と軍国主義を象徴するものとしての羊のイメージ、また安部公房が既に提示した科学技術と羊というテーマと想像力を継承している。第5章後半部では、羊博士・先生・「鼠」の三人の登場人物を襲った、羊が人間の体内に取り憑きその肉体や精神を支配するという「羊つき」の現象に注目し、羊の表象の変容を考察する。

これら全5章から明らかになる論点は、日本近現代文学に描かれた羊は、西洋文化の受容過程で出現して以来、近代化、植民地主義、非軍国化などの歴史的変遷の中で緬羊政策の趨勢を反映させ、多義的な表象を担ってきたことである。キリスト教の象徴性が受容された明治時代以降、羊の表象は西洋文化の模倣に留まらず、社会的に抑圧されたもののメタファーでもあり、また逆説的にも社会的弱者を抑圧する暴力的な権力を暗示するものとしても用いられるようになっていく。羊はこのような権力構造が孕む文化的・社会的な摩擦や衝突の変遷を表象する動物であることを、これから論じていく。

## 注

---

<sup>1</sup> Cheryll Glotfelty, “Literary Studies in an Age of Environmental Crisis,” introduction, *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology*, eds. Cheryll Glotfelty and Harold Fromm (Athens: U of Georgia P, 1996) xvii–xviii.

<sup>2</sup> Graham Huggan and Helen Tiffin, *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment*, 2nd ed. (London: Routledge, 2015) 3.

<sup>3</sup> Huggan and Tiffin 3–11.

<sup>4</sup> Marianne Dekoven, “Guest Column: Why Animal Studies Now?” *PMLA* 124.2 (2009) 363–364.

<sup>5</sup> 大内輝雄『羊蹄記——人間と羊毛の歴史』（平凡社、1991年）13–47頁。

<sup>6</sup> 羊の名称について、特に家畜としての側面が強調される場合には「めんよう」と称されることがある。畜産学関連分野の文献では「緬羊」と表記され、また新聞紙上では「綿羊」の字が用いられることが多かったが、「綿羊」では肉用種の羊を示す際に不都合であることから、便宜上「めん羊」という表記が多用されるようになった（平山秀介『めん羊——有利な飼育法——』農山漁村文化協会、1982年、13–14頁）。

---

<sup>7</sup> Christopher Key Chapple, *Nonviolence to Animals, Earth, and Self in Asia* (New York: State U of New York P, 1993).

<sup>8</sup> アーロン・スキュブランド『犬の帝国：幕末ニッポンから現代まで』（本橋哲也訳、岩波書店、2009年）15頁。

<sup>9</sup> 特に文学・文化研究分野における動物に関する議論の場としては、日本アメリカ文学会第50回全国大会におけるシンポジウム「あめりかいきものがたり——動物表象をめぐって」（2011年10月於関西大学）、明治大学理工学研究科新領域創造専攻主催シンポジウム「動物のいのち」（2014年11月於明治大学）、日本比較文学会第77回全国大会におけるワークショップ「物語という名の動物園——動物を通して語られる人間、自然、核時代」（2015年6月於立命館大学）、ASLE・Japan／文学・環境学会第21回全国大会におけるシンポジウム「動物のいのち」（2015年8月於安藤百福自然体験指導者養成センター）等が挙げられる。

<sup>10</sup> 英米文学作品における動物の表象について日本で刊行された研究論叢としては、英米文化学会編『英文学にみる動物の象徴』（彩流社、2009年）や、辻本庸子・福岡和子編『あめりかいきものがたり 動物表象を読み解く』（臨川書店、2013年）等が挙げられる。

<sup>11</sup> 千種キムラ・スティーブン「「三四郎」試論——続——迷羊について」（『国文学 解釈と鑑賞』第48巻8号、至文堂、1983年5月）。

<sup>12</sup> 柴田勝二「受動的な冒険——『羊をめぐる冒険』と＜漱石＞の影——」（『東京外国語大学論集』第74号、東京外国語大学、2007年7月）。

<sup>13</sup> 松枝誠「「羊をめぐる冒険」論——北海道から満州、そして戦後——」（『論究日本文学』第86号、立命館大学日本文学会、2007年5月）55頁。

<sup>14</sup> 同上、55頁。

<sup>15</sup> マイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ』（鈴木直子訳、青土社、2006年）303頁。

# 第1章 夏目漱石『三四郎』

## ——「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」の英文学的背景とその解釈——

### 第1節 はじめに

1908（明治41）年、約四ヶ月にわたり『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に掲載された夏目漱石の小説『三四郎』は、九州から上京し大学に通う三四郎を中心に明治時代の若者を描いた作品である。この作品についての多くの先行研究で議論の中心となっているのは、三四郎と美禰子<sup>みねこ</sup>、あるいは野々宮といった男女間の関係を中心に、当時の若者が明治の新しい思想に触れどのような変化・成長を遂げたのか、という点である。

その多くで解釈の糸口とされているのが、本文中に度々見受けられる「<sup>ストレイ、シープ</sup>迷へる子」「<sup>ストレイ シー プ</sup>stray sheep」<sup>1</sup>「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」という羊に関連した言葉である。『三四郎』では、主人公三四郎が想いを寄せる美禰子が、「迷子」の英訳として彼に教える「迷へる子」にはじまり、「stray sheep」「迷羊」という言葉が随所に登場する。また、美禰子が三四郎に送る葉書の絵や雲の形についての表現にも羊が用いられている。

『三四郎』の羊については、比喩としてだけでなく、羊という動物の意義にも注目する必要がある。本章ではまず、羊は当時の日本では稀少な存在であり、明治時代以前の表象のように奇怪な印象を与えた動物であったことを論じる。そして、従来キリスト教における羊の象徴性と関連付けたものが多い『三四郎』の羊の解釈に対して、漱石の羊についての知識や概念は英文学によるものであったことを明らかにする。特に、漱石が専門的な研究を行っていた17～18世紀の英文学を代表する『トム・ジョウズ』では、“stray sheep”という言葉が性的に墮落した女性を象徴するものとして使われており、漱石もこの意味を明治の社会状況に応用したと考えられる。

本章の考察に先立ち、『三四郎』の中で「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という言葉がみられる場面を確認していきたい。以下、本章での『三四郎』からの引用は『漱石全集第五巻』（岩波書店、1994年）によるものとし、（ ）内に引用ページ数を示す。ルビについては、ルビが必要とされる読みの言葉や、本論文での議論に関連する箇所について適宜表記する<sup>2</sup>。

まず、菊人形見物の日、気分の優れない美禰子と三四郎が人混みを抜けて小川の畔を歩いている場面である。美禰子は、集団から離れた三四郎と自分を「大きな迷子」(416)に喩える。

「迷子」

女は三四郎を見た儘で此一言を繰返した。三四郎は答へなかつた。

「迷子の英訳を知つて入らしつて」

三四郎は知るとも、知らぬとも云ひ得ぬ程に、此問を予期してゐなかつた。

「教えて上げませうか」

「えゝ」

「<sup>ストレイ・シープ</sup>迷へる子——解つて？」[中略]

迷へる子といふ言葉は解つた様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ此言葉を使つた女の意味である。三四郎はいたづらに女の顔を眺めて黙つてゐた。[中略]

「少し寒むくなつた様ですから、兎に角立ちませう。冷えると毒だ。然し気分はもう<sup>すつかり</sup>悉皆直りましたか」

「えゝ、悉皆直りました」と明かに答へたが、俄かに立ち上がった。立ち上がる時、小さな声で、独り言の様に、

「迷へる子」と長く引つ張つて云つた。三四郎は無論答へなかつた。[中略]

「迷へる子」と美禰子が口の内で云つた。三四郎は其<sup>いんき</sup>呼吸を感ずる事が出来た。

(417-420)

次に、菊人形参観の翌日、三四郎と友人の与次郎が大学の教室で会話を交わす場面である。三四郎のノートを覗き込んだ与次郎は、そこに「stray sheep」(420)という語句が乱雑に書き込まれているのを見つける。

<sup>ベル</sup>号鐘が鳴つて、講師は教室から出て行つた。三四郎は印<sup>いんき</sup>気の着いた<sup>ペン</sup>洋筆を振つて、<sup>ノート</sup>帳面を伏せ様とした。すると隣りにゐた与次郎が声を掛けた。

「おい一寸借せ。書き落した所がある」



与次郎は三四郎の帳面を引き寄せて上から覗き込んだ。<sup>ストレイ シープ</sup>stray sheepといふ字が無暗にかいてある。

「何だこれは」

「講義を筆記するのが厭になつたから、いたづらを書いてみた。」

「さう不勉強では不可ん。カントの超絶唯心論がパークレーの超絶实在論にどうだとか云つたな」

「どうだとか云つた」

「聞いていなかったのか」

「いゝや」

「全然 stray sheep だ。仕方がない」(420-421)

この後、三四郎が下宿に帰ると、二匹の羊が描かれた絵葉書が届いている。

下宿へ帰つて、湯に入つて、好い心持になつて上がつて見ると、机の上に絵端書がある。小川を描いて、草をもちやもちや生やして、其縁に羊を二匹寐かして、其向ふ側に大きな男が<sup>ステツキ</sup>洋杖を持つて立つてゐる所を写したものである。男の顔が甚だ獐猛に出来てゐる。全く西洋の絵にある<sup>デキ<sup>ル</sup></sup>悪魔を模したもので、念の為め、傍にちやんとデキ<sup>ル</sup>と仮名が振つてある。表は三四郎の宛名の下に、迷へる子と小さく書いた許である。三四郎は迷へる子の何者かをすぐ悟つた。のみならず、端書の裏に、迷へる子を二匹<sup>か</sup>描いて、其一匹を暗に自分に見立てゝ呉れたのを甚だ嬉しく思つた。迷へる子のなかには、美禰子のみではない、自分ももとより這入つてゐたのである。それが美禰子の思はくであつたと見える。美禰子の使つた stray sheep の意味が是で漸く判然した。(426)

美禰子は三四郎に好意を寄せているような仕草を見せていたが、二人の恋愛が成就することはなく、美禰子は縁談の相手であつた兄の友人と結婚する。三四郎は美禰子の結婚を知り、その事実を確かめるため、また美禰子に借りた借金を返済するため、彼女のいる教会へ向かう。三四郎は美禰子が外に出て来るのを次のように待っている。

やがて唱歌の声が聞えた。讃美歌といふものだらうと考へた。締切つた高い窓のうちの出来事である。音量から察すると余程の人数らしい。美禰子の声もその内にある。三四郎は耳を傾けた。歌は歇んだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好な雲が出た。

かつて美禰子と一所に秋の空を見た事もあつた。所は広田先生の二階であつた。田端の小川の縁に坐つた事もあつた。其時も一人ではなかつた。<sup>ストレイシープ</sup>迷羊。<sup>ストレイシープ</sup>迷羊。雲が羊の形をしてゐる。(602)

美禰子はやがて教会から出て来て、三四郎から金を入れた包みを受け取る。

女は紙包を懐へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛<sup>ハンケチ</sup>を持つてゐた。鼻の所へ宛てゝ、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭どい香がぷんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罌。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。

「結婚なさるそうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。(604)

最後に、画家の原口が美禰子をモデルに描いた作品「森の女」が展示されている美術展の場面である。与次郎は三四郎にその絵の感想を尋ねる。

「どうだ森の女は」

「森の女と云ふ題が悪い」

「ぢや、何とすれば好いんだ」

三四郎は何とも答へなかつた。たゞ口の中で迷羊、迷羊と繰り返した。(608)

以上が、『三四郎』において「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という言葉がみられる場面である。

## 第2節 羊の異質性——日本における羊の歴史

『三四郎』における羊に関する言葉に着目した先行研究では、これらの言葉が三四郎や美禰子のような登場人物のうち誰を示しているのかという点で議論が交わされてきた<sup>3</sup>。また、三四郎や美禰子のような登場人物に代表される明治の若者全般を指して使われた言葉、彷徨する青春そのものを表した言葉であるともされる<sup>4</sup>。これらの研究では、村瀬士郎が指摘するように、言葉それ自体の意味ではなく、「迷へる子」という言葉を使った美禰子の心情に焦点が当てられてきた<sup>5</sup>。このように、『三四郎』における羊は作品解釈の糸口の一つとなっ<sup>て</sup>はいるものの、『三四郎』研究はヒロイン美禰子の恋愛感情について論じたものが多くなっており、羊については軽視されてきた。

しかし本章では、羊という動物そのものに着目して『三四郎』の羊の解釈を試みたい。日本における羊の歴史を辿ることによって、『三四郎』の発表された時代には羊は現在のよう<sup>な</sup>平穏な印象を備えた動物ではなく、空想に近い奇怪な印象を与える動物であったことがわかる。

先述の村瀬が指摘するように、『三四郎』は「横文字の横溢する作品」<sup>6</sup>であり、「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という言葉は、作品中に頻出するカタカナ言葉と同様、意味が明瞭でない奇妙な響きのするものとして用いられている。『三四郎』の「横文字」の例としては、「マーメイド」(381)、「人魚」(381)、「アフラ、ベーン」(382)、「オルノーコ」(385)、「Pity's akin to love」(387)、「ダーター、フアブラ」(439)、「ヘリオトロープ」(523)、「ハイドリオタフヒア」(536)等が挙げられる。田舎から上京してきた三四郎にとって、東京で新しい思想を学ぶことは、このような「横文字」を見聞きすることから始まった。それらは三四郎にとって「解らないながらも、自分の興味を惹く」(571)ような新しく異質なものとして受け止められていた。

当時の羊をめぐる状況を考慮すれば、「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という言葉に限らず、羊という動物の存在自体が非日常的であった。本章第4節において後述するように、「らしゃめん」など羊に関する語法が広まっ<sup>て</sup>はいたものの、羊に関する認識は限定されたものでしかなかった。

ここで、明治時代における羊の異質性を明らかにするために、それまでに至る日本の羊の歴史を概観したい。現在では日本は世界最大の羊毛輸入国となっているが<sup>7</sup>、相当数の羊

が日本に生息し始めたのは主に明治時代以降であった点を確認しよう。

日本に残る羊についての最古の史料は、『日本書紀』(720)の599年の記述であり、そこには百済から貢物として羊が渡来した旨が伺える。これと同じく、海を渡り王朝へ貢物として贈与された羊についての記述が平安時代や鎌倉時代の『日本紀略』(935)や『百練抄』(1171)にもみられる。しかし、これらの文献の羊は実際には山羊であったという論が現在では定説となっており<sup>8</sup>、羊は庶民には目にも耳にも触れることのできない存在であったという<sup>9</sup>。このように羊が生息しない地であった日本で、唯一羊に関する文化が受容されたのは、十二支の「未」の観念<sup>ひつじ</sup>であった。日本では中国文化から羊の知識を得ていた部分が多く、近代以前の日本文学作品に見受けられる羊に関する記述もまた、中国の説話や漢詩文、仏典を踏まえたものとなっている<sup>10</sup>。

仏教国としての日本における殺生禁断や肉食禁止の歴史からも、羊についてみてみよう。日本では、7世紀以降約1200年にわたり肉食が公的に禁止されていた。それ以前には狩猟による肉食が広く行われていたとされるが、675(天武4)年以降、特定の動物の捕獲や飼育、屠殺が法によって禁止された。927(延長5)年の延喜式では、人死・産・六畜死・六畜産・食采という六つの「穢れ」が定められ、その六畜には六種類の動物、すなわち牛・馬・羊・犬・鶏・豚が含まれていた。日本では当時羊は存在しなかったものの、中国からの影響を受け、他の動物とともに穢れとして公に規定されたのである<sup>11</sup>。穢れの思想を基盤とした日本におけるこのような羊のイメージ形成は、キリスト教文化における、犠牲・生贄、あるいは神の保護を必要とするものとされる無垢な羊の象徴性とは大きく異なる<sup>12</sup>。

このように日本では羊にまつわる情報を間接的に受容していたとはいえ、実体とは縁のないものであったために、羊に関する記録や記述は江戸末期まではほとんど存在しない。その中で羊の知識を得られる貴重な文献となっているのが、江戸時代中期に出版された日本最初の百科事典『和漢三才図会』(1712)である。ここでの「羊」の項(図1)には、実見を伴わない間接的な知識によって記されたと想定される羊の説明と挿絵がある。この解説は中国の記述の引き写しであり、その挿絵についても「鹿に似た体軀に山羊ひげを生やして曲げた角をつけただけの山羊とそっくりの絵柄」<sup>13</sup>でしかなく、羊は空想の動物として捉えられていたと山根は推測する<sup>14</sup>。

羊が実在しなかった状況に対して、日本では羊毛製品の輸入が先立ち、羊に関する認識は動物そのものよりも羊毛製品と結び付いていった。日本に最初に毛織物がもたらされた

のは、1555（弘治元）年、ポルトガル政府官許の貿易船が来航したときであり、それ以後スペイン、イギリス、オランダなどから羊毛製品が輸入された。羊毛で織った厚地の毛織物は「羅紗」と称されたが、それはポルトガル語の“raxa”または“raixa”、あるいはオランダ語の“laken rassen”を語源としている<sup>15</sup>。羅紗の漢字には上等の薄織物（羅）と薄物（紗）という語義があるが、羊毛との関連はない<sup>16</sup>。1639（寛永16）年の鎖国以降も、オランダから持ち込まれた羊毛製品を商人が買い占め、帯地や陣羽織、火事装束などに広く利用された。ところが、多くの人が羊毛製品を着用するようになったにも拘らず、それが羊から作られているという事実に関する認識は広まらなかった。

日本で緬羊飼育が開始されたのは、18世紀後半のことである。江戸文化の爛熟に伴い羊毛製品の輸入量が増加し、輸入急増に伴う金・銀の流出を抑えるため、幕府は羊毛製品の国産化に踏み切った。日本で最初に羊の飼育を試み毛織物の生産を行ったのは、江戸中期の博物学者であった平賀源内（1729–1779）である。源内は、長崎のオランダ商館の羊を讃岐の国に取り寄せて飼育し、毛織物の製織に成功したが、羊は皮膚病に罹り飼育は中断された。後述するように、このとき羊は「らしゃめん」と呼ばれていた。また、源内の師であった医師の田村藍水（1718–1776）も、長崎から羊を取り寄せて毛織物の製造を試みたが、事業は中断した。

このような動きを踏まえ、幕府が緬羊奨励事業を開始したのは、老中田沼意次（1719–1788）が殖産興業・国産奨励政策を展開したときであった。幕府による緬羊奨励事業は田沼の失脚後も継続され、オランダでの緬羊技術に関する文献を翻訳刊行するなど、技術の普及が努められた。しかし、日本への緬羊の輸出はオランダにとって貿易上不利になるため、政策は不振に終わる。幕府以外でも、下野黒羽藩や長州藩において緬羊飼育が行われたという記録が残っているが、最も緬羊振興に熱心であったのは薩摩藩であり、江



【図1】『和漢三才図会』（1712）の羊

戸時代初期から観賞用や食用として朝鮮の鬱陵島から羊を導入していた。

これに対して、日本で羊の飼育が本格的に行われるようになったのは、明治時代以降である。明治時代になると、日清・日露戦争など北方への拡張政策と相俟って保温性の高い軍用羊毛製品の需要が急速に高まった。また、1872（明治 5）年の太政官布令により式服が洋服とされ、庶民の生活にも毛布などの毛織物製品やモスリンと呼ばれる羊毛の布地が広まり、多量の羊毛が輸入されるようになった。この大幅な輸入赤字に対処すべく、羊毛の自給が国家事業の一つとして重要視され始める。薩摩藩出身の内務大臣大久保利通（1830-1878）などの識者や公家が、欧化政策の一環としてイギリスの牧羊法やドイツの羊毛加工技術を参照して緬羊飼育奨励に乗り出し、その拠点として現在の千葉県成田市三里塚に下総牧場（後の宮内庁御料牧場）を開設した。政府はオーストラリア産メリノ種などの優良種を輸入し、民間への払い下げや貸付といった様々な保護政策をとったため、飼育数は急増していった。

しかし、衛生技術、飼育技術など牧羊についての知識不足から、羊は寄生虫や皮膚病に感染し激減する。また、山地が多く牧畜に適した平坦な地域が少ないという日本の風土上の問題から、緬羊飼育は困難を極め、1888（明治 21）年、奨励政策は一時中断された。それ以後の約二十五年間は、政府の緬羊振興対策の空白期となる。明治政府が欧米をモデルとして導入をはかった放牧主体の大規模牧場経営は失敗に終わり、それに代わって、羊は小規模集約農法の中へ副業的小頭数舎飼方式で定着していくことになる<sup>17</sup>。

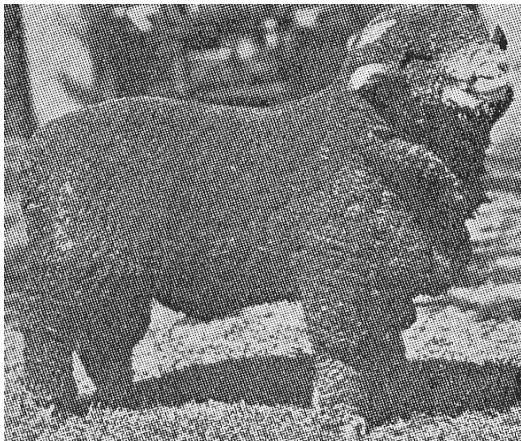
ここで、『三四郎』が発表された 1908 年の状況についてみると、この時期は上記の緬羊飼育奨励政策の空白期に該当する。明治時代になりようやく緬羊飼育が体系的に開始されたとはいえ、当時の日本国内の飼育頭数は三千頭程度であった<sup>18</sup>。緬羊が飼育されていたのも千葉県の下総牧羊場や北海道の月寒種畜牧場など一部の地域でしかなく<sup>19</sup>、羊についての知識を有する者は一部の識者や牧場農家に限られていた。そのため、羊から想起される動物のイメージも、実際の羊の姿とは異なっていた。このことは、新聞連載中に『三四郎』の挿絵<sup>20</sup>として掲載された羊の絵（図 2、図 3）をみると明らかである。ここで描かれている羊は長い毛と角を持った山羊のようであり、それより約二百年前に描かれた『和漢三才図会』の羊（図 1）と大差がない。明治時代にイギリスから輸入されていた、毛量の多いメリノ種（図 4）やコリデール種（図 5）のような羊とは様相が異なっている。



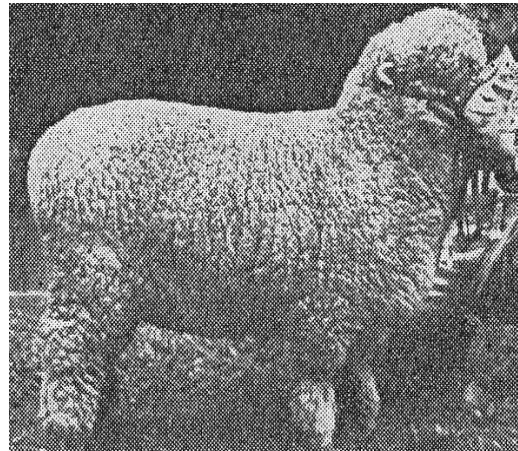
【図2】『三四郎』連載時の挿絵



【図3】『三四郎』連載時の挿絵



【図4】メリノ種



【図5】コリデール種

日本における羊の歴史を振り返れば、『三四郎』が発表された明治時代後期には羊の存在は稀有であり、その認識も乏しかったことがわかる。『三四郎』において「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」として表記された羊は、他のカタカナ語と同様に新しく異質なものとして受容され、明治以前に羊が空想上の動物として描かれていたような印象を残していたといえる。



### 第3節 『新約聖書』における「迷える羊」と『トム・ジョウズ』との比較

このように羊に関する情報が限られていた状況の中で、漱石はどのようにして羊のイメージを得たのだろうか。『三四郎』執筆以前、漱石は1900（明治33）年から1902（明治35）年にロンドンに留学し、1903（明治36）年から1905（明治38）年には二年間にわたり東京帝国大学で日本人による初の英文学講義を担当した。しかし漱石が留学した際には、イギリスでは体系的な国文学の制度は整備されておらず<sup>21</sup>、漱石は学者として英文学研究体系の構築をはかっていた。ここからは、漱石は研究対象としていた英文学作品における羊の表象を受容し、『三四郎』に当てはめていったのではないかと推測される。この点について、『新約聖書』における「迷える羊」の表現と合わせて考察していきたい。

『三四郎』における「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という羊をめぐる三つの言葉については、先に確認したように、美禰子が迷子の英訳として「<sup>ストレイ、シープ</sup>迷へる子」と発したものが最初であった。彼女がキリスト教信者であることを考慮すれば、この言葉の背景には聖書の“stray sheep”に関連した表現があるのではないかと考えられる。

美禰子がキリスト教信者であるということは、作品の終盤近く、三四郎が美禰子に借金を返済する場面で判明する。「全く耶蘇教に縁のない男」（602）である三四郎は、美禰子が教会にいることを野々宮の妹のよし子から聞いたとき、彼女がキリスト教信者であることを初めて知る<sup>22</sup>。

先述したように、キリスト教では羊は無垢の象徴であり、犠牲や生贄、神の保護を必要とする敬虔な信者を表している。このような「犠牲の羊」、「哀れな羊」というキリスト教における羊の象徴性は、明治時代において西欧の小説や詩の翻訳を通して伝えられていた。例えば、1900年に『文芸倶楽部』に掲載されたハイネ（Heinrich Heine, 1797–1856）の訳詩、「小羊」では、「神よ、<sup>あらし</sup>暴風の吹かむ時、／かよわき白き毛を守れ」<sup>23</sup>という一節があり、羊が白い毛に覆われた「かよわき」存在として描かれていることがわかる。羊の中でも「迷える羊」という表現は、悩み苦しみながら生きる信仰者を示すものであり、それに対して神は「よき羊飼い」と称される。特に“stray sheep”という言葉は、『新約聖書』マタイ伝第18章12節における「迷い出た羊のたとえ」（“The Parable of the Wandering Sheep”）を彷彿させる。この節は次のようなものである。



How think ye? if a man have an hundred sheep, and one of them be gone astray, doth he not leave the ninety and nine, and goeth into the mountains, and seeketh that which is gone astray? [Matt. 18:12]<sup>24</sup>

(汝等いかに思ふか、百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹まよはば、九十九匹を山に遺しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか。<sup>25</sup>)

川崎寿彦が指摘するように、「迷子」にあたる英語としては「ロスト・チャイルド」(“lost child”)や「ストレイ・チャイルド」(“stray child”)が考えられる<sup>26</sup>。しかし、美禰子は上記の『新約聖書』の逸話を想起させるような「<sup>ストレイ、シープ</sup>迷へる子」という言葉を用いていることから、キリスト教における羊の象徴性を念頭に置いた作品解釈が見受けられる。例えば千種キムラ・スティーブンは、聖書の羊は羊飼いの愛の深さを試すために群れを離れたのであり、「<sup>ストレイ、シープ</sup>迷へる子」の言葉は「自分を探しに来てくれなかった野々宮への悲痛な愛の告白」<sup>27</sup>という美禰子の心情を表していると論じる。また、川崎は、美禰子が「<sup>ストレイ、シープ</sup>迷へる子」という言葉を提示した理由として、第一に“sheep”が単数と複数ともに同形であり、誰を示すのか曖昧な部分がプロットの展開に直接関係しているということ、第二に“stray sheep”は「迷って罪に落ちこんでゆくもの」<sup>28</sup>を意味することから、美禰子が望まない結婚に妥協した罪を意識したものであると指摘する<sup>29</sup>。佐藤智美も川崎の論を支持し、「迷羊」という言葉は福音書から引用されたものであり、美禰子が「迷子」を敢えて「<sup>ストレイ、シープ</sup>迷へる子」と訳した点には「当然聖書の背景を生かそうとするねらいが漱石にあった」<sup>30</sup>と分析している。

しかし、従来のキリスト教の羊に基づいた解釈に反して、“stray sheep”という熟語そのものは『新約聖書』にはみられない。*Oxford English Dictionary*によると、この言葉の初出はヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』であり、『三四郎』が収録されている『漱石全集』の注解においてもその旨が記されている<sup>31</sup>。『トム・ジョウンズ』では、捨て子トム(Tom)の誕生から成長、そして自らの出自の発見と恋人ソファファ(Sophia)との結婚が描かれるが、“stray sheep”という言葉が登場するのは、第18巻8章のウォーターズ夫人(Mrs. Waters)の言葉である<sup>32</sup>。

『三四郎』と英文学との関係については、作品内で言及される「ハイドリオタフヒア」(536)、つまり『壺葬論』(*Urne-Buriall or Hydriotaphia*, 1658)の作者であるトマス・ブラウン(Sir Thomas Browne, 1605–1682)や、アフラ・ベーン(Aphra Behn, 1640–1689)

についての先行研究が多いが<sup>33</sup>、『トム・ジョウズ』やその作者であるフィールドイングについては、ブラウンやベーンとは異なり作品内で直接触れられることがないためか、この作品と『三四郎』とを関連させた研究はみられない。

しかし、『トム・ジョウズ』は漱石が英文学者として研究していた 18 世紀イギリス小説を代表する作品の一つであり、漱石の蔵書目録にも記録されていることから<sup>34</sup>、『三四郎』の創作で参照された文学テキストであることがわかる。また、フィールドイングについては、東京帝国大学での漱石の英文学講義をまとめた『文学論』(1907)、『文学評論』(1909)、『英文学形式論』(1924) 内で頻繁に言及されている<sup>35</sup>。漱石は、留学中に熟読し、帰国後大学の授業で取り扱った作品である『トム・ジョウズ』の羊の表象に着想を得て、『三四郎』の創作に応用したのではないだろうか。

ここで、『トム・ジョウズ』において“stray sheep”という言葉を発するウォーターズ夫人が、どのような女性として描かれているのかみていきたい。ウォーターズ夫人は本名をジェニー・ジョウズ (Jenny Jones) といい、学識のあることで近所に評判の女性であったことが次の引用からうかがえる。

This Jenny Jones was no very comely girl, either in her face or person; but nature had somewhat compensated the want of beauty with what is generally more esteemed by those ladies whose judgment is arrived at years of perfect maturity; for she had given her a very uncommon share of understanding. This gift Jenny had a good deal improved by erudition.<sup>36</sup>

(拙訳<sup>37</sup>: このジェニー・ジョウズは顔立ちや容姿の美しい娘ではなかった。しかし造化の神は、稀に見るほどの理解力という、完全な成熟期に至って分別を得る女性達がより尊敬するものを彼女に授けることで、その美しさの欠乏を補ったのである。ジェニーはこの天性を学識によって大いに磨いた。)

しかし、この教養の高さによって彼女は周囲から輦轡を買い、彼女が使用人として働いていた奉仕先の主人と肉体関係があるのではないかという、根拠のない噂を立てられる。トムの実母はこのような状況に乗じて、私生児として出産した子どもを置き去りにしたと彼女に偽って告白させる。その結果ジェニーは町から追放され、離れた場所で暮らしてい

た。そこで彼女はウォーターズ大尉 (Captain Waters) と事実上の婚姻関係を結ぶが、その部下であるノーザトン (Mr. Northerton) とも交際するなど、放埒な女性として知られるようになっていった。彼女はある日、偶然にも成長したトムと再会し、肉体関係を持つことになる。

“stray sheep”という言葉がみられるのは、ウォーターズ夫人が以上のような自らの半生をトムの養父であるオールワージー (Squire Allworthy) に語り、トムの出自を明らかにする以下の場面である。

And consider, sir, on my behalf, what is in the power of a woman stripped of her reputation and left destitute; whether the good-natured world will suffer such a stray sheep to return to the road of virtue, even if she was never so desirous.<sup>38</sup>

(拙訳：私の身になって考えてもらいたいのですが、名声を奪われ一文無しで放り出された女に、一体どのような力があるのでしょうか？彼女がどんなに望んだとしても、親切な世間の人々は、そのような迷える羊を美德の道に戻るのを許してくれるのでしょうか。)

このように、『トム・ジョウンズ』では、高い教養を身につけているものの、不義の罪によって社会から追放されたウォーターズ夫人が、“stray sheep”に擬えられているのである。

漱石の講義録だけではなく、『三四郎』にみられる『トム・ジョウンズ』との以下の共通点からも、この作品の影響を確認できる。第一に、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616) の『ハムレット』 (*Hamlet*, 1600–1602 頃) の演劇鑑賞の場面である。『三四郎』では、三四郎が友人達と文芸協会<sup>39</sup>主催の演芸祭<sup>40</sup>に出かけ、『ハムレット』を鑑賞する。この観劇の場面には、『トム・ジョウンズ』でトムが友人のパートリッジ (Partridge) らと『ハムレット』を観る第 16 卷 5 章との類似点が多い。例えば、三四郎が見に行く『ハムレット』では、ハムレット役俳優は広田の所蔵する本に掲載されていた「西洋の何とかいふ名優の扮したハムレット」(589) の写真の人物に服装や顔付きが似ているという。この「名優」とは、『トム・ジョウンズ』でトムが観劇する『ハムレット』に出演し、その役柄で名を馳せ当代屈指の名優と賞賛された人物であり、またフィールディングの友人でもあったデイヴィッド・ギャリック (David Garrick, 1717–1779) <sup>41</sup>のことではないだろ

うか。また、三四郎が演劇を鑑賞しながら「御母さん、それぢや御父さんに済まないぢやありませんかと云ひさうな所で、急にアポロ杯を引合に出して、呑気に遣つて仕舞ふ」(589)と台詞について述べている箇所<sup>42</sup>は、『ハムレット』第3幕第4場である。これは、ハムレットが、父親と、母親の再婚相手である叔父とを比較して、母親を糾弾する場面である。『トム・ジョウンズ』でパートリッジがハムレットの母親の態度に憤慨する箇所<sup>43</sup>もまた、第3幕第4場である。

『三四郎』と『トム・ジョウンズ』の第二の共通点として、作品内でのアフラ・ベーンへの言及が挙げられる。土井治は、アフラ・ベーンを日本に最初に紹介したのは夏目漱石ではないかと指摘しているが<sup>44</sup>、『三四郎』では、三四郎が大学の図書館で偶然ベーンの小説を手にする。その名を知らなかった彼が英文学に詳しい広田に尋ねると、「職業として小説に従事した初めての女」(385)であると説明し、代表作『オルノーコ』(*Oroonoko, the Royal Slave*, 1688)についての話をする。一方、『トム・ジョウンズ』では、トムの滞在先に居合わせたアイルランド紳士がベーンの小説を読んでいる<sup>45</sup>。また、ソファイアが *The Fatal Marriage* という悲劇作品を読む場面<sup>46</sup>があるが、これは、ベーンの小説 *The History of the Nun, or the Fair Vow-Breaker* (1688)をもとにした、トマス・サザン (Thomas Southern, 1660–1746) の戯曲、*The Fatal Marriage; or the Innocent Adultery* (1694)である。

『三四郎』と『トム・ジョウンズ』にみられる共通点は、ともに女性の姦通の問題と関与している。二作品が言及する『ハムレット』の場面は、ハムレットが母親の不貞を追及するシーンである。アフラ・ベーンについては、広田が指摘するように英国最初の女性職業作家であるが、このような認識が普及したのは1970年代のフェミニズム研究以降のことである。漱石が英文学を研究していた時代には、その謎に満ちた経歴と放埒な性格から、ベーンは単なる三文文士的存在としか考えられていなかった<sup>47</sup>。

以上のような『三四郎』と『トム・ジョウンズ』との関連性からは、『三四郎』の「迷羊」には、“stray sheep”という言葉の初出である『トム・ジョウンズ』での用法、つまり不義の罪によって社会から排除された女性という意味が適用されているのではないかと考えられる。『トム・ジョウンズ』の“stray sheep”が教養あるウォーターズ夫人を示すのに対し、『三四郎』では、「迷羊」は高等教育を受けた女学生であり「新しい女」の典型ともされる美禰子を示す一方で、彼女には「墮落女学生」としての一面も描かれていた点に着目して

論じていきたい。

#### 第4節 「墮落女学生」としての美禰子

高等教育を修め、女性の自由意志による結婚を尊重している美禰子は、明治時代の「新しい女」の典型とみなされてきた。「<sup>ピチーズ、アキン、ツー、ラツヴ</sup>Pity's akin to love」(387)<sup>48</sup>と美しく発音できるほど英語に堪能である美禰子に、佐伯順子は「新しい女」の特質を見出している。

漱石という人は一般に、明治という新しい時代にふさわしい「新しい女」を描きだした作家として評価されている。その典型的な例とされるのが、『三四郎』(明治四一年)の美禰子である。

「<sup>ピチーズ、アキン、ツー、ラツヴ</sup>Pity's akin to love」と美禰子が繰り返した。美しい奇麗な発音であった。

この短い一節には、美禰子の「新しい女」としての特質が、鮮やかに浮かび上がっている。英語を美しく発音できる女性。[中略]西洋の「学問」を身につける中でも、とりわけ英語を自由に操る能力があることは、まるで自分が西洋人そのものになったかのような優越感を、自他ともに印象づけたであろう。英語能力は「文明婦人」のステイタス・シンボルであり、美禰子はまぎれもなくその一人であった。<sup>49</sup>

『三四郎』では、よし子が女学校に通学しているのに対し、美禰子が女学生であるという記述はない。しかし、「<sup>ピチーズ、アキン、ツー、ラツヴ</sup>Pity's akin to love」と美しく発音できるほど英語に堪能であることから、彼女が洋学を中心とする高等女学校での勉学を修めていたと想定される。通常、高等女学校は尋常小学校卒業後の十二歳から十七歳の生徒が通学する場であり<sup>50</sup>、美禰子は三四郎と同年齢の二十三歳であるため、高等女学校卒業後兄と二人で暮らしていたと考えられよう。

美禰子に代表される当時の「新しい女」であった「女学生」という存在、そして彼女達が共有した「女学生文化」は、女子教育の発展とともに明治30年代に誕生した<sup>51</sup>。近代女子教育の導入により女学校の設立が相次ぎ、1899(明治32)年の高等女学校令で道府県の高等女学校の設置が義務化されると、女学生数は年々増加し女子教育最初の開花期を迎えた。「海老茶袴」と呼ばれる袴や西洋風の束髪、自転車での通学、言葉遣いなど、彼女

達の間には独自の文化が広まった。特に『三四郎』が出版された明治 40 年代には、女学生は明治前期に比べ世間の注目になる程度に数が増えつつもそのエリート性を失わずにいた時代であり、憧れの的となる条件が整っていた<sup>52</sup>。

美禰子の服装や言葉遣いからは、彼女が女学生文化の享受者であることがうかがわれる。野々宮が送ったリボンを髪に結んでいる様子（343）や「廂の広い髪」（489）という表現からは、彼女が女学生の間に流行した髪形<sup>53</sup>をしていることがわかる。また、美禰子の発する言葉も女学生の言葉遣いである。彼女は、「美しい事」（412）、「迷子の英訳を知って入らしつて」（417）、「迷へる子——解つて？」（417）のように、語尾に「こと」や「て」をつけた言い回しを多く用いている。「能くつてよ。知らないわ」（530）というよし子の台詞に代表されるように、「て」「てよ」「こと」のような語尾は、当時の女学生に顕著な言葉遣いであった<sup>54</sup>。

女学生は時代風俗の象徴として世間の注目を集め、教養のある「新しい女性」像を提示してきた。その一方で、伝統にとらわれない新しさと、西洋の「自由恋愛」の概念による影響から、本業である勉強よりも恋愛に優位を置く者もいた。明治時代の恋愛観については、新しく輸入された「ラヴ」の思想と、日本の伝統的な肉体関係を前提とする「色」との間に葛藤があったことが、佐伯によって論じられている。西洋における「ラヴ」の思想はプラトニックであることを前提とするものであったが、日本にその概念が輸入され実践が試みられると、「色」の伝統との葛藤により肉体関係が交えられることがあった。そのため、未婚の妊娠や堕胎など、女学生の性モラルが問題視されていた<sup>55</sup>。彼女達は世間から「墮落女学生」というレッテルを貼られ、好奇と非難の視線を浴びることになった。

当時の新聞は「墮落女学生」に関する記事を数多く取り上げていたが、それと相俟って、「自由恋愛」を享受しようとしつつも失恋や望まぬ妊娠など悲劇的な結末を迎える女学生を描く新聞小説が現れた。『読売新聞』に連載された小杉天外（1865–1952）の『魔風恋風』（1903）や、小栗風葉（1875–1926）の『青春』（1906）がその代表である。これらの小説の中では、女性主人公が周囲から「墮落」と結び付けられたように、読者もまた彼女達に「墮落女学生」となることを期待して読んでいた<sup>56</sup>。新聞の販売部数が増加し新聞社の競争が激化していた時代の中で、大学の教授職を辞し朝日新聞社に入社した漱石には、このような他紙の新聞小説を凌ぐ作品が期待されていた<sup>57</sup>。「墮落女学生」の記事を興味深く読んでいた読者層を考えれば、同様の要素が漱石の連載にも求められていただろう。漱

石の書簡には小栗風葉の『青春』に言及した発言が見受けられ<sup>58</sup>、彼自身も他紙の「墮落女学生」小説を意識して作品を創作していたことがうかがえる。

漱石の作品における女学生は、美しく教養のある存在としてよりも批判的に描かれることが多く、上に挙げたような同時代の「墮落女学生」を連想させるものである。例えば、『三四郎』に続く『それから』(1909)では、女学生の言動が次のように描写されている。

縫という娘は、何か云ふと、好くつてよ、知らないわと答える。さうして日に何遍となくリボンを掛け易へる。近頃はワ<sup>イ</sup>イオリンの稽古に行く。帰つて来ると、鋸の目立ての様な声を出して御<sup>おさら</sup>浚いをする。たゞし人を見てゐると決して遣らない。室<sup>へや</sup>を締め切つて、きいきい云はせるのだから、親は可なり上手だと思つてゐる。[中略]時々そつと戸を明けるので、好くつてよ、知らないわと叱られる。<sup>59</sup>

ここでは、リボンのような装飾品や、「好くつてよ」「知らないわ」といった言葉遣いが強調され、ヴァイオリンの練習をする女学生の気取った言動が皮肉に描かれている。

女学生はまた、売春婦と同一視されることもあった。『吾輩は猫である』(1905-1906)の語り手である猫は、飼い主の苦沙弥の娘が「海老茶式部か鼠式部になつて、三人とも申し合わせた様に情夫をこしらへて出奔」<sup>60</sup>するのではないかと予想している。また、苦沙弥のかつての教え子である寒月も、「此頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよいと買つて頂戴な、あらおいや? 杯と自分で自分を売りに歩いて居ます」<sup>61</sup>と、女学生について言及している。「海老茶式部」「鼠式部」と呼ばれ、園遊会などの公の場において物品販売を行う女学生は、自分の身体を商品として売る女性の姿と重ね合わせられているのである。

それでは、「墮落女学生」を扱った新聞小説の人氣を背景に『朝日新聞』に連載された『三四郎』では、女学生はどのように描かれているだろうか。女学生文化を象徴する美禰子をさ迷う羊に喩えることは、『トム・ジョウンズ』における「性モラルが崩壊した女性＝羊」という図式を、当時の女学生に適用したものであると考えられる。美禰子は、野々宮や三四郎に好意を寄せていた、あるいはそのような振舞いをみせてはいたが、最後には縁談によって薦められた兄の友人と結婚する。男女の恋愛が公には受け入れられ難かった時代<sup>62</sup>において、彼女はこれらの男性数名と交際していた。三四郎が美禰子と二人で歩いていた

とき、傍を通った男性が「憎悪の色」(416)で二人を「睨め付けた」(416)ように、また、「日本の社会状態で、かう云ふ機会を、随意に造る事は、三四郎に取つて困難」(552)であったように、男女が二人で街を歩くだけでも世間の注目を浴びるような状況では、異性と交際する女性は「墮落」というレッテルを貼られかねなかった<sup>63</sup>。

日本における羊の表象の歴史からは、羊が女性の性モラルの逸脱を連想させるような背景が存在していた点も合わせて検討したい。これについては本論文第3章において詳述するが、羊は羊毛製の布地を示す「羅紗」という語から「らしやめん」と称されており、さらに19世紀後半以降、西洋の水夫が航海中船内の羊を犯すという俗説から、外国人男性に性的サービスを行う日本人女性がらしやめんと呼ばれることがあった<sup>64</sup>。この語法は、「墮落女学生」を描いた明治時代の新聞小説でも使用されている。例えば、先述した小栗風葉の作品である『恋慕ながし』(1898)では、娘を女学校に通わせる父親が彼女のことを自慢げに話す場面において、会話の相手は、「遊芸なら、手習なら、<sup>すつかり</sup>全然舶来仕立てにして置いて、ラシヤメンにでもして<sup>しこたまドル</sup>夥多弗を奪取らうと云ふ山だね」<sup>65</sup>と言り返す。漱石もまたこの語を自らの作品の中で用いており、『彼岸過迄』(1912)では、西洋人のように背の高い男性に付き添う女性が「<sup>らしやめん</sup>洋妾」<sup>66</sup>と表現されている。

らしやめんをめぐる言説に加え、当時の女学生文化に特徴的であった装いもまた羊と関連していた。前述の通り女学生が「海老茶式部」と称されたように、彼女達が着用していた袴は、羊毛加工技術の発展によって明治30年代に流行したメリンス生地で作られており<sup>67</sup>、女学生は羊毛製品を身にまとう存在であったのである。

このような女学生の服飾文化を念頭に置き、『三四郎』で美禰子が教会から出て来る場面を、彼女の服装に注目してもう一度みてみよう。

忽然として会堂の<sup>チャーチ</sup>戸が<sup>あ</sup>開いた。中から人が出る。人は天国から浮世へ帰る。美禰子は終りから四番目であつた。縞の吾妻コートを着て、俯向いて、上り口の階段を降りて来た。[中略]

女は紙包を懷へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い<sup>ハンケチ</sup>手帛を持つてみた。鼻の所へ宛てゝ、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭どい香がぷんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオ



トロープの罫。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。(602-604)

美禰子はこのとき「吾妻コート」を着ており、この袂からヘリオトロープの香水をつけたハンカチを取り出して三四郎の顔に押し付ける。そして三四郎は、美禰子と過ごした日々や「迷羊」という言葉を思い浮かべる。この「吾妻コート」とは、1886（明治 19）年に発売が開始され明治 30 年代に流行した婦人用コートであり、「海老茶袴」と同様、女学生に好んで着用された羊毛製の洋服であった<sup>68</sup>。

『三四郎』が発表された新聞という媒体と、当時の女学生に関する言説を考慮することにより、『三四郎』の美禰子にも「墮落女学生」としての側面が描かれていたことがうかがえる。そして、羊を語源とするらしゃめんのように、性的に奔放な女性、男性に身体を売る女性という意味での羊に関する語の用法が普及しており、さらに女学生は羊毛衣料品を身にまとっていた。このような背景からは、漱石が『トム・ジョウズ』中の“stray sheep”の用法と同様に、教養が高く、性モラルの逸脱した「墮落女学生」としての一面をもつ美禰子に「迷羊」という言葉を当てはめたことがわかる。

## 第 5 節 「書く女」としての可能性の否定——アフラ・ベーンへの言及を通して

以上で考察したように、『三四郎』における「迷羊」は、『トム・ジョウズ』の“stray sheep”の用法を明治の女学生に適用したものであるといえる。しかし、“stray sheep”の言葉を取り入れるに際し、その意味がそのまま受容されているわけではない点にも注意したい。『トム・ジョウズ』では、“stray sheep”と称されるウォーターズ夫人は罪を救済され、オールワージから毎年の年金を受け取り、サプル牧師（Supple）と結婚する。『新約聖書』の「迷い出た羊」が神によって救われることを前提とした存在であるように、ウォーターズ夫人の罪も最終的には報われるのである。しかし、『三四郎』の美禰子の場合はどうだろうか。これから検討していくように、彼女は自らが選択した結婚に罪の意識を覚え、救われることの無い運命を歩んでいくことが仄めかされている。「墮落女学生」小説の典型として先述した『魔風恋風』や『青春』では、主人公の女学生達は病死するか墮胎を経験したように、『三四郎』においても美禰子の将来は決して明るいものではない。

結婚が決定した後、美禰子は三四郎に「われは我が<sup>とが</sup>愆を知る。我が罪は常に我が前にあ

り」(604)と教会の前でつぶやく。これは『旧約聖書』詩篇第51篇3節の言葉であり、ダビデが戦隊の部下ウリヤの妻を王宮に召し入れ妊娠させたうえ、ウリヤを戦死させたという罪を告白し、神の許しを乞う場面にみられる。この後に続く言葉は「視よわれ<sup>よこしま</sup>邪曲のなかにうまれ罪にありてわが母われをはらみたりき」<sup>69</sup>であり、ここでの「罪」が人間の肉欲であることがわかる。加えて、第3節で引用した『新約聖書』マタイ伝の他に、『旧約聖書』イザヤ書第53章6節においても迷えるものとしての羊という表現がみられるが、ここでも不義の罪が言及されている。

All we like sheep have gone astray ; we have turned every one to his own way ;  
and the LORD hath laid on him the iniquity of us all. [Isa. 53:6]<sup>70</sup>

(われらはみな羊のごとく迷ひておのおの己が道にむかひゆけり 然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうへに置き給へり<sup>71</sup>)

河野豊が指摘するように、美禰子が引用した聖書の言葉の近くには肉欲や不義に関する言葉が数多くみられるのである<sup>72</sup>。これらの節を口にした美禰子は、先述したように男女間の交際が認められ難い社会状況の中で、野々宮や三四郎ら複数の男性との交際を「罪」として意識していたのではないだろうか。

美禰子の罪悪感には、自身の結婚の選択への後悔の念も含まれていると考えられる。「あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勧めたつて駄目だ。好きな人がある迄独身で置くがいい」(472)と周囲から思われるような態度を見せ、「自由結婚」を望んでいた美禰子ではあるが、最終的には縁談で勧められた男性と早急に結婚した。彼女が誰に対して好意を抱いていたのか、それはテキストからは明確に読み取ることはできない。しかし、彼女の発した詩篇の言葉からは、自身望んでいなかった結婚を選択してしまったことへの後悔や罪の意識が感じられる。

美禰子を救われざる存在としたのは、結婚問題だけではない。彼女の選んだ進路もまたその原因の一つであり、彼女が「書く女」としての可能性を否定している点に見出せる。『三四郎』が発表された1908年に世間を騒がせた、森田草平(1881-1949)と平塚明(1886-1971)との心中未遂事件である「煤煙事件」との関連からは、美禰子のモデルは平塚明ではないかといわれている<sup>73</sup>。当時は、後に『青鞥』(1911-1916)などの雑誌を創

刊し文筆活動を行った平塚明だけではなく、女学生文化の隆盛に一役を買っていた『女学雑誌』（1885-1904）などの雑誌の読者の中から書き手が現れ、彼女達自身による文壇が形成されてもいた<sup>74</sup>。美禰子にもそのような文筆家としての進路が残されていたはずであり、この点は先に挙げたアフラ・ベーンへの言及と重ねられる。

広田と与次郎のアフラ・ベーンをめぐる次の会話をみてみよう。

「先生、序だから一寸聞いて置きますが先刻の何とかベーンですね」

「アフラ、ベーンか」

「全体何です、そのアフラ、ベーンと云ふのは」

「英国の閨秀作家だ。十七世紀の」

「十七世紀は古過ぎる。雑誌の材料にやなりませんね」

「古い。然し職業として小説に従事した初めての女だから、それで有名だ」

「有名ぢや困るな。もう少し伺つて置かう。どんなものを書いたんですか」

「僕はオルノーコと云ふ小説を読んだ丈だが、小川さん、さういふ小説が全集のうちにあつたでせう」

三四郎は奇麗に忘れてゐる。先生の其梗概を聞いて見ると、オルノーコと云ふ黒ん坊の王族が英国の船長に瞞されて、奴隷に売られて、非常に難義をする事が書いてあるのださうだ。しかも是は作家の実見譚だとして後世に信ぜられてゐたといふ話である。

「面白いな。里美さん、どうです、一つオルノーコでも書いちゃあ」と与次郎は又美禰子の方へ向つた。

「書いても可<sup>よ</sup>ござんすけども、私にはそんな実見譚がないんですもの」

「黒ん坊の主人公が必要なら、その小川君〔三四郎〕でも可いぢやありませんか。

九州の男で色が黒いから」（384-385）

アフラ・ベーンは初めて文筆を生業とした「英国の閨秀作家」として紹介されているが、与次郎はそれを受けて、美禰子に『オルノーコ』のような作品を書いてみてはどうかと提案する。与次郎は、彼女にもベーンのように執筆活動によって生計を立てることが可能であると示唆しているのである。しかし美禰子は、「私にはそんな実見譚がない」と言いその

可能性を否定する。

明治後期、女学校を卒業した女学生は、身に付けた高等教育を活用して就職する道を選択することは稀であった。女学校で洋学を学び、「新しい女」として自由を享受していると思われた美禰子も、自ら筆を取って職業に就くことはなく、結婚して家庭に入ることによって三郎や野々宮ら外部世界との交流も絶ってしまった。当時の高等女学校ではむしろ、新時代の理想の女性の育成をうたいつつも「良妻賢母」教育が中心であり、卒業後結婚して家庭を築くことが前提とされていた<sup>75</sup>。『三四郎』が発表された1908年における東京の高等女学校の卒業生進路では、職業未定又は不詳の者が全体の約七割を占めており、職業に従事した者は三割に満たない<sup>76</sup>。ここからは、高等教育を受けた若い女性が職業に就くことが、いかに稀有であったかがうかがわれる。結婚問題と同様、限られた進路しか歩むことができず、明治社会の中で抑圧された女学生の葛藤が、「書く女」としての可能性の否定にみられるのである。

以上、『三四郎』における「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という言葉の起源を『トム・ジョウズ』の“stray sheep”に辿り、美禰子像の解釈を試みた。“stray sheep”が性的に奔放な女性を表すものとして用いられていたことから、美禰子は「新しい女」の象徴であるとともに、同時代のメディアで悲劇的ヒロインとして受容された「墮落女学生」の側面も持ち合わせていることがわかる。明治の「墮落女学生」小説は、「明治の若者を魅了した「ラヴ」の直線的力と、その目標としての結婚ができない敗北感の大きさ」<sup>77</sup>を物語るものであった。『三四郎』ではまた、望まぬ結婚だけではなく、「書く女」という将来の可能性さえもが閉ざされ、救いのない運命を強いられた女性の将来が懸念されているのである。

## 第6節 漱石の英文学研究と羊

第3節から第5節では、『トム・ジョウズ』との関連から『三四郎』の「迷羊」について考察してきた。羊に関する知識が曖昧であった明治時代には、このように英文学作品の羊の表象の一例を模倣し、それが日本の社会状況に対応するように変容して、日本文学の中に取り入れられてきたのである。

「迷羊」という語の使用に加えて、漱石の羊に関する概念や知識の多くもまた英文学によ

るものであったことを、本節で論じたい。『トム・ジョウンズ』以外でも、漱石が羊に関する知識やイメージを得る際に参照したと想定される英詩等の例を挙げ、イギリス社会史において羊が果たした役割を考証していこう。

漱石の英文学研究に関する論文や講義録では、牧歌をはじめ羊のいる風景がうたわれた英詩が数多く取り上げられている。例えば、「英国詩人の天地山川に対する概念」(1893)では、スコットランド出身の詩人、ジェイムズ・トムソン (James Thomson, 1700–1748) の『四季』(*The Seasons*, 1726–1730) から、羊飼いが羊の毛を刈る場面が引用され、英国詩人の自然観が論じられている<sup>78</sup>。また、『文学評論』では、アレグザンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688–1744) の『牧童歌』(*Pastorals*, 1709) から羊飼いが恋をうたう場面が引用され<sup>79</sup>、「古典文学の中にある一種の理想的な因襲的の羊飼を書き表はして」「なつかしさに昔を偲んだ」<sup>80</sup>詩であるという解説がなされている。

また、漱石は教え子で英文学を専攻していた小松武治(生没年不詳)訳の『沙翁物語集』(1904)の校閲を行っているが、その序として『小羊物語に題す十句』(1904)を寄せている。『沙翁物語集』は、子ども向けにシェイクスピアの作品を再話したチャールズ・ラム (Charles Lamb, 1775–1834) の *The Tales from Shakespeare* (1807) の翻訳であり、*Lamb's Tales (from Shakespeare)* と呼ばれることがあった。漱石が「小羊物語」と題しているのは、著者名の Lamb を掛けたものである<sup>81</sup>。

他にも漱石は、『文学論』で「物質的状況と文学との関係」を論じるにあたり、17～18世紀イングランドの牧羊業の改革を例に挙げている。以下の引用からは、彼が羊と文学・芸術作品との関連性を意識していたことが読み取れる。

物質的状況と文学との関係を論ずるに<sup>〔あた〕</sup>方 づて何人も第一に着眼するは Elizabethan literature なりとす。Elizabethan literature の英文学史にあつて空前絶後の盛時なるは普く人の知る所なるが、其起因を察するに当時の物質的状況に支配せらるゝの多きは論を待たず。〔中略〕農事の改良と共に、嚴冬の候も猶羊群を飼養するの便を得て、在来の如く塩魚を常食とするの必要なきに至り、〔中略〕

又一例を引かむ。十八世紀に於て英人の成就せる農業的発達は一に農業的発達とのみ見做すべからずして、其影響は慥かに芸術の上に反響せるに似たり。此発達の行はれざるに當つてや、中世紀と異なる所なく、羊を飼ふに牧草を以てせるが故に冬に入

れば遂に之を牧する能はず。多くは之を屠るを以て常とせり。<sup>〔しかのみならず〕</sup>加<sup>〔オランダ〕</sup>之草を以て飼養するが故に、草を得るの地は、草を得んがために、毫も耕作の用に供する能はず。不経済の甚しきものありき。十七世紀の頃燕を以て羊を養ふの方を<sup>〔オランダ〕</sup>和蘭にて発見せるものあり。遂に之を英国に移して単に飼養の方を冬季に開けるのみならず、かねて、耕稼の地を拓げて、農者の産を殖する事挙げて数ふ可からず。斯の如く彼等の富を致せるは記憶すべき事実にして、而して此事実の影響は所謂 landscape gardening の芸術として発現せるも亦争ふべからざるの事実なり。〔中略〕英国が landscape gardening を以て名を得たるは実に此時にありとす。影響は単に造園術にとゞまらず、彼等は其資材の豊かなるに依じて自己の家室を飾らざる可からず。之を飾るに父祖もしくは自己の肖像画を以てせるは芸術史を繙くものゝ知る所なり。<sup>82</sup>

漱石は羊の飼養法といった農業改革を例に挙げ、耕作地や資材などの物質的状况と文学・芸術の展開が相関関係にあると考えていた。彼は、イングランドでこのような物質的状况が改善されなければ、風景式庭園 (landscape gardening) や室内装飾といった芸術は興らず、レノルズ (Sir Joshua Reynolds, 1723–1792) やゲインズバロ (Thomas Gainsborough, 1727–1788) 等の肖像画家も誕生しなかったであろうと推測している。

漱石が言及しているエリザベス朝文学の背景となるエリザベス女王 (Elizabeth I, 1533–1603) の治世 (1558–1603) とジェームズ一世 (James I, 1566–1625) の治世 (1603–1625) における農業・牧羊業の発達の背景には、共同放牧場を囲い込むことで土地の共有権を排除し私有化した、15 世紀半ばから 17 世紀の第一次囲い込みがある<sup>83</sup>。イギリスの風景式庭園造成術は、牧草地に羊が逍遙するといった「自然」の風景を生かした造園術で知られる。しかし、18 世紀にこの造園法が誕生する以前においては、イングランドでもフランス式庭園と同じく幾何学的デザインを重んじる庭園が主流であった<sup>84</sup>。換言すれば、英国式庭園は比較的新しく発明されたものであり、それは囲い込みによって、羊が草を食む牧草地が個人所有の庭として私有化されたときに初めて生じたものである。

第一次囲い込みを通じて羊が人間社会にどのような影響を与えたのかについて、合わせてみてみよう。第一次囲い込みは、イングランド産原毛の輸出を禁止し国内の毛織物産業を振興させ、「羊毛商人王」とも称されたエドワード 3 世 (Edward III, 1327–1377) の治世 (1327–1377) に始まる。エドワードは各領主に領地を囲い込ませ農耕地を牧場に変え、

羊と羊毛の生産を急激に増加させていった。領主達は、このとき初めて資本家として牧羊夫を雇用し土地の経営にあたり大きな利益を得ていったのに対し、農地を奪われた農民達は貧窮に陥った。このような状況が顕著になったのが、ヘンリー8世（Henry VIII, 1491–1547）の治世（1509–1547）であった。農民達は浮浪の後に餓死するか、窃盗によって日々の糧を得るしかなく、その罪のために死刑を受けた者も大勢いた<sup>85</sup>。

囲い込み運動が社会的脅威となりつつあった 1561 年に発表されたトマス・モア（Sir Thomas More, 1478–1535）の小説『ユートピア』（*Utopia*, 1515–1516）では、囲い込みによって土地を所有しない人間が貧窮に追い込まれることが、「羊が人間を食う」<sup>86</sup>と表現されている。この表現は、ラファエル・ヒスロディ（Raphael Hythloday）という架空の人物が語る次の一節によるものである。

「イギリスで窃盗の多い理由の一つは」イギリスの羊です。以前は大変おとなしい、小食の動物だったそうですが、この頃では、なんでも途方もない大喰いで、その上荒々しくなったそうで、そのため人間さえもさかんに喰殺しているとのこと。おかげで、国内いたるところの田地も家屋も都会も、みな喰い潰されて、見るもむざんな荒廃ぶりです。そのわけは、もし国内のどこかで非常に良質の、したがって高価な羊毛がとれるというところがあると、代々の祖先や前任者の懐にはいていた年収や所得では満足できず、また悠々と安楽な生活を送ることに満足できない、その土地の貴族や紳士や、その上自他ともに許した聖職者でもある修道院長までもが、国家の為になるどころか、とんでもない大きな害悪を及ぼすのもかまわないで、百姓たちの耕作地をとりあげてしまい、牧場としてすっかり囲ってしまうからです。<sup>87</sup>

貴族や紳士、修道院長が、羊毛を得るために農民の耕作地を取り上げ放牧地にしたことにより、農民は農地を追われ羊に「喰殺」されてしまったかのような状況にあることがここで描かれている。また、羊毛の価格が上昇し、羊毛加工を生業としていた人々の生活も成立しなくなってしまった。多くの羊が「少数の金持の独占するところとなっている」<sup>88</sup>ために、貧者が増え窃盗のような犯罪が増加していると、イギリス社会への批判が暗に述べられている。

羊はこのように、近代ヨーロッパにおける資本主義の誕生に関与した動物である。「資本」

を表す“capital”という語の語源は、ラテン語の“capitale”であり、これは羊の頭数を意味する“caput”に由来する。ヨーロッパでは、羊毛を織物に加工し他国との貿易によって富を増大したフィレンツェの市民達が、ルネッサンスの気運を起こした。その富はやがて「資本」という語に置き換えられ、近代資本主義の基礎が築かれることになった。羊はまた、産業革命の契機とも関わっている。羊毛加工産業の向上のためにジョン・ケイ（John Kay, 1704–1780）によって考案された機械である飛び杼<sup>ひ</sup>は、1760年代以降は主に綿業のために使用されるようになり、この綿業の伸展がイギリス産業革命の推進力となっていたのである<sup>89</sup>。

先に挙げた『文学論』からの引用で「英国が landscape gardening を以て名前を得たるは実に此時にありとす」と論じる漱石は、『ユートピア』で述べられるような資本主義の勃興と羊との関連性を的確に把握し、さらに文学や絵画などの高級芸術を誕生させたことを指摘している点に注意を喚起しておきたい。

以上のように、『三四郎』で「迷羊」として羊が登場する背景には、研究者としての漱石が研究対象としていた英文学作品や英国文化への知識がうかがえ、イギリス史において羊が社会構造の変化上重要な動物であったことを認識していたことがわかる。

## 第7節 終わりに

本章では、夏目漱石の『三四郎』における羊の表象について考察した。羊についての情報やイメージが十分には普及していなかった中で、漱石は英文学研究から得られた知識に基づき「迷羊」を描いている。特に本章では、“stray sheep”という語の初出である『トム・ジョウンズ』に着目した。『トム・ジョウンズ』では、教養がある女性、そして性的な墮落が示唆される女性が羊に擬えられていることを受けて、『三四郎』では、「迷羊」は高等教育を修めながらも「墮落女学生」としての一面も描かれた美禰子を示すものであることを論じた。

このように『三四郎』には、イギリス文学における羊の表象の例が取り入れられているのであるが、その意味が輸入され受容されるだけではなく、当時の日本社会に応用して描かれている。『新約聖書』における「迷い出た羊のたとえ」が神による救済を前提としているのと同様、『トム・ジョウンズ』ではウォーターズ夫人の罪は報われ救済されるのに対し、



『三四郎』の美禰子は望まぬ結婚を選択し罪を背負い、「書く女」としての将来の可能性さえもが閉ざされる。『三四郎』の「迷羊」は、当時の社会状況の中で救われることのない運命を強いられた女性を表すものとなっている。

『三四郎』における「迷羊」の表象は、その後の日本文学作品にも継承され、羊をめぐる言説の一つとして受容されるようになった。例えば、三浦綾子（1922–1999）の『ひつじが丘』（1966）は、北海道に位置する丘陵地帯の地名をその題名に据えた作品であるが、登場人物の奈緒美は、草を食む羊の群れを見つめながら次のように発言している。

「先生。漱石の『三四郎』をお読みになって？」[中略]

「読みましたが……」[中略]

「あの中に、<sup>ストレイシープ</sup>迷える小羊という言葉が出てきますわね」

「ああ、美禰子がいくどか三四郎の前でつぶやいた言葉ですね」

「ええ、そうですわ。今こうしてひつじが丘に来て、沢山の羊を見ているすと、ストレイシープという言葉が思い出されてなりませんの」<sup>90</sup>

このように、羊を目にすれば『三四郎』が連想されるほどに、『三四郎』の「迷羊」のイメージは浸透していったのである。本論文第5章で扱う村上春樹の『羊をめぐる冒険』もまた、このような『三四郎』の「迷羊」の系譜を辿る作品の一つであることをここで指摘しておきたい。

明治時代に開始された日本の緬羊飼育奨励政策は、やがて植民地政策と相俟って外地、特に「満洲」へと拡張されていった。この経緯については第4章で後述するが、日本の緬羊飼育は北方での戦争を想定した軍需衣料製造を目的として開始され「満洲」へと渡り、国策会社であった南満洲株式会社（以下満鉄と略記）によって経営された。「満洲」では農業移民の間でも羊の飼養が推進され、羊は日本の植民地経営の骨格となる動物であった。

『三四郎』以後、漱石の作品では英文学への言及が極端に減少し、『三四郎』から『それから』、『門』（1910）に至る前期三部作では、「満洲」や朝鮮など外地への言及が増加していく<sup>91</sup>。その契機とも考えられるのが、漱石の「満洲」訪問である。漱石は、『三四郎』執筆の翌年、学生時代の縁故から満鉄二代目総裁の中村是公（1867–1927）<sup>92</sup>に招待を受け、1909（明治42）年9月に「満洲」を訪れた。その記録として、帰国後10月から12月ま

で東京・大阪両『朝日新聞』に掲載されたのが、「満韓ところどころ」（1909）である。

「満洲」を訪れた漱石は、かつて漱石と下宿をともにしていた橋本左五郎（1866–1952）<sup>93</sup>の案内で満鉄農事試験場に足を運んでいる。漱石はそこで驢馬や豚を目にし、「全体驢馬といふのを満洲へ来て始めて見たが、腹が太くつて、背が低くつて、総体が丸く遅しくつて、万事邪気のない様な好い動物である」<sup>94</sup>、「始めて満洲の豚を見たときは、実際一種の怪物に出遭つた様な心持がした」<sup>95</sup>などと、初めて見た動物についての感想を述べている。漱石は、農業技術開発の現場も訪れ、それが内地よりも充実し発達した内容のものであったことを学んでいる。この満鉄農事試験場では、漱石が目撃した驢馬や豚だけではなく、現地の緬羊を改良する研究も行われていた<sup>96</sup>。この旅行記で羊についての言及はみられないが、ここで漱石が羊を見ていた可能性もあるだろう。

『文学論』で農業の発展と文化の関わりについて述べ、イギリスにおける緬羊飼育の政治的・社会的影響を把握していた漱石は、日露戦争後日本がアジア侵略を拡張していた国家情勢の中で発表された『三四郎』執筆時から、日本の大陸進出とそれに付随して進められた緬羊政策のあり方を意識していたとも考えられる。

明治時代を経て、日本の植民地化政策は緬羊飼育の地政学的な拡大とともに進展していった。次章では、大正時代に発生した関東大震災時の朝鮮人虐殺事件を描く江馬修の『羊の怒る時』を取り扱う。植民地主義の進展と緬羊飼育数の増加によって、日本における羊の表象はどのように変化していくのか、次章以降で考察していこう。

## 注

<sup>1</sup> 『三四郎』にみられる「<sup>ストレイ シープ</sup>stray sheep」という言葉に関して、本文中で述べる英文学からの引用や概念としての“stray sheep”とは区別し、「<sup>ストレイ シープ</sup>」で括り表記する。

<sup>2</sup> 全集の底本となる『三四郎』の原稿は、「漱石山房」原稿用紙（天理大学附属天理図書館蔵）による。ルビは漱石自身によって相当数振られたものであるが、〔 〕内のルビは全集編集部によって補足されたものである。なお、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に掲載された初出紙本文は総ルビである（『漱石全集 第五巻』後記付校異表、岩波書店、1994年、696–699頁）。

<sup>3</sup> 小倉脩三「森の女」と「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」——『三四郎』論 その一——（『国文学ノート』

---

第 24 号、成城大学、1987 年 3 月) 86 頁。

4 崔在哲「彷徨する青春——『三四郎』を読む——」(『国文学 解釈と鑑賞』第 62 巻 6 号、至文堂、1997 年 6 月) 45 頁。

5 村瀬士郎「<sup>プロセス</sup>過程としての「三四郎」——<sup>ストレイシープ</sup>迷羊へ、「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」から——」(『国語国文学研究』第 84 号、北海道大学国語国文学会、1989 年 12 月) 45 頁。

6 村瀬、同上、41 頁。

7 羊をめぐる未来開拓者共働会議編『羊は未来を拓く——記録集・羊シンポ'89・盛岡』(羊をめぐる未来開拓者共働会議、1990 年) 253 頁。

8 山根章弘『羊毛の語る日本史——南蛮渡来の洋服はいかに日本文化に組み込まれたか』(PHP 研究所、1983 年) 10 頁。

9 山根章弘『羊毛文化物語』(講談社、1989 年) 15 頁。

10 例えば、『今昔物語集』(平安時代末期)における死んだ女兒が羊に転生した話や、羊を盗んだ報いで舌がなくなった男の話等は、中国の説話に題をとったものである。また、『源氏物語』(平安時代中期)浮舟巻には、薫と匂宮との二人への愛情の板挟みになり入水を決意した浮舟の心情が、「明けたてば川の方を見遣りつつ羊の歩みよりも程なき心地」と表現されている。これは經典の「屠所の羊」に基づき、無常を表す「羊の歩み」という表現に拠ったものである。『狭衣物語』(平安時代中期)における狭衣の子を懐妊した二の宮の胸中の心細さ、『栄花物語』(平安時代後期)の彰子の出産を間近に控えた土御門殿の日々を過ごす様なども、「羊の歩み」と述べられている(『国文学 解釈と教材の研究』第 39 巻 12 号、学灯社、1994 年 10 月、30 頁)。

11 以上、日本における殺生禁断と肉食禁止の歴史の概略については、石田戢『現代日本人の動物観 動物とのあやしげな関係』(ビーイング・ネット・プレス、2008 年)、中村生雄『日本人の宗教と動物観——殺生と肉食——』(吉川弘文館、2010 年)を参照した。肉食の禁令が原則として機能してきた一方で、鳥や兎、猪など特定の動物を食することは国内各所で継続的にみられ、滋養や遊郭に上る際の強壮等、様々な形で肉食が行われていたことも指摘されている(石田、同上、110–111 頁、中村、同上、51 頁)。なお、日本における羊肉の消費については第 4 章で後述する。

12 ピーター・ミルワード『聖書の動物事典』(中山理訳、大修館書店、1992 年) 43–47 頁。

---

<sup>13</sup> 山根『羊毛文化物語』前掲書、17-18 頁。

<sup>14</sup> 同上、17-18 頁。

<sup>15</sup> 前田富祺監修『日本語源大辞典』（小学館、2005 年）1162 頁、あらかわそおべえ『角川外来語辞典 第 2 版』（角川書店、1977 年）1420 頁。

<sup>16</sup> 山根『羊毛文化物語』前掲書、20 頁。

<sup>17</sup> 以上、日本における羊の歴史については、羊をめぐる未来開拓者共同会議編、山根『羊毛文化物語』、各前掲書、川端俊一郎「明治初期の牧羊業と羊毛価格支持政策」（『北海学園大学経済論集』第 31 巻 2 号、北海学園大学経済学会、1984 年 1 月）、田村一郎『羊毛の需給と満洲緬羊の将来』（松山房、1934 年）、農林省畜産局編『畜産発達史 本篇』（中央公論事業出版、1966 年）、農林省農務局編『本邦内地ニ於ケル緬羊事情』（農林省農務局、1919 年）を参照した。

<sup>18</sup> 羊をめぐる未来開拓者共同会議編、前掲書、237 頁。

<sup>19</sup> 同上、234-241 頁。

<sup>20</sup> 新聞メディアの隆盛期において、種々の読者層を得ていた『朝日新聞』には、日常生活に即した家庭記事や趣味娯楽記事、子ども欄などを設けてほしいという意見が寄せられていた。新聞小説についても、その内容だけではなく、挿絵と一体となったものを読みたいという読者からの要望があった。『東京朝日新聞』は挿絵入の通俗小説と挿絵をつけない漱石の小説を区別していたが、読者投書欄「三面小話」には、「漱石の虞美人草に不折氏の画なきは可惜絶世の美姫の物言はぬに等し」（1907 年 7 月 4 日）と挿絵を要望する投書があり、読者の側には挿絵のついた小説を望む意見があったことがわかる（有山輝雄「明治末期の新聞メディアと漱石」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第 5 号、翰林書房、1995 年 11 月、93 頁）。このように、挿絵は当時の新聞小説読解のための一手段であったことを踏まえ、『三四郎』連載時に付された挿絵も作品解釈の手掛かりとみなしたい。

<sup>21</sup> イギリスで英文学の教授職が配置されるのは、オックスフォード大学では 1904（明治 37）年、ケンブリッジ大学では 1911（明治 44）年であり、英文学科が設置されるのもそれ以後のことである（山内久明「漱石と英文学研究」『漱石全集 第十三巻』月報 13、岩波書店、1995 年 2 月、15 頁、亀井俊介「『文学論』の講義と内容の展開」『漱石全集 第十四巻』月報 16、岩波書店、1995 年 8 月、14 頁）。

- 
- 22 美禰子の住居がある真砂町の当時の位置関係や、美禰子に通っている教会の「鉄柵」「締切った高い窓」(602)といった建築上の特徴からは、美禰子はプロテスタントの一派である日本メソヂスト教会の中央会堂に通っていたのではないかと推測されている(『漱石全集 第五卷』前掲書、注解、677頁)。
- 23 太田玉茗「小羊」(川戸道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集<<新聞雑誌編>>34』大空社、1998年) 370頁。
- 24 *The Bible* (Oxford: Oxford UP, 1998) 26.
- 25 『新約聖書』(『旧新約聖書 文語訳』日本聖書協会、1996年) 28頁。なお、本章における聖書からの引用は、漱石作品中にみられる聖書からの引用や時代背景を考慮し文語訳によるものとする。なお、マタイ伝第18章12節と同様の記述が、ルカ伝第15章4節にも見受けられる(同上、111頁)。
- 26 川崎寿彦『分析批評入門—新版』(明治図書出版、1989年) 511頁。
- 27 スティーブン、前掲書、163頁。
- 28 川崎、前掲書、512頁。
- 29 同上、512頁。
- 30 佐藤智美『「三四郎」——「迷羊」の意味するもの——』(『弘前大学国語国文学』第17号、弘前大学、1995年3月) 24頁。
- 31 『漱石全集 第五卷』前掲書、注解、666頁。
- 32 なお、“stray sheep”と同義の言葉として、行方不明のソファイアを示す“lost sheep”という言葉もうかがえる (Henry Fielding, *Tom Jones* (Oxford: Oxford UP, 2008) 706)。
- 33 矢本貞幹『夏目漱石——その英文学的側面』(研究社、1971年)、河野豊「サー・トマス・ブラウンと夏目漱石——『三四郎』をめぐる——」(『別府大学紀要』第48号、別府大学文学部、2007年2月)、千種キムラ・スティーブン『「三四郎」試論——『オルノーコ』の意味』(『国文学 解釈と鑑賞』第47巻12号、至文堂、1982年11月)等。
- 34 「漱石山房蔵書目録」によると、漱石は次の版を所有していたことがわかる。Fielding, Henry. *The History of Tom Jones, a Foundling*. 2 vols. London: G. Bell & Sons, 1884. Bohn's Novelists' Library. (『漱石全集 第二十七巻』岩波書店、1997年、33頁)。
- 35 特に『文学論』第4篇6章では、文学作品の中で日常的な瑣末な出来事を荘厳な口調で

物語ることの面白みについて、『トム・ジョウンズ』の一場面を引き合いに出して論じている。ここでは、「*Tom Jones* 中 Molly (賤しき家の娘) の分外に盛装して寺に賽したるがため、四隣の嫉を買ひて遂に一場の活劇を醸せる状を写せるもの」として、『トム・ジョウンズ』第4巻8章の文例が挙げられている(夏目金之助『文学論』『漱石全集 第十四巻』岩波書店、1995年、356頁)。

<sup>36</sup> Fielding 42.

<sup>37</sup> 『トム・ジョウンズ』の日本語訳に関しては、朱牟田夏雄訳『トム・ジョウンズ 1-4』(岩波書店、1975年)があるが、本論文では原文を忠実に検討するため拙訳を記す。

<sup>38</sup> Fielding 837.

<sup>39</sup> 文芸協会は、文学・演劇・美術などの改良を目的として、坪内逍遙(1859-1935)を中心に島村抱月(1871-1918)らによって1906(明治39)年に創立された団体である(『漱石全集 第五巻』前掲書、注解、673頁)。

<sup>40</sup> この演芸祭は、文芸協会の第二回大会であり、作品の舞台となっている1907(明治40)年の11月22日から25日にかけて本郷座で行われたものであると推定される。ここでは、翻訳作品としては本邦初演となる坪内逍遙訳の『ハムレット』(1909)が上演された(同上、注解、673、676頁)。

<sup>41</sup> 『トム・ジョウンズ』第7巻1章“A comparison between the world and the stage”(人の世と舞台との比較)において、ギャリックは“Garrick, whom I regard in tragedy to be the greatest genius the world hath ever produced”(悲劇において、世界が輩出した一番の天才)と評価されている(Fielding 285)。ハムレットを演じるギャリックの容貌については、広田のいうような「写真」ではないが、ベンジャミン・ウィルソン(Benjamin Wilson, 1721-1788)による肖像画、*David Garrick as Hamlet*(1773)がある。

<sup>42</sup> 三四郎が「アポロ杯を引合に出して」と言っている点に関して、坪内逍遙訳『ハムレット』を参照すると、第3幕4場のハムレットの台詞にある「<sup>ハイドリオン</sup>太陽神」を指していると想定される(『漱石全集 第五巻』前掲書、注解、676頁)。それは次のように記述されている。

「<sup>ハイドリオン</sup>太陽神の<sup>ちどれがみ</sup>縮髪、<sup>じん</sup>ヂョーヴ神の<sup>たかびたい</sup>高額、<sup>マーズ</sup>軍神のやうな此眼には三軍戦き服すべく、又此立姿は<sup>つかひがみ</sup>使神マアキュリーが雲に<sup>ひい</sup>沖る高峯に降立たしたる御風情」(川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア翻訳文学書全集 37 『ハムレット』 坪内逍遙訳』(大空社、2000年)156-157

---

頁)。なお、この箇所に対応する『ハムレット』原文は以下の通りである。

HAMLET. See what a grace was seated on this brow ;

Hyperion's curls, the front of Jove himself ;

An eye like Mars, to threaten and command ;

A station like the herald Mercury

New-lighted on a heaven-kissing hill . . .

(William Shakespeare, *The Tragedy of Hamlet*, ed. Edward Dowden (London: Methuen, 1899) III. iv. 55–59).

<sup>43</sup> “Ay, no wonder you are in such a passion, shake the vile wicked wretch to pieces. If she was my own mother, I should serve her so. To be sure all duty to a mother is forfeited by such wicked doings. ---Ay, go about your business; I hate the sight of you” (Fielding 753). (拙訳：「君が怒るのも当たり前だ。あの卑しい、極悪非道な女をばらばらになるまでゆすぶってやれ。もしあの女がおれの母親なら、おれもそうする。あんなひどいことをするのなら、母親に対してのどんな義務だって失われる。——そうだ、ひっこんでしまえ。見るのも嫌なくらいだ」)

<sup>44</sup> 土井治「解説」(アフラ・ベイン『オルノーコ・美しい浮気女』土井治訳、岩波書店、1988年) 267頁。

<sup>45</sup> “This young fellow [the Irish gentleman] lay in bed reading one of Mrs Behn's novels, for he had been instructed by a friend that he would find no more effectual method of recommending himself to the ladies than the improving his understandings, and filling his mind with good literature” (Fielding 458). (拙訳：この若者はベッドに横たわってベーン夫人の小説の一冊を読んでいた。というのは、貴婦人に気に入られるためには、理解を高め優れた文学に浸るのが一番だと、ある友人から教えられたからである。)

<sup>46</sup> “The clock had now struck seven, and poor Sophia, alone and melancholy, sat reading a tragedy. It was *The Fatal Marriage*; and she was now come to that part where the poor, distressed Isabella disposes of her wedding-ring” (Fielding 698). (拙訳：時計は今や七時を打った。そして可哀そうなソファイアは、一人で物思いに沈みながら、ある悲劇を読み座っていた。それは『運命の結婚』で、苦しむイザベラが結婚指輪を

---

処分する場面であった。)

<sup>47</sup> Laura J. Rosenthal, “*Oroonoko*: Reception, Ideology, and Narrative Strategy,” *The Cambridge Companion to Aphra Behn*, eds. Derek Hughes and Janet Todd (Cambridge: Cambridge UP, 2004) 154–155.

<sup>48</sup> この言葉は、アフラ・ベーンの『オルノーコ』をもとに書かれたトマス・サザーンの戯曲『オルノーコ』(*Oroonoko*, 1696) 第2幕第5場にみられる。イギリス人船長に騙されて奴隷になり、妻を失い絶望の淵に沈んでいたオルノーコが、農園主の親切に感動する場面での台詞である (Thomas Southern, *Oroonoko*, eds. Maxmillian E. Novak and David Stuart Rodes (Lincoln: U of Nebraska P, 1976) 44)。なお、アフラ・ベーンについては本章第5節で後述するが、『三四郎』におけるベーンの間テクスト性については高橋ハーブさゆみによる論考がある。高橋は、自由と奴隷制の問題を扱ったベーンの『オルノーコ』と、シェイクスピアの『ヴェローナの二紳士』(*The Two Gentlemen of Verona*, 1594) のテーマの共通点を指摘し、後者には「迷羊」に類似する表現“a sheep doth very often stray” (羊は行く道を見失って迷うことになる)が見受けられることについても言及している (高橋ハーブさゆみ「屋根裏の狂男——『三四郎』における女性作家・帝国・クィア文学——」『文学』第15巻6号、岩波書店、2014年11月、130–131頁)。

<sup>49</sup> 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』(若草書房、1998年) 220頁。

<sup>50</sup> 竹内洋『立身出世主義 [増補版] ——近代日本のロマンと欲望』(世界思想社、2005年) 47頁。

<sup>51</sup> 本田和子『女学生の系譜』(青土社、1990年) 12頁。

<sup>52</sup> 佐伯、前掲書、151頁。

<sup>53</sup> 『漱石全集 第五巻』前掲書、注解、670頁。

<sup>54</sup> 同上、注解、673頁、本田、前掲書、111頁。

<sup>55</sup> 佐伯、前掲書、97頁。

<sup>56</sup> 平石典子「「墮落」する女学生——「女学生神話」を巡る考察(二)——」(『文芸言語研究 文芸篇』第40号、筑波大学文芸・言語学系、2001年3月) 79–80頁。

<sup>57</sup> 有山、前掲書、89–90頁。

<sup>58</sup> 1906年11月17日付松根豊次郎宛書簡に、「今日森田白楊の所へ行つて西洋料理を御馳



---

走して帰り道に彼の身の上話をきいた所が風葉の青春よりも余程面白かった」(『漱石全集 第十四巻』岩波書店、1995 年、509 頁) という一節がある。

<sup>59</sup> 夏目金之助『それから』(『漱石全集 第六巻』岩波書店、1993 年) 33 頁。

<sup>60</sup> 夏目金之助『吾輩は猫である』(『漱石全集 第一巻』岩波書店、1993 年) 415 頁。

<sup>61</sup> 同上、252 頁。

<sup>62</sup> 佐伯、前掲書、178 頁。

<sup>63</sup> 同上、162 頁。

<sup>64</sup> 木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』(皓星社、2000 年) 1325–1326 頁。

<sup>65</sup> 小栗風葉『恋慕ながし』(『明治大正文学全集 第十七巻』春陽堂、1928 年) 361 頁。

<sup>66</sup> 夏目金之助『彼岸過迄』(『漱石全集 第七巻』岩波書店、1994 年) 133 頁。

<sup>67</sup> 山根『羊毛の語る日本史』前掲書、154 頁。

<sup>68</sup> 同上、220–221 頁、『漱石全集 第五巻』前掲書、注解、677 頁。

<sup>69</sup> 『旧約聖書』前掲書、779 頁。『三四郎』を英訳したジェイ・ルービンは、美禰子の台詞の後に続くこの一節を漱石は念頭に置いていたに違いないと指摘する (Jay Rubin, “Sanshiro and Soseki: A Critical Essay,” *Sanshiro, A Novel*, by Natsume Soseki, trans. Jay Rubin (Tokyo: U of Tokyo P, 1997) 234)。

<sup>70</sup> *The Bible* 815.

<sup>71</sup> 『旧約聖書』前掲書、962 頁。

<sup>72</sup> 河野、前掲書、A21 頁。

<sup>73</sup> 小宮豊隆『漱石・寅彦・三重吉』(角川書店、1951 年) 105–106 頁、森田草平『続夏目漱石』(甲鳥書林、1943 年) 607–613 頁。また、煤煙事件をもとにした森田草平の小説『煤煙』は、『三四郎』掲載後の 1909 年 1 月 1 日から 5 月 17 日まで『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載されており、『三四郎』掲載欄と同欄に『煤煙』の連載広告が頻繁にみられる。ここからは、美禰子と平塚明を関連付けることは難しくなかったと考えられる。

<sup>74</sup> 本田、前掲書、44 頁。

<sup>75</sup> 佐伯、前掲書、176 頁。

<sup>76</sup> 佐々木亨監修『文部省 教育統計・調査資料集成 第三三巻 全国高等女学校・実科高等女学校ニ関スル諸調査 第一巻』(大空社、1989 年) 81 頁。

---

77 佐伯、前掲書、160–161 頁。

78 『四季』からの引用は次の通りである。

Fear not, ye gentle tribes, 'tis not the knife  
Of horrid slaughter that is o'er you waved ;  
No, 'tis the tender swain's well-guided shears,  
Who having now, to pay his annual care,  
Borrowed your fleece, to you a cumbrous load,  
Will send you bounding to your hills again.

(おとなしい羊たち、恐れなくてよい、／頭上で揮われるのは恐ろしい殺戮者のナイフではない。／あれは優しい少年の手さばきも確かな毛刈鋏なのだ。／あの子は年毎の手入れのために／お前にとって鬱陶しい毛を借りたのだ、／そしてふたたびお前を丘で跳ね回らせてくれるのだ)

(夏目金之助「英国詩人の天地山川に対する概念」『漱石全集 第十三巻』岩波書店、1995 年、41 頁。日本語訳については、同上、591 頁、山内久明の注解による。)

79 『牧童歌』からの引用は次の通りである。

“Come, lovely nymph, and bless the silent hours,  
When swains from shearing seek their nightly bow'rs ;  
When weary reapers quit the sultry field,  
And crown'd with corn their thanks to Ceres yield.  
This harmless grove no lurking viper hides,  
But in my breast the serpent Love abides.”

(「来れ、麗しの少女よ、この静寂のときを祝福せよ、／若者が羊の毛刈りのあと、夜の憩いの家に帰るとき。／疲れた農夫が暑い野を汗して去り、／額に麦穂をいただいてケレースの神に感謝するときを。／このおだやかな森には蝮の潜むことなく、／わが胸の奥にのみ恋の蛇宿る」)

(夏目金之助『文学評論』『漱石全集 第十五巻』岩波書店、1995 年、389 頁。日本語訳については、同上、522 頁、岡照雄の注解による。)

80 同上、389 頁。

- 
- 81 『漱石全集 第十六巻』(岩波書店、1995 年) 注解、664–665 頁。
- 82 夏目『文学論』前掲書、520–524 頁。ここでの引用、「燕を以て羊を養ふ」という飼養法の発展から、漱石は羊は燕を食する動物と考えていたようである。1904 年末、第一高等学校の英語教師として同僚であった畔柳芥舟<sup>くろやなぎかいしゅう</sup>(1871–1923)に果物をもらった礼に燕漬を送った際には、「燕居士」という差出人名を用いて、「燕を送ればとてかぶを食つて新年に羊にでもなりたまへといふ謎ぢやない」(1904 年 12 月 31 日付畔柳芥舟宛書簡(『漱石全集 第二十二巻』岩波書店、1996 年、343 頁)と書いた手紙を添えている。手紙を認めるという日常的行為において、漱石は羊を取り上げて諧謔を弄しているのであり、羊という比喻を親しみを込めて使用していた様うかがえる。
- 83 山根『羊毛文化物語』前掲書、222 頁。
- 84 川崎寿彦『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』(名古屋大学出版会、1983 年) 205 頁。
- 85 山根『羊毛文化物語』前掲書、222–225 頁。
- 86 同上、225–226 頁。
- 87 トマス・モア『ユートピア』(平井正穂訳、岩波書店、1992 年) 26–27 頁。
- 88 同上、28 頁。
- 89 山根『羊毛文化物語』前掲書、289 頁。
- 90 三浦綾子『ひつじが丘』(『ひつじが丘 病めるときも 三浦綾子作品集 第三巻』朝日新聞社、1983 年) 219 頁。
- 91 海老池俊治「漱石と英文学——『虞美人草』と『三四郎』の場合」(『言語文化』第 2 巻、一橋大学、1965 年 11 月) 96 頁、武田悠一「まなざしの帝国主義——ロンドンの漱石／漱石の満州」(佐々木英昭編『異文化への視点』名古屋大学出版会、1996 年) 233 頁。
- 92 初代満鉄副総裁。大蔵省に勤務後、1896(明治 29)年台湾総督府に転じて総務局などを経る。台湾総督府民政長官であった後藤新平(1857–1929)の信任を得、後藤が満鉄初代総裁になると副総裁に抜擢され、1906 年に満鉄に異動。1908 年には総裁となり、このときに漱石を招待している。1913(大正 2)年辞職、のち貴族院勅撰議員、鉄道員総裁、東京市長などを歴任した(『漱石全集 第十二巻』岩波書店、1994 年、注解、682 頁)。
- 93 1889(明治 22)年札幌農学校卒業、1895(明治 28)～1900 年までドイツに留学し、

---

札幌農学校教授、東北帝国大学農科大学教授となった（同上、注解、688–689 頁）。

<sup>94</sup> 夏目金之助「満韓ところどころ」（『漱石全集 第十二巻』同上）314–315 頁。

<sup>95</sup> 同上、319 頁。

<sup>96</sup> 山本晴彦『満洲の農業試験研究史』（農林統計出版、2013 年）91–94 頁。

## 第2章 江馬修『羊の怒る時』 ——関東大震災における怒れる民衆としての羊——

### 第1節 はじめに

夏目漱石の『三四郎』の世界は、羊の存在が稀有であった時代背景のもとで、「迷羊」という言葉やその異質性が作品解釈の鍵となっていた。しかしやがて、日本における緬羊飼育の規模は増加し、羊についてのイメージも文学作品の中で定着していくようになる。

前章では、明治時代中期の飼育奨励政策空白期までに至る日本の羊の歴史を述べた。明治政府が欧米をモデルとして導入をはかった放牧主体の大規模牧場経営は失敗に終わり、それに代わって副業的な小規模集約農法として緬羊飼育は日本に定着していくことになったが、その後の動向と羊毛加工業の発展について概説しよう。

緬羊奨励政策の第二期は、第一次世界大戦を機に訪れる。1914（大正3）年に第一次世界大戦が勃発すると、英国はオーストラリア、ニュージーランドの羊毛を国家管理の対象とし、戦略物資として輸出を禁止した。羊毛輸入量の九割をこの両国に依存していた日本は、アルゼンチンや南アフリカなど他国からの輸入を試みるが、原毛不足に陥り羊毛加工業は深刻な危機に見舞われる。そこで政府は再び国内生産の向上をはかり、1917（大正6）年に「羊百万頭計画」を立て、約七千頭の前種羊をアメリカやオーストラリアから輸入した。しかし十分な効果は上げられず、計画は七年で打ち切れ、緬羊飼育は小規模な副業農業の一環として継続されていく。

しかし、大正末期から昭和初期にかけての不況期、その影響を受け貧困を余儀なくされた農村において、羊は再度脚光を浴びることになった。1932（昭和7）年、農山漁村経済厚生運動の一環として有畜農業が勧められ、これに最も適した家畜として飼育奨励されたのが羊であった。羊は刈り草を好んで食し、また、その糞尿を土地に還元すると果樹や蔬菜の成長に良いとされ、少ない経営面積を有効利用するために最適な家畜であるとうたわれた。

このような流れに乗じて、1936（昭和11）年、オーストラリアとの通商会談がまとまらなかったことを契機に再び毛織物の原料を自給せざるを得なくなった日本は、大々的な

緬羊飼育奨励政策を打ち出す。その年には「羊百二十万頭計画」、1939（昭和 14）年には「羊百五十万頭計画」が立てられ、羊は「戦時中の花形家畜」<sup>1</sup>として祭り上げられることになった。その結果、1936 年には日本内地の飼育頭数が約九万頭であった羊が、その約十年後の 1946（昭和 21）年には約二十万頭に増加する<sup>2</sup>。本論文第 4 章で詳述するが、内地だけでなく、朝鮮半島や「満洲」での飼育事業が興隆したのもこの時期である。

以上のように日本では、羊の大量放牧は定着しなかったものの、西欧文化の流入やキリスト教文化の普及につれて、羊の群れる牧場の光景が牧歌的な穏やかさを醸し出すものとして想像されていった。このような羊のイメージは、翻訳として受容されるだけでなく、日本で創作された詩や童謡のモチーフとなっていった。例えば、詩人大手拓次（1887–1934）は、「野の羊へ」（1913）という次のように草原の羊をうたった作品を残している。

野をひそひそとあゆんでゆく羊の群よ、  
やさしげに湖上の夕月を眺めて／嘆息をもらすのは、  
なんといふ瞬合をわたしの心にもつてくるだらう。<sup>3</sup>

羊は群れを成す存在であり、羊が集団で移動をする様子は「ひそひそと」した閑静な調子で描写されている。

詩人・童謡作家であった西條八十（1892–1970）も、童謡「羊」（1920）や詩「空の羊」（1921）等の作品で羊について数多く扱っている。例として「羊」の一部を挙げてみよう。

羊 羊、／まつしろな羊／やさしい羊／あつたかい春の日に／青い草をたべながら／  
そろつて通る羊<sup>4</sup>

ここでは羊の毛の白さが強調されており、「そろつて通る」という表現からは、羊が群れながら草を食んでいる様子がうかがわれ、春の温かさや長閑さの象徴となっている。

大手や西條の詩や童謡では、羊は白い雲に喩えられ、羊の群れは温和で穏やかな印象を与えている。しかしそのような光景は、作者が実際に目にしたのではなく、想像によって形成されたものではないかと考えられる。先述したように、大正時代以降、日本では大規模な緬羊飼育奨励策が打ち出されていったが、羊が飼育されていた地域は限定されており、

また日本が模倣した西欧の放牧形態は気候に適合せず、副業的で小規模な舎飼方式が広まっていった。したがって、上記の詩で描写されるような羊の群れる牧歌的風景は、日本内地人には馴染みが少なかったはずである。それにも拘らず、羊を無垢の象徴として描いた作品や、羊の群れが草を食むのどかな風景をうたう作品が創作されていったのである。その背景には、上述の詩人達がイギリスの童謡やフランス象徴詩等の西欧文学に影響を受けていたことがあるだろう<sup>5</sup>。この点については、これらの作家達が読み親しんでいた作品や翻訳活動等、さらなる考察が必要とされる。

しかし、日本近代文学における羊の象徴的意義を考察する本論文では、西欧文化やキリスト教文化の受容によって構築された羊のイメージが浸透していった一方で、それとは対蹠的な意義が付され、あるいは単なる模倣に留まらず日本の社会的・文化的情勢に乗じた新しい表象が生じていった点に着目したい。それは例えば、前章で論じたような、羊と明治時代の女学生の性墮落とを結び付けた『三四郎』の「迷羊」であるといえるが、本章で分析する大正時代には、外地出身者に対して残虐な行為を行う日本人群集が羊として表されている作品がある。それが、江馬修の『羊の怒る時』である。この小説は、1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災の被災体験に基づいて執筆され、1924（大正 13）年 12 月 14 日から翌年 3 月 30 日にかけて『台湾日日新報』夕刊に連載後、1925（大正 14）年 10 月に東京で単行本として刊行された。

『羊の怒る時』では、羊の従順でおとなしい側面は影を潜め、羊はむしろそのイメージを逆手にとるように危険で獰猛な集団的行動を行う存在へと化している。東京を襲った未曾有の災害の中で冷静さを失い、官憲による工作のもとで「スケープゴート」とされた朝鮮人や社会主義者へ暴行を振るう日本人民衆の姿は、「よき羊飼い」を失った羊の群れに喩えられている。本章では、羊と羊飼いを民衆と政治権力の構図に置換し、社会的暴力の象徴としての羊という解釈を試みたい。このような羊の象徴性は、後述する第 4 章の安部公房作品や第 5 章の村上春樹の『羊をめぐる冒険』においても共通するものとなる。

『羊の怒る時』の著者である江馬修については、これまで体系的な作家研究がなされてきたとは言い難い。漱石が英文学に精通していたように、江馬もまた、フランス文学やドイツ文学、ロシア文学の素養があった作家であり、読書や翻訳活動を通して西欧の文学・芸術作品やキリスト教における羊の表象を受容してきたと推測できる。しかし江馬は、特にプロレタリア文学作家としての立場から、関東大震災前後の日本内地と植民地をめぐる

社会構造を描写する際に羊のメタファーを用いていた。本章では、これまで散逸していた江馬の作品情報や作家としての経歴を緻密に考証し直し、作品発表の媒体や経緯といった創作活動の背景、関東大震災を描いた江馬の他の作品にも焦点を当てることにより、『羊の怒る時』における羊の表象について論じていきたい。

## 第2節 江馬修の経歴と『羊の怒る時』

『羊の怒る時』の分析に入る前に、作品概要と合わせ、大正時代に一時ベストセラー作家としてその名を知られたものの、その後文壇からは「忘れられた作家」<sup>6</sup>とみなされてきた江馬修の経歴を確認していきたい。

『羊の怒る時』では、地震が発生した1923年9月1日正午からの三日間と10月下旬に至るまでの後日譚が、四部構成（「第一日」「第二日」「第三日」「その後」）で記述される。そのあらすじは以下の通りである。以下、本章での『羊の怒る時』からの引用は、影書房による復刻版（1989）によるものとし、（ ）内に引用ページ数を示す。なお、初出の『台湾日日新報』連載時及び単行本（1925）での伏字箇所については、復刻にあたり出版社編集部によって伏字が書き起こされ、該当箇所は「×」のルビによって表記されている<sup>7</sup>。

東京府下代々木初台の自宅で原稿を執筆中の語り手が妻子と昼食をとっていたところ、大きな地震が発生する。語り手一家は余震の恐怖を感じて、退役軍人のI中將はじめ近隣住民とともに屋外に避難する。近所を見回ると、朝鮮からの留学生で以前から親しくしていた李君が、倒壊した家屋から幼児を助け出す場面に遭遇する。

翌日、大きな余震があるとの情報を耳にして身構える中、朝鮮人が暴動を起こしているという噂が近所から伝わってくる。やがて初台近くでも朝鮮人による一揆が勃発したという連絡が入り、語り手一家は家の中に隠れ不安な一夜を過ごす。三日目、語り手は本郷に住む兄の安否を気遣い家を出るが、至る所に設けられた検問を通過するごとに朝鮮人や社会主義者と間違えられ、危うく住民から暴力を振るわれそうになる。

四日目の夕方、知り合いの留学生の一人であった蔡君と出会い、李君ほか数名の留学生の消息が不明であることを聞き知る。語り手は風説された朝鮮人暴動抑圧のため近隣住民によって結成された自警団に参加しつつも、蔡君の身の危険を案じて彼を自宅に匿う。また、浅草区長を務める兄のもとで、甚大な火災被害に見舞われた浅草寺近辺や吉原遊郭周



辺を訪れ、その罹災状況を見学する。

犠牲となった朝鮮人を弔うための追悼会を間近に控えた 10 月下旬、友人と語り手が震災について話し合う場面で作品は幕を閉じる。友人と別れた後、語り手は「柔和なる羊を怒らすこと勿れ。羊の怒る時が来たら、その時は天もまた一緒に怒るであろう。その時を思っ  
て恐れるがよい」(256) と独り言をつぶやき、作品が締め括られる。

『羊の怒る時』の作者である江馬修の経歴については、その自伝的作品『一作家の歩み』(1957) が参照されることが多い。しかし、この作品は江馬の記憶に基づいて執筆されており、事実の混同が見受けられる場合や、思想の変化などから過去に関する記述が客観的でない場合がある。江馬の作家研究については、天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』(1985) や永平和雄『江馬修論』(2002) が挙げられるが、これらも『一作家の歩み』の内容を踏襲しているに過ぎず、事実関係についての信憑性が疑われる。また、前者は天児の江馬からの伝聞に基づいて記述されたものであり、作家としての江馬研究に真に有効な文献であるとは言い難い。そのため、本論文では、これらの先行研究を参考にしつつも、客観性のある資料と対照させながら江馬の生涯を辿りたい<sup>8</sup>。

江馬修(本名 <sup>なかし</sup>修)は、1889 年、岐阜県大野郡高山町(現高山市)に生まれた。父弥平の事業の失敗と死去が原因で中学校を中退後、自然主義文学に感銘を受け東京を訪れ、一時田山花袋(1871–1930)の書生となる。1909 年に上京し区役所等で働きながらフランス語の夜間学校<sup>9</sup>に通い、創作活動を開始した。1911 年、『早稲田文学』2 月号に短篇小说「酒」を発表し、文壇にデビューした。小宮豊隆(1884–1966)、安倍能成(1883–1966)らから、この作品の情景描写を高く評価される。その後、『早稲田文学』『スバル』などに短篇作品を発表していくが、自身の最初の妻との恋愛をテーマとした長篇小説『受難者』(1916) がベストセラーとなり、人道主義を貫く「ヒューマニズム作家」<sup>10</sup>として知られるようになった。この間に、ストリンドベルヒ(August Strindberg, 1849–1912)やトルストイ(Lev Nikolaevich Tolstoi, 1828–1910)の作品の翻訳<sup>11</sup>も刊行している。1923 年の関東大震災に際して代々木初台の自宅で被災、このときの体験をもとに『羊の怒る時』を発表した。1926(大正 15)年にはフランスに渡り、三ヶ月間パリに滞在した<sup>12</sup>。帰国後、プロレタリア芸術連盟・作家同盟へ加入し<sup>13</sup>、自ら編集委員を務めたプロレタリア文学雑誌『戦旗』(1928–1931)に戯曲『阿片戦争』(1929)等の作品を発表した。特高による思想弾圧を避けるため、1932 年高山に戻る。ここで、ライフワークともいえる『山の民』(1938)<sup>14</sup>を

執筆・改稿するかたわら、郷土研究雑誌『ひだびと』（1935–1944）を発行し考古学論文を投稿した。

戦後、1946 年に日本共産党に入党した、1966（昭和 41）年まで党员として活動した。中野重治（1902–1979）や宮本百合子（1899–1951）等、共産党非主流派である「国際派」党员が多くを占めた『新日本文学』（1945–2004）に対し、藤森成吉（1892–1977）ら「所感派」党员が拠った文学雑誌『人民文学』（1950–1955）の主導的論者となり、労働者による文学や記録文学運動を進めていった。1967（昭和 42）年、当時の実質上の妻であり『綴方教室』（1937）で知られる作家の豊田正子（1922–2010）とともに、中国作家協会の招待により訪中した。1975（昭和 50）年、立川市の自宅で死去。1989（平成元）年に、本章で取り扱う『羊の怒る時』の復刻版が刊行された<sup>15</sup>。本章で主に取り扱うことになる関東大震災での被災に関しては、江馬修は『羊の怒る時』だけではなく『血の九月』（1947）や「ゆらぐ大地」（1964）といった作品を発表している。また、江馬の作品については、周作人（1885–1967）や張資平（1895–1947）らによる中国語翻訳が出版されていることも述べておきたい。

江馬修の作品研究については、明治維新时期における飛騨の百姓一揆を扱った『山の民』以外についての考察は数少ない。歴史小説としての『山の民』の評価は高く、例えば尾崎秀樹は、『山の民』の分析を通して江馬を「歴史の深部へ迫ろうとした作家」<sup>16</sup>であるとし、大岡昇平はこの作品を「これまでにわが国で書かれた最もすぐれた歴史小説」<sup>17</sup>と述べている。この他にも、『山の民』を階級闘争と関連させた次のような賞賛が見受けられる。本多秋五は、『山の民』を群集の多面的な動きをダイナミックに描いた作品であると論じ<sup>18</sup>、また、中山和子は、副次的階級闘争の激化をいち早く捉えた「明治維新时期の歴史の真実を発見した歴史小説」<sup>19</sup>と評している。しかし、永平が指摘するように、これらの批評では『山の民』以外の作品についての十分な検討はなされていない<sup>20</sup>。

そのような中で、『羊の怒る時』についての先行研究をみると、関東大震災の記録、そして震災時に発生した朝鮮人虐殺事件における群集の心理を綴ったルポルタージュとして紹介されてきたことがわかる。関東大震災時の朝鮮人虐殺事件とは、9 月 1 日の地震発生後、横浜を起点に朝鮮人の放火・投毒・来襲などの流言を契機として起こったものである。翌日東京に戒厳令が公布されると、軍隊・警察や自警団は朝鮮人を狩りたて、集団的に殺害するなどの残虐行為を行った。虐殺された朝鮮人の数は定かではないが、6000 名以上が犠

牲になったともいわれている<sup>21</sup>。天児は、『羊の怒る時』は関東大震災の記録としておそらく最初のルポルタージュであると指摘したうえで<sup>22</sup>、緊迫状態における群集の心理が見事に描かれた、『山の民』に次ぐ江馬の著作であると述べる<sup>23</sup>。作家の石牟礼道子（1927-）は、『羊の怒る時』を「極限事態の群集心理」<sup>24</sup>を鋭く描写した作品であるとし、朝鮮人虐殺に言及した高群逸枝（1894-1964）の文章<sup>25</sup>と比較している。永平も同様に、関東大震災を扱った他の作品<sup>26</sup>と比較し、一市民の体験を地震の瞬間から克明に記録した優れたルポルタージュとして再評価されるべきであると主張する<sup>27</sup>。

しかしこれらの研究では、『羊の怒る時』本文についての具体的な分析は含まれておらず、単なる作品紹介に留まっているに過ぎない。緊迫した状況における群集の描写が注目される中でも、この「群集」とは誰のことを示し、その心理が小説内の時間経過とともにどのように変化していくのかについては、詳しく論じられてはいない。

また、この作品の羊をめぐる解釈に関して、題名や作品末尾において唐突に羊という語が現出する理由については、これまで追究されていなかった点である。ここで仮説を立てるならば、第一に、羊は朝鮮人虐殺事件の犠牲となった朝鮮人を表しているのではないかと考えられる。松枝は、『羊の怒る時』では日本人に虐殺された朝鮮人が羊と呼ばれ、日本の中に潜む不断の人種的偏見が描き出されていると概括する<sup>28</sup>。犠牲者としての羊という図式を用いるならば、この小説で暴虐を受ける朝鮮人が羊であるという結論は導き易い。しかし松枝の論では、羊は各時代的・社会的背景において犠牲とされ抑圧されたものを表すという自説を疑うことがなく、「人間の羊」や『羊をめぐる冒険』等他の作品と一貫した見解が短絡的に当てはめられているに過ぎない。

また、朝鮮人を羊とみる解釈の前提としては、日本の植民地支配に対する朝鮮人の鬱積した「怒り」が震災時に暴動というかたちをとり、それを鎮圧するために虐待・虐殺が行われたという本文中の記述が「羊の怒り」という表現に結び付けられたことが考えられる。第二日目、地震と火災の混乱に乗じて朝鮮人が放火しているという噂を耳にした I 中將は、「日頃日本の国家に対して怨恨を含んでいる」（81-82）朝鮮人にとっては、今が暴動を起こす絶好の機会と考えており、語り手もそれに同意している。

しかし語り手は、同時にこの噂を疑い、次のように語ってもいる。

とは言え、実際の所、自分はどうも腑に落ちなかった。何故なら、いかに絶好の機会

であるとは言っても、罪のない幾百万の人々がかくも大きな変災に容赦なく虐げられている時に当って、さらにその限りない不幸を益々大きくするために到る処へ放火するなどという事は、到底人間の心の堪え得る所と思われなかったのだ。(82)

彼は朝鮮人暴動の噂を一概に信じてはいない。語り手のこの疑いの姿勢は、作品全体を通して強調されるものである。自分と同じく文筆によって生計を立てることを目指す学生がいたこともあり、近所に住む朝鮮人留学生と親しくしていた語り手は、朝鮮人が「この際そんな暴挙を敢てする人々でない」(85) と思っていた。その信念は、地震直後に全力で日本人の幼児を救出する李君の姿を目撃したことによっても裏付けられている。朝鮮人を見たら誰でも暴行を加えてよいという情報が近所から流れると、彼は真剣に朝鮮人の身を案じ、四日目を降蔡君を自宅の奥に匿う。このように語り手は、朝鮮人暴動の流言を虚偽と捉えており、それはこの作品の中で朝鮮人が「怒れる」存在として描かれてはいないということではないだろうか。実際に、この作品の中で朝鮮人が暴動を起こしている情景は見当たらない。

『羊の怒る時』における「怒り」は、むしろ日本宗主国人のものであると考えるべきである。この作品の中で「怒り」について言及されるとき、それは日本人が抱く感情である。例えば、朝鮮人虐待を誘引した理由の一つは、「恐ろしい天変地異に対して持って行きどころのない市民の憤満と怨恨が、期せずして朝鮮人の上にはけ口を見出した」(154) と述べられている。また、朝鮮人への暴虐の様子を目の当たりにした語り手は、「朝鮮人に対する〔日本人〕一般の敵意と憎悪は極端に沸騰して」(162) いると感じる。『羊の怒る時』で描かれる「怒り」は、破壊的な自然災害に直面した者が抱く矛先の向けようのない感情が噴出したものであり、それは朝鮮人虐殺という暴力を引き起こした日本人に属するものである。

以上を踏まえれば、『羊の怒る時』の羊は朝鮮人を示すという松枝の指摘は妥当性を欠いている。生命を脅かす地震や火災に対して抱くやり場のなさが、その捌け口を朝鮮人迫害に見出し「怒り」と化した。その「怒り」は日本人のものであり、従って、『羊の怒る時』の羊は日本人であると解釈できる。

さらに、「羊の怒る時」とはどのようなときであり、その「怒り」が作品内で何を示しているのかを検証することによって、この作品では朝鮮人虐殺事件の加害者である日本人が

羊として喩えられていることが指摘できる。未曾有の大地震とそれに伴う火災被害に見舞われた日本人が、避け難く恐ろしいものである天変地異に対して抱くその「憤満と怨恨」の捌け口を見出すことができないとしても、それを朝鮮人への暴行・虐殺に求めることは決して許されることではない。愚かな「怒り」をあらわにした日本人集団は、語り手によって「愚衆」と非難されるが、ここでは羊として表現される日本人が羊のように群れるものとして表されている点に注意し、知識人階級としての語り手をも含む民衆の「怒り」に対する批判を読み取っていききたい。

このような解釈を可能とするために、まずは題名となっている「羊の怒る時」という言葉に着目する必要がある。「羊の怒る時」とはどのようなときを示し、「羊」や「怒り」とは何であるのかを、『新約聖書』にみられる地震の発生に関する記述との関係から明らかにしていく。

### 第3節 「羊の怒る時」と地震の発生——黙示録的解釈

『羊の怒る時』の中で羊が言及される箇所について、ここで再度確認しよう。それは、題名と最終場面の以下の一節のみである。

外へ出てから、自分は洋行中三年も会わなかった友達から土産話を何一つ聞かないで、震災と朝鮮人の話ばかりしてきた事に気がついた。しかし自分は別に悪い事をしたとも思わなかった。そしてたった今友達と話し合った事を思い返しながら、路の上でこう独語した。

「柔和なる羊を怒らすこと勿れ。羊の怒る時が来たら、その時は天もまた一緒に怒るであろう。その時を思っ<sup>て</sup>恐れるがよい。」(256)

この「羊の怒る時」という言葉は、『新約聖書』に由来する表現であり、「ヨハネの黙示録」における地震の記述に関連している。終末の世界で起こる出来事をヨハネが見聞する「ヨハネの黙示録」において、「羊の怒る時」とは、小羊である神<sup>29</sup>が七つの封印を解き地震と天災が起こるときのことである。「ヨハネの黙示録」第6章12～17節は以下のように記されている。

〔小羊が〕第六の封印を解き給ひし時、われ〔ヨハネ〕見しに、大なる地震ありて日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、〔中略〕地の王たち・大臣・将校・富める者・強き者・奴隷・自主の人、みな洞と山の岩間とに匿れ、山と岩とに向ひて言ふ『請ふ、我らの上に堕ちて御座に坐したまふ者の御顔より、羔羊の怒より、我らを隠せ。そは御怒の大なる日既に来ればなり、誰か立つことを得ん』<sup>30</sup>

『新約聖書』のこの記述に即すれば、「羊の怒る時」とは、神が怒り、地震や数々の災害が発生し世が終わりを迎えるときである。

「羊の怒る時」という表現が『新約聖書』に由来していることは、『羊の怒る時』における上述の引用「柔和なる羊を怒らすこと勿れ」に先立つ次の場面からもうかがえる。語り手は、湯島天神の石段を上り、火災により焦土と化した東京市内を見下ろしている。背後に視線を感じた語り手は、そこに「二十五、六の店員風の男」(248)が立って自分を見つめているのに気が付くが、その鋭い視線から自分が朝鮮人として見られていることを悟る。その男の「殺人者の眼」(249)は、語り手を朝鮮人の気持ちに置き換わらせ、焼け跡を見渡す中にも至る所に同様の鋭い視線を見出す。このとき、語り手は次のように言う。

「汝等に告げん、この所に一つの石も石の上にくずされずしては遣らず。」イエスがエルサレムに於けるこの大いなる呪いの言葉を思い出しつつ、自分は急いでその場を立去った。(249)

ここで述べられている「汝等に告げん、この所に一つの石も石の上にくずされずしては遣らず」という表現もまた、「羊の怒り」と同じく『新約聖書』に見受けられる。以下の「マルコ福音書」第13章1～8節と比較しよう。

イエス宮を出で給ふとき、弟子の一人いふ『師よ、見給へ、これらの石、これらの建造物、いかに盛ならずや』イエス言ひ給ふ『なんぢ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ。』

オリブ山にて宮の方に向ひて坐し給へるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ秘

に問ふ『われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆<sup>しるし</sup>あるか』イエス語り出で給ふ『なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。多くの者わが名を冒し来り「われは<sup>それ</sup>夫なり」と言ひて多くの人を惑さん。戦争<sup>いくさ</sup>と戦争の噂とを聞くとき懼るな、かかる事はあるべきなり、されど未だ終にはあらず。即ち「民は民に、国は国に逆ひて起たん」また<sup>ところどころ</sup>処々に地震あり、飢饉あらん、これらは産の苦難<sup>くるしみ</sup>の始なり。<sup>31</sup>

「マルコ福音書」第13章2節「なんぢ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ」は、語り手の「汝等に告げん、この所に一つの石も石の上にくずされずしては遣らず」という表現と同様である。そして、これは同章8節「処々に地震あり」という記述へとつながるように、地震の発生を予言する表現である。さらにここでは、繁栄を象徴する建築物の崩壊やその兆候について、「民は民に」「逆ひて起たん」とするときであると述べられており、関東大震災での日本人による朝鮮人への暴虐を想起させる。第5節「なんぢら人に惑されぬやうに心せよ」というイエスの忠告は、他の日本人が朝鮮人暴動の噂をいとも簡単に信じ込み闘争態勢を取ったのに対し、その噂の真偽を疑う語り手が肝に銘じる言葉のようでもある。

『羊の怒る時』にみられる、「柔和なる羊を怒らすこと勿れ」「汝等に告げん、この所に一つの石も石の上にくずされずしては遣らず」という二節は、どちらも『新約聖書』における地震の発生<sup>32</sup>の記述と関係していることがわかる。

江馬修はキリスト教信者ではなかったと推定されるが<sup>32</sup>、その作品においては、『羊の怒る時』以前から戦争や自然災害などの出来事を「ヨハネの黙示録」やキリスト教の終末思想からの連想によって語る節が見受けられる。例えば、1916（大正5）年に発表された江馬のベストセラー小説『受難者』では、1914年に発生した鹿児島県桜島の噴火<sup>33</sup>について、東京にまで及んだ影響が世の終わりを想像させるものとなっていることが次の引用からうかがわれる。

その年[1913年]がくれて、翌春の、丁度九州の南端にある桜島が大爆発を起した時分の事だ。[中略] この惨事の影響は遙かに此処、東京まで及んで烈しい風は細かい灰砂を運んで到る所に荒れまわり、そのために天日は暗く、不穏な物音は都会に充ち

て、自分達はおそろしくも世界破滅の日を思わずにいられなかった。[中略] そうして本当に世界は今滅亡しつつあるのではないかと恐れさせた。恐れると！否！最早生甲斐を感じない自分にとって何の恐れるものがあるか。[中略] 火を噴く山よ、その暴威を逞しうしてなお盛んに硫黄と火の雨を降らせてくれ！そうしてソドム、ゴモラの時のように墮落したこの世を綺麗に滅ぼしてくれ！自分もその一人として満足してあらゆる人類と一緒に汝の怒りの下に滅んで行こうから！<sup>34</sup>

桜島から遠く離れた東京にも降り積もる灰砂や、そのための暗さは、前述した「ヨハネの黙示録」にみられる「日は荒き毛布のごとく黒く」という記述のように、「世界破滅」「滅亡」を予期させるものとなっている。そして、これは神の怒り、すなわち「羔羊の怒り」が到来したときであり、ここでは「汝の怒り」という言葉が用いられている。

短篇作品「或る作家の手紙」（1918）では、第一次世界大戦の勃発とその戦況が、次のように「マルコ福音書」の引用とともに言及されている。

日本で広く尊敬せられてゐる基督教徒 K・U 氏は、今の世界の有様をもつて基督の一番恐ろしい預言が実際に現はれつゝあるものと信じてゐられるといふ事です、「民はおこりて民をせめ、国は国をせめ、飢饉、疫病、地震ところどころに有るならん是みな禍の始なり」と其から猶永くつゞゐているあの預言です。氏ばかりでなく、猶外の信者達にも世界は終りと、最後の審判に近づいてゐると思つてゐる者があります。無理の無い事です。私だつて今までに一度ならずあの預言を思ひ出しましたし、其気持を書いたことさへありました。<sup>35</sup>

ここでは、内村鑑三（1861–1930）と想定される人物「K・U 氏」の言葉に、先に引用した「マルコ福音書」第 13 章 8 節の表現がみられる。内村は関東大震災の発生に際しては、日本近代の都市化と文明化が神によって罰せられたと考え、自然災害は人間の犯した罪に対する天罰であるとする天譴論を唱えてもいた<sup>36</sup>。江馬も同様に、不穏な世界情勢をキリストの予言した世界の破滅を想起させるものとして考えていたことがわかる。

また、関東大震災発生時に執筆中であった江馬の作品『極光』（1924）<sup>37</sup>では、「羊の怒る時」という表現が用いられている。ここでは、ヨーロッパの第一次世界大戦の戦況に対



する日本人の安穩とした態度が非難されているが、そのような惨状は対岸の火事ではなく、1918（大正 7）年の米騒動が社会的危機の表れとして日本でも発生したという見解が語られる。

火事はしかし対岸にばかりは無かった。あの記憶すべき米騒動が彼等の足の下で勃発した。この騒動は後期になつてこそ、××主義者達の煽動に寄るところも少なくなつたが、人も知るとほり、火の手は越中の知られない漁村の無智な主婦達によつてあげられた。この火は長い間藁灰の中に燻つてゐたものゝやうに、驚くべき早さをもつて忽ちの間に殆んど全国に亘つて燃えひろがつた。栄作は新聞を食ふやうに見ながら、目に見えぬ敵に挑戦するやうに叫んだ。

「これを見るが良い。日本は露西亜と違ふからなんて、誰が安心してゐられるんだ。成金共がひとり勝手に好景気風を吹かせてゐる間に、どれほどの人々が食ふに困つてゐるか分るぢやないか。柔和な羊が怒る時が来たんだ。」<sup>38</sup>

この引用では、「柔和な羊」は「越中の漁村の無智な主婦達」を示している。「柔和な羊が怒る時」とは、これまでは可視化されず従順であると思われてきた「民衆」が声を上げ、怒りを表すときであることがわかる。

大正時代の桜島の噴火や第一次世界大戦が勃発した 1914 年以降の江馬の執筆活動を辿れば、「羊の怒る時」という表現は、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」における終末の予言に由来し、戦争などの災禍や地震といった自然災害の発生を示している。さらに江馬は、米騒動という民衆の暴動に関して、羊は「柔和」であるという前提をもとに、その穏やかさとは対照的な「怒り」を強調している。

『羊の怒る時』と同年の 1924 年に発表された『極光』では、「柔和な羊」は米騒動を起こすに至った地方の漁村民を表すものとして書かれているが、『羊の怒る時』では「柔和な羊」とはどのような人々を指しているのだろうか。そしてその「怒り」とは何であるのか。次節では、羊が群れるものとして描かれている点に着目し、羊が日本人民衆の比喩となっていることを指摘していきたい。

#### 第 4 節 群れるものとしての羊

『極光』の「柔和な羊」が、漁村の不特定多数の主婦達を示しているように、『羊の怒る時』の羊もまた、単体ではなく集団、つまり群れるものとして描かれていると想定される。日本における羊の歴史について先述したように、日本では規模の大きな牧場経営が困難であったことから、牧草地で羊が群れる風景を見ることは稀であったが、『羊の怒る時』においては、著者である江馬修はヨーロッパ文化の影響を受け、群れるものとしての羊という認識を得ていたと考えられる。ここではまず、羊の群居性について、作者が参照したと推測されるフランス人画家ジャン＝フランソワ・ミレー (Jean-François Millet, 1814–1875) <sup>39</sup>の絵画からの影響を指摘したい。

江馬はレンブラント (Rembrandt Harmenszoon van Rijn, 1606–1669) の絵画やベートーヴェン (Ludwig van Beethoven, 1770–1827) の音楽などの芸術に素養があり、それらに関するエッセーや評論を多数残しているが<sup>40</sup>、ミレーも彼が関心を寄せた芸術家の一人であった。長篇小説『受難者』では、ミレーの絵画について語られる場面がある。主人公の友人である照子は、ミレーの「アンゼルス」<sup>41</sup>、すなわち『晩鐘』 (*L'Angélus*, 1857–1859) (図 6) の絵葉書を見つめ、次のように話す。

「私本当にミレーが好きよ。  
いつかあなたの所に羊の群を  
連れた羊飼いの女の絵があっ  
たわね。あれなぞ私堪らなく  
好きだわ、」と暫く言葉を途切  
って又つづけた。「私は小さい  
時から牛や羊を飼うことを夢  
想したものよ。あの絵にある  
ような生活が本当に私の理想  
だったわ。」<sup>42</sup>



【図 6】 ミレー 『晩鐘』 (1857–1859)

ミレーは、『夕暮れに羊の群れを連れ帰る羊飼』(1857-1860) (図 7) のように、羊飼いと羊のいる田園風景を描いた作品を数多く残しており、例えば『岩に腰掛ける羊飼いの女』(1856)、『腰かけて編み物をする羊飼いの女』(1858-60)、『休息する羊飼いの女』(1860頃)、『毛を刈られた羊』(1862)、『岩間で羊の番をする羊飼いの女』(1871) 等が挙げられる。その中でも特に、照子が「羊の群を連れた羊飼いの女の絵」と述べているのは、ミレーの代表作の一つとみなされる『羊飼いの少女』(1863-1864) (図 8) <sup>43</sup>であろう。この作品をみると、羊飼いの少女と、彼女に見守られ群れをなす羊という構造が明確である。この絵を愛する照子は、自分をよき道に導いてくれた両親を羊飼いの姿に照らし合わせる。江馬は以前からミレーの絵画を鑑賞しており、特に『羊飼いの少女』からは、牧者に見守られ付き従う群れるものとしての羊、という認識を得たと推測できる。



【図 7】 ミレー 『夕暮れに羊の群れを連れ帰る羊飼』 (1857-1860)



【図 8】 ミレー 『羊飼いの少女』 (1863-1864)

加えて、ミレーの代表作である『種播く人』(1850) (図 9) がプロレタリア文学雑誌『種蒔く人』(1921-1924) の表紙 (図 10) にも用いられたように<sup>44</sup>、農民の日常生活を主題として描いたことから、ミレーは日本におけるプロレタリア文学運動で称賛された。次節で詳述するように、江馬は 1920 年代半ばにプロレタリア文学作家としての立場を確立させていったが、雑誌『文芸戦線』(1924-1932) に「ミレーの芸術」(1925) と題するエッセーを著し、ミレーの作品において「無産階級大衆が芸術の正面に堂々とすがたを現はしてきた」<sup>45</sup>点を賞賛している。米騒動で立ち上る大衆を羊に擬えた江馬は、ミレーの絵画に描かれた羊の群れを「無産階級大衆」の姿と重ね合わせていたのではないだろうか。



【図 9】ミレー『種播く人』(1850)      【図 10】『種蒔く人』第 1 号表紙 (1921 年 2 月)

江馬によるミレーの絵画の受容から察すると、江馬の作品における羊は、まず第一に単体ではなく群れるものとして集団的存在であること、第二にその群れは不特定多数の民衆を示すものであることが予想される。それでは、『羊の怒る時』でこのような存在を示すのは、どのような人々であろうか。

『羊の怒る時』で群れをなすものとして描かれているのは、日本人である。日本人の中でも特にそれは、朝鮮人が暴行を起こしているという根拠の無い噂を信じ込む人々や、朝鮮人に暴行を加える労働者や職人であって、語り手を含めた知識人階級とは区別される存在である。例えば、朝鮮人学生を罵倒する労働者の日本人を目撃した語り手の、次のような描写をみてみよう。

焼跡に立って路を探している時、不意に自分は側近くで人々の罵り騒ぐ声をきいた。

「朝鮮人だ、朝鮮人だ！」

「そうだ、朝鮮人に違いない！」

「やっつけろ！」

「ぶっ殺してしまえ。」

見ると、十人ばかりの群集が、三、四人の若い学生を取囲むようにして、口々にそう罵り喚いているのであった。学生達はまさしく朝鮮人であった。彼等の或るものは嘲るような顔付をして群集を振返り、一人は何か弁解するようにものを言った。そして明らかに事もなげな風を装いながら、しかも恐ろしい敵意と憎悪によって圧迫されつつ、そろそろ春日町の方へ歩いていた。

彼等の後につづく群集は目に見えて殖えて行った。[中略]

興奮した群集は一層殺気立った、そして乱闘が始まった。

自分はさっきから息づまるような気持で、その成りゆきを見守っていた。何とかして彼等を助けてやりたい、しかし正気を失った群集に対して無力な自分に何が出来よう。もし彼等を弁護しようとすれば、群集の憤怒は自分におっ冠さってくるだけである…… (139-140)

ここでは、棒を持って朝鮮人の後を追う「職人体の男」(140)達によって形成される日本人は単に「群集」と記述される一方で、虐待を受ける朝鮮人の側は「学生」「彼等」「一人」としてより個性を持った存在として描かれている。このことは、作中に登場する朝鮮人留学生の呼称にも共通し、知り合いの朝鮮人については李君・鄭君・金君・朴君・蔡君のように全て具体的な名前によって語られている。

朝鮮人が拘留されていると聞き、友人の蔡君ではないかと不安に思った語り手が交番へ向かう場面でも同様に、日本人労働者の群が「群集」として描かれている。

坂までくると、二、三人が何ものかを追っかけるように、ばたばたと駆け登って行くのを見た。太い鉄棒をもった一人の労働者が、後に続きながらこうひとりごちた。

「いや、今のは朝鮮人に違いない。日本人だなんてよくも嘘をつきやがる。早くふん

捕まえてくれ。」

「でも、今のはやっぱし日本人らしかったがなあ、」とこれも太い桜の棒をもった小僧が側から言った。

「何にしても、少しでも怪しいと思う奴はふん捕まえるんだ、」と労働者は怒鳴って坂を駆け登って行った。[中略]

こんな有様では、果たして蔡君を助ける事ができるだろうか。なまなか出しゃばって、却って自分が殺気立った群集から滅茶滅茶な目に合わされるだけでは無いだろうか。

[中略] もし群集が恐ろしさに、罪もない友達を見殺しにするようだったら、貴様の日頃の主義や主張は単なる傲語であり、出鱈目にすぎなくなるぞ。群集に殴られるよりも、臆病者となる方がずっと恥ずかしい悪い事だ。(86-87)

朝鮮人と思われる人物を見るとすぐにでも暴行を振るおうと武装する「群集」は、「労働者」や「小僧」といった人々から構成されている。

労働者階級から成る日本人群集と対置されるのは、朝鮮人だけではない。「労働者」が「鉄棒」や「太い桜の棒」で武装しているのに対し、そうではない風体の者もまた、日本人であろうと朝鮮人であろうと関係なく群集の暴力の対象となるのである。例えば、「白い洋服を着た」「会社員らしい男」(88)は、「日本人としか見えない」(88)にも拘らず、鉄棒を持った労働者に捕まえられている。

さらには、群集の暴力は長髪の語り手にも矛先を向ける。彼が町を歩いていると、数人の若者が疑いの目付きで彼に近寄って来る。

三、四人は一斉に注意して自分をじろじろと見た。

「おい、長髪だよ。主義者かも知れない、気をつけろ、」と棒をもった人が呟やいた。

「顔付が朝鮮人くさいね。」

「それに、物の言い方が少し変だぜ。」(143)

上記の引用から読み取れるように、『羊の怒る時』で描かれる暴力の構図は、日本人対朝鮮人という図式にはおさまらない。ナショナリティだけではなく階級の要素にも注意する必要がある。朝鮮人の中でも特に学生が捕えられているように、ここでは、日本人労働者

が朝鮮人知識人を暴力の標的としているのである。そして、この労働者対知識人という階級間の対立は、民族の区別を越え、日本人間の労働者対知識人階級という対立構造へ転換しているのである。

先に論じた通り、江馬が羊に関して群れるものとしての印象を抱いていたとすれば、『羊の怒る時』において、羊は群れをなす日本人の民衆として描き出されていると考えられる。そしてそれは、特に知識人階級である語り手とは異なる、労働者階級の人々を指すものである。

語り手は、朝鮮人暴動の流言を信じ残虐行為を行った労働者階級の日本人を、教養のない「愚衆」（169）であると非難する。そして、暴虐に加わることのなかった自分に関しては、教養ある知識人階級の人物として差異化している。この様子を、次の二つの引用からみてみよう。

後になって証明されたとおり、自分達の初台ではついに血を見ずに終った。その主な理由の一つは、ここいらは概して教養ある人々、所謂知識階級が多かった事である。正直な所、自分は社会主義者と同じように、この震災にあたって、所謂民衆なるものに失望した。民衆とは愚衆であるとの感を強くした。そしてまだしも知識階級を頼もしく思った。少なくとも彼等は残虐から顔を背ける事ができた。（168-169）

今度の事件「朝鮮人虐殺事件」で自分が何よりも痛切に感じたのは、人間にとって、教養がいかに大切なものであるかという事だった。だって、あの騒ぎはいかに日本人一般が日常の教養に於いて浅薄であるかを暴露したようなものだからね。（254）

ここで語り手は、朝鮮人虐殺事件を引き起こした「民衆」を「愚衆」と呼び表しており、これに対して事件に加担しなかった自分自身や、初台に住む近隣住民を、教養のある「知識階級」として対蹠的に描いている。

しかし、『羊の怒る時』は、単に労働者階級を「愚衆」として非難しただけの作品ではない。この作品の成立背景や江馬のプロレタリア文学作家としての歩みを考証することにより、日本統治下の台湾の新聞に掲載されたこの作品には、朝鮮人虐殺事件だけではなく社会主義者弾圧という事件の報道という性質も持ち合わせていることがわかる。そのような

作品発表の背景からうかがえる江馬の階級意識の変化は、羊の怒りが何に対してのものであるかを理解するための一助となる。

従来、『羊の怒る時』が『台湾日日新報』に掲載されたという事実は、この作品の解釈において看過されてきた。次節では、『羊の怒る時』がなぜ『台湾日日新報』に掲載されたのか、その理由を、台湾日日新報社と江馬との関係、及び江馬のプロレタリア文学作家としての経緯という観点から探っていく。これにより、厳格な報道規制が行われる中、『羊の怒る時』には社会主義者弾圧事件の諸相を伝える作品としての一面があることを指摘する。残虐な行為を行う羊としての日本人民衆の怒りがどのように形成され、「羊を怒らすこと勿れ」という警鐘が何に対して向けられたものであるのか、ここから一つの解釈を提示することができるだろう。

## 第5節 『台湾日日新報』に掲載された理由

『羊の怒る時』の初出紙については、これまで作者自身によって『台湾新聞』（1907–1944）、『台湾日報』（1897–1898）などと混同されてきた。江馬修は、関東大震災を題材に描いた『血の九月』序文において、『羊の怒る時』は「台湾新聞」に掲載されたと述べている<sup>46</sup>。一方、自叙伝『一作家の歩み』には、「『台湾日報』からたのまれて、初めて新聞に連載小説を書いた」<sup>47</sup>という記述がみられる。同じく関東大震災について書かれた「ゆらぐ大地」を所収する小説集『延安賛歌』（1964）の「あとがき」では、「台湾日報社」から連載小説の執筆を依頼されたと語っている<sup>48</sup>。これらの記述を受けて、永平もこの作品の初出を『台湾日報』と誤解していた<sup>49</sup>。しかし実際には、『羊の怒る時』が掲載されたのは『台湾日日新報』であったことが確認された<sup>50</sup>。

ここで、『羊の怒る時』初出紙の『台湾日日新報』（以下、適宜『台日』と略記）の概要について述べたい。『台日』は、1898（明治31）年5月～1944（昭和19）年3月の期間に発行され、「台湾最大御用新聞」<sup>51</sup>とも呼ばれた日本統治期最大の台湾総督府系日刊紙である<sup>52</sup>。内地の東京、大阪を含む11の支局があり、特に台北本社には最新型の印刷機や製版機が整備され、総督府系の出版物の印刷を一手に引き受ける機関でもあった<sup>53</sup>。文学面については、大正期から朝夕刊の連載小説として内地の作家、特に「大衆作家」の作品を掲載したことが特徴として挙げられる<sup>54</sup>。



戦前に発表された江馬の長篇小説は、『受難者』以来書き下ろしとして発表されており<sup>55</sup>、連載は自分の執筆姿勢に適さないと江馬は考えていた<sup>56</sup>。それでは、なぜ『羊の怒る時』は『台日』に連載されたのだろうか。この理由について以下で考察することとする。

第一に、江馬修が台湾日日新報社東京支局<sup>57</sup>の記者であった可能性である。このことは、次に記す『台日』に発表された五件の江馬の作品と関連記事によってうかがえる。

- ①1921（大正10）年7月7日第4面：〔新刊紹介〕江馬修「お牧」『小説倶楽部』7月号
- ②1921（大正10）年12月31日第6面：〔台日講話〕江馬修「「新しい」と言ふこと」
- ③1924（大正13）年6月3日～6月7日、夕刊<sup>58</sup>第1面：江馬修「或る温泉場で」（全5回）
- ④1924（大正13）年12月14日～1925（大正14）年3月30日、夕刊第1面：江馬修『羊の怒る時』（全104回）
- ⑤1931（昭和9）年2月24日第3面：〔新刊紹介〕江馬修「新時代の少女達」『令女界』2月号

上記のうち、①、②、③、⑤については、先行研究で整理されている江馬の著作年表<sup>59</sup>には記載が無く、本論文の執筆に際し2011（平成23）年11月に台湾政治大学で行った資料調査により新たに発見されたものである。このうち、江馬の評論が掲載された②の記事末尾には、執筆者の所属を示すかのように「東京支局一記者」と記されている（巻末資料1）。江馬の自伝及び従来の研究でまとめられた経歴<sup>60</sup>では全く触れられていないが、この記事が掲載された1921年12月の時点では江馬が『台日』の東京支局記者であった可能性があり、これを機縁に『羊の怒る時』が連載されたのではないかと推測される。

『台日』に作品が掲載された理由として挙げられる第二の点は、江馬のプロレタリア文学作家としての経歴である。上記①で紹介されている短篇小説「お牧」に注目してみよう。この小説の内容からは、『羊の怒る時』掲載の背景にプロレタリア文学作家としての江馬の活動と紹介が兼ねられていたものと考えられる。

現在では江馬修の作品はプロレタリア文学の全集に収録されているように<sup>61</sup>、プロレタリア文学作家として認知されている。江馬修は、妻との出会いから結婚までの苦悩を描い

た自伝的小説『受難者』の人気により、「ヒューマニズム作家」としてその名が広まっていた。しかし、1926（大正 15）年の渡欧から帰国後は、プロレタリア芸術連盟・作家同盟への加入や、その機関紙である『戦旗』編集委員としての活動など、プロレタリア文学作家としての側面が顕著になる。『羊の怒る時』単行本序文では、このような左傾化の契機が関東大震災の経験にあったことが次のように述べられている。

昨年〔1924 年〕の一月及び五月に出版した長篇小説「極光」に於いて、自分はインターナショナリストとしての自己の立場を明らかにした。そして「羊の怒る時」も或る意味で同じ立場から書かれたものと言える。しかし、同じインターナショナリストとしても、その頃の自分はやはり「受難者」以来の観念論者である事に少しも変りが無かった。ところが、「羊の怒る時」を書き終える頃から、自分は思想上に一大変化を経験した。そして自分はマルクス主義者となった。(1)

『羊の怒る時』の執筆を終える頃から、彼は「思想上に一大変化を経験し」、マルクス主義者になったと述べている。このような発言とその後の作品群から、江馬のプロレタリア文学作家としての活動は関東大震災以後であり、『羊の怒る時』は彼の思想的転換を示す記念碑的作品であるとみなされてきた<sup>62</sup>。

しかし、日本統治下の台湾で発行されていた『台日』においては、1921 年に「お牧」という短篇作品が紹介されることにより、江馬のプロレタリア文学作家としての側面がいち早く伝えられていたと考えられる。「お牧」は、貧しい家庭に生まれ髪結いとして働く女性お牧の経済的困窮を描いたものである。父の大怪我によって明日の生活の糧さえもが危ぶまれる中、お牧は、幼馴染の従兄弟を婿養子にもらうよう家主から勧められる。彼女は、この結婚によって貧困から抜け出すことができるとわかってはいるが、好きでもない従兄弟との結婚の勧めを断り、これまで以上に労働に励むことで困難を切り抜けようと決心する。お牧を中心に、電線工場の労働者が集まる長屋での「働いても働いても、働き切れないやうな暗澹とした明日の生活」<sup>63</sup>への不安を描いている点で、江馬自身の経歴を素材として描かれた同時代の『不滅の像』（1919-20）や『訪るゝ女』（1922）等の他の作品とは異なり、階級問題への意識が明確にうかがわれる内容となっている。

「お牧」が発表された 1921 年頃は、江馬の「ヒューマニズム作家」からプロレタリア

文学作家への変化の過渡期といえるだろう。先述したように、江馬は、関東大震災をきっかけに「マルクス主義者となった」と自身述べている。しかし実際には、それ以前の1920年前後から「社会主義について、また革命の問題についてまじめに考えてみるようにな」<sup>64</sup>り、マルクス主義に関する様々な書物の訳本を読んで勉強していた<sup>65</sup>。また、1920（大正9）年頃に転居した代々木初台の自宅近くには、『種蒔く人』や『文芸戦線』同人としてプロレタリア文学の発展に中心的役割を担った青野季吉（1890–1961）<sup>すえきち</sup>が住んでおり、彼の家にも頻繁に出入りしていたという<sup>66</sup>。このような中で、『台日』では、プロレタリア文学作家としての江馬の揺籃期作品である「お牧」が紹介されたことで、この作家の新しい側面が強調されることになった。

『台日』に発表された江馬の作品に注目することによって、江馬は1920年前後に台湾日日新報社東京支局記者であった可能性があり、このことが『羊の怒る時』の連載理由の一つであると想定される。さらに、短篇小説「お牧」の内容からは、『台日』における江馬のプロレタリア文学作家としての台頭を見出すことができる。

関東大震災に至るまでの江馬のプロレタリア文学作家としての経緯を整理すれば、『羊の怒る時』は、労働者が単に「愚衆」として非難された小説ではない可能性が考えられる。この点について、『台日』における関東大震災の報道と作品中に描かれた弾圧の様相と合わせ、次節で検討する。この作品は、関東大震災における社会主義者弾圧事件に関する情報を外地に伝達する役割も担っていたと考えられるのである。

## 第6節 『羊の怒る時』に描かれた社会主義者弾圧の諸相

まず、『台日』における関東大震災の報道について、記事の差止めといった情報統制との関連から整理していく。震災下の東京では、地震や火災の被害によって新聞の発行が困難であった上に、内務省、警察、軍隊による情報統制が行われていた。特に規制されたのは、関東大震災の三大テロ事件ともいわれる朝鮮人虐殺事件、甘粕事件（大杉栄殺害事件）、亀戸事件についての報道である。各事件の概要と報道規制内容は以下の通りである<sup>67</sup>。

第一に、朝鮮人虐殺事件についてである。この事件の概要については先述した通りであるが、その発端となったと考えられる朝鮮人暴動の流言の発生源については、軍隊、警察、市民など諸説あり、未だ明らかではない。朝鮮人虐殺事件についての東京中央各紙<sup>68</sup>にお

ける初出記事掲載は9月3日の『東京日日新聞』であったが、発禁処分となり、以後10月20日まで記事掲載は差止めされた。『台湾日日新報』における初出記事掲載日は、差止め期間中の9月7日であった。

第二に、甘粕事件（大杉栄殺害事件）についてである。これは、9月16日、アナーキストの大杉栄（1885-1923）・伊藤野枝（1895-1923）夫妻と大杉の甥である橘宗一（1917-1923）が、甘粕正彦（1891-1945）率いる東京憲兵隊麹町分隊に殺害された事件である。甘粕らは軍法会議で裁かれたが、3年で仮出獄した。東京中央各紙における初出記事掲載は9月20日の『時事新報』号外であったが、発禁処分となり、以後10月8日まで記事掲載は差止めされた。『台湾日日新報』における初出記事掲載日は9月20日であった。

第三に、亀戸事件についてである。これは、軍隊・警察が亀戸で労働運動家・社会主義者を虐殺した事件である。9月3日夜、亀戸署は当時革命的労働運動の拠点となっていた南葛労働組合の川合義虎（1902-1923）ら八名と、元友愛会活動家で純労働者組合の平沢計七（1889-1923）ら二名を検束し、朝鮮人も含めて七百余名を拘留した。以上の十名は4日未明にかけて署内で習志野騎兵連隊兵士によって殺害され、同様に自警団員四名や朝鮮人も殺害された。事件は約一ヶ月後に公表され、遺族や自由法曹団などが真相究明に取り組んだが、戒厳令下の軍の行動として不問に付された。亀戸事件についての記事掲載差止め日は9月20日であった。東京中央各紙における初出記事掲載は10月8日の『時事新報』号外であり、この記事を機に10月10日に警察が発表を行い、記事掲載が解禁された。『台湾日日新報』においては、記事掲載解禁以降もこの事件についての記事はみられない。

以上の三事件に関して、姜徳相、山田昭次による先行研究では、東京から離れた地方紙では記事の差止めが十分に機能しておらず、東京で発行された新聞と内容・時期の差が見受けられることが指摘されている<sup>69</sup>。『台日』における甘粕事件の報道についても、9月20日の事件発覚と同時に内務省から記事掲載禁止命令が出されたが、「大杉栄検挙さる」と題された記事が掲載されており<sup>70</sup>、差止めの不徹底が見受けられる。

しかし、先述したように「御用新聞」としての性質が根強い『台日』が、厳格な情報規制の対象に組み込まれていたことは明らかである。特に亀戸事件に関しては、記事掲載解禁日である10月10日以降、内地新聞では号外等含め一斉に報道された<sup>71</sup>にも拘らず、『台日』ではこの事件についてはそれ以降も全く記載がない。

そのような中で、江馬修の『羊の怒る時』は、『台日』において関東大震災下の社会主義

者弾圧について言及している唯一の文献であることを、本文中の社会主義者に関する描写から示していきたい。

『羊の怒る時』において、社会主義者弾圧について触れられているのは主に二箇所である。第一に、地震発生から三日後の夜、近隣住民とともに見回りをしていた語り手が、武器を携えて町を歩く男を目にする場面である。

この時、武器や兇器をもつことは警察から堅く禁ぜられていたのであるが、誰もそんな布令に耳を貸さなかった。見るがよい、どこかの職人らしい若い男は刺子の火事装束をきて、大刀を抜身にして無暗に振まわしながらこうなっていた。

「主義者でも朝鮮人でも出てくるがよい、片っぱしから斬って捨ててやるから。」

「本当だよ。もし大杉栄なんかいたら、頭を叩き割ってくれるがなあ。」(165)

火事装束や大刀で武装した男の言葉からは、朝鮮人だけではなく、大杉のような「主義者」、つまり社会主義者や無政府主義者もが暴力の対象となっていることがわかる。この後に続く場面では、近所の巡査が、1923年に殺害されたアナーキスト高尾平兵衛(1896-1923)<sup>72</sup>に触れ、「こないだ社会主義者の高尾平兵衛が殺されたろう」「例え主義者だって勝手に殺していいという法は無いんだからね」(167)と発言している。当時の社会主義者弾圧の背景がうかがわれる箇所であるが、ここでは、日本人民衆の朝鮮人への無差別的な暴力と、官憲による社会主義者弾圧という二つの残虐性が重ね合わせられているのである。

第二に、『羊の怒る時』には、甘粕事件と亀戸事件についての言及がある。上記の引用では、「もし大杉栄なんかいたら、頭を叩き割ってくれるがなあ」という仮定で語られているが、大杉は実際に9月16日に殺害されたのであり、語り手はこの甘粕事件や亀戸事件の発生を新聞を通して知るのであった。新聞を読む場面は次のように描かれている。

震災のために新聞が出なくなってから、自分達はそれを見る事にどんなに飢え渴いたろう。そして[9月]十日前後になって、漸く焼け残った「報知」と「都」と「東京日々」とが出初めた時どんなに食るようにして隅々まで読んだ事だろう。とは言え、またしても震災の記事で殆んど全部を充たされている新聞は、わけても実地に震災を経験したものにとっては、余りに刺戟が強すぎた。[中略]

そして新聞で委しい事実を知れば知るほど、今度の災禍が自分の知っているよりも、また想像しているよりも遥かに大きく、そして残忍で深刻なものだった事を知って驚かずにいられなかった。

葛飾に於ける社会主義者十三名の銃殺事件、大杉栄外二名の絞殺事件、その他知られる事なくあちこちで犯された同様な暴力、それらについて自分は今何にも言うことを控える。こうした事件は当時いずれも自分の魂をどん底まで震撼させたものだった。

(251-252) <sup>73</sup>

ここでは、大杉の殺害とともに、亀戸事件についても「葛飾における社会主義者十三名の銃殺事件」として言及されている。管見の限り、『台日』におけるこの事件に関する言及は、新聞廃刊となる 1944 年 3 月までこの一箇所のみである。

『羊の怒る時』は、朝鮮人虐殺事件を目の当たりにし切迫した心理を描いたルポルタージュ作品であると評価されてきた。しかしこの作品では、僅かではあるが甘粕事件や亀戸事件という社会主義者への弾圧についても言及されており、厳格な言論統制の中で『台日』において稀少な情報提供をしていることがわかった。『羊の怒る時』が持つこのような側面を考慮すれば、語り手の恐怖感は、朝鮮人暴動の噂への恐れだけではなく、自分自身もが社会主義者とみられ迫害される可能性に根付いているといえるのである。以下、作品内で描かれる社会主義者としての語り手の恐怖の様相を分析したい。

まず、社会主義者として描かれることになる語り手の政治思想の推移を確認しよう。江馬の左傾化と同様、この作品の語り手の思想は、大震災をきっかけに「これまでも増して急進的になり、ずっと左へ傾いてきた」(255)と述べられている。しかし、震災以前から書棚に「レーニンやマルクスの著作」(61)が置いてあり、ロシア革命に期待を寄せているという記述(255)からは、すでにマルクス主義に対する大きな関心を持っていたことがうかがわれる。

先に提示した引用にみられたように、震災時には語り手自身も社会主義者として暴行を受ける可能性が十分にあった。長髪の語り手が町を歩いたときには、「おい、長髪だよ。主義者かも知れない、気をつけろ」(143)と言われ、危うく暴力を振るわれそうになる場面もあり、語り手の恐怖は極度に高まっている。さらに彼は、新聞に掲載された社会主義者・無政府主義者弾圧事件の情報を得ることで、「魂をどん底まで震撼させ」(252)られる。

しかし、この時点において語り手が新聞で得ている情報は、官憲によってようやく記事の差止めが解禁されたばかりのものであり、未だに事件の全貌を伝えてはいない<sup>74</sup>。また、これらの事件について、「自分は今何にも言うことを控える」(252)と言っている点には、多くの伏字がある中で『台日』に小説を連載している作者自身の検閲への配慮があるだろう。連載小説として伝えたい事実と、新聞に掲載できる事実との間の溝をうかがえる。

検閲によって言論を慎まなければならないもどかしさは、その後の江馬の執筆活動と指針を形成していった。江馬の経歴で示したように、江馬は、『羊の怒る時』発表後にも関東大震災での体験をもとにした作品『血の九月』と「ゆらぐ大地」を残している。そのどちらも、『羊の怒る時』では書くことが躊躇された亀戸事件を中心に扱ったものである。『台日』掲載の時点では検閲によって描くことができなかった関東大震災の暴力の真実は、戦後になりようやく発表可能となったのである。

このような江馬の執筆姿勢を考えるならば、『羊の怒る時』連載当時左傾化が進んでいた江馬にとっては、朝鮮人虐殺事件と同様に社会主義者・無政府主義者の弾圧に自分の身の恐怖を重ね合わせていたことがわかる。『羊の怒る時』にみられる緊迫感はまた、新聞連載時に機能していた報道規制という弾圧によってもたらされているのである。

以上、『羊の怒る時』の発表背景を中心とした考証からは、この作品が、関東大震災下の朝鮮人虐殺事件を描出したルポルタージュとしてだけではなく、社会主義者・無政府主義者弾圧に関する情報提供を備えた新聞連載であったことが明らかになった。特に、亀戸事件について『台日』で言及した唯一の文献として、言論統制下の圧力と恐怖、限界を感じながらも、暴力の実情を伝えた記録として評価できるだろう。『羊の怒る時』に描かれる緊迫感は、朝鮮人虐殺の残忍性とともに、語り手の社会主義者としての迫害の危険性、そして作者江馬自身の連載当時の言論弾圧に対する危惧によって表出したものなのである。

## 第7節 「羊を怒らすこと勿れ」——羊飼いへの警鐘

これまでみてきたように、社会主義者弾圧事件を伝えるものとしての作品の側面と、作者のプロレタリア文学作家としての経歴を考慮するならば、『羊の怒る時』で非難の対象となるのは、愚かな羊の群れに喩えられる暴徒と化した民衆だけではない。むしろ、その行為を見過ごしている知識人階級や、情報操作によって民意を操る存在に、「羊を怒らすこと

勿れ」という警鐘が与えられているのではないだろうか。

『羊の怒る時』前後の江馬の作品では、プロレタリアートとブルジョア階級に属する人間の接触による葛藤や、ブルジョア階級がプロレタリアートに対して取るべき責任が主題として描かれることが多い。先にも言及した、震災発生時に執筆中であった小説『極光』では、貧しい生活を送ってきた主人公の曾我がブルジョア家庭に生まれ育った濱子と結婚することによって直面する経済的価値観の相違や、濱子のプロレタリアートに対する罪悪感が描かれ、階級の異なる二人の結婚の破綻がプロットの中心を占める。次作『羊の怒る時』では、「所謂民衆なるものに失望した」（168-169）と述べられるような表面的に見受けられる民衆への非難の他に、知識人階級への責任追及と、羊としての民衆を怒らせる存在が何であったのかが示唆されていることを明らかにしよう。

まず、『羊の怒る時』から読み取れる知識人批判の姿勢についてみていきたい。先述したように、語り手は自分を「教養ある人々」（168）「知識人階級」（168）の一人として、朝鮮人に暴行を振るった民衆とは区別していた。しかし、暴行に加担していないというだけで、事件とそれを引き起こした民衆と無関係の立場にあったと言い切ることはできない。朝鮮人による暴動の噂を聞いたとき、当初は「どうも腑に落ちな」（82）いと言い疑いをみせていた語り手であったが、いよいよ初台近くでも一揆が起きたという連絡が入ると、たちまち自分と家族の身の危険を感じて狼狽する。「職人体の男」（140）達が朝鮮人学生に石を投げたり、棒で殴ったりする「乱闘」（140）の現場に遭遇しても、語り手は、「正気を失った群集に対して無力な自分に何が出来よう」（140）と朝鮮人の救助を諦め、怒り狂った民衆の前では無力な存在でしかない。日本人民衆の「怒り」を「愚衆」と非難してはいるが、それを留まらせる力は語り手にはない。

震災から二ヶ月近くが経過しこのときを振り返る語り手は、事件に対して負うべき責任に関して、自分と民衆との境界が曖昧であったことに気付かされる。暴虐を行った「愚衆」と、教養ある知識人階級としての自分とを差異化していた語り手であったが、実は自分も日本人として民衆の一部であり、この事件に加担していたことに思い当たる。彼はこの事件は「日本人全部の責任」（254）であると考え始め、自分自身もこの「日本人全部」という集団に含まれていることを意識する。事件とは無関係な日本人としての立場から出席しようと思っていた朝鮮人犠牲者の追悼会についても、「臨席を申しこんでやった自分が、何だかずうずうしい恥知らずのような気がして」（256）、結局会に赴くことはなかった。



民衆と自分を区別し、虐殺事件とは切り離された存在であるかのような姿勢をとった知識人階級は、江馬修の後の作品『血の九月』<sup>75</sup>の中で徹底的な非難の的となっている。『血の九月』は二部構成をとる小説であり、第一部の内容は『羊の怒る時』とほぼ同一のものであり、地震発生からその後二日間の体験が語られる。しかし第二部は、亀戸事件で虐殺された川合義虎の家に居合わせた少年工の目を通して、亀戸署での社会主義者弾圧の諸相が描かれている<sup>76</sup>。『血の九月』は、三人称の語り手によって事件の様相が語られるが、主人公は『羊の怒る時』の語り手と同一人物と想定される堀進一であり、彼については次のように辛辣な調子で述べられる。

今こそ彼〔堀進一〕は小ブルジョアの反動性を露骨にさらけ出してしまつたぢやないか。なる程後になつて彼が朝鮮人の虐殺に対して心から憤激し、社会の不正義と暴虐に抗議したのは真情からであつたらう。しかも暴徒の幻影に戸まどひし、軍隊の出動に何となく胸を撫でおろし、そして何よりもブルジョア的支配に信頼を置いた彼は、本質に於いて一体何であつたか。彼自身手を血で染めた虐殺者でこそ無かつたが、しかも彼等に対する一種の支持者として現はれたのだ。<sup>77</sup>

ここでは、堀の属する階級は「教養ある」「知識階級」ではなく、「小ブルジョア」と言い表され、戒厳令という「ブルジョア的支配」に信頼を置いた彼は、事件の支持者であつたと追及されている。『羊の怒る時』の書き直しともいえる『血の九月』にみられるこの知識人批判では、『羊の怒る時』で民衆と立場を異にしていた語り手もまた、暴動の噂に取り込まれる日本人の「愚衆」の一人に過ぎなかつた点が糾弾されている。

本章で着目してきた、「柔和なる羊を怒らすこと勿れ。羊の怒る時が来たら、その時は天もまた一緒に怒るであろう。その時を思つて恐れるがよい」(256)という警鐘もまた、「怒れる」羊としての民衆に向けられただけでない。実はその群れの内に含まれていた語り手自身に向けての非難であつたともいえる。

『羊の怒る時』では、羊は群れをなすものとして捉えられ、労働者や職人など無産階級から成る不特定多数の民衆を表していることは、先に論じた通りである。ミレーの絵画でみたように、羊の群れには必ず羊飼いが対置されている。この、羊と羊飼いの構図を考える場合に問題となるのは、群れを率いる存在が「よき羊飼ひ」として信頼に値するもので

あるかどうか、という点である。

『羊の怒る時』では、民衆の怒りとともに、その怒りの矛先を朝鮮人に向けさせた存在が暗に示されている。先述したように、朝鮮人暴動の流言の発生源については、軍隊、警察、市民など諸説あるが、官憲によるものであったという推測がなされている<sup>78</sup>。『羊の怒る時』の語り手は、この事実をどのように把握していたのだろうか。

朝鮮人暴動の噂が最初に伝わってきた場面は、次のように記されている。

未だに色々に揣摩はされるけれど、その起源をはっきりと知る事のできない恐ろしい流言は、最初こんな風にして自分達の所へ伝わってきた。重大な報知の場合いつもそうであるように、初めのうちこそ人々の間でひそひそと語られていたが、いつとなくあちらでもこちらでも「朝鮮人、朝鮮人」と昂奮しきった烈しい語調で言っているのが聞えた。驚くべき事には少なくとも自分の見る所ではこの流言は何の疑いもなく人々に受け納れられた、それこそ、まるでそういう場合の有り得る事を誰しも充分予感して信じていたかのように。(84-85)

『羊の怒る時』において流言の起源が語られるとき、それは「はっきりと知る事のできない」曖昧なものとしてしか描かれない。作品の最後に友人の K 君<sup>79</sup>とこの事件について語る際にも、流言の出所についてはやはり不確かである。

「だが、一体どこからそうした流言が出たのかね。それが根本の問題だと思うね。」

「それについて誰が答える事ができるかしら？」

「でも、それは無くてはならない。」

「勿論そうさ。でも、それは永久に知る事はできないかも知れない。唯間違いないのは、すべては日本人全部の責任だという事だ。」(253-254)

この不明瞭さの原因は、『羊の怒る時』連載当時の情報の把握具合にもよるだろう。しかし、震災後の厳格な検閲の中では、もしその起源に見当がついていたとしても、新聞紙上では真相を明らかにすることが不可能であったと考えられる。

しかし戦後、江馬は自伝『一作家の歩み』の中で関東大震災を振り返り、虐殺の責任が

政府や軍隊といった国家権力であったことを明言した。そのうえで、『羊の怒る時』執筆の動機について次のように述べている。

一九二三年九月一日の関東大震災は、私に恐るべきかすかすの印象を刻みこんだ。大地震と大火災による災害だけでも戦慄すべきものであったが、それに伴って発生した朝鮮人に対する大量虐殺、亀戸において軍隊と警察によって行われた社会主義者九名の虐殺、憲兵隊による無政府主義者大杉夫妻と小さい甥の虐殺、こうした一連の残虐事件は、今さらのように政府と軍隊と官憲にたいして私の眼をひらかせた。私はようやく、自分たちがどんな国家と政治機構の中に生きているかを、改めて考えてみずにいられなくなった。同時に、私たちをがっちりとりまいていて奇怪な、巨大な権力機関に対して、自分個人とその思想がじつに無力で、何らなすべき路をもたないことを徐々に自覚しはじめた。これまであくまで自由であると信じていた自分の思想も、立場も、生活も、こうした権力の前にはひとたまりもなく吹きとんでしまうものであることが分ってきた。

つぎの年、私は「台湾日報」からたのまれて、初めて新聞に連載小説をかいた。〔中略〕柔和な羊をも怒らせずにおかないような、人民に加えられた非人間的な暴力と横暴に対する怒りと抗議を書こうとしたのである。<sup>80</sup>

ここにおいて、著者江馬の「怒り」の矛先は、暴動を行った民衆よりも、それを煽動した「政府と軍隊と官憲」や「警察」といった、「国家と政治機構」、「奇怪な、巨大な権力機関」へ変化していることがわかる。

「巨大な権力機関」への態度の変化は、『羊の怒る時』と『血の九月』にみられる警察についての描写の差異からもうかがえる。『羊の怒る時』の語り手は、武装した群集を恐れる一方、「正気を失った群集よりは、警察の方を信じていた」(90)。そのため、群集の標的となるような人物がいる場合には、交番へ連れて行き保護してもらうよう提案する(90)。これに対し、『血の九月』では、自警団や警察が民衆の暴動を抑制するどころか、朝鮮人虐殺の噂の発端とも考えられ、社会主義者を弾圧していた点が追及されている。近所で自警団の発生を目にした労働組合員の北上と川田は、次のような会話を交わす。

「さつき町内のものが夜警に出るとうちへもどつてきたが、こんな時には民衆は自分たちの手で自分たちを衛らうと考へるやうになるんだ。つまり民衆の自衛団だ。面白い現象ぢやないか」

「もちろん自衛団は悪くないが、その自衛団たるや、軍隊と警察と協力して、朝鮮人を殺さうと云ふんぢや無いか。そんなものが我々労働者にとつて何になるんだい？」<sup>81</sup>

二人の会話が示唆しているのは、町内の住人によって結成された「自衛団」に象徴される、民衆と軍隊・警察の連繋である。国家や警察・軍隊といった「巨大な権力機関」が影なる情報操作によって犠牲者を定め、その情報を疑うことなく信じ暴力を実行に移すのが「職人」や「労働者」である。ここでは、権力機構が無産者階級の民衆を取り込み、「非人間的な暴力と横暴」と化す様相が明らかにされているのである。

## 第8節 終わりに

以上本章では、江馬修『羊の怒る時』において、関東大震災下で暴徒と化した日本人民衆が羊として表象されていることを論じた。作品のタイトルが示す「羊の怒る時」とは、日本人が行き場のない「怒り」の捌け口を「スケープゴート」としての朝鮮人に求めたときであり、そのような許されざる行為に陥った民衆、特に労働者階級を「愚民」として非難しているのである。しかし、知識人階級として民衆に含まれることはないと思っていた語り手自身も、民衆の「群れ」の動きと無縁ではなかった。彼もまた、朝鮮人による暴動の噂に取り込まれ、事件に責任を負うべき日本人の一人であったといわねばならないことが、プロレタリア文学者としての江馬のその後の創作活動から示唆されている。

『羊の怒る時』では、無産者階級である民衆を、普段は「柔和」でおとなしい羊であるとしながら、その群れが恐怖の集団と化す瞬間、つまり、国家や警察といった巨大な権力が羊達に煽動的に働きかける瞬間が描かれている。根拠のない流言によって凶暴な存在と化した民衆は、「愚衆」として愚かな羊の群れに喩えられる。「柔和」な羊のイメージを敢えて逆手に取り、「怒れる」存在とすることにより、その群れが潜在的に備えている暴力性を現出させている。「柔和なる羊を怒らすこと勿れ。羊の怒る時が来たら、その時は天もまた一緒に怒るであろう。その時を思つて恐れるがよい」(256)という小説の最後の一節は、

民衆によって構成される群れを「怒らす」ことを可能とする、情報統制による煽動を行う権力機構に対しての警鐘の言葉として解釈できる。

日本近現代文学に描かれた羊の表象について、『羊の怒る時』の解釈から指摘できることは、「犠牲の羊」という表現のように羊は犠牲者としてのマイノリティを示す存在だけではなく、マジョリティの成す集団の凶暴性をも表すということである。『三四郎』の「迷羊」が、集団から離れた単体としての存在を描いていたのに対し、『羊の怒る時』では、羊は群れをなすものとして捉えられ不特定多数の集団を表している。ここで暴徒と化した民衆の群を影で率いている「羊飼いは、江馬が「巨大な権力機関」として非難した軍隊や警察、官憲である。この作品の成立背景や江馬の経歴を辿るならば、『羊の怒る時』では、表面的な「愚衆」への非難よりも、柔和な羊の怒りを操る「羊飼いは」に向けられた警鐘を、情報統制の網を潜り抜けて読み取ることができるのである。

本章では、羊が群れる存在であることに着目し、羊と羊飼いの関係性を民衆とそれを操る権力機構の構図の中に見出した。羊と羊飼いに表される主従関係は、労働者対知識人、プロレタリア対資本家、あるいは植民地対宗主国といった、様々な支配と従属の構造を描出するとともに、羊飼いの不在や羊の暴動によってそのような対立は攪乱されることもある。次章では、このような支配構造をジェンダーの視点から見出し、日本近現代文学において羊が女性というジェンダーを付与され表象されてきたことを論じる。

## 注

- 1 大垣さなゑ『ひつじ～羊の民俗・文化・歴史～』（まろうど社、1990）27 頁。
- 2 以上の羊の歴史については、農林省畜産局編、羊をめぐる未来開拓者共同会議編、山根『羊毛文化物語』、各前掲書を参照した。
- 3 大手拓次「野の羊へ」（『大手拓次全集 第一巻』白鳳社、1970 年）154 頁。
- 4 西條八十「羊」（『西條八十全集 第六巻』国書刊行会、1992 年）28 頁。
- 5 西條八十全集編集委員編『西條八十全集 別巻』（国書刊行会、2014 年）「著書目録」・「年譜」7-358、617-676 頁、原子朗「大手拓次研究」（原子朗・林宏太郎『大手拓次全集 別巻』白鳳社、1971 年）104-177 頁。
- 6 大東和重「（書評）工藤貴正著『中国語圏における厨川白村現象 隆盛・衰退・回帰と継

---

続』(『比較文学』第53巻、日本比較文学会、2011年3月)133頁。

7 江馬修『羊の怒る時』(影書房、1989年)「凡例」。

8 江馬の経歴については、江馬修『一作家の歩み』(日本図書センター、1989年)、天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』(春秋社、1985年)、永平和雄『江馬修論』(おうふう、2002年)を参照した。

9 江馬は自身のフランス語学習の場として、「アテネ・フランセエの夜学部に入学した」(江馬『一作家の歩み』前掲書、84頁)と述べている。アテネ・フランセの開校が正式に認可されたのは1916年であるが、フランス語教室の発足はそれに遡り1910(明治43)年頃であるという(日影丈吉「300万人の大学 61 アテネ・フランセ」『朝日ジャーナル』第22巻24号、朝日新聞社、1980年6月、41頁)。『一作家の歩み』における江馬の記述に従えば、江馬がアテネ・フランセに入学したと想定される時期は1908年から1911年2月となるが、江馬は認可前に通っていたと考えられる。

10 長谷川啓「解説」(江馬修『阿片戦争』ゆまに書房、2004年)2頁。

11 ストリンドベルヒの翻訳については、『地獄』(1915)や、阿部次郎(1883-1959)との共訳『赤い部屋』(1916)等がある。トルストイの翻訳については、『幼年・少年』(1916)や『青年』(1917)等がある。いずれも、英語訳・フランス語訳・ドイツ語訳をもとに行われた重訳である(江馬『一作家の歩み』前掲書、122頁)。

12 この渡欧の目的について、江馬の自伝では、少年時代からの憧れの地であり、敬愛する作家ロマン・ロラン(Romain Rolland, 1866-1944)らの活躍したフランスを訪れることで、創作上の不振や妻との不和から解放されたかったためと語られている。しかし、他の理由としては、モスクワ経由で帰国してコミンテルンを視察し、共産党指導者と面会する意図があったことが想定される。ただし、パリ滞在中に日本にいる娘の病状が悪化したことと、貯蓄の大部分が盗難により紛失したことで帰国を余儀なくされ、この目的は適わなかった(同上、178-182頁)。

13 『一作家の歩み』の記述に基づき、江馬のプロレタリア芸術連盟への加入は帰国後1927(昭和2)年の夏であると考えられていた。しかし、渡欧前の1925(大正14)年10月4日には日本プロレタリア文芸連盟の発起人会に江馬が参加していたことが判明している(永平、前掲書、115頁)。

- 
- 14 『山の民』は、1938（昭和 13）年の発表以降、1947（昭和 22）年、1949（昭和 24）年、1958（昭和 33）年、1973（昭和 48）年にそれぞれ改稿版が出版されている。
- 15 『羊の怒る時』復刻版刊行の背景には、江馬の晩年に彼と恋愛関係にあり著作権を継承した天児と、当時朝鮮大学校副学長であった朴庸坤（<sup>ボクヨウコン</sup>（出生年不詳）との交友関係が指摘できる。1987（昭和 62）年に発生した大韓航空機爆破事件における北朝鮮報道に関して、関東大震災時の流言蜚語との類似性を感じた天児は、『羊の怒る時』の復刊を切望していた。そこで、朝鮮大学校認可の際に江馬と交わっていた朴に出版を相談したという（天児直美『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』春秋社、1989 年、231 頁）。
- 16 尾崎秀樹・菊池昌典『歴史文学読本 人間学としての歴史学』（平凡社、1980 年）291 頁。
- 17 大岡昇平『歴史小説の問題』（文芸春秋、1974 年）177 頁。
- 18 本多秋五「歴史小説論の一齣」（『すばる』第 2 巻 6 号、集英社、1980 年 6 月）217 頁。
- 19 中山和子『差異の近代——透谷・啄木・プロレタリア文学』（翰林書房、2004 年）403 頁。
- 20 永平、前掲書、8 頁。
- 21 関東大震災時における朝鮮人虐殺事件の概要については、姜徳相『関東大震災・虐殺の記録』（青丘文化社、2003 年）を参照した。
- 22 天児直美『『血の九月』あとがき』（『在日文芸 民涛』第 8 号、影書房、1989 年 9 月）381 頁。
- 23 天児『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』前掲書、230 頁。
- 24 石牟礼道子「存在の根底を照らす月明り——『羊の怒る時』（江馬修）」（『群像』第 45 巻 4 号、講談社、1990 年 4 月）344 頁。
- 25 石牟礼は、次のような高群の文章を引用している。「××人が来たら一なぐりとでも思っているのかしら。じつに非国民だ。いわゆる『朝鮮人』をこうまで差別視しているようでは、『独立運動』はむしろ大いにすすめてもいい。その扇動者にわたしがなってもいい」（同上、345 頁）。ここでは引用の出典は明らかにされていないが、この文章は高群の「火の国の女の日記」（1965）に見出される（高群逸枝『高群逸枝全集 第 10 巻 火の国の女の日記』理論社、1965 年、204 頁）。

---

<sup>26</sup> 永平は、小田切進の『昭和文学の成立』（1965）での紹介をもとに、関東大震災を扱った作品を列挙している。ここで小田切は、佐藤春夫（1892–1964）や菊池寛（1888–1948）、芥川龍之介（1892–1927）、横光利一（1898–1947）らが震災について言及した文章について論じている。その中で、新聞社・出版社の罹災、厳しい報道管制という状況下で全面的な批判が困難な中、朝鮮人暴動、社会主義者弾圧事件等を扱った作品として、『種蒔く人』「帝都震災号外」（1923 年 10 月）と「種蒔き雑記——亀戸の殉難者を哀悼するために」（1924 年 1 月）の二作を評価している（小田切進『昭和文学の成立』（勁草書房、1965 年）16 頁）。なお、雑誌『種蒔く人』は、震災後の社会主義者及び解放運動に対する弾圧により、1924 年 1 月号をもって廃刊となった（小田切進「解説」『種蒔く人 復刻版別冊』日本近代文学館、1961 年、8 頁）。

<sup>27</sup> 永平、前掲書、100 頁。

<sup>28</sup> 松枝、前掲書、55 頁。

<sup>29</sup> 「ヨハネの黙示録」では、イエスは小羊の姿として出現すると解釈されている（ミルワード、前掲書、45 頁、ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』竹内信夫他訳、大修館書店、1992 年、153 頁）。

<sup>30</sup> 『新約聖書』前掲書、373 頁。なお、本章における聖書からの引用は、江馬の著作にみられる聖書からの引用や時代背景を考慮し文語訳によるものとする。

<sup>31</sup> 『新約聖書』前掲書、70–71 頁。

<sup>32</sup> 江馬自身の経験をもとに創作された『受難者』では、仏教の影響の強い地域で生まれ育った主人公が『新約聖書』を熟読し、「ある不思議な、静かな熱情に捕われて」（江馬修『受難者』『江馬修作品集 4 受難者 他』北溟社、1973 年、140 頁）いくようにキリストの教えに感銘を受ける様子が描かれている。

<sup>33</sup> 石川秀雄『桜島——噴火と災害の歴史——』（共立出版、1992 年）57 頁。

<sup>34</sup> 江馬『受難者』前掲書、154–155 頁。

<sup>35</sup> 江馬修「或る作家の手紙」（江馬修『樅の葉』新潮社、1920 年）131 頁。

<sup>36</sup> 半澤健市「関東大震災とリスボン大震災——天譴論・内村鑑三・ヴォルテール——」（『日韓相互認識』第 5 号、「日韓相互認識」研究会、2012 年 2 月）108–113 頁。

<sup>37</sup> 江馬修『極光』下巻（新潮社、1924 年）362 頁下部には、「この二 [『極光』の章番号]



---

にかゝつてゐた時に、大正十二年九月一日のあの恐るべき大地震が起つたのだ」と小文字の記載があり、この小説の執筆時期と震災の発生的一致がうかがえる。また、『極光』下巻には、主人公が地震に遭遇する場面も描かれ（同上、602 頁）、執筆中の実体験が小説の展開に反映されていることが読み取れる。

<sup>38</sup> 江馬修『極光』上巻（新潮社、1924 年）412–413 頁。

<sup>39</sup> ミレーは、1814 年ノルマンディー地方に生まれた。幼い頃から絵画の才能を周囲に認められ、19 歳からシェルブールで、22 歳からパリで絵の修行を開始する。1849 年、パリでのコレラの流行を避けフォンテーヌブロー近郊のバルビゾンへ移住し、農民生活や田園風景を描くバルビゾン派の画家として活動した（高階秀爾・馬淵明子編『25 人の画家 現代世界美術全集 第 4 巻 ミレー』講談社、1981 年、128–131 頁）。

<sup>40</sup> 「先に行けるもの」（1916）、「時代と天才」（1916）、「握手」（1920）、「朽ちゆく彫刻」（1922）等。

<sup>41</sup> 江馬『受難者』前掲書、228 頁。

<sup>42</sup> 同上、228 頁。

<sup>43</sup> ミレーはこの作品の制作に全精力、全精神を打ち込んだといわれており、1864 年に出品したサロンでは高い評価を得た（飯田裕三編『ミレー画集』講談社、1979 年、201 頁）。

<sup>44</sup> 表紙には、ミレーの『種播く人』に描かれた農夫の姿とともに、「自分は農夫の中の農夫だ。自分の綱領は労働である。——ミレー——」と記されている（図 5）。

<sup>45</sup> 江馬修「ミレーの芸術」（『文芸戦線』第 2 巻 5 号、文芸戦線社、1925 年 9 月）5 頁。

<sup>46</sup> 江馬修『血の九月（上）』（『在日文芸 民涛』第 7 号、影書房、1989 年 6 月）302 頁。

<sup>47</sup> 江馬『一作家の歩み』前掲書、170 頁。

<sup>48</sup> 江馬修『延安賛歌』（新日本出版社、1964 年）270–271 頁。

<sup>49</sup> 永平和雄「江馬修と「血の九月」」（『在日文芸 民涛』第 7 号、前掲書）305 頁。

<sup>50</sup> 天児「『血の九月』あとがき」前掲書、381 頁、永平『江馬修論』前掲書、114 頁。なお、江馬が言及していた二つの新聞、『台湾新聞』、『台湾日報』の概要については以下の通りである。『台湾新聞』は、1899 年に設立された台湾日日新報社の台中支社が発行を開始した隔日紙『台中新聞』を前身とし、日本人経営で台湾中部に本社を置く唯一の新聞であった。大正期には輪転印刷機や工場の増設により、台湾日日新報社に次ぐ新聞社として発

---

展した。1944年3月に統合されて『台湾新報』（1944–1945）となり、社屋は台湾新報社台中支社となった。『台湾日報』は、『台湾日日新報』の前身となる新聞であり、1898年、台湾日報社・台湾新報社が合併して台湾日日新報社となった（中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房、2005年、56–60頁）。

<sup>51</sup> 李承機「データにみる植民地台湾ジャーナリズムの発展」（『アジア遊学』第48号、勉強出版、2003年2月）24頁、波形昭一「解題」（台湾日日新報社編『台湾日日三十年史 附台湾の言論界』ゆまに書房、2004年）8頁。

<sup>52</sup> 中島、前掲書、60頁。

<sup>53</sup> 同上、60頁。

<sup>54</sup> 連載小説を執筆した作家としては、吉川英治（1892–1962）、武田麟太郎（1904–1946）、広津和郎（1891–1968）、石川達三（1905–1985）や、次章で取り扱う高見順らがいた（同上、60頁）。

<sup>55</sup> 当時、新人作家の長篇小説を書き下ろしとして刊行するのは画期的な出版形態であった。新潮社刊『受難者』の人気を機に、他の出版社でも新人作家の書き下ろし長篇小説が刊行されていった（天児『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』前掲書、237–238頁）。

<sup>56</sup> 江馬『一作家の歩み』前掲書、142頁。

<sup>57</sup> 台湾日日新報社は、1898年の創業後間もなく東京代理店を設置したが、1909年に廃止され、京橋区元数奇屋町に東京支局が設立された。この東京支局通信部には記者数名が配属され、内地における政情、経済情勢等が取材された。関東大震災の際に建物が全壊し、その後銀座一丁目に移転している（台湾日日新報社編、前掲書、三〇–三一頁）。

<sup>58</sup> 『台日』夕刊の発行開始日は、1924（大正13）年6月1日である（同上、二十七頁）。

<sup>59</sup> 天児『炎の燃えつきる時』付属「江馬修年譜」前掲書、285–296頁、天児直美「江馬修の著作年表と参考文献目録——その開拓精神と多様な活動を中心に——」（『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』第45巻、美作女子大学、2000年）、永平『江馬修論』付属「著作年表」前掲書、361–180頁。

<sup>60</sup> 江馬『一作家の歩み』、天児『炎の燃えつきる時』、永平『江馬修論』各前掲書。

<sup>61</sup> 江馬修の『阿片戦争』は、『新・プロレタリア文学精選集 10』（ゆまに書房、2004年）に収められている。

- 
- 62 天児『炎の燃えつきる時』前掲書、244-245 頁、長谷川、前掲書、2 頁、永平『江馬修論』前掲書、99-100 頁。
- 63 江馬修「お牧」（『小説倶楽部』第 7 号、民衆文芸社、1921 年 7 月）13 頁。
- 64 江馬『一作家の歩み』前掲書、171 頁。
- 65 同上、171 頁。
- 66 同上、172 頁。
- 67 関東大震災における報道規制と三大テロ事件については、姜、前掲書、加藤文三『亀戸事件——隠された権力犯罪——』（大月書店、1991 年）、山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺——その国家責任と民衆責任』（創史社、2011 年）、山田昭次編『関東大震災朝鮮人虐殺関連新聞報道史料 第 1-4 巻・別巻』（緑蔭書房、2004 年）を参照した。
- 68 山田編、前掲書において収録されている『報知新聞』『時事新報』『東京日日新聞』『国民新聞』『東京朝日新聞』『読売新聞』『法律新聞』『中外商業新報』『中央新聞』『二六新報』『都新聞』『萬朝報』『東京毎日新聞』『やまと新聞』を参照した。
- 69 姜、山田編、各前掲書。
- 70 『台湾日日新報』1923 年 9 月 20 日第 7 面。
- 71 10 月 10 日『報知新聞』号外、『東京朝日新聞』夕刊等（加藤、前掲書、215 頁）。
- 72 高尾はアナキズム系北風会の会員で、労働運動に率先して参加し関係文献の秘密出版にも従事するなど行動派として知られていたが、1923 年 6 月、赤化防止団長米村嘉一郎（生没年不詳）宅を襲撃した際にピストルで射殺された（松尾尊兌『大正時代の先行者たち』岩波書店、1993 年、201-261 頁）。
- 73 「報知」「都」「東京日々」は、それぞれ『報知新聞』『都新聞』『東京日日新聞』を指す。9 月 1 日の地震発生による休刊後、『報知新聞』は 9 月 5 日、『都新聞』は 9 月 8 日（9 月 2-7 日は号外のみ）、『東京日日新聞』は 9 月 3 日より再刊していた（山田編、前掲書、第 1 巻（7）（21）頁、別巻 29 頁）。なお、引用中「社会主義者十三名」が銃殺されたとあるのは誤りで、正確には先述したように十名である。
- 74 姜、前掲書、281 頁。
- 75 『血の九月』出版の経緯は次のようなものである。江馬は『血の九月』を 1930（昭和 5）年に脱稿しその年の内に出版予定であったが、弾圧を避けるため出版社側から出版が拒否

---

された。その後 17 年間江馬の自宅に原稿が保存されたが、1947 年、在日朝鮮民主青年同盟飛驒支部を通じて非売品として刊行された。1964（昭和 39）年には、創作集『延安賛歌』に「ゆらぐ大地」とともに所収されている。1989 年、影書房から『羊の怒る時』が復刊されるにあたり、同社刊行雑誌『在日文芸 民涛』の編集員であった李恢成（1935-）の意向により、『血の九月』が同年 6 月及び 9 月に 2 回にわたって同誌に掲載された（江馬『血の九月（上）』前掲書、302-303 頁）。なお、同誌掲載の『血の九月（上）』は、『延安賛歌』所収「ゆらぐ大地」に、『血の九月（下）』は『延安賛歌』所収「血の九月」と対応している。

<sup>76</sup> 『血の九月』では福田として登場するこの少年は、川合らとともに虐殺の現場まで引き出されたが、年齢が考慮され命を助けられた。その後この人物は小石川方面の映画館で活弁として働いているという話を知人から聞いた江馬は、彼に会い、当時の亀戸署の様子を聞き取った。その口述をもとに、『血の九月』第二部が執筆されたという（天児『『血の九月』あとがき』前掲書、381 頁）。

<sup>77</sup> 江馬『血の九月（上）』前掲書、343 頁。

<sup>78</sup> 姜、前掲書、80 頁。

<sup>79</sup> 江馬の交友関係を検証すると、K 君とは久保正夫（生没年不詳）であることが推測される。久保はドイツ留学後同志社大学教授となり、『ベートーフェンの一生』（1919）、『ダンテ詩集』（1923）等の翻訳作品を残したが、腸結核のため夭折した。久保の兄は漢学者の久保天随（1875-1934）であった（江馬『一作家の歩み』前掲書、149 頁）。

<sup>80</sup> 江馬『一作家の歩み』前掲書、170 頁。なお、引用中「社会主義者九名の虐殺」というのは誤りであり、先述したように正確には十名であった。

<sup>81</sup> 江馬修『血の九月（下）』（『在日文芸 民涛』第 8 号、前掲書）340 頁。

### 第3章 らしゃめんの変容 ——唐人お吉物語と戦後占領期における羊の表象——

#### 第1節 はじめに

第2章では、江馬修の『羊の怒る時』において、「愚衆」と表される日本人労働者が羊として描かれた点を論じた。羊の表象にはこのように、愚かで無能というイメージがつきまとう。第3章では引き続き、社会の中で虐げられた人間や従属関係の下部に位置する存在が、愚者としての羊のメタファーを用いて表象される点に着目するが、ここでは羊が特に女性、あるいは女性化された男性を指し示す動物であることを明らかにしていく。

日本において羊が特定のジェンダー的意味合いを帯びて表象されていったことは、「らしゃめん」という語の歴史からうかがうことができる。第1章で述べたように、日本では16世紀以降、ヨーロッパ船の渡来により羊毛製品の輸入が開始され、羊に関する認識は羅紗などの羊毛製品と結び付いていた。このような経緯を反映しているのが、羊を表すらしゃめんという語である。しかし、「墮落女学生」との関連において言及したように、近代以降らしゃめんの語は西洋人男性と日本人女性の性的な関係を示唆するものへと変容した。らしゃめんは、1854（安政元）年の開国前後から、西洋人男性を相手とした性的サービスに従事する日本人女性を軽蔑する語として使用され始めた。さらに、開国期のらしゃめん女性の物語は、戦後占領期の駐留米軍兵士を性的商行為の相手とし「パンパン」と呼ばれた日本人女性をめぐる言説に当てはめられていくこととなる。

第3章ではまず、このようならしゃめんの意味の変遷を1850年代から1950年代にわたって考証する。本論文でも述べてきたように、日本では羊は主に明治以降渡来した動物であり、それ以前は羊は間接的な情報を通してしか知られていなかった。1850年前後において、西欧諸国からの外国船の出現による異文化との遭遇の中、混乱や誤解を伴って形成されたらしゃめんとしての羊のイメージを探ることにより、それ以降の羊の表象にどのように継承されたのかを知ることができるだろう。開国期から戦後占領期の間には、明治・大正・昭和と大きな社会的推移があり、羊の表象も一様ではないはずである。しかし、らしゃめんの語法やらしゃめんとして表された女性像を分析することにより、この二つの時

代が、西洋の権力に支配され、日本人女性が西洋人男性の性的対象になるとともに、日本という国家もまた東洋の一国として女性性を強いられた時代として共通していることがわかる。

次に、らしゃめんを描いた物語として人口に膾炙している唐人お吉に関する文学作品から、らしゃめんという語に含まれる意味やそれが指し示す女性の実像を分析する。具体的には、1920年代後半から30年代にかけて唐人お吉をめぐる文芸作品の流行のきっかけとなった十一谷義三郎の小説、『唐人お吉』等を取り扱う。作品の舞台となる開国期とこれらの作品群の間には時間的な隔たりがあり、後者を幕末社会の分析に用いる際には注意が必要である。しかし、唐人お吉をめぐる言説の受容を分析することにより、唐人お吉に代表される日米間の異文化交渉が1920年代から30年代においてどのように意味付けられていたのかを知ることができるだろう。

外国人男性と性的関係をもつ日本人女性がらしゃめんとして羊に喩えられてきた一方、戦後占領期を描いた文学には、日本人男性が羊として表象された作品がある。高見順の『敗戦日記』では、戦争に敗れた日本人は去勢され小羊のように従順な存在として記述され、大江健三郎の「人間の羊」では、外国兵にズボンを脱がされ羊のように屈み込む日本人男性の様子が描かれる。日本人男性作家によるこれらの作品においては、羊はアメリカ占領下の日本人男性を表す動物となっているのである。歴史的に女性化されてきた羊の象徴性は、占領期を舞台とするこれらの作品の中でどのように継承され、あるいは反転されているのだろうか。この点については、本章第5・6節において詳述する。

開国期と占領期を舞台とする文学作品を分析することにより本章で主な論点となるのは、西欧列強及びアメリカと日本との間に構築されたオリエンタリズムとジェンダーの図式が、羊の表象によってどのように描出されているのかという問題である。エドワード・サイード (Edward Wadie Said, 1935–2003) によるオリエンタリズムの概念<sup>1</sup>では、支配的な強者である西洋に対し、被支配下におかれる東洋は従属的で従順な弱者とされる<sup>2</sup>。ここで留意したい点は、女性化された東洋に付属する従順さは、羊の特性、あるいは人間が家畜としての羊に見出し構築されたイメージ<sup>3</sup>にも共通するということである。羊のこのような性質は、前章で論じたように、羊と羊飼いといった二者の権力構造のもとに成立する。日本では羊は西欧文化を象徴するものであったが、開国期と占領期をオリエンタリズムの概念を用いて解釈するならば、日本は東洋の女性として位置付けられ、西洋に従属した羊のよ

うな従順な国家だったのである。事実、本章で扱う作品では、日本人女性だけではなく日本人男性もまた羊として表象され男性性を剥奪されている。

以下、らしゃめんの歴史と戦後占領期を舞台とした作品の考察を通して、羊は、ジェンダーやナショナリティ、階級の構造の中で、被支配下に置かれ女性化された存在を表象していることを明らかにしていく。

## 第2節 らしゃめんの起源とその変遷

らしゃめんという語の意味は、大きく次の二つに分けられる。第一に羊という意味、第二に日本に來ている西洋人の妾になった日本人女性あるいは外国人相手の日本人娼婦という意味である<sup>4</sup>。「らしゃめん」には、「羅紗綿」「羅紗緬」「羅紗女」「綿羊娘」「洋妾」「洋娘」などの漢字が当てられるが<sup>5</sup>、本章では語義の変化を検討する点から、便宜上「らしゃめん」として平仮名表記を用い、「」は省略する。本節では、羊を表すものであったらしゃめんという語の意味がどのような推移を経て異文化・異人種・異性間の性的関係を示唆するものへと変化したのか、日本における羊の歴史や性をめぐる外交政策と合わせて考察する。

第一に、らしゃめんの語の意味の変遷を、18世紀～20世紀初頭の文献を中心に考証しよう。らしゃめんの語が初めてみられる文献は、第1章で述べたように日本で最初に綿羊飼育を行った平賀源内（号・風来山人）の文集、『風来六々部集』（1780）である。気候上の問題から最初の綿羊飼育は失敗し、皮膚病に罹った羊達は絵具を塗られ見世物として評判になった<sup>6</sup>。その様子は次のように記されている。

いかに物いはぬ畜類ぢやとて、毛を織りて国家の益にもなる物を、らしゃめんなんど、あてじまいな名をつけ、絵具で体を塗りちらし、引きずり廻して恥をさらす、綿羊の手前も気の毒なり。<sup>7</sup>

上記の引用からは、羊毛によって国家の利益を生じさせるべき「畜類」である「綿羊」が見世物師によって「らしゃめん」と名付けられ、まるで「恥をさらす」かのように人目にさらされていることが読み取れる。これからみていくように、らしゃめんという語はや

がて娼婦の蔑称として用いられるようになるが、山根が指摘するように、語の誕生の時点から「恥知らずの代名詞になる素地があった」<sup>8</sup>のであり、そこには既に辱しめや蔑みの意味が含まれていたことがわかる。

「綿羊」の意味としてのらしゃめんの語の使用は、江戸時代後期の風俗や事物について記された喜田川守貞『守貞漫稿』（1853）における「ラシヤメン」の項にもみることができる。しかしここでは、らしゃめんに新しい意味が付与されている点に注目したい。

武州横浜にて西洋人の妾となる女を異名してラシヤメンと云。[中略] 綿羊俗にラシヤメンと云ふ。洋人犬を堂に上し、又己が閨房中にも臥しむ。国人誤て洋夷は犬及綿羊を犯すと思ひ、其犬羊と同く、処女の夷妾となるを卑め、雑夫仮名を付て羅紗めんと云初しが、遂に通称の如くなる。<sup>9</sup>

ここからは、『守貞漫稿』が発表された 1853（嘉永 6）年には、「綿羊」が「ラシヤメン」と呼ばれていたことに加え、「西洋人の妾」の意味として「ラシヤメン」の語が使用されていたことがわかる。らしゃめんがそのような意味に転じた背景には、西洋文化との遭遇に際する驚きと誤解が反映されている。すなわち、西洋人が寝室にも犬を入れる習慣から、西洋人は犬や羊を犯すと考えられた誤った認識をもとに、西洋人に犯される者という意味から、外国人の妾が「羅紗めん」と呼ばれ始めたのである。

開港後の横浜にまつわる談話が収録された菊苑老人『美那登能波奈横浜奇談』（1861–1865 頃）においても、『守貞漫稿』と同様に、西洋人の獣姦<sup>10</sup>の噂とらしゃめんの語源との関連性が述べられる。

異人の妾となりし女をさして、ラシヤメンと唱ふるなり。此名を負ひし元といふは、異人彼国より連れ渡りしラシヤメンといふ獣あり。其性素直にして、よく人に馴れしたしむものなり。船中にてマドロスども、下官下部を云ふ。 煩悩きざしたるとき、此獣をとらへておかす事ありとぞ。此故に異人に犯さるゝの義よりして、ラシヤメンといひならいせしも理なり。[上付ママ] <sup>11</sup>

異国から連れられてきた「獣」である羊が「ラシヤメン」と呼ばれていたとともに、水



夫が航海中に羊を犯すという伝聞をもとに、「異人の妾」が「ラシヤメン」と称されてきた由来を知ることができる。

上記の『守貞漫稿』と『美那登能波奈横浜奇談』を参照したうえで、横浜市役所の編集による『横浜市史稿 風俗編』（1932）では、「ラシヤメン」の由来やその実態について次のように要約されている。これをもとにらしゃめんの意味の変化を確認したい。

言海に拠つて見るに、「らしゃめん、羅紗綿、綿羊に同じ」と解釈してあるから、正しく畜類部に入るべき動物である。かゝる文献に依つて之を推すと、らしゃめんは綿羊の毛で造った洋織物であつて、現今単に羅紗と称するものに当り、外国人は大方此羊毛織物に包まれて臥すものと断じ〔中略〕らしゃめんなる動物の毛を以て製織したものを抱擁して暖を取る事に及ぼし、果ては之を擬人化し日本婦人にて外国人の妾となれるものを称してらしゃめんと呼んだものと思はれる。されば語義上、人倫部に加ふべきものとして扱ふ事も出来るのであつて、全く一種特異の名詞として人称化されて終つたものである。<sup>12</sup>

この説明からは、らしゃめんの意味は次のように変化していったといえる。すなわち、第一に羊としての意味、第二に羅紗と呼ばれる羊毛織物の意味、第三に外国人の妾という意味である。ここでは、前二点の引用でみたような獣姦については直接言及されないが、西洋人が羊毛の織物を寝具として用いて眠ることから、転じて外国人の妾がらしゃめんと称された経緯が記されている。らしゃめんは「畜類部」にも「人倫部」にも分類されうる名詞であり、その漢字は「羅紗緬と云ひ、羅紗女と字義する事は、一は畜類を脱化して織物称とし、一は人類其ものに当嵌めたもの」<sup>13</sup>として、これら三つの意味を象徴している。

これらの文献からは、外国人の妾が総じてらしゃめんと呼ばれていたと解釈される。しかし、在日外国人の数が増加し遊郭で制度的に日本人女性が仕えるようになると、らしゃめんの語が示す対象である女性はより具体性を帯びるようになっていった。外国人相手の娼婦としてのらしゃめんという語の使用が広まったのは、横浜開港後 1859（安政 6）年に開業された港崎<sup>みよざき</sup>遊郭においてである<sup>14</sup>。ここでは、外国人一人を相手として限定した女性がらしゃめんと呼ばれた<sup>15</sup>。

港崎遊郭におけるらしゃめんの実態については竹下修子による研究があるが<sup>16</sup>、外国人

が「夷狄」として蔑まれ尊王攘夷の思想が昂揚していた時代において、外国人相手の娼婦となることは恥ずべきものとして蔑まれていたという<sup>17</sup>。しかし、らしゃめんには破格の報酬が約束されており、一等らしゃめんの場合には月給二十両<sup>18</sup>という高級官吏並みの報酬が約束されていた<sup>19</sup>。このために、関東各地かららしゃめんになることを希望する貧しい女性が港崎遊郭に集まり<sup>20</sup>、1860（万延元）年には 30 人であつたらしゃめんは翌年には 150 人にまで増加した<sup>21</sup>。らしゃめんの交際対象は外国人と限られており、日本人男性と関係を持つことは禁じられていた<sup>22</sup>。彼女達は相手の西洋人を通して得た羊毛製品（羅紗）を身に付け、日本人男性を相手とする遊女とは一目で違いがわかるような豪奢な格好をしていた<sup>23</sup>。

らしゃめんという語の使用について記された以上の文献からは、らしゃめんが羊や羊毛織物を表す語から、外国人の妾となった日本人女性の意味へと変化していった過程がうかがわれる。日本では羊がほぼ存在せずその知識やイメージが不明瞭な中で、羊は西洋文化という見知らぬものへの不可解さとともに、羊毛製品をはじめとする外国文化への憧れを象徴する動物でもあった。羊だけではなく、外国人男性を相手としたらしゃめんの存在もまた異文化との接点であったといえる。彼女達は西洋人男性にとってのエキゾチックな性の対象であったとともに、日本人による西洋文化への好奇心や恐れ、嫌悪感の混合した、開国期のエキゾティシズムを体現していたのである。

外交政策や経済的な理由を背景に誕生したらしゃめんは、男女や国家間の勢力関係を象徴する悲劇のヒロインとして、繰り返し文学作品に描かれていくことになる。その中でもらしゃめんの物語として最も人口に膾炙しているのは、唐人お吉の物語である<sup>24</sup>。次節では、唐人お吉を題材とした小説におけるらしゃめんという語の用法や羊との関連性を分析し、羊が異人種間の性的交渉を示唆する動物であったことを論じる。

### 第3節 らしゃめんとしての唐人お吉物語

唐人お吉は、本名を齋藤吉といい、初代駐日アメリカ公使タウンゼント・ハリス（Townsend Harris、1804–1878）の妾といわれる女性である。らしゃめんとして下田の町の人々に軽蔑され酒に溺れて自害したという話が伝えられているが、お吉の実態についての詳細は判明しておらず、その実在さえも証明できないのが現状である<sup>25</sup>。

しかし、1920年代後半から30年代には、下田の郷土史家・医者であった村松春水（生没年不詳）が郷土雑誌『黒船』（1924–1944）に連載した唐人お吉関連記事を皮切りに、小説や戯曲、映画で唐人お吉を扱う作品が次々と現れ、「お吉熱」ともいわれる流行が起こった<sup>26</sup>。この嚆矢となった作品が、十一谷義三郎の小説『唐人お吉』・『時の敗者 唐人お吉』（1930）・『時の敗者 唐人お吉（続篇）』（1930）である<sup>27</sup>。

唐人お吉の流行を牽引することになった作家である十一谷義三郎の経歴について、ここで触れておきたい<sup>28</sup>。十一谷は、1897（明治30）年神戸市に生まれ、東京帝国大学英文科在学時から同人誌を出版し、新聞雑誌等に評論創作を発表していた。大学卒業後、東京府立第一中学校や文化学院において英語の教鞭を執りながら作品を執筆した。小泉八雲（1850–1904）の作品の翻訳や、シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816–1855）の『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）の翻訳（1931）などでも知られている。十一谷のこのような英文学の素養や、『唐人お吉』小説群におけるハリスについての詳細な記述を鑑みれば、これらの作品は1930年にアメリカで出版されたハリスの日記、*The Complete Journal of Townsend Harris: First American Consul General and Minister to Japan*（1930）に基づいて著されたと推測される。

十一谷義三郎の『時の敗者 唐人お吉』は、1930年に溝口健二（1898–1956）によって『唐人お吉』（1930）として映画化もされ人気を博した<sup>29</sup>。十一谷の小説に影響を受け、真山青果（1878–1948）や山本有三（1887–1974）もそれぞれ戯曲『唐人お吉』（1930）・『唐人お吉と攘夷軍』（1931）、『女人哀詞 唐人お吉物語』（1933）を残している。

ここで、1920年代から30年代に生じた唐人お吉人気の理由について考えられる点を二点挙げておきたい。第一に、近代以降の日本社会において、唐人お吉物語が「対米感情のバロメーター」<sup>30</sup>として機能していることである。幕末史研究の視点から唐人お吉の言説を研究する吉田常吉は、日本において唐人お吉の人气が高まった際には、必ず日米間の政治的緊張関係があるという一定の法則が成り立つことを指摘している<sup>31</sup>。酒井敏も吉田のこの論点に同調し、1920年代後半から30年代にかけての唐人お吉の流行と太平洋戦争開戦前夜の時代相を重ね合わせるとともに、1990年代初頭の唐人お吉を題材とする芝居上映の増加と、アメリカにおけるジャパン・バッシングの動向についても言及している<sup>32</sup>。

第二には、社会的弱者としてのらしゃめんのイメージと、プロレタリア文学の隆盛との関連性である。貧しい家庭に生まれたお吉がらしゃめんになることで高給を得て経済的地

位を向上させる点や、お吉の情夫・鶴松が役所からの依頼を受けお吉への想いを諦めることで職と名字を得ようとする点など、唐人お吉の物語には階級移動の様相が読み取れる。このように階級問題の視点から唐人お吉を読む姿勢は、溝口の映画『唐人お吉』の演出を手掛けた畑本秋一（生没年不詳）によっても意識されていた。

お吉が『ラシヤメン』として生きなければならなかつた背後には、かうした大きな『国家的』の『利害関係』が横たはつてゐたのである。[中略] 婦人の覚醒せる『現代の資本主義社会』に於てすら、すべての政權を『男性』が握つてゐるため、『婦人達』は依然として彼等の『利害関係の道具』として使用されつつあるのである。[中略] 映画によつて『唐人お吉』を現代に生かすことは、大きな『意義』がある。[中略] そこには男女の『誤れる時代精神』があり、支配階級、被支配階級の『間違つた人生観』があつて、それがこの二人を『不幸』に導いたのである。[二重括弧ママ]<sup>33</sup>

唐人お吉の物語に代表される開国期のらしゃめんの存在は、1920年代後半当時の階級問題への意識や婦人運動の文脈においても取り上げられ問題視されていた。唐人お吉物語に対する畑本のこのような批判的読解は、羊と羊飼いの関係から羊を支配構造の下部に位置すると考える本論文にとって、興味深い視座を提供している。らしゃめんは、女性というジェンダーと身体を売る職業、出身階級、そして西洋のアメリカに対するアジアの日本という地政学的配置において、多重に周縁化された存在であつた点を強調しておきたい。

それでは、1920年代後半から30年代前半にかけて人気を博した唐人お吉を題材とする作品の中で、らしゃめんの語源となつた羊との関連性は指摘できるのか、そしてらしゃめんという語はどのように用いられているのか、検証したい。

まず、十一谷義三郎の『唐人お吉』を例にみていきたい。この作品では、お吉の生い立ちやお吉を育てた女主人「をばさま」の半生が描かれるが、作品冒頭では、石井研堂著『増訂明治事物起源』（1926）と、本章第2節で引用した『守貞漫稿』のらしゃめんに関する項目が掲載されている。『唐人お吉』冒頭における『増訂明治事物起源』からの引用は次の通りである。

——これ〔らしゃめん〕人倫部に入るべきか、畜類部に入るべきか、決しがたき動物

の名なり。

（嘉永明治年間録）安政四丁巳四月の条に『垂人下田滞留中囀娼風説』の条あり、「垂人下田に滞留中、ハルリス儀、当五月より同所坂屋町きちと申芸子一ケ年給金百二十両の仕切にて当金二十五両にて召抱へ〔中略〕未だラシヤメンの名無きが如きも、日米始めて通商条約を結びしは安政元年三月にして、国人皆外人を鬼畜視する際なるに、きち、ふじの二少女が、夜々玉泉寺へ通勤せる勇氣に驚く。

——石井研堂氏著「増訂明治事物起源」八〇四頁<sup>34</sup>

作品冒頭部でこの文献を引用することにより、唐人お吉の物語に史実性が加えられるとともに、『守貞漫稿』のらしゃめんに関する説明も合わせて引用することによって、らしゃめんという語が元来は羊を示すものであったことがわかるように記されている。小説の中で直接動物の羊について言及される箇所はないが、読者はこの冒頭部を読み、らしゃめんから羊を連想しながら作品を読み進めていくことになったといえよう。加えて、十一谷はらしゃめんの表記として、「らしゃめん」の他に「綿羊」<sup>ラシヤメン</sup><sup>35</sup>という漢字も用いている。「羊」を含むこの表記からは、冒頭に引用されたらしゃめんの語源としての羊が容易に想像される。

『唐人お吉』で描かれるらしゃめんの存在については、前節で述べたような高い報酬やその待遇の良さが強調して描かれる。例えば、ハリスに仕えるようになったお吉の境遇について、次のような記述がある。

彼女〔唐人お吉〕が、毎月、奉行所の手を経て受けとる金は、幕府の大奥の一流女官のそれに六倍したし、彼女が駕籠<sup>のりもの</sup>で通つた時に、奉行所から差し廻された人数などの格式は、云はば男爵級の旗本以上に相当してゐた。さうして、彼女の勤めは、〔中略〕お抱への、通ひの、らしゃめんだ。<sup>36</sup>

らしゃめんが「幕府の大奥の一流女官のそれに六倍した」ほどの高い報酬を得、「男爵級の旗本以上」の待遇で処された女性であった点については、十一谷の唐人お吉作品群で繰り返し述べられる。『時の敗者 唐人お吉（続編）』では、お吉の生活について記述する際に「彼女の財布の重味を、ふたつ三つ、史料について、しらべておかう」<sup>37</sup>と作者の語

りが介入する。そして、当時の日用品や食料品の物価が記された領事館の史料が約三頁にわたって引用されたうえで、お吉の月給が「どうやら相当な会社の月給」<sup>38</sup>に値するものであったと、史実に基づいた結論が下される。

らしゃめんとなった女性が手にした報酬については、唐人お吉以外に、芸者喜遊を扱った物語においても同様に言及される。喜遊は港崎遊郭の岩亀楼の人気芸者であったが、アメリカ人の客に見込まれ、らしゃめんになることを求められる。しかしそれを拒み、「露をだにいとふ大和のをみなへしふるあめりかに袖はぬらさじ」という辞世の歌を残して自害したといわれている<sup>39</sup>。この話の真偽の程は定かでないが、彼女の最期の姿は尊王攘夷の志士達によって英雄化され語り継がれていくこととなった<sup>40</sup>。この物語の形成過程について想像を交えて描いた作品が、有吉佐和子（1931–1984）の短篇小説「亀遊の死」（1961）<sup>41</sup>と戯曲『ふるあめりかに袖はぬらさじ』（1982）である。ここでは、外国人を相手とする遊女がラシヤメンと呼ばれ、遊郭の帳場が「洋妾の値段は一番高いので月に二十両が相場」<sup>42</sup>と言っているように、日本人相手の芸者と比較した際の報酬の高さが強調されている。

一方で、唐人お吉を題材とする村松春水や真山青果の作品では、らしゃめんの待遇の良さには焦点は当てられず、その呼称のもつ差別的な意味合いや、それによって生じるステイグマが描かれる。村松の『唐人お吉を語る』（1929）では、お吉が外出すると、「「それ唐人のラシヤメンになつたお吉が来た。」と子供まで囃したて、夜は四つ這になるかなど、とても耳を掩はねばゐられぬ雑言」<sup>43</sup>が村の人々によって発される。また、真山の作品では、「唐人お吉だ、ラシヤメンと……、世間一体に爪弾きされて」<sup>44</sup>とあるように、「ラシヤメン」という呼称が広い世代に渡って人を蔑むものとして用いられていたことがわかる。真山の『唐人お吉』で描かれる、お吉の次の台詞をみてみよう。

お吉はお吉だ、坂下うまれの貧乏人、孤児同様に生れた身の上だ。なるほど一度異人には出た。が、それは一時の……夢と過ぎたのだ。それを世間はなほ忘れず、身についた古創か何んぞのやうに、唐人お吉だラシヤメンだと、前に立ち後ろに立ち、湯に行く道ちや小兒どもまで、人をなぶり者にするとは何んのことだ。〔中略〕なぜこの額の焼印が消えないのだ。表に出ても、人に遭つても、唐人だラシヤメンだと……一生消えない符帳をつけて、生きての一生をなぶり者にする気なのか。<sup>45</sup>

らしゃめんという語は、時間が経過しようとも一生消えない「古創」「焼印」「符帳」としてお吉を苦しめる。このような侮蔑語としてのらしゃめんの用法と、先に挙げた高い報酬を得る女性の象徴としてのらしゃめんは、決して対立するものではないだろう。お吉をらしゃめんと呼んで中傷する村人の心情としては、外国人に仕えることに対する侮蔑の他に、「貧乏人」「孤児同様」の状況から抜け出した彼女の社会的・経済的地位に対する嫉妬の念も含まれていると考えられる。

唐人お吉を主人公に据えた作品のタイトルに「時の敗者」や「哀詞」という言葉が付されていることからわかるように、唐人お吉は、社会で虐げられた犠牲者として読まれてきた。その一方で、このような悲劇的側面はときに影を薄め、お吉はらしゃめんになることで階級の上昇を果たし成功を治めた人物でもあるとも読み取れる。物語の中のお吉は、らしゃめんと呼ばれて絶望に打ちひしがれるよりも、むしろ開き直って強く生きる女性として描かれている。

また、お吉は、ハリスとの生活を通して、男性知識人に先駆けいち早くアメリカの文化風習を学んだ人物でもあった。第1章で挙げた『三四郎』の美禰子の「<sup>ピチーズ、アキン、ツー、</sup>Pity's akin to <sup>ラッダ</sup>love」という句と同様に、お吉もまた外国語に通じた女性として、「「ま、ロウニン！」と、思わずアールの音をふるはせ」<sup>46</sup>のような流暢な英語の発音を身に付けている。外国文化の紹介者としてのお吉の側面は、特に真山の『唐人お吉と攘夷群』において鮮明に描かれる。この作品は、下田を去ったお吉が幕末の京都に向かい新撰組の志士達と交際するという、唐人お吉伝説からは飛躍したフィクション性の高い戯曲であるが、お吉はアメリカ文化に関して得た知識を生かし頑なな攘夷の志士を開国派へと導き、一目置かれる存在となっている。

このように一概に犠牲者とは解釈できないらしゃめん女性の描写については、後述するように、戦後占領期においてアメリカ兵を相手に性的サービスを行った日本人女性の表象にも通じるものであることを、ここで述べておきたい。

以上、第2節・第3節では、羊を語源にもつらしゃめんという語に注目し、その意味の変遷と、らしゃめんとしての唐人お吉物語の受容過程、及びそれらの作品の中でらしゃめんという語がどのように使用されているのかを考証した。

西洋人男性を性的行為の相手とした日本人女性を表すものとなったらしゃめんは、第1章で取り上げたように、明治時代には洋学を修める女学生や外国人に付き添う女性にまで

意味が拡張される。そこでは、実質的な性交渉の有無に拘らず、西洋人や西洋文化との接点を持つ女性がらしゃめんと称されており、らしゃめんのどのような側面が明治時代に継承されていったのかがうかがえる。さらに 1920～30 年代には、らしゃめんは西洋人男性と日本人女性との異人種間の性的関係を示唆する意味を引き継ぎ、唐人お吉の物語として伝えられていった。

次節では、らしゃめんが含意したこのような女性としてのジェンダーを保持しながら、戦後占領期の文学作品において羊はどのように表象されているのかを考察したい。らしゃめんを描いた作品群では、アメリカ人男性と日本人女性をめぐるオリエンタリズムとジェンダーの問題が、日本人男性の手によって描かれていた。これに対し、開国期を髣髴させるかのようにアメリカと日本が支配関係に置かれた占領期には、らしゃめんの表象が召喚されつつも、日本人男性作家が日本人男性を羊に擬えた記述が見受けられるのである。

#### 第 4 節 戦後占領期のらしゃめん——パンパンとの比較

開国期のらしゃめんをめぐる言説は、その指示対象を変化させ戦後社会にも継承されていった。特に、1945（昭和 20）年 8 月のポツダム宣言調印から 1952（昭和 27）年のサンフランシスコ平和条約発効に至る、連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied Powers, GHQ/SCAP）による占領期においては、米軍兵士を相手とした街娼である「パンパン」とらしゃめんが同義の語として用いられた。本節では、らしゃめんとパンパンが同一視された言説とその社会的背景について、幕末の開国期と占領期の共通点に注目した論考を参照しながら分析する。

まず、パンパンとは具体的にどのような女性のことを示しているのか、その誕生の背景とともに確認しよう。パンパンとは、占領期において、進駐軍兵士を相手とした街娼のことである<sup>47</sup>。パンパンの語源については諸説あり、例えばアメリカ軍兵士が夜に花街の表戸を叩いた音、日本海軍がサイパン島の女性をパンパンと手を打って買淫したこと、占領下で日本人女性が食料をねだり「パン、パン」と哀願したこと、性交を意味する“pom pom”という米軍内の卑語が「パンパン」と聞えたこと、等が挙げられている<sup>48</sup>。パンパンという呼称には侮蔑的なニュアンスが込められ、「夜の女」や「闇の女」、「パン助」といった呼び名も同様の意味で用いられていた<sup>49</sup>。パンパンの中には、特定の一人を相手とし他に客



をとらない「オンリー」<sup>50</sup>と、複数の客を相手とする「バタフライ」<sup>51</sup>という二種類の形態があった。

パンパンの誕生についてその歴史的背景を辿れば<sup>52</sup>、進駐軍の男性、主に GI (Government Issue の略で、一般にアメリカ兵を指す) を対象とした「慰安施設」の設立がまず挙げられる。敗戦直後、アメリカ軍の進駐によって日本人女性が強姦されるといふ不安が広まっていた。このような懸念は、19 世紀開国期の横浜で、外国人はヒヒのように女性の肉を食べるといふ噂のために未婚女性が寄り付かなかった状況<sup>53</sup>と同様である。占領下の日本政府と警察は、このような恐怖心から「一般の善良な婦女子の貞操を守るといふ大義名分」<sup>54</sup>のもと、GI のために性的サービスを行う慰安施設の設立を考案した。敗戦後間もない 1945 年 8 月 26 日に、内務省警保局によって東京都に開設された特殊慰安施設協会 (Recreation and Amusement Association, RAA) をはじめとして、全国各地にこのような慰安施設が設けられた。

慰安施設で働く日本人女性として、当初は戦前の娼妓や接客婦が召喚されたが、戦争の影響のため十分な人数が集められなかった。そのため、高額の月給を条件として、ダンサーや女給といった名目のもと街頭ポスターや新聞広告を通して広く募集が行われた。「一般の善良な婦女子を守る」ために設けられた慰安所で、結果としてはそのような女性が「慰安婦」として働くことになったという矛盾については、茶園敏美が指摘する通りである<sup>55</sup>。全国各地の慰安所は盛況を博したが、翌 1946 年の公娼制度廃止の前提措置として、及び GI の間での性病の蔓延が危惧されたことから、GHQ は 1945 年 12 月に GI に対して慰安施設への立入禁止命令を発令し、慰安施設は設立から三ヶ月ほどで閉鎖された。これによって、全国で約一万八千人いたともいわれた慰安婦<sup>56</sup>は失業して次第に街娼化し、パンパンと呼ばれる女性達が登場した。さらにこの数値の背後には、統計では把握できない多数の女性が含まれると想定されている<sup>57</sup>。

パンパンは、田村泰次郎 (1911–1983) の『肉体の門』(1947) や松本清張 (1909–1992) の『ゼロの焦点』(1959)、森村誠一 (1933–) の『人間の証明』(1976) といった、戦後占領期を描いた文学作品や映画、テレビドラマ等で重要な役割を担って登場し、そのイメージは繰り返し再生産されてきた<sup>58</sup>。彼女達は「米兵のジープに乗って陽気にさわりだり」<sup>59</sup>し、「米兵の腕にぶら下がりこれみよがしに歩く、派手な衣装を着た夜の女」<sup>60</sup>としてしばしば描写される。特に、チョコレートや缶詰などのアメリカ製品を手にし、ネッカチー

フやフレアスカート、濃い口紅やハイヒールといった華美な服装を身にまとっていた様子は、印象深く継承されていった<sup>61</sup>。このように当時のパンパンは「大胆に征服者の富を頂戴した者」<sup>62</sup>であったが、パンパンに関しては、「批判あるいは、ポルノグラフィ的、平たく言えばエロ的な消費、更生もしくは救済の対象」<sup>63</sup>として語られることが多かった。

これまでに述べてきたパンパンの誕生背景やそのイメージ群から想像されるように、戦後占領期には、開国期のらしゃめんのイメージがパンパンに適用され、らしゃめんとパンパンが同一化されることがあった。それは、開国期の国際情勢と占領期の日米関係、アメリカ人を対象とした日本人女性の性的サービス、華美で新しいファッション、高い報酬といった、らしゃめんとパンパンの境遇の類似点による。進駐軍相手の慰安婦の表象にお吉のイメージが召喚された点については、吉見周子やモラスキー、唐人お吉物語の受容の変遷を研究する齊藤愛による言及がある<sup>64</sup>。この傾向は、RAAの次のような設立声明書に顕著に表されている。

時あり、命下りて、予て我等が職域を通じ戦後処理の国家的緊急施設の一端として、駐屯軍慰安の難事業を課せらる。「昭和のお吉」幾千人かの人柱の上に、狂瀾を阻む防波堤を築き、民族の純潔を百年の彼方に護持培養すると共に、戦後社会秩序の根本に、見えざる地下の柱たらしめんとす。<sup>65</sup>

この「昭和のお吉」という言葉は、東京だけではなく他地域の慰安施設の開設を担った日本人男性の発言にも見受けられる。例えば広島県海田市では、1945年9月上旬、日本人慰安婦約百名を前にした市長の次のような発言が記録されている。

日本の将兵が血を流して戦って来た敵兵に、体を以て慰安せよというのは、私としてはまことに言い辛<sup>ママ</sup>らく〔中略〕これ以上敗戦日本に侮辱をうけさせたくない。しかしそれを防ぐには、一にかかってみなさんのかれらに対する接待活動の如何にあると私は思う。どうか！みなさん、この際、一つみなさんに昭和の唐人お吉になって頂きたいことを懇願する。みなさん、どうかお国のために最後の御奉公をして下さい。<sup>66</sup>

占領軍の男性を「体を以て慰安」する日本人女性は、慰安施設の開設を中心的に担った

男性達によって、「昭和のお吉」という名の下で募集・奨励された。その「接待活動」は、「民族の純潔」を守る「防波堤」、国家のための「御奉公」とされていたことが、上記二点の引用からうかがえる。

開国期のらしゃめんとして、唐人お吉だけではなく、先に述べた芸者喜遊の物語もまた、占領期の日本人女性を語るためのモチーフとなっていた。鈴木直子は、大宅壮一（1900–1970）のエッセー「一番得をしたのは女——占領下の世相を斬る」（1952）において、占領下の日本人女性が「「ふるアメリカに袖はぬらさじ」どころか「アメリカニズムにびしょ濡れ」」と揶揄されていることを指摘している<sup>67</sup>。

周知の通り占領期には GHQ による検閲制度が機能しており、プレスコードによって GI と日本人の男女間の親密関係の描写は処分対象となっていた。そのため、当該期間に記された文献を分析対象としてパンパンの実情を把握するには留意が必要であるが<sup>68</sup>、その一方、1950 年代後半には、西洋人男性と日本人女性との恋愛を描いた「らしゃめん映画」と呼ばれる外国との合作映画が数多く制作された。当時映画館の経営に携わっていた柴田芳男は、このジャンルについて次のように定義している。

「大言海」をひもとくと「[らしゃめん]の項には」「西洋人の妾となりたる日本婦人を卑しめていう語」とある。いまでいう「オンリー」である。ところが、戦後外国との合作映画というものが現われ、その中では必らず<sup>ママ</sup>西洋人は日本女性と恋愛をすることになっている。国外へ輸出してドルを稼ぐつもりだが、こういう映画を見せつけられる日本人の男子ぞ哀れなりである。[中略]この種の合作映画を「——[らしゃめん]映画」というようになった。代表的なものに「サヨナラ」等がある。<sup>69</sup>

「らしゃめん映画」の具体的な例としては、ここで柴田が言及している『サヨナラ』（*Sayonara*, 1957）の他にも、『八月十五夜の茶屋』（*The Teahouse of the August Moon*, 1956）や『あしやからの飛行』（*Flight from Ashiya*, 1964）が挙げられる<sup>70</sup>。上記の引用では、パンパンの中でも特にオンリーがらしゃめんと並置され、映画の中で描かれる恋愛は、西洋人男性と日本人女性の間のものであることが説明されている。

このように、1850 年代と 1940～50 年代という約百年間の時間的相違があるとはいえ、らしゃめんとパンパンという日本人女性の存在からは、幕末開国期と占領期が類似した状

況にあると理解されていたことがうかがえる。先述した有吉佐和子の小説「亀遊の死」について、有吉のアメリカ表象を考察する金志映は、「1950年代までの多くの小説が占領の体験からアメリカを描くなか、幕末にまで遡ってアメリカとの接触を描くこの小説は、それまでのアメリカ表象の流れからみれば、明らかに異質」<sup>71</sup>であると捉える。しかし、らしゃめんとパンパンを同一視した占領期の言説を考慮すれば、有吉が喜遊を題材とする作品を執筆することで幕末と占領期とを連繋させたのは、決して「異質」ではない。

らしゃめんとパンパンについて、特にオンリーとの共通点に着目した竹下は、彼女達が男女間そして国家間の勢力関係において弱者とされた存在であることを論じている。

時代背景のほか、実態などにおいても、らしゃめんとオンリーには共通点が多いことがわかる。[中略] らしゃめんとオンリーには、男女間の勢力関係に加えて、国家間の勢力関係が深くかかわっていることがわかる。つまり、彼女たちは弱者である女性であり、弱者である日本人であったのである。<sup>72</sup>

竹下の引用では、らしゃめんとオンリーがジェンダーとナショナリティの勢力関係双方において弱者の側に位置していた点が強調されている。

長期にわたりらしゃめんという語が日本人娼婦を示すものとして広がるにつれ、その語源である羊のイメージは直接的には喚起されなくなったと考えられる。しかし、らしゃめんとして女性のジェンダーを付与された羊の表象をめぐる、このような国家とジェンダーの二重の支配関係は、アメリカと日本の立場を動物の比喻を用いて表した占領期の言説にもうかがうことができる。GIの男性を対象とした慰安施設の開設にあたり、その従業員が「昭和のお吉」に擬えられて語られた点については先述した。これに関連して、警察による慰安施設の設置に際し、日本人女性を犯すとされた占領軍を狼に喩えた次のような文章がある。

一般の善良な婦女子をオオカミのような占領軍から守らねばならぬ。[兵庫] 県警察部は中央の指示でその防波堤として慰安所の設置を急いだ。プロやセミプロの女性に犠牲になってもらって大部分の女性を救おう。苦しい大義名分だった。米軍相手の“女郎部屋”をつくるのだ。それも警察がその世話をするのだ。泣くに泣けない情けない

気持ちだった。良家の子女を守るために。<sup>73</sup>

ここでは、占領軍は「オオカミ」に喩えられ、慰安施設で働く日本人女性は「良家の子女を守る」ための「犠牲」者とされている。ここでは「羊」という語は用いられないものの、狼との対置によって、これらの女性が「犠牲」の「羊」に擬えられうる存在であることは明らかである。

慰安施設の従業員募集についての文章では、「昭和のお吉」や「犠牲」というフレーズとともに、「防波堤」という言葉も頻繁に見受けられることが指摘されているが<sup>74</sup>、この事実については本節のこれまでの引用によっても明らかであろう。慰安婦を表す「防波堤」の表現については、田中貴美子という名の RAA の娼婦が書いたとされる『女の防波堤』（1957）<sup>75</sup>が想起させられる。モラスキーは、この『女の防波堤』等 1950 年代に量産された「パンパン物語」に描かれる占領軍に支配される女性身体を、日本国家のメタファーとして読み解く<sup>76</sup>。モラスキーによって再発見されたこのような作品は、「娼婦たちの実情をありのままに書くことよりも、国民的体験のアレゴリーを創出することに専ら興味を集中させ」<sup>77</sup>ており、屈辱感を伴う国家の被占領経験が女性表象を通して物語化されてきたことが指摘されている<sup>78</sup>。

国家のメタファーとしての女性の身体表象は、近代日本の歴史を「黒船によって「強姦」された」「あわれなく女>」<sup>79</sup>であると表現する上野千鶴子の論においても見受けられる。上野は、本章でも検討してきたように、アメリカの「黒船」に象徴される開国期と占領期とを分断して捉えることはせず、敗戦時には相手がヨーロッパからアメリカにとって代わることで「強姦」が繰り返されたと述べている<sup>80</sup>。

このように、占領期には支配下にある国家の屈辱が女性の身体表象を通して語られ、あるいは日本人女性がらしめんとして犠牲の羊に喩えられる傾向がある一方、占領期を描いた文学作品の中には、日本人男性が犠牲の羊とされた描写がある。次節では、占領期を題材とする二つの作品、高見順の『敗戦日記』と大江健三郎の「人間の羊」における羊の比喩の分析を通して、弱者としての羊に付与されたジェンダーとその意味がどのように変化しているのかを考察したい。

## 第5節 高見順『敗戦日記』——去勢された小羊としての日本人男性

占領期を描いた文学作品の中でしばしば羊の表象がみられることを最初に指摘したのは、マイク・モラスキーである<sup>81</sup>。モラスキーは、高見順の『敗戦日記』の引用と、大江の「人間の羊」の分析を通して、戦後日本の小説家が羊を用いて「日本の軍国主義者とアメリカ占領者の双方に対する、日本人の受動的な反応」<sup>82</sup>を表象していることを明らかにした。先述した松枝もまた、これらの作品において、戦前から連続する恐怖政治、あるいは権力によって従順であることを強いられる者が小羊と呼ばれていると分析する<sup>83</sup>。

これらの先行研究では、占領期以前に羊がどのように描かれてきたのかという羊の表象の歴史性については着目されていなかったが、日本文学における羊は、第2章で論じたように単に犠牲や弱者の表象だけではない点に留意すべきである。また、本章では、日本における羊の表象の特徴として、らしゃめんという語を介し女性のジェンダーが付与されてきた経緯を論じてきた。受動的な犠牲者あるいは弱者としての羊という意味においては、その指示対象は主に女性であったことがわかる。

ところが、高見や大江の作品では、日本人女性ではなく日本人男性が羊と称されている。彼ら日本人男性作家が描く羊は、それまで羊に付されてきた女性性を継承しているのだろうか。まずは、高見順の『敗戦日記』を検討してみよう。

『敗戦日記』は、『故旧忘れ得べき』（1935）や『如何なる星の下に』（1939）、『わが胸の底には』（1946）、『いやな感じ』（1960）といった小説の代表作を凌いで、作家高見順の名を知らしめている作品である。近年では、毎年8月になると「終戦の記憶が風化するのを防ぐかのように、高見の詳細な日記が引き合いに出される」<sup>84</sup>というように、敗戦後の社会的・文化的状況を知る上で欠くことのできない資料となっている。

高見順の1945年1月から12月の日記の抄録である『敗戦日記』については、次のような刊行の経緯がある。まず、「敗戦日記・日本<sup>ゼロ</sup>年」というタイトルで1958年7月から8月にかけて『文芸春秋』に掲載された。その後、これに未発表のものを加えた単行本『敗戦日記』（1959）が文芸春秋社より出版され、さらに二度にわたり文春文庫版が刊行された。1945年の日記の全容は、『高見順日記』第五巻と第六巻（1965）に収録されている<sup>85</sup>。本節では、主に1945年8月から12月を中心とする日記の記述から、敗戦後間もない占領下の日本人男性の心象と羊の表象について分析していきたい。

以下、本節での『敗戦日記』からの引用は『敗戦日記』（中央公論新社、2005年）によ

るものとし<sup>86</sup>、( ) 内に引用ページ数を示す。

まず、『敗戦日記』の中で、モラスキーが引用した羊についての記述を確認したい。モラスキーによる『敗戦日記』からの引用「日本人はある点、去勢されているのだ。恐怖政治ですっかり小羊の如くおとなしい」<sup>87</sup>という文章は、1945年10月5日の日記にみられる。この日、雑誌『ライフ』(*Life*, 1936–2007)<sup>88</sup>でムッソリーニ (Benito Mussolini, 1883–1945) が情婦とともに逆さに吊るされた死体写真を見た高見は、戦争の責任を負うべきムッソリーニへのイタリア国民の憤激と、日本国民の東条英機 (1884–1948) への態度を比較して、次のように記している。

日本人はある点、去勢されているのだ。恐怖政治ですっかり小羊の如くおとなしい。怒りを言葉や行動に積極的に現わし得ない、無気力、無力の人間にさせられているところもあるのだ。東条首相を逆さにつるさないからといって、日本人はイタリア人のような残虐を好まない温和な民とすることはできない。

日本人だって残虐だ。だって、というより日本人こそといった方が正しいくらい、支那の戦線で日本の兵隊は残虐行為をほしいまにした。

権力を持つと日本人は残虐になるのだ。権力を持たせられないと、小羊の如く従順、卑屈。ああなんという卑怯さだ。(371–372)

軍事支配を「恐怖政治」と呼ぶこの文章では、「権力を持たせられない」日本人は「去勢」された「従順な」小羊として表現される。そして、戦争を統率した者に対する怒りを表すことのない占領期の「無気力」「無力」さが、戦時中の「残虐行為」と比較され非難されている。

このように高見順が羊の比喻を用いている理由については、高見が末年の生まれであるために、自身の性格を「ヒツジ的である」<sup>89</sup>と語っているように羊に愛着を持っていたことも考えられる<sup>90</sup>。しかし、左翼作家からの転向を余儀なくされた政治的態度の推移や高見の小説作品を考慮するならば、それは転向者の臆病な気質を表すものとして解釈できるだろう。高見は、1932年に治安維持法違反の容疑で検挙され、翌年転向の上申書を提出して仮釈放されたが、擬似転向者として終戦まで特高警察の監視から逃れることはできず転向した罪の意識を生涯背負い続けていた<sup>91</sup>。言論統制の中、書きたいと思う題材を書くこ

とができない転向者の苦悩は、高見自身の経験に基づいて描かれた小説、『深淵』（1947–1950）の中で次のように述べられている。

彼〔主人公の角見〕は書きたかつた。しかし真に書きたいとするものは書けなかつた。〔中略〕時代の重圧に、——そして重圧に順応しながらとにかく書きたいとする殆んど盲目的なあせりに。

彼はその頃いつも、鞭で追はれる羊の群を自分のうちに思い描いてゐた。鞭は絶えず鳴りつづいてゐた。〔中略〕

もとより鞭に抗して自分を固く守つてゐる作家のゐることを角見も知らないではなかつた。さういふ態度について考へないわけではなかつた。しかしそれを正しいとしながら、それを自分の態度にしうるには彼は弱すぎた。臆病であり卑怯であつた。ものを書いて発表できなくなるという、確実な預想には堪へられなかつた。<sup>92</sup>

ここでは、「書きたいとするもの」を書きたい欲求が、「時代の重圧」の下で抑圧されている状況が、「鞭で追われる羊の群」という言葉によって表されている。作品を執筆しても発表が許されないという状況に堪えられず転向した「弱さ」、「臆病」、「卑怯」な性格は、ここでは羊という動物によって表象されている。この表現には、羊の群れを「鞭」で追う、つまり作家達の言論を監視する特高警察や政府のような「羊飼い」がいることが前提とされるだろう。

第2章で論じた江馬修が、関東大震災で民衆を操る権力機構を羊飼いと羊の群れの比喻を用いて表していたように、高見順もまた、羊の群れを政治的権力と関連させて述べた作家であつたことがわかる。江馬は戦前思想犯の疑いで特高に連行されたことがあるが、転向の上申書は求められず起訴猶予として釈放され、戦時中は郷里の高山に戻りついに転向することはなかつた<sup>93</sup>。これに対して高見は、特高の拷問を受け、1933（昭和8）年に転向を表明している<sup>94</sup>。『敗戦日記』の中では、敗戦後の東京の焼野原はしばしば関東大震災後の情景と重ね合わせて語られるが<sup>95</sup>、ここでも、戦前から継続して民衆を「愚民」として扱う政治が非難されている点をみていこう。

羊の比喻を用いた上記の10月5日の日記には、戦争を導いた国家の指導者に対する怒りの感情が表れている。これに先立つ8月16日の日記では、敗戦の報道を信用しない国



民の姿を目にし、戦時中の事実を隠蔽した宣伝による煽動が今もなお機能していると考え、政府に対する批判が述べられている。

特攻機温存、本土決戦不敗という政府の宣伝が一般民衆によくきいている。原子爆弾の威力についても、事実を隠蔽していたため、民衆は知らない。[中略]

愚民化政策が成功したものだと思う。自国の政府が自国民に対して愚民化政策を採ったのである！（316-317）

情報統制によって民衆を「愚民」に変えた政府への非難は、9月17日の日記にも見受けられる。

「何も知らされずにいた」私たちは、まことにヘンな気がする。政治というものは面白い。国民を欺いても平気なのである。[中略] 反対のことをいって国民を欺き、そうして今となると、実業家、新聞人らの知識階級は「正しい認識」をもっていたが……などと言って、何も知らされないで「正しい認識」をもち得なかった国民をまるで何か無智扱い、馬鹿扱いだ。（362-363）

ここでは、国民を「無智」で「馬鹿」な人間として扱い、戦時中正確な情報を提供しなかった政治や知識人階級が糾弾されている。このように、民衆を「愚民」扱いする政治的権力を糾弾する高見の態度からは、江馬のように、羊は愚かな民衆の喩えとして描かれていると考えることが可能である。

しかし、『敗戦日記』10月5日の去勢された羊にまつわる表現に関しては、前後の日記の記述と合わせて分析するならば、そのような態度だけではなく、アメリカ人男性と日本人女性の性交渉に基づいた関係を傍観し無力さを感じる一日本人男性の視点がうかがえる。例えば、同年8月28日と29日の日記には、警視庁によってRAAが準備されるにあたり、勤務を希望する日本人女性が決して少なくなかったという事実が次のように綴られている。

警視庁から占領軍相手のキャバレー [RAA] を準備するようにと命令が出たこと。「淫売集めもしなくてはならないのです、いやどうも」「集まらなくて大変でしょう」「そ

れがどうもなかなか希望者が多いのです」「へーえ」(338)

占領軍相手の「特殊慰安施設」[中略] 接客婦千名を募ったところ四千名の応募者があって係員を「憤慨」させたという。(340)

第4節でも述べたように、GIのための慰安施設は、内務省や警察といった日本人男性から構成される政府機関によって作られたものであったことを、ここでもう一度確認しておこう。上記の引用では、そこに予想を上回る数の女性が志願したことに対して、当の施設運営者である係員自身が「憤慨」するという矛盾した状況がうかがえる。これを聞いた高見は、怒るまでもなく、まるで無関心を装うかのようにその事実を「へーえ」(338)と受け入れるだけである。同様の姿勢は、9月2日の日記において、横浜でGIによる強姦事件があったという噂に対し、「敗けたんだ。殺されないだけましだ」「日本兵が支那でやったことを考えれば……」(345)と反応する日本人の姿にも共通している。

このような感情の背後には、日本人男性の「所有物」であるべき日本人女性が、戦勝国の男性の「所有物」になることに対する嫉妬を読み取ることができる。10月18日の日記には、若い日本人女性がGIと一緒にいる姿を眺める次のような記述がある。

日本人は、——年若い娘の多いのが眼を惹いた。濠端でアメリカ兵を囲んだり、アメリカ兵に囲まれたり、——さらに、アメリカ兵にいかにも声を掛けられたような、物欲しそうな様子で、でもまだ一人歩きの勇氣はなく、二人三人と連れ立って、アメリカ兵のいる前を選んで、歩いている娘たち。[中略]

いやな気がした。嫉妬か。二十を越した、つまり一応分別のあるといった女はさすがにいない。みんな二十前なもの、面白い。

「——戦争中は、軍に渡りをつけて、軍を利用したり笠に着たりしていた連中が、今度はまた真先にマッカーサー司令部……。それがつまり同じ人間なのだから面白いですね」

そんな話を私たちはしていたが、そう言えば、この浅墓な浅間しい娘たちもそのたぐいだなと私は思った。このにがにがしい娘たちと、そういう人間とは、同種類なのだった方がほんとうだろう。(377-378)

アメリカ兵に囲まれ、あるいはアメリカ兵に声を掛けてもらいたい「物欲しそうな様子」で歩く日本人女性を見た高見は、「いやな気」「嫉妬」を感じている。そして、彼女達を、敗戦後一転して態度を変え占領軍に追従する日本政府と比較している。戦後このような姿勢を示す人間は、「浅墓な浅間しい」種類の人間として捉えられている。

戦後のパンパンに関する資料を分析する茶園は、主に日本人男性によって記されたその語りの中に、「「われわれ」日本のおとこたちの「所有物」であったはずの日本のおんなたちが、GIの「所有物」になってしまった脅威」<sup>96</sup>が読み取れることを指摘している。高見の日記においても、日本人男性の所有物であるべき日本人女性が、GIの所有物になっていることへの「嫉妬」が描かれている。さらにそのような状況が、慰安施設の設立背景に見受けられるように、米軍に従う日本人男性自らの手によって作り出されたことに対する「にがにがしい」気持ちが読み取れる。

このように敗戦後数ヶ月の高見の日記には、戦後の政治政策の一環で日本人女性を「淫売」として利用する日本人男性の卑劣さや、敗戦国民としてそのような状況を受け入れざるを得ない日本人男性の無力感が記録されている。GIへの性的サービスに従事することを志願する日本人女性の自発的な意志や、GIによる日本人女性の強姦事件について、高見自身は客観的な描写を行うだけで自分の意見を述べることは稀である。このように高見の日記を読み直せば、去勢され従順でおとなしい小羊という表現は、日本人の中でも特に男性を示すものであることがわかる。オリエンタリズムの概念では、「「東洋（オリエンタル）」とは、「女」もしくは「女性的な男」でなければならない」<sup>97</sup>とされるが、高見が描く敗戦下の日本人男性は、去勢された小羊に擬えられることによって、まさに東洋の「女性的な男」であることを自白しているのである。

しかし、占領期だけではなく戦時中の状況を考えるならば、日本という国家が常に「女性的」な東洋であったわけではない。上野は、「女性的」とみなされる日本が、朝鮮や台湾などの植民地に対しては男性性を担っていたことを指摘する<sup>98</sup>。『敗戦日記』ではまた、日記の書き手である高見自身を含む日本人男性の無力さは、戦時中の日本兵の残虐性と比較されることにより、さらに強調されている。RAAの女性について述べられた、11月14日の日記をみてみよう。

世界に一体こういう例があるのだろうか。占領軍のために被占領地の人間が自らいちはやく婦女子を集めて淫売屋を作るといような例が——。[中略]日本人だけがなし得ることではないか。

日本軍は前線に淫売婦を必ず連れて行った。朝鮮の女は身体が強いと言って、朝鮮の淫売婦が多かった。ほとんどだまして連れ出したようである。日本の女もだまして南方へ連れて行った。[中略]戦争の名の下にかかる残虐が行われていた。

戦争は終わった。しかしやはり「愛国」の名の下に、婦女子を駆り立てて進駐兵御用の淫売婦にしたてている。無垢の処女をだまして戦線へ連れ出し、淫売を強いたその残虐が、今日、形を変えて特殊慰安云々となっている。(427)

ここでは、朝鮮半島出身の女性や南方に送られた日本人女性とともに、戦後慰安施設で働く日本人女性が並列して言及されている。「従軍慰安婦」とパンパンとの連続性については、茶園や平井和子による指摘があるが<sup>99</sup>、高見は、このような女性を利用した戦中の日本軍の「残虐」さが戦後にもなお形を変えて存在することを指摘している。

高見順の『敗戦日記』では、アメリカ軍の占領下で「残虐を好まない温和な民」(371)として小羊と化した日本人男性の「無気力、無力」(371)さと、戦中「権力」(372)を行使した「残虐」(372)さが対照されている。敗戦後、小羊と化した日本人は、第2章で論じたような暴徒と化す羊の群れとは正反対である。朝鮮半島・台湾を植民地としていた関東大震災下の社会状況では、羊は日本内地人男性の凶暴性を示し、反対に、戦後には、羊の比喻は去勢された日本人男性の無力さを示しているのである。

## 第6節 大江健三郎「人間の羊」——女性化された日本人男性

次に、占領期の文学における羊の表象の代表的なものとしてモラスキーや松枝が取り上げている、大江健三郎の「人間の羊」について分析する。『敗戦日記』と同様、「人間の羊」においても、羊は日本人男性を表すものである。しかし、ここで『敗戦日記』と異なる点は、「人間の羊」では占領の屈辱は外国兵の「所有物」となる日本人女性を通してではなく、外国兵の言葉と暴力によって羊とされ女性化された日本人男性の表象を通して語られる点である。

以下、本節での「人間の羊」からの引用は『大江健三郎全作品（第Ⅰ期）1』（新潮社、1994年）によるものとし、（ ）内に引用ページ数を示す。

「人間の羊」は、1958年2月、『新潮』に掲載された短篇小説である。雑誌掲載後、大江の最初の短篇小説集『死者の奢り』（1958）において、「奇妙な仕事」（1957）・「死者の奢り」（1957）・「他人の足」（1957）・「偽証の時」（1957）・「飼育」（1958）・「鳩」（1958）とともに収録された。

「人間の羊」のあらすじは次のようなものである。主人公の学生である「僕」は、フランス語を教えるアルバイトからの帰り道、外国兵<sup>100</sup>と日本人女性が座ったバスに乗り合わせる。この女性は酔った外国兵の膝に跨り口論をしていたが、「僕」に寄りかかりそれを「僕」が振り払ったことをきっかけとして、「僕」は外国兵にナイフで脅迫されズボンを脱がされしゃがみ込む。他の乗客達も同様の振舞いを強いられ、外国兵達は乗客の尻を叩きながら「羊撃ち、羊撃ち、パン パン」（145）と歌い、尻を露わに屈んだ乗客は「《羊たち》」（145）と表現される。

外国兵と日本人女性の降車後、バスの前部に座り辱めを免れた教員と他の乗客達は、この事件を警察に訴えるよう《羊たち》に勧める。しかし、《羊たち》にはそのような意志はなく、ただ沈黙を貫くばかりである。バスを降りて帰宅しようとした「僕」は、教員に交番に連れて行かれるが、警官はこの事件を真面目に取り扱おうとはせず二人を追い返す。家に帰ろうとする「僕」を教員は一晩中追いまわし、「兵隊にも、お前たちにも死ぬほど恥をかかせてやる」（156）と、怒りで震える声で次のように訴える。

ねえ、君、と彼〔教員〕は訴えかけるように切実な声でいった。誰か一人が、あの事件のために犠牲になる必要があるんだ。君は黙って忘れたいだろうけど、思い切って犠牲的な役割をはたしてくれ。犠牲の羊になってくれ。（153）

このように「人間の羊」は、その題名を含め、小説全体で羊の比喩が用いられている作品である。

上記のあらすじで確認したように、「人間の羊」では、小説前半部では外国兵と日本人乗客の対立が、後半部では《羊》となった乗客とならなかった乗客の対立が描かれている。先行研究では、主に後者に注目した論考が多く見受けられる。例えば高橋由貴は、米軍の

通訳を務める日本人男性と村人達の間の対立を描いた「不意の唾」(1958)など、占領期を題材とする大江の他の作品と合わせて「人間の羊」を考察する。高橋は、大江のこれらの作品は、日米関係を反映させたテキストというよりもむしろ、「日米関係を背後に据えた戦後空間において序列や対立を生み出す言葉の力学によって、個々の人間の間に再び暴力的な出来事が引き起こされる」<sup>101</sup>点を描いていると解釈する。モラスキーもまた、「人間の羊」では、日本社会内部の分断が占領を通して一層悪化し、「占領者と被占領者の支配関係が日本人同士の関係へと複製される様子」<sup>102</sup>が中心的に扱われていることを指摘する。

「人間の羊」について論じたこれらの先行研究が、作品に描かれる日本内部の構造に焦点を当てている背景には、「人間の羊」が収録された短篇集『死者の奢り』の「後記」に記された大江の発言があるだろう。大江は、1957(昭和32)年から1958年に発表された収録作品について、「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした」<sup>103</sup>と述べている。このような主題のもとに執筆された大江の初期短篇小説群は、「奇妙な仕事」や「死者の奢り」等、「アルバイト小説」<sup>104</sup>とも称されるものであるが、栗坪良樹が指摘するように生活に疲れたアルバイト学生を主人公に定めているものが多い<sup>105</sup>。これらの作品で扱われる「監禁されている状態」について、平野謙は、「すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな」<sup>106</sup>日本人学生が、「占領下日本の全人民のシンボル」<sup>107</sup>であると論じる。

無気力で没个性的な日本人学生の姿は、「人間の羊」では、占領下の日本を闊歩するアメリカ兵と同様に、「中産階級の正義感を代表する」<sup>108</sup>教師と対置される。その結果この作品では、占領者と被占領者の関係の描写から始まるにも拘らず、「その関係がいかに被占領者たち自身の世界に移し替えられているのか」<sup>109</sup>という問題がより深く追究される。多くの占領文学で扱われる被害者意識の問題や占領者・被占領者の次元からは離れ、「日本人の受動性や国の内外で興る社会的不正義に立ち向かうことへの拒絶」<sup>110</sup>に関心が払われていると、モラスキーは「人間の羊」を解釈する。

このように「人間の羊」をめぐる従来の解釈は、作品前半部では外国兵と日本人の関係が、後半部ではそれが移し替えられた教師と学生という日本人同士の関係が描かれているという前提で論じられてきた。その結果、外国兵と日本人乗客によって構成される小説前半部のバス内部の世界は、単に占領者と被占領者の構図によって捉えられ、日本人乗客の間の差異が看過されてきた傾向がある。羊の表象を通して占領期の日米間の支配関係をジ

エンダーの観点から考察する本章では、主に小説前半部の外国兵と日本人の描写に着目するが、日本人男性乗客の間に構築された支配関係にも着目してテキストを分析していく。

モラスキーやフレデリック・リクターは、「人間の羊」で日本人乗客の屈辱が描かれる際に、「小動物」(143)や「四足の獣」(144)、「動物の毛皮を剥ぐ」(144)といった動物のメタファーが多用される点を指摘している<sup>111</sup>。動物の中でも特に羊が強調される理由について、リクターは次のように述べている。

「羊」が暗示するものは、西洋人の読者には自明のことだが、侮辱された乗客の受動性であり、さらには、彼らが共通の自意識を有する集団をなすということである。<sup>112</sup>

上記のリクターの引用中注意すべき点は、「侮辱された乗客の受動性」と「共通の自意識を有する集団」という羊の暗示について述べる際に付された、「西洋人の読者には自明のことだが」という前置きである。換言するならば、「西洋人」でない読者にとっては、このような羊の象徴性の解釈は自明ではないということである。

本節では、リクターが論じるような羊についての「西洋」的な解釈が「人間の羊」においても適用されるのかどうか、あるいは、本論文で考察するような日本における羊の表象の歴史が反映され、そのような解釈が当てはまらないものとなっているのかどうかを、検討していきたい。特に、本章第2節から第4節で論じたように、日本ではらしゃめんやパンパンと称される女性が羊として表されてきた背景を考慮すれば、羊が暗示する「侮辱された乗客」や「共通の自意識を有する集団」が、外国兵・日本人女性・日本人男性の間どのようなナショナリティ、ジェンダーによって構成される集団であるのか、慎重な分析が必要である。

「人間の羊」における羊の表象を解釈するに先立ち、ここで、大江健三郎作品、特に短篇集『死者の奢り』に収録されている1957年から1958年に発表された短篇小説や、1960年代の作品にみられる羊について分析したい。

大江の「アルバイト小説」群や初期の作品では、「奇妙な仕事」の犬や「運搬」(1958)の仔牛の肉など、動物を取り扱う一見奇妙なアルバイトの様子が描かれ、動物を用いた比喩も多用される。「共同生活」(1959)では主人公は猿に「鶏姦」<sup>113</sup>される夢を見るが、獣に犯される獣姦についての言及は、「飼育」(1958)において最も明らかである。主人公の

「僕」の家では、村に墜落した飛行機に乗っていた黒人兵を「飼育」している。「牝山羊」<sup>114</sup>に喩えられる黒人兵の裸体に対して、「兎口」という名の少年から牝山羊が差し与えられ、黒人兵と牝山羊の二者の間で獣姦が試みられる。

大江健三郎の初期作品群では、このように動物が数多く登場し、人間の身体が動物の比喩によって描かれることが多いが、その中でも羊の比喩の用法についてみてみよう。上に挙げた「飼育」では、「早産した羊の仔のように、ねとねと指にからむ袋につつまれている」<sup>115</sup>という表現があるほか、戦争が身近に感じられない状況が「遠い国で、羊の群や、刈りこまれた芝生を押し流す洪水のように、それは決して僕らの村へは届いてこない」<sup>116</sup>と言い表され、現実の対極に位置する世界が羊の群れによって表現されている。「共同生活」では、猿に見つめられる生活の中で、部屋に飾られた「銀色の小さな羊のレリーフ」<sup>117</sup>が主人公の心の慰めとなっている。また主人公が勤める会社には、オーストラリアで羊毛を買い付ける、羊毛業者の夫をもつ事務員の女性が登場する。『個人的な体験』（1964）では、ゲームセンターのゲームで弱い力しか発揮できない主人公が「哀れな羊」<sup>118</sup>と称され、「猛獣」<sup>119</sup>に擬えられた周りの集団から襲撃を受ける。四国の山奥の村が舞台となる『万延元年のフットボール』（1967）では、その小さな共同体の中の犠牲者が羊に擬えられる。例えばそれは、「谷間のすべての人間の災厄を一身にひきうける贖罪羊」<sup>120</sup>として、謎の疾患により旺盛な食欲で肥り続ける「ジン」という女性や、在日朝鮮人の部落を襲撃し報復を受けて殺害され、「贖罪羊」<sup>121</sup>と呼ばれた「S 兄さん」のことを示す。あるいはまた、羊は共同体から排除されるべき者を表すメタファーともなる。村民で構成されるフットボールチームから除外される人物は、共同体の中で異質な「黒い羊」<sup>122</sup>と言い表される。

大江健三郎の作品に描かれる羊について以上の例をみれば、群れとしての羊が現実社会とは異なる世界に存在するものである一方、「哀れ」な弱者であり、「贖罪羊」や「黒い羊」として共同体内部で犠牲となり排除される者が羊に擬えられている。本節で分析の対象とする 1958 年に発表された「人間の羊」においても、羊は同様の意味を含んで表象されているのだろうか。日本の文化的背景においては、羊はらしゃめんという語に見受けられたように、弱者・犠牲者とされた日本人女性を示唆していた。「人間の羊」では羊はどのようなジェンダーを表すものであるのか、考察していく。

「人間の羊」における男女間の構造に着目するならば、らしゃめんとして弱者である女性のイメージを付与されてきた羊は、高見順の『敗戦日記』と同様、この作品では日本人



女性ではなく日本人男性を表するものに变化していることがわかる。これとは反対に、「人間の羊」に描かれた女性は、無力な犠牲者としては描かれていない。

ここで、外国兵・日本人女性・日本人男性によって構成されるバスの中の世界における、日本人女性の存在について検討しよう。男性によって多くが占められるバスの中には、二人の日本人女性がいる。一人は、バスの後部で外国兵の膝に座り騒ぐ女性であり、もう一人はバスの車掌である。バスの乗客に席を案内し切符を受け取る車掌は、「たくましい首すじに兎のセクスのような、桃色の優しく女らしい吹出物」(141)をもった「少女」(146)である。彼女は、外国兵が日本人の乗客や運転手にズボンを脱ぐことを強要して《羊》にする様を見て、バスが止まると急いでドアを開け悲鳴を上げながら逃げていく。

車掌がバスの中の暴行に恐れ慄き逃げ去るのに対し、外国兵とともにいる日本人女性は、外国兵と対等に言葉を交わすことのできる女性として描かれている。外国兵がうたう「羊撃ち、羊撃ち、パン パン」(145)という歌のフレーズには、「パンパン」という銃撃の擬音語の他に、前述したように、アメリカ兵に性的サービスを行う日本人女性を示す「パンパン」の意味も含まれるだろう。ここからは、作品内で決して明示されることはないが、彼女がパンパンであることが推測される。

パンパンの女性は、羊のように従順で無力な存在ではない。この女性は、モラスキーが指摘するように、外国兵に抵抗する唯一の声を持つ存在として登場する<sup>123</sup>。外国兵が彼女の耳に熱心にささやき、彼女がそれを拒んで肩や頭をふりたてるのを見て笑い喚く外国兵に向って、彼女は次のように言い放つ。

あたいはさ、東洋人だからね、なによ、あんた。しつこいわね、と女はそのぶよぶよする軀を僕におしつけて日本語で叫んだ。甘くみんなよ。[中略]

こんちくしょう、人まえであたいに何をするのさ、と女は黙っている外国兵たちに苛立って叫び、首をふりたてた。

あたいの顔になにをすんのさ、穢いよ。(142)

この場面から判断できることは、この女性は外国兵と「口争い」(141)をしたり、彼らに「罵りの言葉」(141)を浴びせるように、外国語を用いたコミュニケーションが可能な日本人女性ということである。また、怒りの感情を露わにする際には、日本語も交えなが

ら、外国兵を黙らせる気迫を備えている。彼女は、男性に対して怒りや意見を発する声と自意識を備えた女性として描かれている。

この女性の言語能力は、バスの中で「唾」(148)のように黙り込む《羊》となった日本人男性とは正反対である。主人公の学生は、家庭教師の仕事からの帰り道で「フランス語の初等文典」(141)を携えており、外国語の教養を身に付けた学生であると推定できる。しかし、バスの中では、外国兵の発する言葉の単語一つ理解することができない。外国兵は彼に対して、「ゆっくり音節をくぎって言葉をくりかえした」(143)が、彼は「耳へ内側から血がたぎってくる音」(143)しか聞き取ることができない。外国兵の発音を理解できず、日本語も含めて一言も発することができない「僕」は、外国兵に対して屈辱を感じるとともに、外国兵と外国語で会話を交わすことのできる日本人女性に対しても劣等感を味わったといえる。モラスキーは、このような日本人男性の言語的不能を、《羊》の表象を通した去勢のメタファーとして性的不能と結び付けている<sup>124</sup>。

日本人男性が外国兵から《羊》として暴力的な扱いを受けるのに対し、この女性は、バスの中で唯一外国兵から「人間的な」扱いを受ける存在である。寄りかかってきた彼女に対して「僕」がその腕を振り払い、バスが揺れ彼女が倒れた際には、外国兵の「乱暴な扱いを受けた「婦人」を助けようという騎士道的衝動」<sup>125</sup>によって彼女は助け起こされる。彼女は《羊》にならなかった日本人として、外国兵とともに《羊》になった日本人男性を揶揄さえする。彼女は、「破れかぶれのように声をはりあげて外国兵たちの歌に合唱しはじめ」(145)、下半身をさらして屈み込む《羊》達を「生きいきして猥らな表情」(143)で見下ろしている。《羊》達に対する辱めが行われるこの場面では、辱めを行う者と辱めを受ける者、見るものと見られるものという構図において、アメリカ人対日本人ではなく、アメリカ人男性・日本人女性対日本人男性という対立が見受けられるのである。

本章第4節で考察したように、らしゃめんの表象を受け継ぎ、占領期にはパンパンが羊とされる言説が見受けられたが、「人間の羊」に登場するパンパンの女性はこのように羊として描かれてはいない。鈴木は、「被占領体験は女性表象をとおして物語化される」<sup>126</sup>ことを指摘したが、「人間の羊」では、女性の身体を通してではなく、《羊》になることで女性化された男性の身体を通して占領期の屈辱が語られているのである。

パンパンの女性に関する研究では、彼女達の全てを救済の対象とする視点が多く見受けられた<sup>127</sup>。その中で、占領期の女性表象やパンパンに関する近年の研究では、パンパンを

犠牲者、あるいは救済されるべき存在とみなす一義的な図式から脱却する解釈が試みられている。例えば茶園敏美は、日本人男性によって執筆されたパンパンについての調査資料を読み直し、占領期のパンパンと GI の異性関係について、支配する者・される者という力関係に捉われない、多層的で親密な関係に着目している<sup>128</sup>。茶園は、パンパンの女性全てを救済の対象としてみなすのではなく、彼女達のセクシュアリティの自己決定権を尊重する<sup>129</sup>。また、先に挙げた金も、有吉の「亀遊の死」の考察を通して、アメリカへの従属という構図におさまらない、もしくはそのような枠組みからはみ出すために排除されたと考えられる女性の描写に着目し、女性表象が一概に日本国家のメタファーとして被占領の喪失感を描いているのではない点を指摘している<sup>130</sup>。「人間の羊」に登場するパンパンの女性もまた、そのような枠組みにはおさまらず、自らの言葉を発する女性の一人として、アメリカと日本、男性と女性の構造を攪乱する存在であるといえる。

このように、「人間の羊」では、女性ではなく男性が羊に擬えられている点に留意して、男性対女性の間ではなく、男性同士の間でどのような支配関係が構築されているのかを改めて分析したい。

第一に、外国兵と日本人男性の乗客についてみてみよう。この二者については、羊以外にも、動物のメタファーを用いて身体的な差異が描写されることによって、外国兵の優越性と日本人男性の無力さが強調されている。例えば、外国兵の身体については、「太く脂肪の赤い頸」(141)、「逞しい首」(143)、「力強い腕」(144)といった体の部位の表現や、「背中までひげもじゃ」(142)、「金色の荒い毛が密生した腕」(143)という体毛への言及のように、その屈強な身体の男性性が強調されている。このような身体に対面した「僕」については、「外国兵の逞しい腕が僕の肩をしっかりと掴むと動物の毛皮を剥ぐように僕の外套をむしりとった」(144)と記されるように、あたかもひ弱な動物のようになすがままにされてしまう。「よく肥えて固い尻」(141)をもつ外国兵に対し、《羊》にされてさらけ出された「僕」の臀部は、「ひくひく動くだけ」(144)で、「僕」は無力にも「自分のセクスが寒さにかじかむ」(144)のを見ている。

このように、剛健な身体の外国兵と、毛皮を剥がれた動物のように脆弱な日本人男性との対立や、《羊》達が尻を晒して屈んだ姿勢や「自分のセクスが寒さにかじかむ」(144)という表現について、モラスキーは、この辱めは去勢のメタファーとして読むことができると解釈する<sup>131</sup>。外国兵による日本人男性の《羊》化は、モラスキーが解釈するような去

勢の暗示であるとともに、強姦のメタファーとも解釈できるのではないだろうか。

占領期には、戦勝国の男性による日本人女性の強姦が懸念されていた点については、高見の日記を通して言及してきたが、強姦された記憶を語ることができない女性達が多く存在することを茶園は指摘している<sup>132</sup>。このように、性暴力を語ることができないという状況が、「人間の羊」においても示唆されている。《羊》にされた乗客に対して教員が呼びかける、次の言葉をみてみよう。

警官に事情を話すべきですよ、と教員が僕らに呼びかけるように、ひときわ高い声でいった。あの兵隊のいるキャンプはすぐにわかるでしょう。警察が動かなかったら、被害者が集って世論に働きかけることができると思うんです。きっと今までも、被害者が黙って屈服したから表面化しなかっただけだと僕は思う。そういう例はほかにもあります。(147)

ここで教員が発言している、「被害者が黙って屈服したから表面化しなかった」「そういう例」には、米兵による強姦を警察や世論に語ることができなかった占領期の性暴力も含まれるだろう。「はっきり暴力ではずかしめられたんだ」(152)という教員の言葉からも、外国兵の行為が強姦に値するようなものであったという認識がうかがえる。また、《羊》にされた主人公の「僕」自身も、その経験を強姦として認識していることは、「軀の底ふかく、屈辱が鉛のように重くかたまって、僕に身動きすることさえ億劫にしていた」(148)という表現や、「僕のうけた屈辱」(153)という言葉からうかがえる。

以上のように、「人間の羊」に描かれた外国兵と日本人男性の分析からは、外国兵による日本人男性の強姦というメタファーを読み取ることが可能である。

先行研究が指摘するように、「人間の羊」では日本人内部にも対立が生じているが、注目すべきは、そのような日本人男性内の対立関係においてもまた、上記のような強姦の行為が複製されていく点である。このことを示すために、《羊》となった者とならなかった者という二つの集団によって構成される、日本人男性間の対立について分析しよう。《羊》にならなかった者達は、被害者としての《羊》に同情をみせ救済を試みているかのようであるが、実際にはどのような態度がとられていたのだろうか。

「人間の羊」には、外国兵によるナイフという凶器を用いた暴力の他に、「視姦」とも呼

ぶことができるような視線による凌辱が存在する。ときにはそれは、外国兵からの辱しめよりもさらなる屈辱感を《羊》達に与えるものとなっている。その視線は、《羊》にならなかった乗客から、《羊》になった乗客に向けられる。バスの前部に座る乗客達は、《羊》達の様子を、「くすくす笑」(144) いながら、「上気した頬」(146) の興奮した面持ちで眺めている。彼らが《羊》達を見つめるその視線は、「熱をおびた眼」(146)、「熱情的な眼」(147) と表現される。他人の性行為を覗くような好奇に満ちたこのような視線は、バスの乗客だけではなく、他の日本人男性によっても共有されている。停止したバスの側を通る自転車の男性達は、「霧にとざされた窓ガラスを覗きこもうとしながら」(145) 通り過ぎて行くのである。

《羊》達は、外国兵による辱しめよりもむしろ、日本人男性からの視線によって「うちのめされ押しひしがれ」(144) ていることが、バスの前部に座る乗客について述べた「僕」の次のような語りからうかがえる。

バスの前半分に活気が戻ってきた。彼ら、前半分の乗客たちは小声でささやきあい、僕ら被害者を見つめた。僕はとくに教員が熱をおびた眼で僕らを見つめ、唇を震わせているのに気がついてた。僕は座席に身をうずめ、彼らの眼からのがれるためにうなだれて眼をつむった。僕の身の底で、屈辱が石のようにかたまり、ぶつぶつ毒の芽をあたりかまわずふきだし始めていた。(146)

《羊》にならなかった者達の「熱をおびた」視線は、「被害者」の「僕」にとっては眼をつむらなければならないほど堪え難いものであり、体の奥底から屈辱感を湧かせている。

バスからの降車後、「僕」が教員に連れて行かれた交番の警官達もまた、事件の話を聞き好奇心に満ちて彼を見つめ、「僕」を辱しめる存在となっている。教員がバスの出来事について警官に報告するとき、「僕」の心情は以下のように述べられる。

教員はバスの中での事件を詳細に話した。僕はそれをうなだれて聞いていた。僕は警官たちの好奇心にみちた眼のなかで、僕が再びズボンと下ばきをずりさげられ、鳥のそのように毛穴のぶつぶつふき出た裸の尻をささげ屈みこまされるのを感じた。

(152)

警官達の視線の中で、「僕」はうなだれ、再び下半身を露わにされたように感じている。《羊》となった「僕」の羞恥心や屈辱感、外国兵によってだけでなく、《羊》にならなかった日本人男性によってさらにその度合いを増幅させられているのである。このように「僕」は、外国兵からの身体的な恥辱の他に、日本人からの「視姦」にも晒されているのである。

日本人男性からの辱しめは、「視姦」に留まるものではなく、教員による「僕」への身体的な暴行としてより明らかな形で繰り返される。「僕」を強引に掴まえる場面は、あたかも強姦の描写のように解釈できるだろう。次の引用をみてみよう。

街燈が淡く霧を光らせている路地の曲りかどで、僕は背後から逞しい腕に肩を掴まえられたのだ。僕を抱きこむように軀をよせ教員は荒い息を吐いていた。そして僕も白く霧にとけこむ息を開いた口と鼻孔から吐き出した。

今夜ずっと、この男につきまとわれて、冷たい町を歩きつづけねばならないだろう、と僕は疲れきって考えた。軀を重く無力感がみだし、その底から苛だたいしい哀しみがひろがってきた。僕は最後の力をふりしぼって、教員の腕をはらいおとした。しかし教員はがっしりして大きい軀を僕の前にそびえさせて、僕の逃走の意志をうけつけない。(156)

外国兵と日本人男性の身体的な差異と同様に、教員と「僕」もまた、教員の「逞しい腕」、「がっしりして大きい軀」という強靱な身体描写によって対置されている。そして、外国兵によって《羊》にされたときと同じように、教員に掴まえられた「僕」は、体の奥底から「無力感」と「哀しみ」を味わっている。《羊》とされた日本人男性、その中でも特に主人公の「僕」は、外国兵だけでなく、教員や警官といった《羊》にならなかった日本人男性達からも、精神的・身体的な強姦を被っているのである。

このように、「人間の羊」では、外国兵・日本人女性・日本人男性によって構成されるバスという閉ざされた空間の中で、日本人女性ではなく日本人男性が羊として表象されている。らしゃめんとして羊の表象が担ってきた女性性が、ここでは日本人男性に当てはめられている。ズボンや下着を脱がされ屈み込む、《羊》になるという行為は、外国兵による日本

人男性の強姦のメタファーとして読み取ることができるが、このような支配構造は、外国兵と日本人男性だけではなく、《羊》になった乗客とそうでない乗客という日本人男性の間でも繰り返されている。《羊》となった日本人男性は、男性性を剥奪され女性化され、被支配の対象として幾重にも強姦を被っていると解釈できる。

## 第7節 終わりに

以上本章では、らしゃめんという語の意味の変遷と、戦後占領期を描いた文学作品にみられる羊の表象を通して、日本における羊の表象が孕むジェンダーの属性を考察した。日本において羊の表象は、外国人男性を対象に性的サービスを行った日本人女性を示すらしゃめんの語に表されるように、女性のジェンダーを付与されてきた。幕末から明治・大正・昭和を経て、らしゃめんと称される女性は、唐人お吉から女学生、パンパンへと変遷したが、西洋人男性と日本人女性という異人種間の性交渉を示唆するものであり続けた。羊のイメージは次第に喚起されなくなったが、そこには西洋人男性と羊の異種間の性交渉というらしゃめんの語源が残されているようである。

このように女性のジェンダーを与えられた羊の表象を、ナショナリティの視点から捉えるならば、西洋との接触の中で弱者として置かれた国家の位置と、その中で西洋人男性に身を売ることを余儀なくされた女性の立場が反映されているといえる。唐人お吉をはじめとするらしゃめんの物語は、「時代と、歴史と、偏見と、男性社会と、階級社会とに押しつぶされた女性の悲劇」<sup>133</sup>として文学作品や映画に投影され、社会の犠牲者としてのらしゃめんのイメージはそれらの作品を通じてさらに広まり、1990年代になってもなお大衆文化の中で繰り返されている<sup>134</sup>という。

その一方で、高見順の『敗戦日記』や大江健三郎の「人間の羊」のような占領期を描いた日本人男性作家の文学作品では、日本人男性が羊に擬えられている。らしゃめんのように、外国人男性との性的・経済的關係と日本社会内部という二重の意味で被支配者として描かれてきた羊は、ここでは女性ではなく男性を表象している。対照的に、戦後のらしゃめん女性とも考えられるパンパンの女性は、「人間の羊」では支配者である外国兵と立場を同じくし、外国兵とともに日本人男性を見つめることで彼らを《羊》にしている。羊の比喩が用いられることにより、これまで羊に付与されてきた女性性が、占領下の日本人男性

に当てはめられているのである。「人間の羊」について、モラスキーは、「被占領男性主体を弱体化させる占領者の力」<sup>135</sup>が暴き出されていると述べる。このような男性性の剥奪と女性化は、羊の表象を用いることによって可視化されている。さらに「人間の羊」では、外国兵から日本人男性への辱しめの行為が、《羊》にならなかった乗客と《羊》になった乗客という、日本人男性同士の間で繰り返される。らしゃめんの歴史とこれらの占領期を舞台とした作品を通していえることは、ジェンダーやナショナリティ、階級の構造において、羊に擬えられた者は、被支配下に置かれ女性化された存在として描かれているということである。

本章で論じてきたように、高見や大江の作品では、羊の表象が戦後日本の敗戦色を色濃く映し出し、アメリカと日本の占領の構図を描き出していた。しかし、戦後占領期には、戦前の植民地政策の影響が完全に払拭されたわけではない。戦後の日本には、アメリカ兵だけではなく、朝鮮半島や「満洲」から引揚げて来た多くの人々が存在した。そのような引揚げ者の一人に、作家安部公房が含まれる。「満洲」で少年期の大部分を過ごし敗戦を迎えた安部は、その作品の中で頻繁に羊のモチーフを用いている。次章で中心的に取り上げる「詩人の生涯」もまた、本章で扱った作品と同様占領下に発表された小説であるが、その羊の表象には安部の植民地体験が関与している。第4章では、安部の1960～70年代のテレビドラマや戯曲も分析の対象として、安部公房作品における羊の表象を考察する。

## 注

---

<sup>1</sup> 西洋と東洋に付属するとされる性質については、『オリエンタリズム』第1章「オリエンタリズムの領域」を参照した（エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1987年、31–113頁）。

<sup>2</sup> 同上、35、37頁。このような支配関係に置かれた西洋に対する東洋は、あらかじめ女性としてジェンダー化されたものであり、オリエンタリズムとジェンダーについて論じる上野千鶴子によれば、それは「西洋：東洋」＝「男性：女性」＝「文化：自然」という図式によって表される（上野千鶴子「オリエンタリズムとジェンダー」加納実紀代編『母性ファシズム——母なる自然の誘惑』学陽書房、1995年、110、117頁）。しかし、このような単純な二項対立の構図については検討が要される。



- 
- <sup>3</sup> 羊の性質は臆病、温和であり、畜産経営に適しているといわれてきた（谷泰『牧夫の誕生——羊山羊の家畜化の開始とその展開』岩波書店、2010年、170頁、岡本正行『緬羊と羊毛』有誠堂、1936年、58頁）。
- <sup>4</sup> 木村・小出編、前掲書、1325–1326頁、日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』（小学館、2002年）773頁。
- <sup>5</sup> 同上、773頁、横浜市役所編『横浜市史稿 風俗編』（横浜市役所、1932年）334頁。
- <sup>6</sup> 山根『羊毛の語る日本史』前掲書、20頁。
- <sup>7</sup> 風来山人『風来六々部集』（国民図書株式会社編『近代日本文学大系 第二十三巻』国民図書株式会社、1926年）733頁。
- <sup>8</sup> 山根『羊毛の語る日本史』前掲書、20頁。
- <sup>9</sup> 喜田川守貞『守貞漫稿 中巻』（朝倉治彦編、東京堂出版、1973年）95頁。
- <sup>10</sup> 人間と他の生物種との性的行為を示す獣姦（bestiality, zoophilia）の対象となる動物としては、法廷議事録や精神分析医の統計に基づくと第一に牛が挙げられるが、その他にも馬、山羊、羊、豚、犬などがいるという（フロリアン・ヴェルナー『牛の文化史』（臼井隆一郎訳、東洋書林、2011年）53頁、Andrea M. Beetz and Anthony L. Podberscek, eds., *Bestiality and Zoophilia: Sexual Relations with Animals* (West Lafayette: Purdue UP, 2005) 1–19)。
- <sup>11</sup> 菊苑老人『美那登能波奈横浜奇談』（錦港堂、1861–1865年頃）21頁。
- <sup>12</sup> 横浜市役所編、前掲書、333頁。
- <sup>13</sup> 同上、334頁。
- <sup>14</sup> 同上、335–337頁。
- <sup>15</sup> 竹下修子『国際結婚の社会学』（学文社、2000年）13、20頁。
- <sup>16</sup> 同上、12–18頁。
- <sup>17</sup> 同上、12–13頁。
- <sup>18</sup> 横浜市役所編、前掲書、344頁。
- <sup>19</sup> 荒木誠三『らしゃめん』（大陸書房、1982年）32頁。
- <sup>20</sup> この中には被差別部落出身の女性が多く含まれていたという事実についても、ここで言及しておきたい（横浜市役所編、前掲書、375頁）。

- 
- <sup>21</sup> 中里機庵『幕末開港綿羊娘情史』（赤炉閣、1931年）183頁。
- <sup>22</sup> 同上、171頁。
- <sup>23</sup> 竹下、前掲書、17頁、横浜市役所編、前掲書、334頁。
- <sup>24</sup> 齊藤愛「被害者か、英雄か——「唐人お吉」の旅、日本、ヨーロッパ、そして日本へ——」（『文学研究論集』第31号、筑波大学比較・理論文学会、2013年2月）17頁。
- <sup>25</sup> 同上、18頁。
- <sup>26</sup> 同上、17頁、佐相勉『溝口健二・全作品解説8 『唐人お吉』から『満蒙建国の黎明』へ』（近代文芸社、2010年）6頁、山本有三『女人哀詞 唐人お吉物語』（『山本有三全集第二巻』岩波書店、1940年）661頁。村松は、唐人お吉に関して『唐人お吉を語る』（1929）、『実話唐人お吉』（1930）を残しているが、これらは後に、それぞれ村越章二郎（1900—没年不詳）監督『唐人お吉』（1930）、衣笠貞之助（1896—1982）監督『唐人お吉』（1931）として映画化された。
- <sup>27</sup> 十一谷は『黒船』に連載されていた村松の記事を読み、これをもとに小説を執筆した（酒井敏「「お吉」探索——十一谷義三郎『唐人お吉』など・諸書の陰影（4）」（『中京大学図書館学紀要』第14号、中京大学、1993年3月）5頁）。
- <sup>28</sup> 十一谷の経歴については、十一谷義三郎・田畑修一郎・北條民雄・中島敦『現代日本文学全集 79 十一谷義三郎・田畑修一郎・北條民雄・中島敦集』（筑摩書房、1956年）412—413頁の付属年譜を参照した。
- <sup>29</sup> 佐相、前掲書、61頁。
- <sup>30</sup> 吉田常吉『唐人お吉——幕末外交秘史』（中央公論社、1966年）4頁。
- <sup>31</sup> 同上、4頁。
- <sup>32</sup> 酒井、前掲書、11—12頁。
- <sup>33</sup> 畑本秋一「蚊軍と争闘しつゝ——いまはもう既に眠れる唐人お吉を考へる」（1929）（牧野守監修『戦前映像理論雑誌集成 第五巻 劇場街（2）』ゆまに書房、1989年）225—226頁。
- <sup>34</sup> 十一谷義三郎『唐人お吉』（十一谷他『現代日本文学全集 79 十一谷義三郎・田畑修一郎・北條民雄・中島敦集』前掲書）84頁。
- <sup>35</sup> 十一谷義三郎『時の敗者 唐人お吉』（新潮社、1930年）94頁。

- 
- <sup>36</sup> 十一谷『唐人お吉』前掲書、121 頁。
- <sup>37</sup> 十一谷義三郎『時の敗者 唐人お吉（続編）』（新潮社、1930 年）130 頁。
- <sup>38</sup> 同上、134 頁。
- <sup>39</sup> 中里、前掲書、7-19 頁。
- <sup>40</sup> 齋藤、前掲書、23-24 頁。
- <sup>41</sup> 「亀遊の死」では、らしゃめんの語源について、明確に羊を指し示しているわけではないが次のような言及がある。「らしゃめんというのは獣の名で、船乗りなんかが航海中に気を立つのを鎮めるために犯すことがあるものなんだそうです。そんなことで異人に犯されるものとして、洋妾と書いてらしゃめんというのだとは、私は吉原にいた頃に客から聞かされたことがあります」（有吉佐和子「亀遊の死」『別冊文芸春秋』第 76 巻、文芸春秋社、1961 年 7 月、145 頁）。
- <sup>42</sup> 有吉佐和子『ふるあめりかに袖はぬらさじ』（中央公論社、1970 年）41 頁。
- <sup>43</sup> 村松春水『唐人お吉を語る』（十一谷義三郎『唐人お吉』万里閣書房、1929 年）232 頁。
- <sup>44</sup> 真山青果『唐人お吉と攘夷群』（『真山青果全集 第六巻』講談社、1976 年）159 頁。
- <sup>45</sup> 真山青果『唐人お吉』（『真山青果全集 第六巻』前掲書）134-135 頁。
- <sup>46</sup> 十一谷『時の敗者 唐人お吉（続編）』前掲書、184 頁。
- <sup>47</sup> 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第十一巻』（小学館、2001 年）87 頁、あらかわ、前掲書、1022 頁、茶園敏美『パンパンとは誰なのか キャッチという占領期の性暴力と GI との親密性』（インパクト出版会、2014 年）10-11 頁。なお、本章第 5 節で後述する高見順は、エッセー「反時代的考察」（1953）において、終戦後初めて小説にパンパンを登場させたのは自分であると主張しており（「反時代的考察」『高見順全集 第十八巻』勁草書房、1974 年、18 頁）、この点についてはモラスキーによる指摘がある（モラスキー、前掲書、381 頁）。
- <sup>48</sup> 前田、前掲書、934 頁、竹下、前掲書、90 頁。
- <sup>49</sup> 茶園、前掲書、11 頁。
- <sup>50</sup> あらかわ、前掲書、234 頁。
- <sup>51</sup> 同上、965 頁。蝶々が飛び移るように相手を変えた様子が「バタフライ」の語源となっている（同上、965 頁）。

- 
- 52 以下、パンパンが誕生した歴史的背景については、茶園、前掲書、8-49 頁を参照した。
- 53 中里、前掲書、100-101 頁。
- 54 茶園、前掲書、35 頁。
- 55 同上、35 頁。
- 56 同上、16 頁。
- 57 同上、16 頁。
- 58 同上、33 頁、モラスキー、前掲書、204-205 頁。
- 59 ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて（上）』（三浦陽一・高杉忠明訳、岩波書店、2001 年）153 頁。
- 60 原田弘『MP のジープから見た占領下の東京』（草思社、1994 年）61 頁。
- 61 竹下、前掲書、91 頁。
- 62 ダワー、前掲書、153 頁。
- 63 茶園、前掲書、16-17 頁。
- 64 吉見周子『売娼の社会史』（雄山閣出版、1992 年）185 頁、モラスキー、前掲書、209 頁、齊藤、前掲書、19 頁。
- 65 市川房枝編『日本婦人問題資料集成 第一巻 人権』（ドメス出版、1978 年）536 頁。
- 66 肥田琢司・肥田琢司遺稿刊行会編『政界追想——日本終戦秘史とわが生涯』（肥田琢司遺稿刊行会、1964 年）191 頁。
- 67 鈴木直子「一九五〇年代をジェンダー・メタファーで読みかえる」（川村湊編『「戦後」 という制度——戦後社会の「起源」を求めて』インパクト出版会、2002 年）219 頁。
- 68 茶園、前掲書、46 頁。
- 69 柴田芳男『映画館ものがたり 第 2 部』（精文館、1958 年）229 頁。
- 70 佐藤忠男「対米感覚の戦後史——らしゃめん映画考——」（『思想の科学』第 5 次、第 80 号、思想の科学社、1968 年 10 月）93 頁。
- 71 金志映「有吉佐和子の「アメリカ」——『亀遊の死』（戯曲『ふるあめりかに袖は濡らさじ』）を中心に——」（『比較文学』第 51 巻、日本比較文学会、2009 年 3 月）8 頁。
- 72 竹下修子「日本人女性と外国人男性の関係の歴史——らしゃめんとオンリーの比較から」（『歴史民俗学』第 11 巻、批評社、1998 年 7 月）194-195 頁。

- 
- 73 岩佐純『兵庫・風雪二十年』（兵庫新聞社、1996年）41頁。
- 74 モラスキー、前掲書、207頁、吉見、前掲書、199頁。
- 75 モラスキー、前掲書、240頁。
- 76 同上、249–250頁。
- 77 鈴木、前掲書、220頁。
- 78 モラスキー、前掲書、249–250頁。
- 79 上野、前掲書、115頁。
- 80 同上、115頁。
- 81 モラスキー、前掲書、303頁。
- 82 同上、303頁。
- 83 松枝、前掲書、55頁。
- 84 川上勉『高見順 昭和の時代の精神』（萌書房、2011年）9頁。
- 85 木村信一「解説」（高見順『敗戦日記』中央公論新社、2005年）463–465頁。
- 86 本論文では、高見の日記の全容ではなく、特に戦争直後の世相を映し出すものとして『敗戦日記』に収録された記述を分析の対象とすることから、文春文庫版『敗戦日記＜新装版＞』（1991）を典拠とする中公文庫版『敗戦日記』（2005）から引用を行うものとする。なお、考察にあたっては、適宜『高見順日記』第五巻と第六巻（勁草書房、1965年）を参照した。
- 87 モラスキー、前掲書、300頁。
- 88 日本に滞在した米兵を対象に販売された英文雑誌『ライフ』は、当時の日本人にとっては、「それを読むより持ち歩くことがファッション」（原田、前掲書、61頁）となっていた。
- 89 高見順「ヒツジの共食ひ」（『高見順全集 第十九巻』勁草書房、1974年）710頁。
- 90 高見は、戦前に陸軍報道班員としてインドネシアや中国を訪れた際、羊肉料理を食し「共食ひの感」（同上、710頁）が生じてきたとも述べている。
- 91 坂本満津夫『評伝・高見順』（鳥影社、2011年）75、87頁。
- 92 高見順『深淵』（『高見順全集 第三巻』勁草書房、1974年）322頁。
- 93 江馬『一作家の歩み』前掲書、196、238頁。
- 94 坂本、前掲書、87頁。

- 
- 95 高見『敗戦日記』前掲書、129–131、379 頁。
- 96 茶園、前掲書、63 頁。
- 97 上野、前掲書、116–117 頁。
- 98 同上、130 頁。
- 99 茶園、前掲書、238 頁、平井和子『日本占領とジェンダー 米軍・売買春と日本女性たち』（有志舎、2014 年）1–3 頁。
- 100 この外国兵がアメリカ兵であることは作品中では明示されないが、その解釈が自明とされてきた点については大島丈志による指摘がある（大島丈志「人間の羊」論——単行本「後記」から新たな読みの可能性へ——」（『近代文学研究』第 21 号、日本文学協会近代部会、2004 年 3 月、45 頁）。
- 101 高橋由貴「人間の羊」における沈黙を囲む饒舌——大江健三郎と遅れてきた戦争（下）——」（『日本文芸論叢』第 20 巻、東北大学文学部国文学研究室、2011 年 3 月）53 頁。
- 102 モラスキー、前掲書、300 頁。
- 103 大江健三郎「後記」（『死者の奢り』文芸春秋新社、1958 年）302 頁。
- 104 高橋由貴「大江健三郎のアルバイト小説」（『日本文芸論叢』第 19 巻、東北大学文学部国文学研究室、2010 年 3 月）42 頁。
- 105 栗坪良樹「大江健三郎の＜戦争・戦後＞序説 「人間の羊」を手掛りにして」（『評言と構想』第 8 巻、評言と構想社、1970 年 9 月）12 頁。
- 106 大江健三郎「奇妙な仕事」（『大江健三郎全作品（第Ⅰ期）1』新潮社、1994 年）8 頁。
- 107 平野謙「解説」（『大江健三郎集 新潮日本文学 64』新潮社、1973 年）530 頁。
- 108 フレデリック・リクター「恥の環——『人間の羊』をめぐる」（武田勝彦他編『大江健三郎文学 海外の評価』創林社、1987 年）249 頁。
- 109 モラスキー、前掲書、309 頁。
- 110 同上、315 頁。
- 111 同上、307–308 頁、リクター、前掲書、248 頁。
- 112 リクター、前掲書、250 頁。
- 113 大江健三郎「共同生活」（『大江健三郎全作品（第Ⅰ期）1』前掲書）326 頁。
- 114 大江健三郎「飼育」（『大江健三郎全作品（第Ⅰ期）1』前掲書）128 頁。

- 
- 115 同上、133–134 頁。
- 116 同上、137 頁。
- 117 大江「共同生活」前掲書、322 頁。
- 118 大江健三郎『個人的な体験』（『大江健三郎全作品（第Ⅰ期）6』新潮社、1994 年）216 頁。
- 119 同上、216 頁。
- 120 大江健三郎『万延元年のフットボール』（『大江健三郎全作品（第Ⅱ期）1』新潮社、1994 年）57 頁。
- 121 同上、80 頁。
- 122 同上、138 頁。
- 123 モラスキー、前掲書、300 頁。
- 124 同上、300 頁。
- 125 リクター、前掲書、248 頁。
- 126 鈴木、前掲書、219 頁。
- 127 茶園、前掲書、278–279 頁。
- 128 同上、22–23 頁。
- 129 同上、278–279 頁。
- 130 金、前掲書、9 頁。
- 131 モラスキー、前掲書、307 頁。
- 132 茶園、前掲書、138 頁。
- 133 齋藤、前掲書、17 頁。
- 134 同上、17 頁。
- 135 モラスキー、前掲書、331 頁。

## 第4章 安部公房作品における羊の表象 ——「満洲」の緬羊政策と牧歌的風景の構築——

### 第1節 はじめに

本章では、「詩人の生涯」を中心とする安部公房作品における羊の表象を、安部の「満洲」での植民地経験を踏まえたうえで、「満洲」の緬羊政策と牧歌的風景の構築との関係から解釈する。

まずは、安部公房が「満洲」で幼少年期を過ごし東京へ引揚げてきた経緯を、谷真介『安部公房評伝年譜』（2002）を参照して確認したい。安部は、1924年、国立栄養学研究所に勤める父安部浅吉（1898–1945）<sup>1</sup>が東京に出張滞在していた際に東京府で生まれた。浅吉は満洲医科大学の医師・助教授であり、1925年には家族とともに「満洲」に戻り奉天市（現中国瀋陽市）の満鉄社宅に住んだ。1940（昭和15）年、安部は成城高等学校理科乙類（ドイツ語）に入学するため東京へ渡る。しかしその年の冬、校風に馴染めなかったことや、雨天の軍事訓練のためにひいた風邪をこじらせ肺浸潤に罹り、休学して奉天市の自宅に戻る。病気の回復後、二年後に東京に戻り復学し、1943（昭和18）年に東京帝国大学医学部医科に入学した。1944年、敗戦が間近という話を聞き、「満洲」時代の友人<sup>2</sup>と偽造診断書を作成し「満洲」に渡る。1945年、敗戦後の混乱の中、発疹チフスの診療を行っていた父が感染して死亡した。1946年、安部は「満洲」の占領軍から家を追われ、サイダーを製造し生活費を稼ぎながら市内を転々とした。その年の10月、大連から引揚げ船に乗り「満洲」を離れ、長崎佐世保港に到着する。11月、北海道の祖父母の家に帰り着くが、学業を続けるため、農業をするという母と弟妹を残して上京した。1947年、東大医学部の一年下のクラスに編入するが、貧困と栄養失調でほとんど登校しなかったという。3月、女子美術専門学校を卒業した山田真知（1926–1993）<sup>3</sup>と結婚し、5月にはガリ版刷詩集『無名詩集』（1947）を自費出版し作家としての道を歩み始めた。

以上のように、安部公房は自身が一歳であった1925年から1942（昭和17）年、敗戦を跨ぐ1944年から1946年の約二十年間を、「満洲」の地で過ごしている。この期間は、後述するように、「満洲」における大規模な緬羊増産計画の時期と重なるものである。



このような経歴をもつ安部公房は、「詩人の生涯」や「盲腸」等の作品で頻繁に羊について言及している。これらの作品が発表された 1950 年代は、食糧・物資不足の中で国内における緬羊の飼育頭数が増加し、羊毛加工業の発展や羊肉消費の普及がみられた時期であった。日本内地だけではなく旧植民地の政策を合わせて検討すると、戦後の緬羊飼育の発展は、軍服の生産を目的として戦時中の「満洲」で行われた政策に由来する。そのため、安部の作品の中には、自身の「満洲」での経験、あるいは日本内地人による「満洲」の表象を反映させたと考えられる羊の描写が見受けられるのである。

羊は長閑さや平和の象徴として捉えられることが多い。しかし、安部公房の作品においては、羊はそのようなイメージとは対蹠的な事柄、即ち戦争、植民地支配、飢餓、身体の変形を表象するものでもあることを、本章で明らかにしていく。

## 第2節 変形譚としての「詩人の生涯」

安部公房作品における羊の象徴性を論じるに先立ち、安部がどのような作品で動物の中でも特に羊について言及しているのかを確認したい。ドナルド・キーンは、安部は「動物に余り興味がないようだが、小説家としての安部氏は上手に動物を活用する」<sup>4</sup>と指摘し、「空中楼閣」(1951)の三毛猫や「イソップの裁判」(1952)の動物寓話を挙げている。このように寓話の中で人間を擬えたものとして動物が用いられることもあるが、「バベルの塔の狸」(1951)の狸や、「奴隷狩り」(1954-1955)の珍獣「ウエー」など、人間が姿を変えたものや、言葉を話すことができる動物など、人間との境界が曖昧な存在であることも多い。

安部公房文学における動物や植物、機械の存在は、変形<sup>5</sup>の現象と結び付けられてきた。安部の作品では、身体の変形は一貫するモチーフの一つであり<sup>6</sup>、特に 1949 年から 1952 年にかけては「変形譚」として分類される数々の作品が発表されている<sup>7</sup>。このような動物や植物への変形に関する先行研究は数多く、例えば岡庭昇や山田博光は、安部の初期作品に影響を与えた花田清輝(1909-1974)の論から安部が変形の発想を得たと考察する<sup>8</sup>。また、田中裕之は、安部の作品では動植物と人間とを同列に置くことによって、人間中心主義の転覆がはかられていると論じる<sup>9</sup>。他にも、安部作品における変形のもつ重要性については、李貞熙<sup>10</sup>や呉美姪<sup>11</sup>による先行研究において検討されてきた。

安部公房が描く動物は、駱駝や鳩、犬、猫、鼠、蠅、鳥から、想像上の動物である「とらぬ狸」や「ウエー」、人間の進化した植物人間や水棲人間など、多岐にわたる。しかし、その中でも羊が繰り返し登場する点は注目に値する。第一に、1951年に発表された「詩人の生涯」において、糸を紡ぐ老婆が緬羊から作られたジャケツとして売られる話が挙げられる。この作品はラジオドラマ「詩人の生涯」(1960)としても放送された<sup>12</sup>。また、1955年に発表された「盲腸」は、食糧不足の問題を解決するために羊の腸を移植される人間の物語であり、この作品をもとにテレビドラマ「羊腸人類」、戯曲『緑色のストッキング』が創作されている。「鏡と呼子」(1957)では、農村で一匹の緬羊を飼育する老婆が登場し、老婆は道に飛び出した羊をかばおうとしてトラックに轢かれ死んでしまう。また、段ボールをかぶり覗きの行為を生き甲斐とする男性が主人公の『箱男』(1973)では、戦時中の野戦病院において羊の腸内酵素を研究する軍医についての挿入話がある。この他にも安部公房の作品では、「迷える小羊」<sup>13</sup>や「あわれな小羊」<sup>14</sup>、「犠牲の羊」<sup>15</sup>のような羊に関する比喩表現が、指導者を見失い路頭に迷う若者や社会から疎外された人間に当てはめられている。

このように繰り返し現れる羊については、数多く論じられてきた安部の変形譚との関連においても取り上げられることはなかった。しかし、小説をはじめラジオドラマやテレビ、戯曲など、安部が試みた様々なメディア表現の中で羊が登場し、また羊に関する比喩表現が多用されている点は看過し難い。緬羊飼育が盛んに行われていた「満洲」で育ったという安部の伝記的背景を考慮すれば、この点は単なる偶然であるとはいえないだろう。

そこで本章ではまず、安部の作品において最初期に羊について言及された作品であり、また変形譚の一種でもある短篇小説、「詩人の生涯」の羊の表象について考察していく。

「詩人の生涯」は、1951年に雑誌『文芸』に発表された、安部公房の初期短篇小説の一つである。先に述べたように、「詩人の生涯」は1960(昭和35)年に同題でラジオドラマ化されてもいるが、この二作品における羊はジャケツの原料として言及される。以下、本章での「詩人の生涯」からの引用は、『安部公房全集3』(新潮社、1997年)によるものとし、( )内にページ数を記す。

短篇小説「詩人の生涯」のあらすじは次の通りである。「三十九歳の老婆」(74)は一日中糸車を回して糸を紡いでいたが、「<綿>」(74)のように疲れ果て、彼女自身の身体が機械に巻き込まれ糸になる。「同じくらい貧しい隣の女」(75)が糸になった老婆をジャケ

ツに編み上げ、工場街の町角で売りに出す。しかし、貧しい人々の多い町の中でジャケツはなかなか売れない。女は結局ジャケツを質屋に入れるが、どこの質屋の庫にもジャケツが溢れていた。

冬が来ると、貧しい人々の夢や魂や願望が空中で雲になり、太陽の光を遮るようになった。やがて雪が降り始め、町や人々が次々に凍りついていく。「外国からやって来たジャケツを着る階級の男たち」(77)は、ジャケツの数が多過ぎることから、戦争を起こして外国に売りつけようと考えていた。彼らは凍りつかずに生き延びていたが、次第に不足した食糧をめぐって争うようになる。貧しい人々が働く工場を稼働させて戦争を起こすことができないため、解決策はなく、彼らは「窓を開けて、雪の中に手を差しのべ、自ら凍る」(80)しかなかった。

ジャケツが保管された質屋の庫にいた一匹の鼠が凍死をまぬがれ、糸になった老婆から編まれたジャケツを噛むと、ジャケツから血が流れ出す。ジャケツは、賃上げを要求するビラを配布したために工場から追い出され、工場の門そばでビラを抱えたまま凍りついていた息子のもとへと向かい、彼の身体を包み込む。息子は突然自分が詩人であることに気づき、雪の結晶についての分析を書き留め始めると、雪が融けてゆく。至るところで持ち主のなくなった庫からジャケツが運び出され、貧しい人々がジャケツを身に付ける。工場の汽笛が鳴りジャケツを着て働きに行く群衆がいる中で、息子は最後の「雪の言葉」(82)を書き終えると、詩集の頁の中に消えていく。

ラジオドラマ版「詩人の生涯」のあらすじについては、小説版とほぼ同様であるが、小説では寒さの原因が貧しい人々の夢や願望であるのに対し、ラジオドラマ版では「雲づくり屋」<sup>16</sup>が現れ、街を行く貧乏人達の魂を蒸発加工して雲にするという内容に変化している。

それでは、これら二作品の中で羊について言及される場面をみてみよう。それは、糸に変形した老婆から編まれたジャケツが、隣の女によって工場街で売られる際にみられる。隣の女は、次のような売り口上でジャケツを販売している。

——兄さん、お買いよ。あたたかいよ。決して風邪なんかひかないよ。

——ほんとに、まだ、生ぬるいね。

——そうとも、これは、純毛だよ。百姓家で、生きているめん羊から切りとった毛

だよ。

——なんだか、ついさきまで、誰かが着ていたみたいじゃないか。

——とんでもない。古物なんかじゃないよ。つい今しがた編みおわったばかりさ。

——まざりつけがあるんじゃないのかい？

——そばによって、触ってごらんよ。百姓家で、生きているめん羊から切りとった毛だよ。

——そうかもしれないね。……おや、このジャケットは妙な音をたてるじゃないか。つねると、ギュップと鳴いたぜ。生きているめん羊の毛を使ったせいかい？ (76)

ラジオドラマ版においても、以下のような同様の文句でジャケットが売られる。

隣の女 兄さん、お買いよ、あたたかいよ、決して風邪なんかひかないよ……

通行人 1 ほんとにまだ生ぬるいね。

隣の女 そうとも、これは純毛だよ。百姓家で、生きているメン羊から切りとった毛だよ。

通行人 2 なんだか、ついさっきまで、誰かが着ていたみたいじゃないか。

隣の女 とんでもない。古物なんかじゃないよ。つい今しがた編みおわったばかりさ。

今年のインフルエンザには、手編みのジャケットが一番なんだ。

通行人 1 まざりつけがあるんじゃないのかい？

隣の女 そばによって触ってごらんよ。百姓家で、生きているメン羊から切りとった毛だよ。<sup>17</sup>

ここでは羊はジャケットの原料として言及され、ジャケットは「めん羊」の「まざりつけ」のない「純毛」から編み上げたばかりのものであり、防寒性に優れている点が強調されている。小説版の表記「めん羊」とは異なり、ラジオドラマ版では「メン羊」と片仮名が用いられているが、ジャケットが「まざりつけ」のない「手編み」の製品で、流行性感冒の予防にもつながる衣服である点は、小説と同様である。

老婆が糸からジャケットへと変形する「詩人の生涯」の先行研究について、その多くは、「デンドロカカリヤ」(1952) 等他の変形譚と合わせ、レトリックと変形の問題に関連し

て論じられてきた<sup>18</sup>。作品の冒頭部において、疲労した老婆は「やれやれ、私は＜綿＞のように疲れてしまった」(74) と言うが、甚だしく疲弊した状態を表すこの直喩表現<sup>19</sup>によって、老婆は実際に「糸」へと変形してしまう。安部作品における変形のモチーフの重要性については上述したが、平岡篤頼は、通常は比喩を形成すべきものがレトリックの次元を超えて実際に形象化されると指摘している<sup>20</sup>。このような表現の特徴を踏まえ、「詩人の生涯」では比喩表現が実際の物質へと変化していることから、安部の変形譚の中でも変形のメカニズムが最も精緻に表現された作品であるとみなされてきた<sup>21</sup>。

また、安部の Kommunismus への接近の背景を念頭においてこの作品を解釈し、マルクスの『資本論』(1867–1894) からの想像によって作られた寓話とする論もみられる。1950 (昭和 25) 年前後には安部はマルクス主義関連の文献に親しんでおり、「詩人の生涯」が発表された 1951 年には画家の桂川寛(1924–2011)や映像作家の勅使河原宏(1927–2001)とともに共産党に入党した<sup>22</sup>。「詩人の生涯」には、「ジャケツは売るためのものだからなあ」「そうとも、着るためのものだなんて思ったらおお間違いさ」(76) という、老婆の息子と隣の女の会話がみられるが、ここではジャケツは交換価値のみの商品と化している。『資本論』では、糸からリンネル、リンネルから上着へ、といった原料と生産の過程についての説明があるが<sup>23</sup>、特に上着については、「上着の生産では、実際に、裁縫という形態で、人間の労働力が支出された。だから、上着のなかには人間労働が積もっている」<sup>24</sup>と記されている。鳥羽耕二はこの表現を引用し、「詩人の生涯」のジャケツを『資本論』の上着と重ね合わせて読み解く<sup>25</sup>。

このように「詩人の生涯」の先行研究では、疲労の状態を表す「綿」という比喩表現や上着としてのジャケツについては論じられてきた。しかし、テキスト内では、ジャケツが「綿」から編まれたという記述はない。老婆が糸車に引き込まれ糸に紡がれる場面を引用してみよう。

車はようしゃなく、キリキリと糸の端によりをかけて引込もうとする。もう引込むものが何もないと分ると、糸の端は吸いつくように老婆の指先からみついた。そして＜綿＞のように疲れた彼女の体を、指先から順に、もみほぐし引きのぼして車の中に紡ぎこんでしまった。彼女が完全に糸になってまきこまれてしまってから、車はタロタロと軽くしめった音を残して、やっと止った。(74)

このように、老婆が「綿」から糸に紡がれるのであれば、それは本来「綿糸<sup>めんし</sup>」となるべきである。しかし、老婆が糸からジャケツへと変化する過程を検証すると、その中間には羊毛としての羊の存在があることがわかる。先に挙げた引用のように、ジャケツは「綿糸」ではなく、「めん羊<sup>めんよう</sup>から切りとった毛」(76)から編み上げられているのである。「詩人の生涯」における「めん羊」という表記は、「綿」からの変形であることが想像される「綿羊」から変化し、「綿」の音が傍点によって強調されたものと考えられる。しかし、ジャケツが「めん羊」から作られたものであるということ、つまり羊毛製である点については、これまでは「綿」という表現が注目されていたために看過されてきた。

ここで、「ジャケツ」という語の意味を確認すると、英語の“jacket”の略訛としての意味と、毛糸編みの袖の長い上着という二つの意味があることがわかる<sup>26</sup>。「めん羊」から作られたという表現からは、この作品においては後者の意味を当てはめるのがより適切であると考えられる。そこで本論文では、ジャケツが「めん羊」の毛糸によって編まれたものであるという前提に基づき、「詩人の生涯」について論じていきたい。

「詩人の生涯」では、「めん羊」から作られた「純毛」のジャケツは、防寒性に優れた温かいものとされ、貧しさや平和のイメージと結び付いている。前述の引用には「決して風邪なんかひかないよ」(76)という売り手の言葉があったように、ラジオドラマの脚本においても同様に、「今年のインフルエンザには、手編みのジャケツが一番なんだ」<sup>27</sup>という表現がある。これに対して、外国製のジャケツに関する描写には、次のようなものが見受けられる。

細い糸を機械で織った、少しもあたたかくない花模様のジャケツ、外国からやって来たジャケツを着る階級の男たちは考えた。なんとしても、ジャケツの数が少し多すぎるのだ。戦争をおこして、どこか外国に売りつけてみたら、どんなものかしら？(77)

外国製のジャケツは、ある特定の階級の人々、裕福な人々しか身に付けられないものであるが、それには機械による大量生産を髣髴とさせる模様が織り込まれている。しかしそのジャケツは「少しもあたたかくな」く、「別にこれといった効用はなかった」(79-80)という。

ここで、ジャケツについて、安部公房の他の作品も合わせて検討してみよう。ジャケツは、「詩人の生涯」だけではなく、安部の小説第一作である真善美社版『終りし道の標べに』（1948）から用いられているモチーフである。「満洲」が舞台であると想定されるこの作品では、主人公が粘土塀に押した手形が「まるで毛編みのジャケツのほころびに指を突込んだようなものだった」<sup>28</sup>と表現されている。安部の変形譚の代表作でもある「赤い繭」（1951）では、「すり切れたジャケツの肘がほころびるように」<sup>29</sup>主人公の足がほぐれて繭に変形する。このようなジャケツと「ほころび」との連想は、『箱男』にもみられ、「ほんの些細なほころびから、手編みのジャケツみたいに、すっかりほつれてしまう事だって無くはないのだ」<sup>30</sup>という記述がある。

顔面に傷を負った男が他人の顔の仮面を装着する『他人の顔』（1964）では、他人になりきってしまうために服装も取り替える主人公が、次のように語る場面がある。

すっかり他人になりきってしまうためには、当然服装から変えてかかる必要があった。しかし、あいにくそこまでの準備はできていなかったし、今夜はほんの気分の調整だけなのだからと、簡単にジャケツをはおって出掛けることにした。既製品の、ありふれたやつだったから、それが目印になるなどということはよもやあるまい。<sup>31</sup>

『他人の顔』では、手編みではない「既製品」のジャケツは、「ありふれた」ものであり、個人を特定する要素を欠いた衣料品とされている。

以上のように、「詩人の生涯」やその他の安部公房の作品において、手編みのジャケツは、純毛、温かさ、貧しさ、ほころびといった要素と結び付いている。それに対して外国製のジャケツは、裕福な人々が着用する既製品で個性を欠き、戦争を連想させもする。安部が手編みの羊毛ジャケツを肯定的に描写し、その品質や手仕事による紡ぎという行為を強調するのはなぜだろうか。

ここでもう一度、「詩人の生涯」をマルクス主義的に読解し、上着としてのジャケツに注目していた鳥羽の解釈を検討したい。工場街で働き労働条件改善のための活動を行う息子と、ジャケツを着た労働者が凍結と富裕層に打ち勝つこの物語を、鳥羽はマルクスの隠喩から導かれる「プロレタリア独裁の寓話」<sup>32</sup>であると論じている。このように、「詩人の生涯」を安部の共産党員としての伝記的事実と関連させて読み解くのであれば、同時期の安

部の下丸子文化集団における活動にも目を向けるべきである。

次節では、下丸子文化集団が発行していた詩集の作品と「詩人の生涯」を比較することにより、この作品はプロレタリア詩人の影響を受け、糸紡ぎや編み物といった羊毛にまつわる行為が機械による大量生産と対置されていることを論じていく。

### 第3節 「詩人の生涯」と『詩集下丸子』

東京大田区に位置する下丸子には、米軍管理下の軍需工場であった東日本重工があり、1950年代初頭には労働運動やサークル活動が盛んであった。ここに安部・桂川・勅使河原の三人が文化工作者として赴き、1951年春頃下丸子文化集団が結成された。当初集団に参加したのは東日本重工や近郊の北辰電機の労働者であり、サークル機関紙『詩集下丸子』（1951-1953）を発行して、労働現場からの声を代弁する詩作品の創作・発表が行われた。安部は1951年7月の『詩集下丸子』第1集発行をはさむ約四ヶ月間、毎週のように下丸子に足を運び、文学についての講義を行っていた<sup>33</sup>。

安部の政治的立場を考慮して1950年代初頭の作品を語る際には、同集団についての言及は欠かすことのできないものとなっている<sup>34</sup>。しかし、安部の下丸子での活動が作品創作とどのように関わっていたのかについては、未だ詳しく検証されていない。また、『詩集下丸子』については、第1集に掲載された安部の詩「たかだか一本のあるいは二本の腕は」（1951）について論じられることはあっても<sup>35</sup>、その他の詩作品と関連付けた分析はみられない。しかし、「詩人の生涯」は、ときには下丸子文化集団のメンバー宅に寝泊まりするほど足繁く工場街に通っていた生活の中<sup>36</sup>で執筆され、1951年10月に発表された作品である。そのため、「詩人の生涯」には、『詩集下丸子』のプロレタリア文学的趣向や政治態度が反映されていると考えられる。

1951年7月に発行された『詩集下丸子』第1集の中で特に取り上げるべきは、高島青鐘（1915-1959）<sup>37</sup>の「糸車」と、外米えり子（生没年不詳）<sup>38</sup>の「日給百七十五円」である。高島と外米はともに下丸子文化集団の設立と運営に携わった人物であるが<sup>39</sup>、その詩には「詩人の生涯」と同様の題材が用いられている。以下にこの二作品を引用し、「詩人の生涯」との類似点を指摘したい。

まず、高島の「糸車」をみてみよう。



高島青鐘（失業者）「糸車」

婆さんがまわす糸車の様に／後から後から真直で気持のよい／機関紙を続けられたら  
と思う

だが糸の様に切れやすくて困る／やつぱりスチールワイヤーがいいゝ

婆さんはまわさないだろうが／俺達がまわすのだ

まったく切れやすくて困るものは閉口だ<sup>40</sup>

ここでは、「婆さん」が糸車を回すという行為が、「詩人の生涯」の老婆と共通している。糸車を回す様子が、「後から後から真直で気持のよい」という印象を与えている点は、「詩人の生涯」で老婆が「ユーキッタン、ユーキッタンと」「糸車を、朝早くから夜ふけまで」（74）機械のように「踏みつづける」（74）、単調で継続的な糸紡ぎの作業を想起させる。高島は、1951年10月に発行された『詩集下丸子』第2集に「母をみつめて」という詩も寄稿しており、自身の母親が貧しい生活の中で朝から晩まで働き続ける様子が描かれている<sup>41</sup>。「詩人の生涯」の老婆もまた、隣の女に糸を売るために内職として糸紡ぎを行い、「＜綿＞のように疲れ」（74）るまで一日中糸車を回し続けているのである。

貧しさのために女性が身を粉にして働く様子は、外米の詩においても主題として扱われている。以下は外米の「日給百七十五円」からの引用である。

外米えり子（主婦）「日給百七十五円」

みんなから／その人は／小母さんと呼ばれた

まだ／ようやつと三十に／なるかならずだというのに／三人子持の／家計の負担は／  
その人を／十五年も年よりにした

いつでも／ウサギのひとみ／町工場の片隅で／ハンダゴテを使いながら／その人の首  
は／日と何回となく／カクンとした

足の不自由な／老母にたくす三人の子の／明日の食料／スゝギ、洗濯／ボロトゾの  
数々〔中略〕

ようやつと三十に／なるかならずだというのに／まだ水々しくて／いゝはづだのに／  
一日 百七十五円の／日給を稼ぐため／その人は身心を／スリコギにした／枯葉のよ

うに／若さを枯らした<sup>42</sup>

「日給百七十五円」では、三十歳の女性が短い睡眠時間に耐えながら町工場で働いており、家計を支えなければならない心労から年老いて見え、「小母さん」と呼ばれている。これは、「詩人の生涯」で、「短い睡眠をいっそう切りつめて」（74）糸車を踏み続ける貧しい母親が、「三十九歳の老婆」（74）と称される点と類似している。身心を「スリコギ」にするように働く様子は、「＜綿＞のように疲れて」（74）しまうまで糸を紡ぎ、「ひからびた筋と黄色い骨とで出来た機械」（74）のような身体の老婆と同様である。

このように、『詩集下丸子』に掲載された二篇の詩、「糸車」と「日給百七十五円」には、「詩人の生涯」で中心となる「糸車」と「老婆」のモチーフが用いられ、貧しさのために女性が働き続ける様子が描かれており、安部の「詩人の生涯」の創作に影響を与えたと考えられる。

「詩人の生涯」と『詩集下丸子』とのつながりは、「糸車」と「老婆」だけではない。「詩人の生涯」の「詩人」には、安部が下丸子で目にした労働者詩人達の姿が投影されているのである。「詩人の生涯」の「詩人」と下丸子文化集団の詩人とを比較するために、「詩人の生涯」の記述を確認しよう。「詩人」となる息子は勤務先の工場で賃上げを要求するビラを配ったために解雇されていたが、その後も工場で働く仲間のためにビラ配りを続けていた。そのビラや彼の運動の内容については、次のように記される。

「あなた方は五十人の首をきり、その五十人分を私たちに働かせ、不正を衝く言葉をもつ勇気のあるものがなくなったのを幸いに、それ以上を働かせ、五千万円ももうけることができました。どうか私たちの給料を上げて下さい。」そう書いたビラをくばったために、工場から追出された三十九歳の老婆の息子が、今日も工場の中に残っている哀しい仲間の倖せのために、彼らの消えかかった心臓のストーブに吹き送る酸素の言葉を、一日ヤスリと鉄筆の間にはさんだ原紙にほりつけ、一日とうしゃ版のローラーを押しつづけた疲れから、裸の腹の上に新聞紙をあてがって、ユーキッタンと糸車を踏む母親の足元にぐっすり睡っていた（74-75）

このビラに記されている「五十人の首を切り」という言葉や、ガリ版でビラを作成する

様子は、『詩集下丸子』発行の前年である 1950 年に起こった下丸子での反レッドパージ闘争を髣髴させる。この年は朝鮮戦争の戦況に伴い大規模なレッドパージが次々と実施された年であったが、それに対する反対闘争も行われた<sup>43</sup>。下丸子では、10 月 21 日、東日本重工における四十五人のレッドパージ通告に対して、東京南部地区労働組合によるストライキ権が確立され闘争宣言が発せられた。しかし、実力行使を決議した労組も、米軍管理下の工場では意志表示に留まりストライキ決行はなされなかった<sup>44</sup>。レッドパージ後、工場内に共産党細胞はいなかったものの、反戦平和に共感を寄せる労働者は少なからず存在し、ビラに詩を書いて工場付近で配布していたという<sup>45</sup>。

下丸子地区でのレッドパージとそれに対する闘争、『詩集下丸子』の発行、そして安部公房の「詩人の生涯」発表をめぐるこのような経緯を念頭に置けば、「詩人の生涯」で息子が配る「あなた方は五十人の首をきり」（74）というビラの文句は、発表前年に四十五人が解雇された下丸子のレッドパージを示唆していよう。「ビラをくばったために、工場から追出され」（75）た後も工場の仲間のためにビラの印刷を続ける息子は、「不正を衝く言葉をもつ勇気のあるもの」（75）の一人であり、失業者としての身分の中、ガリ版刷りの言論文化で精力的にサークル活動が続けた高島青鐘のような労働詩人の姿と重ね合わされる。

同時代のサークル運動の背景を考慮することにより、「詩人の生涯」の「詩」や「詩人」という言葉にも特定の意味が含まれていることがわかる。当時の「詩人」は、労働者の主張を反映した「詩」を創作する運動家を示していた。『詩集下丸子』を継続した下丸子文化集団の機関紙『文学南部』第 1 号（1952 年 11 月）の原稿募集欄、「詩集下丸子に原稿を！」においては、価値ある「詩」の性質について次のように述べられている。

《残業しないで食える賃金を》——便所のラクガキにかき、ガリ新聞に寄せて叫んでいます。ぼくたちは、これこそが、ホントの詩だと——。思わずにいられないのです。どうしてですか？ ホントのことだからです。胸うつことばだからです。ぼくたちは今このことばを集めています<sup>46</sup>

下丸子集団が求めた「詩」とは、「《残業しないで食える賃金を》」といった労働者の要求の言葉、「胸うつことば」であり、「ラクガキ」や「ガリ新聞」のような多くの人々の目に触れる場で発表されるべきものであったことが読み取れる<sup>47</sup>。

「詩人の生涯」に登場する「詩人」もまた、このような同時代のサークル運動における「詩人」の定義に則った性格の人物であると考えられるが、それは次のような場面から明らかになる。息子は工場の門でビラを配りながら凍りついていたが、ジャケツを着用することによって凍結の状態から解き放たれ、突然自分が「詩人」であることに気付く。彼は雪を手にし「雪の言葉」(82)を書いていくことを決心するが、この「詩人」が書き集める「雪の言葉」とは、「貧しいものの言葉」(82)として次のように描写される。

見たまえ、この見事なまでに大きく、複雑で、また美しい結晶は、貧しいものの忘れていた言葉ではないのか。夢の……、魂の……、願望の。六角の、八角の、十二角の、花よりも美しい花、物質の構造、貧しい魂の分子の配列。

貧しいものの言葉は、大きく、複雑で、美しく、しかも無機的に簡潔であり、幾何学のように合理的だ。[中略]

彼は小脇のビラを裏返して、そこに雪の言葉を書いていこうと決心した。(82)

貧しい者達の言葉は美しく簡潔であり、様々な形の雪の結晶の美に擬えられる。「詩人」はその一つ一つを観察し、耳をすませ、夢や願望を聞き取っていく。ここでの「詩」は、上述したような労働運動やサークル運動の主体によって意識された「詩」、つまり工場労働者や一介の市民から寄せられる労働条件向上の要求であると考えられる。

「詩人」が「雪の言葉」を書き終えると、凍りついた世界に春が訪れ、労働者達はジャケツを来て工場に働きに出かける。そして「詩人」は詩集を完成させ、その頁の中へと消えていく。このような「詩人」の行為は、労働者の声である「詩」を集め編集・発行していった、高島や外米のような下丸子文化集団の労働詩人達と重ね合わせられる。「詩人の生涯」は、『詩集下丸子』の詩作行為が目指したように、労働者の声を体現することの意義を主張する作品として、安部の下丸子文化集団での活動と並行して創作されたのである<sup>48</sup>。

以上のように、「詩人の生涯」がプロレタリア詩人に影響を受け、労働者の言葉を聞き書き取っていく行為を評価している作品である点を踏まえ、「詩人の生涯」の羊について解釈していきたい。「糸車」による糸紡ぎやジャケツを編むという羊毛に関連した行為は、下丸子の軍需工場に代表されるような巨大な機械産業とは相反する手工業的性質を備えたものである。手編みの羊毛のジャケツは、工場で生産された既製品とは異なる。このような意

識は、安部の植民地経験を考慮すれば、戦前の「満洲」における緬羊政策によって形成されたものではないだろうか。以下、戦後日本における緬羊飼育と羊毛加工業の発展、及びそれが継承した戦時中の「満洲」の緬羊政策について考証する。

#### 第4節 戦後日本における緬羊飼育の発展と「満洲」の緬羊政策

終戦後、食糧難と物資不足の時代には、純毛の衣料供給源として羊の需要が大きく高まった。濃厚飼料を必要としない飼育が容易な動物であること、また有畜農家特別措置法による奨励策もあり、緬羊の飼育頭数は増加の一途を辿り、1957（昭和 32）年には史上最高の百万頭を記録した。日本緬羊協会初代会長で参議院議員でもあった岸良一（1890–1962）<sup>49</sup>による緬羊政策推奨など、大々的に羊の飼育が推奨された時代でもあった<sup>50</sup>。

前述したように、安部公房が「詩人の生涯」や「盲腸」、「羊腸人類」、「鏡と呼子」の中で羊を描いたのは、まさに日本において羊の数が急増したこの 1950～60 年代であった。

「羊腸人類」では、「畠や山をつぶして、羊をかうために牧野にした農家の人たち」<sup>51</sup>という記述があるが、これは貧しい農家で有畜農業として羊の飼育が広まった背景を映し出しているといえる。また、短篇小説「鏡と呼子」で描かれる、畳を上げた一部屋を小屋として一匹の緬羊を飼育する風景は、大陸の曠野で行われる大量放牧とは異なり、日本の有畜農業に特有の羊の舎飼方式の典型である。

戦前の緬羊飼育が軍需羊毛の自給を目的として進められ、刈り取られた羊毛は 1897 年に設立された官営の千住製絨所などの織物工場で加工されていたのに対し<sup>52</sup>、戦後には一般家庭における緬羊の普及に伴い、家庭内で羊毛から糸を紡ぐホームスパンも広がりを見せていった。例えば、日本緬羊協会編『日本緬羊協会史 58 年の歩み』（2003）では、戦後の羊毛加工について、「純正なホームスパンの国民的認識を得ると共に、農家のめん羊飼育と結び付いた加工技術の向上」<sup>53</sup>が図られたと述べられている。国家政策によって進められていた緬羊飼育は、この時期には家庭内の衣料品生産活動にも影響を及ぼし、ホームスパンの価値が国民の間に浸透していったという<sup>54</sup>。

自宅で飼育する緬羊から刈り取った毛を、紡績会社に依頼し、毛と毛糸などの製品を交換する比較的小規模な羊毛加工の形態もみられた。安部公房の母親ヨリミ（1899–1990）もまた、戦後北海道で緬羊を飼育し、そのような制度を利用した一人であった。ヨリミは

戦後「満洲」からの引揚げ後、亡くなった夫・浅吉の父の住む北海道において、安部の弟・妹とともに農業を営みながら生活していたが、同時に羊を飼育していたことが次の資料からうかがえる。これは、安部宅の近所に住んでいたドイツ文学者、保坂和夫の回想記の一節である。

私〔保坂〕の両親はしばらくいろんな副業に手を出していたが、その一つに紡績会社の代理店の仕事があった。農家が飼っている緬羊の毛と製品との交換を仲介するのである。安部公房のお母さんも緬羊を飼っていたのだろう。ときおり刈った毛を持って来ては見本の中から交換すべき製品を選択していた。お母さんは「公房さんにはどの色がいいかしらね」などと言いながら、〔保坂の〕母を相手に毛糸や布地を選んだ。

〔中略〕

お母さんはその毛糸でセーターを編んだ。そして、それを東京の息子〔公房〕へ送った。安部公房の初期の作品には糸のイメージが重要な役割を演じている。〔中略〕『詩人の生涯』の背後に北海道在住の母親のイメージを推測する批評家は多い。しかし、セーターは事実送られた。——そうとも、これは、純毛だよ。百姓家で、生きているめん羊から切りとった毛だよ。ジャケットを売る隣の老婆はこう言うが、それは事実なのだった。<sup>55</sup>

引揚げ後東京に渡った 1947 年前後の安部は、「住む家がなく、また金がなく、したがって飢え疲れていた」<sup>56</sup>と記されるような貧困の状態にあった。その中で母親から送られてくる、自宅で育てた羊の毛によって編まれたジャケットを、ほころびが生じるまで長く着込んだであろう状況がうかがえる。

羊毛製のセーターに関するこの逸話からは、安部一家の地理的な移動を考えれば、母親ヨリミは緬羊飼育や羊毛加工に関する知識を「満洲」で得ていたのではないかと推測される。なぜなら、戦後日本の緬羊飼育の隆盛や羊毛加工業の発展は、戦前の「満洲」における畜産事業での成果を継承したものであったからである。本論文第 1 章で述べた通り、明治時代、寒冷地での戦争に備える目的から軍需衣料生産のための羊毛生産が重要視され始めたように、日本の緬羊飼育は植民地主義政策の一環であった。戦前には内地の牧羊業は風土や気候が原因で停滞していたが、やがて政府はその拠点を日本から「満洲」へと移行

した。そして、「満洲」における緬羊飼育は、日本の植民地政策の骨格の一部ともいえるほどにその重要性を増していったのである。

ここで、緬羊飼育奨励政策が日本の植民地政策と相俟って外地へと拡張されていった経緯を概観したい。第一次世界大戦の戦況に伴い、1914年、オーストラリア・ニュージーランドからの羊毛輸入が禁止されると、日本国内及び朝鮮半島・「満洲」での緬羊飼育が熱を持って進められた。広大な土地を有する植民地、その中でも特に古来牧畜に縁のある「満洲」での緬羊生産が期待されるようになる。1932年の「満洲国」建国宣言後に行われた「満洲」での牧畜業展望調査の報告では、その土地が気候面や文化面において緬羊飼育に最適とみなされたことが、次のように強調されている。

満洲国の畜産は其広大なる面積、僅少な人口、豊富な家畜飼料の生産を基礎とし家畜なくして生活し得ない蒙古人、家畜の飼育と其使役に長じて居る満人、家畜の生産物の利用に長じて露人が生活して居るので、一大産業として盛んであるのが当然である。

〔中略〕満洲農業が必ず畜産<sup>〔マヤ〕</sup>を加味しなければならない、言い換へると、基本産業である農業は畜産に依存する所甚だ大である事を力強く首肯せしめるのである。<sup>57</sup>

さらに1930年代後半に工業・農業部門で展開された「満洲国国家改造計画」の一環である満洲農業移民計画においては、経済的見地から農牧混同農業が勧められ、馬や牛とともに家畜としての緬羊飼育が奨励された。これについては、将来予想される対ソ連戦に備えた寒冷地での軍用衣料の増産も目的の一つであったと想定される。

国家の植民地政策の一環として精力的に取り組まれた「満洲」での緬羊飼育の中心を担ったのは、南満洲鉄道株式会社であった。1905年に日露戦争で勝利した日本は、「満洲」における鉄道権利の譲渡を受け進出の基盤が形成された。満鉄はその翌年に設立され、鉄道経営だけでなく、炭鉱開発や農林牧畜、インフラ整備など、「満洲」経営の中心的役割を担った。そのような事業の一環に、満鉄農事試験場の設立が挙げられる。第1章でも述べたように、農事試験場は1909年に夏目漱石が「満洲」を訪れた際に足を運んだ場所でもあるが、ここでは農業技術を高度化するための農事試験研究が積極的に推進されていた。その畜産部門において、緬羊品種の改良実験が実施されていたのである。

「満洲」における羊毛事業は一大国策であり、羊毛の輸出を目指して改良種千五百万頭

増殖の目標が立てられた。1900年代初頭、「満洲」には約二百万頭の羊がいたが、毛質が粗く衣料用としては不適であるとして羊毛生産は僅かしか行われていなかった。そこで農事試験場では、オーストラリア産のメリノ種や、内地の下総牧場で改良に成功した種羊を輸入し在来種と交配させることにより、毛質の改善がはかられた<sup>58</sup>。

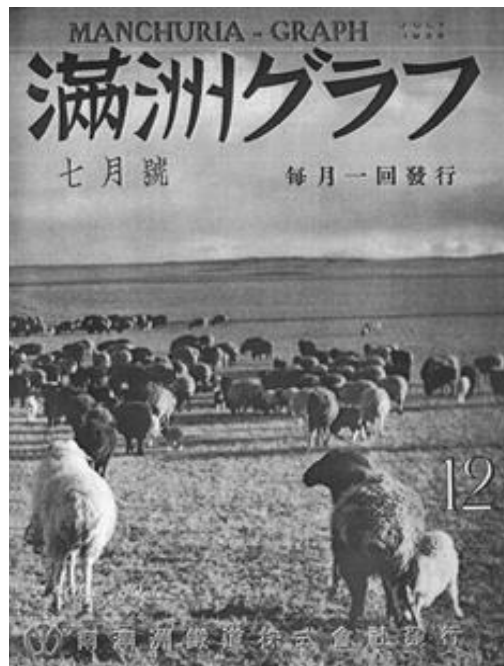
以上のように、日本の緬羊飼育は中国・ロシアなど北方での戦争に向けての衣料製造を第一の目的として開始され、そして日露戦争で租借された大陸へと渡り、満鉄という国策会社によって経営されていた。羊は「満洲」に渡った農業移民によって飼育されることにもなり、日本の植民地政策と切り離すことのできない動物だったのである。

戦前の「満洲」における緬羊飼育事業は、戦後の日本内地における緬羊振興の発展につながっていった。その一端を示しているのが、羊肉の需要である。「満洲」では、羊の飼育頭数が増加するにつれ、羊肉消費の普及も提唱された。牛肉に代替する食糧として適切な調理法の開発が行われ、「満洲」では軍隊や農業移民の間で羊肉料理が消費された。戦後の食糧不足の状況下では、内地でも羊肉の宣伝が行われ、その調理法として考案されたのが羊肉鍋料理の「ジンギスカン」である<sup>59</sup>。特に 1950～60 年代は、国内産豚肉の価格上昇に伴い、ニュージーランドからの輸入羊肉の消費が増加した時期でもあり、羊肉料理店の開業や羊肉を用いた料理の紹介などが頻繁に行われていた<sup>60</sup>。

第 1 章で論じたように、日本における殺生禁断や肉食禁止の歴史の観点からは、羊は「穢れ」とみなされた動物であり、その肉を食することも禁忌とされていた。しかし、近代以降、牛肉や豚肉、鶏肉の消費に次いで、1950 年代には羊肉も食卓に取り入れられるようになった<sup>61</sup>。その背景には、戦前の「満洲」における緬羊政策の成果があったのである。

このように植民地経営の一端として緬羊飼育が大規模に奨励された中で、その軍事的目的とは対峙するかのように、羊を囲む「満洲」の生活風景は日本内地人にとって牧歌的な憧憬と郷愁を誘うものとして受容された。当時の「満洲」での緬羊飼育状況を知るために、満鉄弘報係によって編集されたグラフ雑誌『満洲グラフ』（1933-1944）の記事を例に挙げてみていこう。『満洲グラフ』では、「満洲国」のプロパガンダに関わりながらも、その地の人々の生活に目を向けた芸術としての写真表現が試みられていた<sup>62</sup>。この雑誌では、表紙に羊の群れの風景写真が掲載されたり（図 11）、農業移民にとっての羊の有用性が写真や図版入りで説明されたりと<sup>63</sup>、度々羊についての特集が組まれていた。





【図 11】『満洲グラフ』第 3 巻 4 号表紙（1935 年 7 月）

日本内地では馴染みの薄い動物であった羊も、「満洲」においては、内地からの農業移民にとって自給自足の生活に欠かすことのできない身近な動物となった。例えば、「北満農業移民は何故有望か」と題された第 6 巻 11 号の特集では、次のような一節がうかがえる。

天与の牧草が豊富なこと、土地の広大なことが有畜農業として非常に有利だ、緬羊、豚、牛、馬、鶏、蜜蜂、鷺鳥等が寒さにも負けずによく育つ。[中略]

衣——棉は出来ないが、どんどん殖えて行く移民地の緬羊が将来これを解決する、農家では既にホームスパンもやり、ジャケットや靴下も温いお手製のものが出来る。<sup>64</sup>

上記の引用で注目すべきは、移民農家の間では、緬羊から刈り取られた毛を用いたホームスパンが行われ、ジャケットや靴下といった衣類を自家生産できることが宣伝されている点である。ホームスパンは、家庭で子どもの養育や家畜の世話にあたる女性移民による作業であり、次のようにも言及されている。

最近の開拓地などを訪れると、もう幾分建設的な荒々しい空気は薄れ、なにか牧歌的な泌々とした情調が漂つてゐる。

男は野良へ出て、残った主婦たちは子供の世話から家畜の手入などに忙がしい。家畜のなかでも現在では羊の外来種の飼育が積極化され、所謂ホームспанやら、採乳、その他農耕経営の一環として羊の飼育は開拓地にはつきものゝ様な感である。<sup>65</sup>

羊の飼育やホームспанといった活動は、開拓地の「建設的な荒々しい空気」とは相反する、家庭的・女性的で「牧歌的」な景色を形成していたことがここから読み取れる。『満洲グラフ』では、1944年1月に戦局の悪化と物資不足によって雑誌が廃刊される<sup>66</sup>直前まで、羊毛産業への期待が繰り返し特集されていたが、ホームспанの重要性はまた、厳しい寒さに対する家庭的な情調や温かさを想起させるものであった。

朔北の寒地と取組んだ北満開拓団にとって防寒被服の用意も忘れることは出来ない。房々しい毛皮の緬羊はやがてホームспанとなつてこの要求に応へてゐる。<sup>67</sup>

以上のような「満洲」における緬羊飼育の資料からは、羊毛生産が植民地経営の手段として勧められた一方で、農家では寒冷な気候に耐えるための温かい衣服がホームспанによって生産され、それは家庭的情趣を伴うものであったことがうかがえる。ホームспанという羊毛加工行為から呼び起こされるこのような趣は、先に挙げた安部公房の母親の記録にも当てはめられるだろう。「羊毛を生産して生活に用ひる外に日本が外国から輸入する羊毛を駆逐すること」<sup>68</sup>というような厳格な調子で語られる、科学産業基盤に基づいた国策としての羊毛生産の骨子とは反対に、農業移民にとっての羊の存在は、より日常生活に根差した手工業的側面を備えていたのである。

羊を囲む「満洲」の生活風景が、当初の軍事化・植民地化政策の目的とは相反するように、日本内地人にとって牧歌的で平和な郷愁を誘うものとして捉えられたことは、主として内地在住の日本人が読者対象であった<sup>69</sup>『満洲グラフ』に掲載された写真からもうかがえる。『満洲グラフ』には、満鉄の高級嘱託として雑誌の編集を担当した写真家、淵上白陽（1889-1960）を中心に結成された満洲写真作家協会の会員による写真が多く掲載されている<sup>70</sup>。そこには、「大陸の曠野に広がる光景や農村の情景をソフト・フォーカスによって牧歌的かつ、郷愁を込めて表現したもの」<sup>71</sup>が多く、内地日本人にとっては異国情緒を思わせる光景を被写体におさめたものが多かった。そのような風景にはしばしば羊が存在す

ることが、雑誌に掲載された写真をみると容易に見出される。先に挙げた表紙写真（図 1）や、第 5 巻 6 号（1937 年 6 月）の特集「満洲の美術写真」における、寺島万治『風景』と題された羊の群れの写真（図 12）がその顕著な例である。雑誌掲載写真の選評と編集にあたった淵上は、「満洲」における写真の題材について次のように述べている。

満洲の風物には写真の素材として適するものが多い。大平原に放たれた羊や駱駝の群、日露戦役以来日本人の脳裡にしみこんでゐる「紅い夕日」の極まりなき荘厳、街頭の物売り風景、田園における着ぶくれた農夫の姿態、



【図 12】寺島万治『風景』（1937）

すべて線と塊とが大まかで、画面構成の美観と内感の豊かさがある。[中略] 従つて写真の趣味は振ひ、芸術的向上また目醒しきものがある。<sup>72</sup>

日露戦争以来、植民地とされた「満洲」に対して抱かれた「大平原」や「紅い夕日」のイメージの中には、羊や駱駝の群れも含まれており、エキゾチックな芸術の題材として捉えられていたことがわかる。

日本内地における綿羊飼育の歴史を振り返れば、羊の放牧風景が定着したことはなく、そこにエキゾティシズムを見出すことは可能であるとしても、郷愁を感じることは矛盾している。しかし、そのノスタルジアは、西欧文化に表出した牧歌的風景への郷愁という心性の受容、及びそれに対する憧憬によって形成されたものであったことがわかる。例えば淵上は、ミレーやコロドー（Jean-Baptiste Camille Corot, 1796–1875）といったバルビゾン派の絵画を好んでいたが、その情趣や象徴主義的な意味を「満洲」の落日の風景や田園、未開の曠野に憧れをもって見出していた<sup>73</sup>。日本内地人が「満洲」に抱いた憧れや郷愁は、西欧文化への憧憬とオーバーラップしていたのである。さらに、19 世紀中葉に興ったバルビゾン派絵画にもまた、産業革命の影響を受け失われつつある農民生活へのノスタルジア

が描かれていたことを考えれば<sup>74</sup>、日本内地人が「満洲」に対して抱いた郷愁は、西欧において形成された牧歌的風景への郷愁を受容した上での二重の意味合いが含まれていることになる。

それでは、先に確認したように、年少期の多くの時間を「満洲」で過ごした安部公房は、このような羊を囲む「満洲」の風景とどのように関わり、引揚げ後自らの作品創作に反映させていったのだろうか。安部の植民地経験に関する先行研究や他の作品群も参考にして考察していこう。

## 第5節 安部公房の植民地経験と羊

安部公房の作品と植民地記憶との関連性については、前述の李や呉の研究や、波瀾剛によって詳細な検討が試みられている<sup>75</sup>。これらの研究では、安部の経歴や以下の引用を参考にして、安部を「故郷喪失者」<sup>76</sup>として捉える傾向にある。安部は自筆年譜において、自らの生い立ちを次のように語っている。

原籍と出生地と、育った場所とが、三つとも違っていることのために、その後私はますます過去に関して口が重くなった。たとえば、一と口に出身地と聞かれて、いったい何と答えればいいのかろう？<sup>77</sup>

東京と北海道、そして「満洲」を行き来した安部を「故郷喪失者」とみなすこのような見解は、安部に関する初期の言及でほとんど一致すると呉は述べ、例として磯田光一「無国籍者の視点」(1996)や山田博光『『終りし道の標べに』』(1971)等の研究が挙げられている<sup>78</sup>。

安部の植民地経験については、「満洲」を舞台としその引揚げ経験に基づいて執筆されたとされる真善美社版『終りし道の標べに』と、『けものたちは故郷をめざす』(1957)を対象とする分析が多い。この二作品については、『終りし道の標べに』の発表後、安部は植民地経験について直接的に語ることをやめ、『けものたちは故郷をめざす』において敗戦の「満洲」が再び登場することが指摘されている<sup>79</sup>。そして、1960年代には、『砂の女』(1962)等の代表作を発表する傍ら、1947～48年の間に発表された初期作品における「満洲」へ

のノスタルジアを削除する方向で大きく書き直し、1965（昭和 40）年の『終りし道の標べに』の改訂（冬樹社版）を行ったという<sup>80</sup>。

『終りし道の標べに』では「満洲」という固有名はテキスト内に登場しないが、戦前の日本人が「満洲」に対して抱いた典型的なイメージである粘土、黒煉瓦、曠野、匪賊、榆、アカシヤのような用語が、作品内で異国的な「満洲」の風景を喚起している<sup>81</sup>。このような「満洲」の草原や砂漠、曠野の風景は、安部公房作品の中で繰り返し描かれるモチーフである。佐々木基一が指摘するように、特に砂漠的なものの魅力や流動的なイメージは、安部の作品を貫く重要な創作上のモチーフとして機能している<sup>82</sup>。例えばそれは、留まることを知らない流動的な砂の動きの中で、崩れゆく家を守る『砂の女』の物語に象徴されるが、さらに『無名詩集』のような初期作品から一貫してみられるものでもある<sup>83</sup>。

作品中でこのように描かれる砂漠の風景は、幼少期を「満洲」で過ごした安部公房にとって、記憶と憧れを形成するものであったことが次の文章からうかがえる。

砂漠には、あるいは砂漠的なものには、いつもなにかしら言い知れぬ魅力があるものである。日本にはないものに対するあこがれだとも、言えなくはないが、しかし私などは半砂漠的な満洲（現在の東北）で幼少期のほとんどをすごしたのだ。いまならノスタルジアだと説明してしまうこともできるわけだが、記憶の中でも、その半砂漠的風土のなかにいてさえ、なお砂漠にあこがれを持っていたことを思いだす。<sup>84</sup>

安部は「満洲」の砂漠に対して「言い知れぬ魅力」を感じ、「日本にはないものに対するあこがれ」を抱いていた。そして、日本に戻ってきて以降は、砂漠的な風景が「ノスタルジア」と化して記憶の中に留まっているという。

ここで留意すべきは、安部が住んでいた奉天は実際には「半砂漠的風土」ではなく、草原地帯であったという可能性である。山田博光は、安部が反リアリズム作家である点を強調し、奉天を取り巻くのは砂漠ではなく緑豊かな田園都市であり、安部の砂漠に関する言及は「満洲」への郷愁を表すものではないと指摘する<sup>85</sup>。また、安部と同時代に奉天市郊外に居住し、後に安部の演劇作品や映画に出演した俳優の井川比佐志（1936―）も、当時の環境について「畑か草っ原ばかり」<sup>86</sup>であったと語っている。この証言からは、安部の植民地経験と結び付けられる風土は、砂漠ではなくむしろ草原ではないかと考えられる。



【図 13】『緑色のストッキング』の舞台（1974 年 11 月 9 日初演於紀伊国屋ホール）

先行研究では砂漠ほどに取り扱われることはなかったが、安部公房の作品における草原は、平和や自由の象徴とされている。戯曲『緑色のストッキング』は、草食動物の腸を移植される男についての物語である。舞台の壁には、草原の絵や写真パネルが貼られるように設定されている<sup>87</sup>（図 13）。そのような風景を成す牧場の跡地に、新しい腸をもった人類を創造する実験を行うための病院が建築され、病院の医者と助手、看護婦は、照明が当てられた壁の風景を「ミレーの『晩鐘』の雰囲気」<sup>88</sup>で敬虔に見つめる。そして、腸の手術を担当した医者は、その風景を見回し草食について次のようなイメージを羅列する。

医者 （壁の絵を見まわし） 緑……自由……平和……自然……豊穡……融和……旅……雲……太陽……ピクニック……満腹……<sup>89</sup>

ここでは、「自由」「平和」の象徴として草原を見つめる人々の様子が「ミレーの『晩鐘』」に擬えられている。先にも述べたように、植民地「満洲」で見出された大陸の風景は、バルビゾン派の絵画と重ね合わせられることがあった。ミレーの『晩鐘』については、本論文第 2 章において前述したが（図 6）、この風景は単にミレーの描いたバルビゾンの農村を表しているだけではなく、安部が馴染んでいた「満洲」の草原と関連しているだろう。安部は、自身が「満洲」で目にした風景への郷愁をミレーの絵画と相関させ、「自由」「平和」といった言葉に象徴される空間を舞台上に作り出しているのである。そこには、「満洲」の草原地帯で多くの時間を過ごした安部のノスタルジアと同時に、日本内地人が「満洲」に

対して抱いたエキゾティシズムを共有する姿勢が見受けられる。

そして、バルビゾン派の絵画と連繋する草原の光景には、『満洲グラフ』にみられるような羊の群れの存在が想定されていたのではないだろうか。『晩鐘』には羊の姿は見受けられないものの、ミレーは、第2章で述べたよう『夕暮れに羊の群れを連れ帰る羊飼』(図7)や『羊飼いの少女』(図8)等、羊飼いと羊のいる農園を描いた作品を数多く残している。これまで、砂漠や曠野が安部の植民地的記憶を表すものとして語られてきたが、奉天を取り囲んでいた草原や、そこにしばしば共存した羊という動物、そして羊毛やジャケツなどの羊に関する物質もまた、安部の「満洲」の記憶を喚起するものなのである。

このように考えるならば、『終りし道の標べに』執筆後の1948(昭和23)年から、『けものたちは故郷をめざす』発表の1957年の期間における安部公房の植民地的記憶への沈黙という先行研究の指摘は、安部公房の作品内で言及される羊に注目することによって訂正されるだろう。「満洲」が舞台となっているこの二作品の間に発表された「詩人の生涯」では、安部の植民地経験が直接述べられることはない。しかし、手編みの羊毛製品に関する描写には、内地日本人が「満洲」の草原に対して抱いた牧歌的で平和なイメージを内面化した、郷愁や懐古の感情が反映されていたのである。

以上論じてきたように、日本内地及び「満洲」における綿羊飼育の発展や、ホームスパンといった羊毛加工に付随する家庭的情趣、そして「満洲」に構築された牧歌的風景への憧憬と郷愁を踏まえたうえで、「詩人の生涯」における糸紡ぎや羊毛製のジャケツの解釈を行いたい。ここで注目したい点は、「詩人の生涯」において、「めん羊」から作られた「純毛」のジャケツが、外国製のジャケツに対し、凍りついた世界を溶かし人々に希望を与えるという役割を担っている点である。

氷と化した貧しい人々の夢や願望が解け始めたとき、それらは「ジャケツ、ジャケツ」と鳴りながら、喜びに満ちた表現で次のように描写される。

一つかみの雪をつかんで宙にまくと、チキンヂキンと鳴って舞上ったが、落ちるとき、それはジャケツ、ジャケツと鳴って降った。青年は笑った。彼の心が、その唇の小さな隙間から、静かに明るいメロディーになって遠くの空に消えていった。答えるように、あたり一面の雪が、いっせいにジャケツ、ジャケツと鳴りはじめていた。(82)

貧しい人々がかつては着ることのできなかったジャケツを身につけ、「ジャケツを着て笑いながら働きに出る」(83) 明るい風景からは、「ジャケツ」という言葉そのものが希望の象徴として機能している。

「ジャケツ！」喜びと力にあふれた讃歌が、黒くしめった重い土、やっと駈けることをおぼえた三歳の子供のようにころがって走る小川のせせらぎ、島のように残った雪の間からのぞく浅緑の玉、それら春の使者たちに向って高らかに呼びかけられた。春だとはいえ、まだ寒いとすれば、貧しい人たちがジャケツを身につけたのは、やはり美しく素晴らしい光景ではなかったろうか！(83)

ラジオドラマ版の「詩人の生涯」でもまた、最後の場面でジャケツは人々の夢の象徴となる。以前は貧しくジャケツを買うことなど考えてもいなかった人々が、雪から解放された世界でジャケツを買うことを夢みるようになる。そしてこの作品は、「人々から、ジャケツをうばってはいけない……」<sup>90</sup>というセリフで閉じられる。

羊毛製の手編みのジャケツが人々に温かさや喜びを与え、「ジャケツ」という名詞が雪の世界を溶かす労働者の「讃歌」としてうたわれている背景には、前述したようなプロレタリア詩への賛美や詩作活動への称賛の姿勢と相俟って、大規模機械産業に対する手工業への回帰的な姿勢が読み取れる。羊のいる情景やホームスパンという家庭内作業は、日本内地人にとって牧歌的なイメージで語られる憧れの対象であった。それゆえに、「詩人の生涯」では、羊から編み上げられたジャケツを着る者が春を謳歌し、ジャケツは「讃歌」として称えられるのである。そこには、安部が「満洲」の草原の風景に対して抱いた憧憬と郷愁が反映されている。

第1章で触れたように、羊毛産業の変革は近代ヨーロッパの資本主義と産業革命の発展の契機であった。18世紀に考案された飛杼は、手織物加工の作業効率を高め産業革命を牽引することになったが、これと時期を同じくして糸紡ぎの機械化も進んでいた。それ以前には、糸を紡ぐ作業は足踏み式紡ぎ車を用いた家庭内作業が主であったが、1764年頃、織布工ハーグリーヴス（James Hargreaves, 1720–1778）によって錘の数が増えたジェニー紡績機（spinning jenny）が発明された。これによって多量の糸を短時間で供給できるようになり、羊毛製品の製造過程に画期的な変化がもたらされた。羊毛加工はもはや家庭内



手工業（manufacture）ではなく、工場で機械を用いて行われる産業（industry）と化していったのである<sup>91</sup>。これに対して「詩人の生涯」で老婆が回す「糸車」は、家庭の内部で女性が「ユーキッタン」（74）と音を立てながら「踏みつづけ」（74）るものであり、あたかも産業革命以前の糸紡ぎの手工業的側面を描き出している。ここから織られた羊毛製のジャケットは品質が優れているとされる点で、このような製造過程は大規模機械産業に対する、プロレタリアの「ユートピア」世界を体現するものとなっているのである。

しかし安部公房は、「詩人の生涯」の中で、羊毛製品を単に平和や希望の象徴として描くには留めていない。手編みのジャケットと対照的に描かれる、外国産のジャケットについてもみてみよう。

先述した下丸子での反レッド・パージ闘争は、朝鮮戦争下での反戦・反植民地闘争として受け止められたが<sup>92</sup>、1950年を中心に吹き荒れたレッドパージの意義について、ある労働組合新聞では次のように述べられていた。

日本の資本家たちは戦争景気でゴッソリもうけるために、高級官僚どもは自分たちの点数をかせぐために、それぞれ労働者をこきつかって戦争のための仕事を進めている。だが労働者だって昔のようなおとなしい徴用工気分ではない。賃上げだ、税金闘争<sup>【ママ】</sup>ださては戦争のためのボイコットだとタテをついてくる。これを何とかおさえつけなければ日本の戦時動員は失敗してしまう。ここに彼らが「赤追放」をやらねばならない理由があるのだ。<sup>93</sup>

こうした資本家と労働者の間の朝鮮戦争を隔てた搾取の構図は、あたかも「詩人の生涯」の一場面のようなものである。ジャケットの数が多すぎるために「戦争をおこして、どこか外国に売りつけてみたら、どんなものかしら？」（77）と考える「外国からやって来たジャケットを着る階級の男たち」（77）は、貧しい人々が凍りついた後に、「貧しい人たちが動きはじめ、工場が動きはじめて、戦争がおこせなくてはどうにもならない」（80）ことに気が付く。男達は戦争によって利益を得ることを目論んでいたが、工場で働く労働者がいなければ戦争を勃発させることもできないと悟るのである。彼らは凍結を免れるために「外国」（77）に支援を依頼するが、そのときには次のような電話を受け取った。

——ジャケツ、新しい柄物、白黒まだらの思想的虎紋ジャケツを、もう五千枚お買いなさい。さもないと、アトム・ボム五十箇ほどはいかがでしょう？（80）

労働者を支配する資本家は、「外国」との関係においては追従するしかなく、これに背くのであれば原子爆弾の投下に表される核戦争すらも招きかねない。米軍管理下の軍需工場という朝鮮戦争の影が濃密な下丸子の工場街でこの作品は創作されており、「詩人の生涯」のジャケツをめぐる戦争が冷戦という時代背景に基づいたものであることは明らかである。ジャケツは、核戦争を引き起こすような貿易摩擦を生む国際取引上の商品として描かれており、戦前の日本内地や「満洲」の緬羊政策にみられるような戦略物資としての羊毛製品という側面が強調されている。羊毛を産み出す動物である羊は、牧歌的な郷愁を呼び起こす動物、そして戦争を牽引する動物であり、そこには「満洲」の緬羊政策における家庭内手工業の側面と軍需用羊毛増産という、二つの側面が表出しているのである。

羊毛増産計画は、原産種と外来種の交配という、人間による種の改良実験によって戦時下の「満洲」において進められていた。次節では、このような羊の身体の改造を想起させるテーマを扱った作品群について考察する。

## 第6節 「盲腸」「羊腸人類」『緑色のストッキング』——羊の腸を移植される人間

安部公房作品における羊に注目した際には、前節のような羊毛製品以外にも、羊もしくは草食動物の腸を人間に移植するというテーマが繰り返し用いられていることがわかる。このテーマははじめに短篇小説「盲腸」において表れ、次に「羊腸人類」では「盲腸」と同様の内容がテレビドラマとして映像化されている。さらに、戯曲『緑色のストッキング』では、羊とは明示されないものの草食動物の腸の移植の問題が引き続き描かれている。これら三作品以外でも、『箱男』では、羊の腸の酵素を研究する軍医が登場する。

ここでは、腸の移植を主なテーマに据えた「盲腸」「羊腸人類」『緑色のストッキング』のそれぞれの作品内容をみていきたい。

「盲腸」は、1955（昭和30）年4月、雑誌『文学界』に発表された。羊の盲腸を移植することにより人間は草や藁を食べて生きていくことができるようになり、これによって世界の飢餓問題が解決されるという新しい学説の実験台として、長い間失業中だったKは

手術を受けた。手術から三ヶ月後、Kは藁だけの食事を開始する。研究室の教授の指示を受けた後に家に帰ろうとすると、助手の一人である牧がKを呼び止め、Kが参加する予定の飢餓問題に関する学会を前にこの実験が不正なものではないかという不安を語る。

Kは家に帰り、妻と息子とともに夕食をとろうとするが、咀嚼に慣れず藁を噛み砕くのに何時間もかかってしまう。やがてそのような食生活にも慣れていくが、次第に性格にも影響が出始め、Kは無口で「おどおどした鈍い性格」<sup>94</sup>へと変貌していった。飢餓学会を間近に控え、Kの名前は町中に広まり人気を博する。しかし、学会の十日ほど前から急激にKの体力は衰え、栄養失調をきたし、Kの体内から羊の盲腸が取り出される。Kは元の人間の身体に戻ったが、「思想の問題」<sup>95</sup>においては完全に元通りにはならなかった。「外では飢えが、本当の飢えが、再び彼を待ちうけている……」<sup>96</sup>という一文で、小説は閉じられる。

「盲腸」は、1962（昭和 37）年、安部公房の脚本により「羊腸人類」としてテレビドラマ化され上演された<sup>97</sup>。「盲腸」と同様の内容であるが、多少の相違点がみられるため、以下にあらすじを記す。

世界の食糧難に備えるため、研究者Bは羊の腸を人体に移植し、藁や紙を食べて生きていくことのできる「羊腸人類」<sup>98</sup>をつくり出す計画を立てる。Bの研究室と、実験によって羊の腸を移植された羊腸人類Aがテレビ局のインタビューを受ける公開録音の現場が第一幕の舞台である。テレビやラジオといった多くのメディアが、この羊腸人類の誕生に注目し、Bの実験は成功したかのように思われた。しかし、Aは二時間おきに大きく鳴動する腹の音に不安を覚えるとともに、常に反芻をしなければならない。Aの妻や息子も、その鳴動音や食事時間の長さに驚く。

Aはやがて世間の注目を浴び人気者になるにつれ、性格も楽天的になっていった。しかし、その食生活は周囲から奇異の目で見られ、彼をまつり上げたメディアだけではなく、家族からも見放されていく。研究室では、Bの精神までが羊になってしまったのではないかという、実験の失敗が危惧される。次の引用は、「羊腸人類」の創造者である医者が発言である。

B〔教授〕 なにが羊腸人類だ！なにが自由な人間だ！あんなもの、胸くそが悪くなる、まるで化物じゃないか！

C [助手] まあ、そんなこと、先生の苦心の結晶じゃありませんか。

B そうさ、ぼくの責任だよ！だから、よけい、がまんできないんだ！<sup>99</sup>

羊の腸を移植された羊腸人類は、飢餓の不安から「自由な人間」の印象とは程遠く、異質で不気味な「化物」のような存在と化している。創造者自らが被創造物を怪物視し嫌悪する態度は、あたかもフランケンシュタインの物語を想起させる。

「食うことのドレイ」<sup>100</sup>になってしまったAは、自分で作った藁を食べて腹膜炎を患い、学会直前に盲腸を摘出される。Aは顎の発達といった身体上の変化を悔んでおり、「鳴動のブルース」<sup>101</sup>が鳴り響く中で幕が閉じられる。

「羊腸人類」のテレビ放映からさらに十二年後、安部公房は再度羊の腸の移植についての作品を残している。『緑色のストッキング』は、「盲腸」「羊腸人類」をもとに執筆された戯曲である<sup>102</sup>。前二作と比較すると、草食動物の腸が移植されるがそれは羊のものであるとは特定されず、腸を移植された人間は「羊腸人類」ならぬ「人間兎」<sup>103</sup>と呼ばれ、また手術を受ける前の主人公の男の生活がより詳細に描かれている。この戯曲のあらすじは以下の通りである。

舞台には大きな草原の絵が描かれている。何年間も白蟻だけを食べて生き延びてきた老婆が亡くなり、その後に残された牧場を一人の若い医者が買い取る。医者助手は蛋白源としての白蟻に注目しており、牧場では実験用の病室と研究室が増築される。

場面が変わり、女性のストッキングにフェティシズムを持ち、下着泥棒を働く教師の男が盗んだストッキングに触れている。その妻と息子が、最近近所に現れた下着泥棒の噂をする。自分が下着泥棒であることを家族に知られる恐れから冷静さを失った男は自殺をはかるが、医者が彼を救い、高い報酬と引き換えに地球最初の草食人間になるよう勧め腸の手術が行われる。手術後、男の息子とその婚約者が病院を訪れ、男を発見する。男の性癖が暴露される中で、男がかつて盗んだ中で最も気に入っていた緑色のストッキングが上から落ちてくる。

裏方役がインタビュアーとカメラマンに変わり、病院の中にいる人物へのインタビューが始まる。インタビュアーに向って医者は草食人間の存在意義を語るとともに、医者、妻、息子の婚約者がそれぞれ「草食」についてのイメージを述べる。一同に見守られながら男の食事の様子がカメラに映され、そこでは看護婦が藁のパンに羊の盲腸のペーストと、乾

燥白蟻の粉末をかけている。やがて、男の発する言葉は不明瞭になり、発言が意味を成さなくなる。妻は医者に夫の去勢手術を依頼し、夫が集めていた女性用下着を鋏で切り裂く。いつの間にか男はいなくなり、舞台の壁の草原の一点となり走って逃げて行くかのように思われるが、それは単に虫であり壁の上のしみでしかなかった。

上に挙げた三作品に共通するのは、食糧不足の問題を解決するために、羊や草食動物の腸が人間に移植されていることである。他の動物の肉を食べる、あるいは加工することによって飢餓問題を解決しようとする意図は、安部公房の他の作品でも頻繁にみられる。早くは「事業」（1950）において、鼠の品種改良を行って食肉加工する新しい事業の内容が、その事業主である司祭によって詳しく述べられる。司祭は、今後人口の増加が進めば蛋白源としての食糧を確保する必要性が高まると考え、堕胎した胎児や犯罪者の肉など、人間の肉を加工する技術の開発にも着手する予定であるという。人体が容易に食肉へと加工されることにより、貧しい日本において食糧不足の問題が解決されるのであれば、近代的設備を備えた食肉加工場の機械は「ユートピヤ」<sup>104</sup>となると司祭は考えている

「盲腸」では、羊の腸を移植することによって人間は藁や紙、草を食べることができるようになり、これによって世界の食糧不足の問題が解決されると考えられている。このため、最初の実験台となった K は、次のように人類の「飢えからの解放者」として崇高視される。

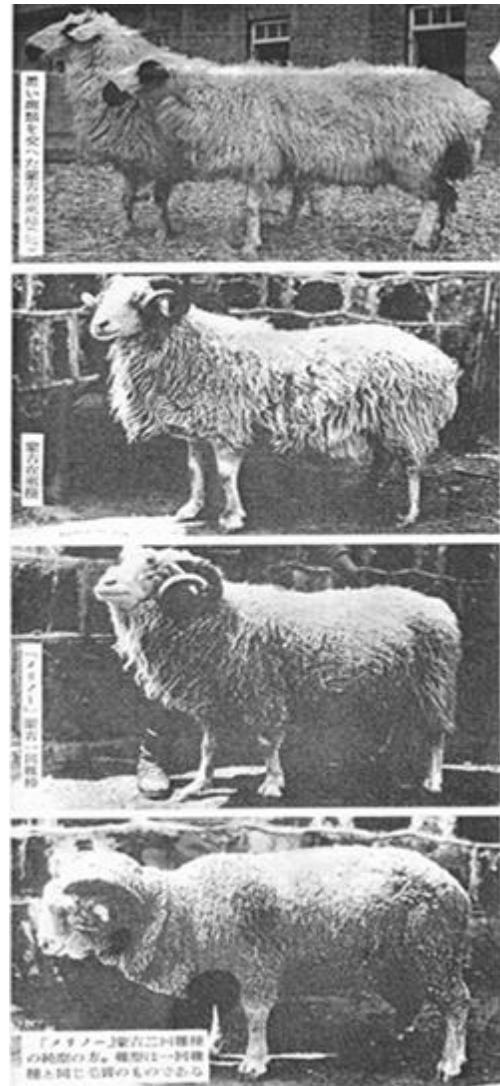
新聞は、ニュースの効果を強めるために、世界飢餓の恐るべき姿を大々的にとりあつかった。世界の人口の九十パーセントは慢性的栄養失調状態にあり、それが繁殖力の増大の原因になり、さらに食糧難の原因になり、この悪循環は行きつくところが人類の破滅以外にないというようなことを書きたてたすぐその後で、K をその飢えからの恒常的解放者としてまつりあげた。<sup>105</sup>

戦後の食糧不足という背景の中で、飢餓や栄養失調の問題の解決策となりえる実験や事業、動物は、まるで「ユートピヤ」を築くような尊いものとみなされたのである。

羊はまた、『箱男』においても、食糧不足問題を解決するための科学実験の対象である。『箱男』に登場する医者は、終戦の前年にある野戦病院の軍医の従卒に配属され、材木から糖分を作る研究に携わっていた。その研究内容は次のように述べられている。

軍医殿の研究について、申し上げますと、戦時中は糖分が極度に不足し、甘味はきわめて貴重なものでありました。材木から糖分が出来れば、これは世界的な大発見でありましょう。軍医殿は、羊が材木を原料とした紙を食べることに着目し、その腸内にセルロースを澱粉に分解する活潑な酵素が存在するはずだと考え、その酵素の分離抽出に日夜没頭しておったわけです。<sup>106</sup>

安部公房が、食糧問題を解決に導く可能性のある動物、さらに科学実験の対象となる動物として羊を描いている点には、戦時下の「満洲」における羊の種の大規模な改良政策の影響があるのではないだろうか。この点については、例えば『満洲グラフ』第11巻2号(1943年2月)の特集記事「羊毛の自給確立へ」に掲載された写真(図14)をみてみよう。これは、満鉄農事試験場に



【図14】「蒙古羊」の改良の様子

における在来種「蒙古羊」とオーストラリア産メリノ種の交配の様子が撮影されたものであり、上から「黒い斑点を交へた蒙古在来種」、「蒙古在来種」、「「メリノー」蒙古一回雑種」、「「メリノー」蒙古二回雑種の純型」と種についての説明がみられる。「満洲」の在来種とメリノ種が交配されることによって、綿羊の毛質や毛量に変化している。ここからは、羊が種の改良実験に適した動物であったこと、科学技術によってその身体や機能を容易に変化させられる動物であったということが明らかである。『箱男』の軍医はある野戦病院にいたと記されているが、当時実験用の羊が大量にいた場所を考えるならば、それは「満洲」であったとも推測されるだろう。

「盲腸」をもとにした三作品や『箱男』の作品に描かれる羊は、前節のような「満洲」の広大な草原を想起させる、牧歌的な平和の象徴とは大きく異なる。腸を移植された登場人物達は、失業によって経済的な不安を抱えているなど、ある側面において社会への適応が困難となっている者達である。そして、羊の腸を移植されることによって、一時は飢餓問題を解決できる存在として世間にもてはやされる。しかし、草食動物の反芻を思わせるその食生活は性格にも影響を及ぼし、家族や医者自身から見放されていく。手編みのジャケットに表される羊の温かさといった肯定的な印象は去り、これらの作品の羊は異質で不気味な、「化物」のような存在となっている。

## 第7節 終わりに

以上、本章では、安部公房が幼少年期を過ごした「満洲」の羊の歴史性に着目し、植民地経験と関連させて安部公房作品にみられる羊の表象の解釈を試みた。「詩人の生涯」における糸紡ぎや手編みの羊毛製のジャケット、『緑色のストッキング』の草原の描写には、安部の植民地経験に基づいた「満洲」への郷愁と、日本内地人が牧歌的風景に対して抱いた憧憬が投影されていると結論付けられる。さらにその背景には、バルビゾン派絵画にみられるような日本内地には存在しない牧畜文化への憧れが共有されていることがわかった。

安部公房は、「満洲」の草原に育った者として、羊の群れが逍遙する風景を日常的に目にしていた可能性がある。その一方で、戦後内地へと引揚げ、大陸の大規模な放牧とは異なる舎飼や農家の家屋での小規模な綿羊飼育の実情を、北海道の母親の生活などから把握していただろう。植民地経験者として、そして内地への引揚げ者として、安部は二つの立場から羊を描いた作家である。そのため、「満洲」の草原や、羊を囲む糸紡ぎの生活風景や羊毛製のジャケットは、郷愁を込めて描出されている。

しかし、一見平和で穏やかにみえる羊の放牧風景は、「満洲」における綿羊飼育政策の軍事的側面によって構築されていたことにも、改めて注意を喚起しておきたい。放牧地の拡大を含む「満洲」の農地開発は、現地の資源を強制的に収奪することによって成立していたのである<sup>107</sup>。

安部公房作品における羊を総観した場合、「詩人の生涯」以降、「盲腸」や「羊腸人類」、『緑色のストッキング』といった作品において、羊や草食動物の腸の移植というテーマが

繰り返し用いられている。これらの作品の羊は、牧歌的なノスタルジーの象徴とは異なる様相を呈しており、戦時中から引き継がれた身体改造技術の実験を施される動物として描かれている。「羊腸人類」の創造主である医者が「化物」と言うように、羊はここでは異質で不気味な動物へと化している。

牧歌的な郷愁を呼び起こす動物、そして奇妙な「化物」という、安部公房作品における羊の表象の二面性には、「満洲」の緬羊政策における家庭内手工業的な側面と軍需用羊毛増産の為の種の改良という、二つの側面が表出している。身体改造のテクノロジーを体現する羊は、安部の他の変形譚や、サイエンス・フィクションとされる作品群と類似するテーマを孕んでいるといえるだろう。

安部公房が提示した羊にまつわる同様の題材は、村上春樹の作品にも見受けられる。次章では、飼育頭数が増加した安部公房の羊の時代を経て、高度経済成長により羊の需要が激減した 1970 年代を舞台とする『羊をめぐる冒険』を取り上げる。下丸子文化集団のプロレタリア詩人達の多くが、工場解雇後の文筆活動を経て広告代理店や出版社といったメディア業界で活躍していったように<sup>108</sup>、『羊をめぐる冒険』の世界では、翻訳会社に勤める主人公が広告業の発展する高度資本主義社会に生きている。安部の作品にみられた羊と種の改良、生体実験との結び付きは、1990 年代のクローン羊の誕生へとつながっていくように、冷戦下のテクノロジーの発展によってさらに色濃く展開されていく。

## 注

---

<sup>1</sup> 安部浅吉は、北海道の旭川中学から、1911 年に満鉄によって設立された奉天南満医学堂に進学し、同校が満洲医科大学に昇格した 1921 年に卒業した。その後同大学で栄養学を専攻し助教授となり、ビタミンの研究により博士号を取得した。1935（昭和 10）年には、勲六等の満鉄副参事として人事局保健課に勤務した。浅吉は奉天では著名な存在であり、満鉄社員間のエスペラント語普及活動においても活躍していた人物である（谷真介『安部公房評伝年譜』新泉社、2002 年、7 頁、呉美姪『安部公房の＜戦後＞——植民地経験と初期テクストをめぐる』クレイン、2009 年、226–227 頁）。

<sup>2</sup> 安部の小学校以来の友人で、東京工業大学に進学していた金山時夫（出生年不詳–1946）である。安部と金山、金山が連れていた母親を亡くした少女は、新潟から朝鮮北部の羅津



---

に渡り、このときの体験が後に戯曲『制服』(1958)の素材となっている。金山は新京へ向かい、1946年7月に病死した(谷、前掲書、17頁)。

<sup>3</sup> 本名真知子。絵画制作の他書物の装幀を手掛けながら、前衛的な舞台美術家としても活躍した。安部公房の『幽霊はここにいる』(1958)、『棒になった男』(1969)や、千田是也(1904–1994)演出の『リア王』(1972)等の舞台美術を担当し、『棒になった男』では第4回紀伊国屋演劇賞を受賞している(谷、前掲書、19頁、木村陽子『安部公房とは誰か』笠間書院、2013年、37、115–120頁)。

<sup>4</sup> ドナルド・キーン「解説」(安部公房『水中都市・デンドロカカリヤ』新潮社、2011年)319頁。

<sup>5</sup> 安部の「変形譚」の第一作品とされる「デンドロカカリヤ」では「変形」という語が用いられているが、『名もなき夜のために』(1948–1949)以降、「転身」から「変形」、「変身」へと語が変化したことが指摘されている(呉、前掲書、40頁)。

<sup>6</sup> 友田義行『戦後前衛映画と文学——安部公房×勅使河原宏』(人文書院、2012年)191頁。

<sup>7</sup> 田中裕之『安部公房の研究』(和泉書院、2012年)141頁。

<sup>8</sup> 岡庭昇『花田清輝と安部公房』(第三文明社、1980年)56頁、山田博光「安部公房——反共同体の文学」(『社会文学』第11号、日本社会文学会、1997年6月)131–132頁。

<sup>9</sup> 田中、前掲書、149頁。

<sup>10</sup> 李貞熙「安部公房の小説における〈変身〉のモチーフをめぐって——初期作品を中心として」(『国際日本文学研究集会会録』第19回、国文学研究資料館、1996年10月)。

<sup>11</sup> 呉、前掲書、第3章「戦後表象としてのメタモルフォーゼ——『壁』論」に詳しい。

<sup>12</sup> 初題「白い恐怖——ラジオのための構成詩」として、1960年11月22日(火)午後11:00–11:30、朝日放送において第15回芸術祭ラジオ部門参加作品として放送された。また、1966年2月26日(土)午後11:05–11:25、NHK第1放送「物語」の時間に、井川比佐志他の語りによって朗読放送されている。「詩人の生涯」と改題され、『現代文学の実験室① 安部公房集』(1970)に収録された。また、1975年1月17日には、デンマーク放送で「詩人の生涯」としてラジオ放送された(安部公房『安部公房全集12』新潮社、1998年、9–10頁)。なお、小説「詩人の生涯」をもとにした川本喜八郎(1925–2010)監督による同

---

題の短篇アニメーション作品（1974）も制作されている。

- 13 安部公房「いかに生くべきか」（『安部公房全集 4』新潮社、1997 年）55 頁。
- 14 安部公房『終りし道の標べに』[冬樹社版]（『安部公房全集 19』新潮社、1999 年）452 頁。
- 15 安部公房「内なる境界」（『安部公房全集 22』新潮社、1999 年）207 頁。
- 16 安部公房「詩人の生涯」[ラジオドラマ]（『安部公房全集 12』前掲書）451 頁。
- 17 同上、449 頁。
- 18 田中、前掲書、143–145 頁。
- 19 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』前掲書、1300 頁。
- 20 平岡篤頼「安部公房・人と作品」（石川淳・三島由紀夫・武田泰淳・安部公房『昭和文学全集 第 15 巻』小学館、1987 年）1044–1046 頁。
- 21 田中、前掲書、143–145 頁。
- 22 谷、前掲書、36 頁。なお、安部の共産党入党に関して正確な時期は明確ではなく、同年 3 月、5 月、6 月など諸説ある（田中、前掲書、106 頁、鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、2007 年、129 頁）。
- 23 ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編『マルクス＝エンゲルス全集 第 24 巻』（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1965 年）240 頁。
- 24 同上、70 頁。
- 25 鳥羽、前掲書、145–151 頁。
- 26 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第六巻』（小学館、2001 年）1115 頁。
- 27 安部「詩人の生涯」[ラジオドラマ] 前掲書、449 頁。
- 28 安部公房『終りし道の標べに』[真善美社版]（『安部公房全集 1』新潮社、1997 年）274 頁。
- 29 安部公房「赤い繭」（『安部公房全集 2』新潮社、1997 年）494 頁。
- 30 安部公房『箱男』（『安部公房全集 24』新潮社、1999 年）103 頁。
- 31 安部公房『他人の顔』[講談社版]（『安部公房全集 18』新潮社、1999 年）397 頁。

---

<sup>32</sup> 鳥羽、前掲書、149 頁。

<sup>33</sup> 下丸子文化集団の成立とその活動については、道場親信「下丸子文化集団とその時代五十年代東京南部サークル運動研究序説」(『現代思想』第 35 卷 17 号、青土社、2007 年 12 月) 43、51–66 頁を参照した。

<sup>34</sup> 呉、前掲書、64 頁、鳥羽、前掲書、166 頁。

<sup>35</sup> この詩に関しては、安部の氏名と「作家」という肩書は墨塗りにして頒布されていた(鳥羽、前掲書、165 頁)。

<sup>36</sup> 高橋元弘「ページ」(『贗月報 安部公房全集 3 サブ・ノート』『安部公房全集 3』新潮社、1997 年) 頁数なし。

<sup>37</sup> 本名清正。1931 年に北辰電機に入社後、「満洲」等での兵役を経て北辰に戻り、1949 年に労組教宣部長に選出された。労働組合演劇部のリーダーとして活躍し、また毎日のように壁絵や風刺画を描き工場内の話題の的となっていた。同年 5 月にレッドパージにより解雇され、この頃からプロレタリア詩人としての歩みを始める。1951 年以降下丸子文化集団では詩作を中心に主導的な役割を果たすが、日雇生活の中胃潰瘍のため入退院を繰り返す日々を送っていたという(井之川巨編『鋼鉄の火花は散らないか 江島寛・高島青鐘の詩と思想』社会評論社、1975 年、288–296、308–309 頁)。

<sup>38</sup> 「外米えり子」は高橋須磨子のペンネームであったことが道場親信によって指摘されている(成田龍一・道場親信・鳥羽耕史・池田雅人「討議 戦後民衆精神史」『現代思想』第 35 卷 17 号、前掲書、211 頁)。高橋は先述した高橋元弘の妻であった(道場、前掲書、54–55 頁)。

<sup>39</sup> 道場、前掲書、57 頁。

<sup>40</sup> 高島青鐘「糸車」(『東京南部サークル雑誌集成 第 1 巻』不二出版、2009 年) 8 頁。

<sup>41</sup> 高島青鐘「母をみつめて」井之川編、前掲書、205–232 頁。

<sup>42</sup> 外米えり子「日給百七十五円」(『東京南部サークル雑誌集成 第 1 巻』前掲書) 51 頁。

<sup>43</sup> 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第 24 集(労働旬報社、1970 年) 426–438 頁。

<sup>44</sup> 同上、437 頁、城戸昇「詩と状況・激動の 50 年代 敗戦から 60 年安保闘争まで」(『現代思想』第 35 卷 17 号、前掲書) 254–258 頁。

<sup>45</sup> 井之川巨「下丸子文化集団——一九五〇年代、労働者詩人の群像」(思想の科学研究会

---

編『共同研究集団——サークルの戦後思想史』平凡社、1976年）185頁。

46 『東京南部サークル雑誌集成 第1巻』前掲書、384頁。

47 「詩」や「詩人」についてのこのような意味付けが当時の共産黨員間でも共通していたことは、1952年のサークル詩誌『列島』（1952–1955）発刊の際の野間宏（1915–1991）の言葉にもうかがえる。野間は、「詩は工場のなかでよまれ、職場でよまれ」「労働者や農村の人たちや、勤労する市民、広い国民のなかから新しくほんとうの詩人が生れてくる」（野間宏「詩誌『列島』発刊について」『野間宏全集 第16巻』筑摩書房、1970年、218–219頁）と述べている。

48 共産党入党後の安部公房は、第2章で言及したように江馬修が主導的論者であった労働者中心の文学雑誌『人民文学』の同調者であった。それにも拘らず、作品の中では労働者の問題を描くことができていないという批判を受けていた（呉、前掲書、100頁）。しかし、「詩人の生涯」に織り込まれたこのようなプロレタリアの詩作活動への賞賛をみれば、この非難は妥当でないといえる。

49 岸良一は、東京帝国大学卒業後、農商務省畜産課勤務、英米留学を経、1934（昭和9）年満洲国林務司長、1937年農林省畜産局長、同馬政局長官となる。1946年日本に帰還、日本緬羊協会初代会長となる。その後日本畜産協会会長などを歴任する一方、戦後における畜産の急速な発展によって畜産政治力の強化が叫ばれる中、1953（昭和28）年参議院議員に当選し緬羊をはじめとする日本畜産界を牽引していった（日本緬羊協会編、前掲書、111頁）。岸に代表されるように、戦後日本での緬羊飼育興隆の背景には旧「満洲」陣営の影響がうかがわれる。

50 日本緬羊協会編、羊をめぐる未来開拓者共働会議編、各前掲書。

51 安部公房「羊腸人類」（『安部公房全集16』新潮社、2003年）412頁。

52 大内、前掲書、287–288頁。

53 日本緬羊協会編、前掲書、17頁。

54 同上、17頁。

55 保坂和夫「詩人の生涯 安部公房のお母さんの質問」（『郷土誌あさひかわ』第37巻1号、あさひかわ社、1996年1月）70–71頁。

56 安部公房「後記——『夢の逃亡』」（『安部公房全集22』前掲書）37頁。

- 
- 57 井口賢三『満洲国に於ける畜牛と緬羊』（北海道帝国大学満蒙研究会編、1937年）1頁。
- 58 以上、「満洲」における緬羊政策については、井口、田村、山本、各前掲書、小林英夫『「満洲」の歴史』（講談社、2008年）、日本学術振興会編『満洲の牧羊』（日本学術振興会、1937年）、山室信一『キメラ 満洲国の肖像』（中央公論社、2004年）を参照した。
- 59 田村、前掲書、240–243頁、高石啓一「羊肉料理「ジンギスカン」の一考察」（『畜産の研究』第50巻6号、養賢堂、1996年6月）710–713頁、宮崎昭『食卓を変えた肉食』（日本経済評論社、1987年）140頁。
- 60 「羊肉売り出す 豚の半値に人気集まる」（『朝日新聞』1959年12月13日朝刊第4面）、  
「商品の知識 マトン（羊肉）」（『朝日新聞』1963年6月9日夕刊第4面）。
- 61 宮崎、前掲書、51–54、88–94、139–141頁。
- 62 竹葉丈「絵画の効果、写真の機能——写真家・淵上白陽と『満洲グラフ』（財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第15巻、ゆまに書房、2009年）129頁。『満洲グラフ』のジャーナリズム的役割と芸術的要素についての先行研究には、竹葉丈・三浦乃利子監修・編集『異郷のモダニズム 淵上白陽と満洲写真作家協会』（名古屋市美術館・毎日新聞社、1994年）等がある。
- 63 例えば、羊の毛だけではなく乳や皮をどのように利用するかなど羊の様々な用途を示した表（第11巻2号）や、羊の毛刈りの様子を写した写真（第5巻7号）等がみられる。
- 64 『満洲グラフ』第6巻11号（1938年11月）。引用は、財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第5巻（ゆまに書房、2009年）246頁。
- 65 『満洲グラフ』第11巻2号（1943年2月）。引用は、財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第13巻（ゆまに書房、2009年）164頁。
- 66 井村哲郎『満洲グラフ』と満鉄の弘報活動」（財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第15巻、前掲書）117頁。
- 67 『満洲グラフ』第11巻12号（1943年12月）。引用は、財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第15巻、前掲書、66頁。
- 68 『満洲グラフ』第4巻12号（1936年12月）。引用は、財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第3巻（ゆまに書房、2008年）231頁。
- 69 井村、前掲書、117頁、竹葉、前掲書、129頁。

- 
- 70 『満洲グラフ』第7巻1号(1939年1月)の「満洲写真作家協会展作品特集」等。
- 71 竹葉、前掲書、132頁。
- 72 『満洲グラフ』第7巻1号(1939年1月)。引用は、財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第6巻(ゆまに書房、2009年)25頁。改行は原文のままとした。
- 73 このような心情は、ミレーの『種播く人』(図9)の構成に類似した淵上の写真作品『種蒔き』(1935)に見受けられる(竹葉、前掲書、144頁)。
- 74 原田平作「日本人とミレー」(山梨県立美術館編『ミレー展ボストン美術館蔵開催記念シンポジウム報告書』山梨県立美術館、1986年)12頁。
- 75 波瀾剛『越境のアヴァンギャルド』(NTT出版、2005年)第8章「故郷を創造する引揚者——安部公房とシュルレアリスム」、第9章「高度成長期のアヴァンギャルド」に詳しい。
- 76 呉、前掲書、13頁。
- 77 安部公房「安部公房年譜」(『安部公房全集 19』前掲書)128頁。安部公房の出生時の原籍は、北海道川上郡字近文東鷹栖村であった(谷、前掲書、7頁)。
- 78 呉、前掲書、37頁。
- 79 同上、31頁。
- 80 同上、33頁。
- 81 同上、26頁。
- 82 佐々木基一「解説」(安部公房『壁』新潮社、1988年)254-255頁。
- 83 同上、254-255頁。
- 84 安部公房「砂漠の思想」(『安部公房全集 8』新潮社、1998年)108頁。
- 85 山田、前掲書、129頁。
- 86 鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』(森話社、2013年)165頁。
- 87 安部公房『緑色のストッキング』(『安部公房全集 25』新潮社、1999年)153頁。
- 88 同上、158頁。
- 89 同上、192頁。
- 90 安部「詩人の生涯」[ラジオドラマ]前掲書、459頁。
- 91 山根『羊毛文化物語』前掲書、281-309頁。

---

<sup>92</sup> 道場、前掲書、43 頁。

<sup>93</sup> 全日本金属労働組合中央機関紙『労働者』1950 年 9 月 29 日。引用は、大原社会問題研究所編、前掲書、436 頁。

<sup>94</sup> 安部公房「盲腸」(『安部公房全集 5』新潮社、1997 年) 76 頁。

<sup>95</sup> 同上、77 頁。

<sup>96</sup> 同上、77 頁。

<sup>97</sup> 放送日は 1962 年 11 月 10 日(土)午後 9:30-10:00 で、NET テレビの前衛ドラマ・シリーズ「お気に召すまま」の第 18 回として放送された(安部公房『安部公房全集 16』前掲書、9 頁)。

<sup>98</sup> 安部「羊腸人類」前掲書、403 頁。

<sup>99</sup> 同上、406 頁。

<sup>100</sup> 同上、411 頁。

<sup>101</sup> 同上、413 頁。

<sup>102</sup> 『緑色のストッキング』は、1974(昭和 49)年 11 月 9 日から 30 日にかけて、安部公房スタジオ公演及び第 6 回紀伊国屋演劇公演として新宿の紀伊国屋ホールにおいて上演された。出演者は田中邦衛(1932-)、山口果林(1947-)等であった。第 26 回(1974 年度)読売文学賞(戯曲賞)受賞作品である(安部公房『安部公房全集 25』前掲書、5 頁)。

<sup>103</sup> 安部『緑色のストッキング』前掲書、189 頁。

<sup>104</sup> 安部公房「事業」(『安部公房全集 2』前掲書) 178 頁。

<sup>105</sup> 安部「盲腸」前掲書、77 頁。

<sup>106</sup> 安部『箱男』前掲書、161 頁。

<sup>107</sup> 野田公夫編『日本帝国圏の農林資源開発―「資源化」と総力戦体制の東アジア―』(京都大学学術出版会、2013 年) 219 頁。

<sup>108</sup> 道場、前掲書、87-88 頁。

## 第5章 村上春樹『羊をめぐる冒険』 ——「迷羊」の継承と三人の「羊つき」——

### 第1節 はじめに

『三四郎』からおおよそ七十年後の1982年、日本における羊の歴史を振り返り一匹の羊を探し求める物語が発表された。村上春樹の『羊をめぐる冒険』である。

『羊をめぐる冒険』は、日本文学の中でも羊に焦点を当てた数少ない作品の一つであるが<sup>1</sup>、村上春樹のその他の作品においても羊に関する言及が頻繁に見受けられる。本章では、村上が作品に羊を登場させた理由を検証するとともに、『羊をめぐる冒険』における羊の表象について、本論文でこれまでに論じてきた日本文学における羊の表象をどのように継承しているのか、またどのような新しい表象を生じさせているのかを考察する。そして、『羊をめぐる冒険』に登場する羊博士・先生・「鼠」の三人に共通する「羊つき」という現象について、小説内で描かれる社会背景と合わせて分析することにより、羊が身体や精神を管理する精神医学の権力と科学テクノロジー、高度資本主義社会の消費の象徴となっていることを明らかにする。

1978（昭和53）年を舞台とする『羊をめぐる冒険』のあらすじは次のようなものである。主人公の二十九歳の「僕」は妻と一ヶ月前に離婚し、空虚な生活を送っていた。しかし、広告制作の仕事を通じて知り合った耳のモデルの女性と交際を始め、彼女から羊に関する大事な電話があると告げられる。すると、「先生」と呼ばれる右翼の大物の秘書が「僕」の会社に現れる。秘書は、「僕」が担当した生命保険会社のPR誌に掲載された羊の群れの写真の入手先を知りたいと言う。その写真は、「僕」の故郷の友人で行方のわからなくなっていた「鼠」からの手紙に同封されていたものであり、「鼠」はそれが人目に触れることを望んでいた。その写真には、先生に取り憑き超人的な力を与えた、背中に星の斑紋のある伝説の羊が写っていた。羊は今では先生を離れ、先生は脳にできた血瘤のために意識不明の状態に陥っていたが、秘書はその羊の秘密を知りたいという。「僕」は写真の入手先を教えないが、その羊を一ヶ月以内に見つけ出すことができなければ抹殺されると秘書から言い渡される。



「僕」は勤務先の翻訳事務所の経営を友人に託し、羊を探すために耳のモデルの彼女と北海道を訪れる。偶然宿泊した札幌の「いるかホテル」で、かつて農林省の官僚であった「羊博士」と呼ばれる人物に出会い、彼が「満洲」にいた際にその羊に取り憑かれたこと、その後羊が先生に乗り移ったことを知る。羊博士は写真の風景が北海道の「十二滝町」の放牧場であることを伝え、「僕」は「鼠」一家の別荘が北海道にあったことを思い出し十二滝町へと向かう。別荘には誰もいなかったが、「僕」は「鼠」が戻って来ると信じて待つことにする。しかし「僕」が目覚めると、耳のモデルの彼女は姿を消していた。次の日、羊の皮をまとった「羊男」が別荘にやって来る。「僕」は別荘の書棚の本から、先生が十二滝町の出身であり、「鼠」が彼の存在を知っていたことに気付く。そして、この羊探しの道程が全て仕組まれたものであったことを知り、怒りを露わにする。

次の日、別荘に「鼠」が現れ、故郷を離れてこの別荘にやって来た理由や、伝説の羊が取り憑いたこと、そして「僕」が来る一週間前に自殺したことを告げる。「鼠」は「僕」に、翌日柱時計の時間を合わせ、時計の裏にあるコードをつないで別荘を去ってほしいと告げる。「僕」は言われた通りに別荘を後にし下山するが、その途中で先生の秘書と出会う。秘書は、一週間前に先生が亡くなったことを告げ、「僕」に多額の報酬を手渡し別荘へと向かう。「僕」は別荘が爆発し黒い煙が立ち上るのを見ながら、十二滝町を去ってゆく。

『羊をめぐる冒険』では、「僕」が羊を探す冒険のプロットに加え、日本における羊の歴史や、「十二滝町」の農業開拓と牧羊業の歴史が詳細に語られる。本章では『羊をめぐる冒険』におけるこのような歴史記述にも着目して、論を進めていくこととする。

以下、本章での『羊をめぐる冒険』からの引用は『村上春樹全作品 1979～1989② 羊をめぐる冒険』（講談社、1990年）によるものとし、（ ）内に引用ページ数を示す。

## 第2節 観光牧場の誕生——高度経済成長期におけるイメージとしての羊の消費

はじめに、村上春樹作品に描かれる羊と、1960年代以降の日本における羊をめぐる状況を、高度経済成長に伴う社会構造の変革と合わせて概観する。二つの戦争、そして占領期を通して日本における緬羊飼育は発展し、前章で述べたように1957年に羊の頭数は史上最高の百万頭を記録した。しかし、その年を境に羊は急速に日本国内から姿を消し始め、羊の表象も変化していく。

村上春樹の作品では、動物や動物の名称が象徴的に用いられることが多々ある<sup>2</sup>。『羊をめぐる冒険』の羊や登場人物の名前である「鼠」、猫の「イワシ」の他にも、『ねじまき鳥クロニクル』（1992–1995）の「ねじまき鳥」や猫の「サワラ」、『海辺のカフカ』（2002）の「猫殺し」等、動物に関わる描写は数多い。また、村上は動物に愛着を持っており<sup>3</sup>、世界中の様々な動物園を訪れている<sup>4</sup>。村上の初期三部作、『風の歌を聴け』（1979）・『1973年のピンボール』（1980）・『羊をめぐる冒険』に共通する主人公であり、大学時代生物学を専攻したという「僕」も、動物が好きであると語っている<sup>5</sup>。

村上が描く動物の中でも、羊は特に顕著な存在である。村上作品において羊が最初に登場するのは、1980（昭和 55）年 9 月に雑誌『文学界』に掲載された小説「街と、その不確かな壁」（1980）であり、作品の終盤で次のように羊と牛について言及されている。

僕はこれまでに余りに多くのものを埋めつづけてきた。

僕は羊を埋め、牛を埋め、冷蔵庫を埋め、スーパー・マーケットを埋め、ことばを埋めた。

僕はこれ以上もう何も埋めたくはない。

しかしそれでも僕は語りつづけねばならない。それがルールだ。<sup>6</sup>

ここで記されている羊や牛、「ことば」を「埋める」という行為は、1960 年代後半の学生闘争から十年近くの沈黙を経て小説の執筆を開始した村上の活動経緯を表したものであり、このような行為の象徴性がその後の村上の作品全体を通じて描かれていることを、久居つばきは指摘している<sup>7</sup>。

羊が登場する第二作目の小説は、1982 年 1 月に雑誌『トレフル』に掲載された短篇作品「彼女の町と、彼女の緬羊」（1982）である。これは、神戸出身の「僕」が同郷の友人を訪ねて札幌に向かい、ホテルのテレビで町の緬羊業について報告する番組を目にするという話であり、同年 8 月に『群像』に発表された『羊をめぐる冒険』と内容が類似している。『羊をめぐる冒険』では、背中に星の斑紋のある伝説の羊の他に、羊に関して博識の羊博士や、羊の皮をかぶった羊男が登場する。この羊男については、『羊をめぐる冒険』の中で挿絵が掲載されているが<sup>8</sup>（図 15）、同年 6～11 月『トレフル』に掲載された「図書館奇譚」（1982）、翌年『海』に掲載された「シドニーのグリーン・ストリート」（1983）にも

同じ容貌で記述される。また、前期三部作の続編と考えられる『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）にも羊男は再度姿を現し、次々に起こる事件や登場人物同士を「繋げる」<sup>9</sup>役割を果たしている。また、『羊をめぐる冒険』で詳述される日本の羊の歴史は、『ねじまき鳥クロニクル』において、陸軍参謀部として「満洲」に赴いた綿谷ノボルの伯父の挿話として再度語られる。『羊をめぐる冒険』以降の作品では、挿話として羊が登場する箇所もみられる<sup>10</sup>。このように、村上作品の他の動物に比較すると、羊に関する記述の量の多さには目を引くものがある。



【図 15】羊男の挿絵

しかし、先述のように、村上が 1980 年代に数多くの作品で羊を登場させたこととは反対に、日本では羊の飼育頭数は急激に減少していた。綿羊飼育の絶頂期であった 1957 年の前年である 1956 年（昭和 31）は、経済白書によって「もはや「戦後」ではない」と総括された年であり、日本経済は高度成長期に入る。賃金・所得の急上昇によって大衆消費時代がもたらされ、60 年代以降には、余暇時間の増大に伴うレジャー・ブームが起こり、レジャー関連の消費支出も増大していった<sup>11</sup>。高度経済成長期におけるこの消費革命に大きく翻弄されたものの一つが、羊である。経済成長期には農家から働き手が都心部へ流れ、羊を育てる労働力が著しく減少した。さらに、グルメ文化の勃興とともに羊の食肉としての需要が高まり、羊を飼育していた農家は、すぐに金銭に変換できることから羊毛生産用の羊を羊肉として手放した。羊は羊毛を産する動物としてよりも、食肉としての換金価値が重視されるようになったのである。1961（昭和 36）年には羊毛の輸入が自由化され、また化学繊維の技術も発達し、忽ちのうちに日本国内の綿羊飼育頭数は減少していった。1957 年にピークを迎えた羊の数は、その十年後の 1967 年には約十万頭にまで激減した。さらに、その約十年後である 1976（昭和 51）年には一万頭弱になり、現在でも三万頭程度の頭数が維持されているのみである<sup>12</sup>。

1978 年を舞台とする『羊をめぐる冒険』について、村上春樹は次のように羊を扱った理由を述べているが、その頃には日本人が実際に羊を目にする機会はほとんどなく、存在の

意義が曖昧な動物と化していたことがわかる。

羊というものが、われわれの生活にどう関わっているのかということは、ぼくにもよくわからなかったわけです。日本に羊なんかいないと思ってる人もいるし。でもいるわけですよね。どこにいたっていうと、マザー牧場とか北海道とかにいたりしてさ、ぼくらの日常レベルでは関わっていないわけですよね。そういう動物にいったいどういう存在意義があるのか（笑）という疑問は前からあって……だって羊なんて見たことないでしょ？実際に。<sup>13</sup>

村上のこの発言からうかがえることは、『羊をめぐる冒険』が発表された 1982 年には、日本の羊は羊毛生産としての物質的価値を失い、レジャーや余暇の一つとして消費されるようになっていたという事実である。ここで村上が言及しているマザー牧場とは、1960 年に前田久吉（1893–1986）<sup>14</sup>によって設立された日本初の牧場型テーマパークである。都心からの交通の利便性も整備され関東圏の景色が見渡せる千葉県いずの山地に位置するこの牧場は、畜産業による同地の農業開発が見込まれるとともに、遊園地施設を備えた観光牧場として発展していった<sup>15</sup>。

マザー牧場の誕生に表されるように、戦中から戦後にかけて行われた有畜農業が不振に陥った 1960 年代には、飼育関係者の間で観光畜産の振興が進められ、牧場のテーマパーク事業が開始された<sup>16</sup>。エッセー『日出る国の工場』（1987）の取材で村上春樹が訪問した岩手県の小岩井農場も、そのような牧場の一つである<sup>17</sup>。畜産を主な事業としていた小岩井農場では、観光客の増加に伴い、1962 年に遊園地の設置、レストラン経営などの観光事業に取り組み始めた。レジャー・ブームや交通網の整備により農場への入場者数は増加の一途を辿り、観光事業は畜産部門の不振を支え農場の経営を担う支柱となっていった<sup>18</sup>。第 4 章で論じたような日本人の牧歌的風景への憧れが、戦後 60 年代の観光産業においても見受けられるのである。

このような牧場型テーマパークで飼育されている動物の中でも、特に羊は、ジンギスカン料理やふれあい広場、羊追いショーなどで、牧場の見所の一つとされている<sup>19</sup>。国内においてもはや原毛生産という役目を担わなくなった羊は、レジャーや余暇の時間を彩る存在として消費される動物へと変化していったのである。

牧場の観光事業については、『羊をめぐる冒険』の十二滝町の放牧場においても示唆されている。木材業が衰退し経済的に疲弊した十二滝町の役場の職員は、「鼠」の別荘にある放牧場を「買い取って観光牧場にでもすればいい」(273)と考えている。また、「鼠」の出現を待ちながら別荘に籠る「僕」は、そこで山小屋風のレストランを開き、「羊の群れと青い空を眺めながら食事をするというのも悪くない」「きっとはやるに違いない」(321)と想像しながら料理をしている。そこでは、「家族づれは草原で羊と遊べばいい」(321)と「僕」が考えるように、草原や羊は余暇の一要素として消費されるものとなっている。

『羊をめぐる冒険』発表の翌年である 1983 (昭和 58) 年に行われた「国民生活に関する世論調査」は、日本人の生活の力点が、住生活からレジャーや余暇中心の生活に移行したことを示している<sup>20</sup>。この年の 4 月、マザー牧場と同じく首都圏近郊の千葉県に開園したのが、東京ディズニーランドである。ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard, 1929-) は、『シミュラクルとシミュレーション』(1981) の中で、ディズニーランドを「錯綜と幻影の遊び」<sup>21</sup>、「空想の再生空間」<sup>22</sup>であると論じる。このことは、マザー牧場や小岩井農場に代表される牧場型テーマパークにも当てはめられるだろう。人工的に形成された自然と融合するように作られた牧場は、都市生活と隔たり、空想の空間として享受された。ここに生きる羊もまた、現実と空想の世界の境界を曖昧にさまよう動物である。

北海道や東北地方などの一部の地域を除き、郊外の観光牧場でしか羊を見られなくなったような状況下<sup>23</sup>で、日本人の羊に関するイメージは国内のレジャーや余暇と結び付き、第 1 章で論じたような、近代日本における羊のイメージと同様に空想に留まるものでしかなくなっていた。このような背景の中、『羊をめぐる冒険』では、日本人の羊に関する認識は「イマジナティブ」(146)で「おそろしく低い」(146)ものであると語られる。

しかし、『羊をめぐる冒険』の羊は、レジャーや余暇の印象を与えるものとして描かれるだけではない。この作品の羊は、本論文においてこれまでに論じてきたような日本近代における政治的・軍事的行為を思い起こさせるものでもある。この点において、村上は、1970～80 年代当時の羊のイメージだけではなく、日本文学における羊の表象、特に『三四郎』の「迷羊」を一部念頭に置いて『羊をめぐる冒険』を執筆したのである。以下、第 3 節では村上の夏目漱石に関する言及を考察し、『三四郎』の「迷羊」の表象が『羊をめぐる冒険』へと受け継がれている様子を明らかにする。

### 第3節 『三四郎』からの影響と日本近代の象徴としての羊

前述したように、村上春樹の作品においては羊が数多く登場するが、村上はなぜ羊に着目したのだろうか。この疑問については、先に挙げた『幻想文学』のようにいくつかのインタビューによって取り上げられているが、それに対する村上の解答はどれも曖昧である。村上は「文学的意味はない」「何らかのきっかけ」<sup>24</sup>によって羊を登場させたと語っているが、その動機は明らかにされていない。

このように村上が羊を取り上げた曖昧な理由について、柴田勝二は、村上が漱石の『三四郎』に着想を得たのではないかと推測している<sup>25</sup>。柴田は、「鼠」のいる「穴倉」(365)と、『三四郎』で物理学者の野々宮が籠っている研究室の「静かな暗い穴倉」<sup>26</sup>という表現に表される閉塞的状况や、「僕」が飼っている名前のない猫と漱石の『吾輩は猫である』の猫を比較し、『羊をめぐる冒険』と『三四郎』及び漱石作品との類似点を列挙する。『羊をめぐる冒険』と『三四郎』との関連性は、村上と対談を行った河合隼雄(1928-2007)によっても示唆されている。河合は心理療法の関連から村上作品を読み始めたというが、『羊をめぐる冒険』を読みながら若い頃に読んだ『三四郎』を思い出したと語っている<sup>27</sup>。

柴田や河合が『羊をめぐる冒険』の羊から『三四郎』を連想しているように、『羊をめぐる冒険』の羊は『三四郎』の「迷羊」が前提とされているのではないだろうか。その推測を裏付ける証拠として、村上による漱石への言及を取り上げて論じたい。

村上春樹については、アメリカ文学を好んで読み翻訳活動を行ってきたことから、アメリカ文学の影響が多々指摘されている<sup>28</sup>。一方、村上と日本文学との関係については、村上は日本文学の「アレルギー」<sup>29</sup>と言うほどに日本の小説はほとんど読んでいなかったという<sup>30</sup>。そのような村上の日本文学への視点が変化する契機が、1991(平成3)年から1995(平成7)年のアメリカ滞在である。村上はプリンストン大学の客員研究員・客員講師として二年間ニュージャージー州に在住し、大学院の日本文学セミナーを担当した。これにより、日本文学を「系統的に突き詰める」<sup>31</sup>という体験を得、村上の日本語・日本文学に対する姿勢に変化が現れたのである。

村上はアメリカ滞在時に『ねじまき鳥クロニクル』を完成させるが、その創作に際しては、漱石の『門』の夫婦のイメージがあったと語っている<sup>32</sup>。また、それ以前に彼が四十歳を迎えた1989年頃にも、「最近漱石を読み出したが、彼はナチュラルだと思う。自分の

言葉、文章をもっていて読ませるし、感じさせる。硬直していない」<sup>33</sup>と肯定的な意見を述べている。

『ねじまき鳥クロニクル』以降の村上の作品内では、漱石作品との間テキスト性が明瞭にうかがえる。例えば、『スプートニクの恋人』（1999）では、主人公の男性が電車で一人旅をしていた際に年上の女性と出会い一夜をともにした経験を、「なんだか『三四郎』の冒頭の話みたいだなとそのときに思った」<sup>34</sup>と語る。『三四郎』冒頭部で、三四郎が九州から東京へ行く途中の名古屋で見知らぬ女性と旅館の同室に宿泊したことを、自己の経験に重ね合わせているのである。『海辺のカフカ』においても、漱石作品への言及がみられる。主人公の少年田村カフカは「全作品を読破しようと思うくらい漱石を気に入って」<sup>35</sup>おり、家出先の図書館で漱石全集に読み耽っている。その中でも、『三四郎』と『こゝろ』（1914）を「完成された作品」<sup>36</sup>として評価している。

夏目漱石と村上春樹という二人の作家に注目した半田淳子の『村上春樹、夏目漱石と出会う——日本のモダン・ポストモダン』（2007）では、このように1995年以降の村上の作品において、漱石との関連が顕著になったと論じられている<sup>37</sup>。しかし、村上作品の翻訳でも知られるジェイ・ルービンの訳により出版された『三四郎』の英訳本 *Sanshirō* (2009) に付された村上の序論からは、彼の漱石への関心はより早い段階から表れていたものであることがわかる。村上は、学生結婚をした1972（昭和47）年頃の貧しい生活の中で、日本文学専攻の妻が所持していた漱石の作品を読んでいた。学生闘争終焉後の逼迫した時代において、漱石の小説を読むことが新たな意味を持ち始めたと村上は述べており、それが彼にとって第一の「漱石体験」（“Sōseki experience”）<sup>38</sup>であったという。村上の『三四郎』に対する評価の背景には、このような個人的な読書体験がある。彼にとって『三四郎』とは、貧しい中でも若く気軽に生活していた新婚当時の日々を想起させるものであった。また、三四郎が九州から上京する場面を、村上自身が神戸から東京に向かった姿とオーバーラップさせてもおり、総じて『三四郎』に好意的な評価を下している<sup>39</sup>。

このように、日本の小説をほとんど読んでこなかったと語る村上が、実際には夏目漱石の作品を好んで読んでいたことが明らかになった。村上が『羊をめぐる冒険』の中で羊を登場させた理由の一つには、『三四郎』に対する意識があったといえるだろう。このことによって、村上は、作品の舞台となっている1970代や、作品が発表された1980年代の羊のイメージを作品に用いるだけでなく、日本近現代文学における羊の表象の歴史を継承し

ていると考えられるのである。

村上は羊の表象の歴史に意識的であることによって、羊が日本近代の軍国主義政策によって進められたものであり、緬羊飼育の失敗に表される性質が日本の現代社会にも引き継がれているという認識を得ている。村上は『羊をめぐる冒険』の執筆動機について、1992（平成4）年11月に行われたワシントン州立大学の講演で次のように語っていた。

僕にわかったことは、羊というのは日本に昔からいる動物ではなかったということでした。羊は明治維新の折に外国から珍しい動物としてもたらされて、日本政府によって政策として飼育を奨励され、そして今では経済効率の悪さからほとんど見捨てられかけている動物であるということを知りました。羊の運命というものは、ある意味では日本という国家の無謀なほどの速さの近代化の、ひとつの象徴でもあったのです。<sup>40</sup>

ここで述べられている近代化の象徴、「経済効率の悪さ」を示す動物としての羊という認識は、『羊をめぐる冒険』の中で、羊の歴史を「日本の近代そのもの」と語る先生の秘書の言葉に表されている。

今日でもなお、日本人の羊に関する意識はおそろしく低い。要するに、歴史的に見て羊という動物が生活のレベルで日本人に関わったことは一度もなかったんだ。羊は国家レベルで米国から日本に輸入され、育成され、そして見捨てられた。[中略] 可哀そうな動物だと思わないか？ まあいわば、日本の近代そのものだよ。（146）

このように村上の羊への関心の根底には、日本が歩んだ近代化の過程の象徴という意識があることがわかる。

『羊をめぐる冒険』における羊の象徴性は、戦争の敗北によって近代日本の「愚劣」な過去とみなされる。次の羊博士の言葉をみてみよう。

「日本の近代の本質をなす愚劣さは、我々がアジア多民族との交流から何ひとつ学ばなかったことだ。羊のこともまた然り。日本における緬羊飼育の失敗はそれが単に羊毛・食肉の自足という観点からしか捉えられなかったところにある。生活レベルでの



思想というものが欠如しておるんだ。時間を切り離した結論だけを効率よく盗みとろうとする。全てがそうだ。つまり地面に足がついていないんだ。戦争に負けるのも無理はないよ」(242)

ここで羊博士が「日本の近代の本質」として述べているものは、「アジア多民族との交流から何ひとつ学ばなかったこと」、そして「戦争」であることがわかる。羊博士は、「日本の近代の本質をなす愚劣さ」を、日本の軍国主義に見出しているのである。

『羊をめぐる冒険』では、羊博士自身がそのような日本の近代化と軍国主義の相関性を象徴している。彼は東京帝国大学農学部の優等生であり、「朝鮮と台湾を一体化した広域的な計画農業化」(230)に関するテーマで卒業論文を修め、農林省入省後には朝鮮半島における稲作の調査を行っていた。そして、陸軍関係者から「来るべき中国大陸北部における軍の大規模な展開に向けて羊毛の自給自足態勢を確立していただきたい」(231)との依頼を受け、現地視察のため「満洲」に渡る。彼が学んでいた農学は、日本の領土拡張を促進するものであり、それゆえに周囲から評価されたのである。羊が体内から抜け出た後には農林省を辞し、牧羊を営みながら静かな生活を送ることになった。松枝は、「羊博士は、戦前はアジアへの進出、つまりは日本の大陸進出を直接的に目論んだ人物であり、それゆえに戦後は隠蔽されざるを得ない人物」<sup>41</sup>であると述べている。

羊博士が農業の研究によって日本の軍国主義政策を牽引したこととは反対に、そのような時代の趨勢には同調できずにいたにも拘らず関与することになってしまった人物もいる。それは、「僕」が読む「十二滝町の歴史」という本に登場するアイヌ青年である。アイヌ青年は、1880（明治 13）年に北海道にやって来た最初の開拓民を導き、彼らとともに開拓地で農業を開始した。厳しい気候条件の下で畑作を行っていたが、当地の農業の発達は芳しくはなかった。そのような中で、村の近くの台地が牧草地として適していることが判明し、1902 年に村営の緬羊牧場が設営される。それは、間近に迫った日露戦争に備え、「来るべき大陸進出に備えて防寒用羊毛の自給を目指す軍部が政府をつつき、政府が農商務省に緬羊飼育拡大を命じ、農商務省が道庁にそれを押しつけた」(260) からであった。

この村での緬羊飼育に最も興味を持ったのが、アイヌ青年である。彼は役人から緬羊の飼育法を学習し、すぐに有能な羊飼いとなり羊の数は増加した。しかし、牧羊業の開始後間もなく、彼は戦争によって息子を失っている。日露戦争が始まるとアイヌ青年の息子は

徴兵され中国大陆の前線に送られたが、そこで「羊毛の軍用外套を着て」(260) 戦死した。アイヌ青年は役人が村に出現し始めた頃から、納税や徴兵といった近代社会システムの必要性が理解できず、また「どうして外国まででかけて行って戦争なんかするんですか？」(260) と人々に訊ねまわっていた。このように軍国主義とは正反対の立場にいたアイヌ青年ではあるが、息子が着ていた外套は軍用羊毛増産政策によって生産されたものであり、羊飼いのアイヌ青年は十二滝町において自ら進んでこの事業に関与していたのである。

緬羊政策と軍国主義との関係については、『ねじまき鳥クロニクル』第3部「鳥刺し男編」においてより詳細に語られる。この作品には、「羊を数える、輪の中心にあるもの」と題された章があり、これは『羊をめぐる冒険』第4章「羊をめぐる冒険Ⅰ」「羊を数える」というタイトルと類似している。『羊をめぐる冒険』の「羊を数える」では、「僕」が生命保険会社の広告に用いた写真を見ながら、文字通りそこに写っている羊の数を数えながら眠ってしまう。しかし『ねじまき鳥クロニクル』の「羊を数える」では、陸軍参謀本部による寒冷地特殊被服研究で行われた、緬羊飼育計画について記述される。主人公のトオルは、妻クミコの兄で現在では政界のキーパーソンとなっている綿谷ノボルについて知るため、彼が寄稿していた雑誌を調査する。そこには、陸軍学校を卒業してロジスティックス(兵站学)を専門とする彼の伯父について、次のような記事が掲載されていた。

彼はそこで帝国陸軍が昭和の初期に、予想されるソビエトとの全面戦争に備えて防寒着の大量調達の可能性を検討していたことについて書いていた。[中略] 参謀本部には対ソビエト戦争仮想研究チームが設置され、兵站部門においては寒冷地特殊被服の本格的な研究がおこなわれた。[中略] 研究班はとりあえず十個師団の兵隊に行き渡らせる有効な防寒被服を製作するために必要な綿羊の数を試算し(眠る暇もないくらい羊の数を勘定している、というのがその班で流行った冗談だった)、また加工に要する設備の規模を試算し、報告書を提出した。<sup>42</sup>

ここでは、綿谷ノボルの伯父が、対ソビエト戦に向けた羊毛需給調査において「羊を数える」ために「満洲」に赴いたように、羊は戦略物資として欠かすことのできないものとして、日本の軍国主義の歴史と密接に結び付いていることがわかる。『羊をめぐる冒険』では『ねじまき鳥クロニクル』での上記の描写ほど明確にその関係性が示唆されることはな

いが、羊博士が学ぶ農業やアイヌ青年の描写からは、村上がすでに羊と軍国主義との連関を意識していたと推測できる。

羊博士に乗り移った羊について、羊博士が調査した古い文献によれば、かつてはジンギスカン（成吉思汗、1162–1227）に取り憑いたものであったという。川村二郎は、『羊をめぐる冒険』の羊が意味するものについて、このジンギスカンに言及し、羊は「モンゴルのな世界征服の権力意志を象徴している」<sup>43</sup>と述べる。ジンギスカンは、中央アジア・南ロシア・北アジア遊牧地帯を配下に治め、広大なモンゴル帝国の基礎を確立した人物であり、「世界の征服者」<sup>44</sup>とも称される。羊はまさに、ジンギスカンの世界征服の野望と同様、中国大陆を侵略し勢力を広めようという野心をみせていた日本の軍国主義を表すような動物だったのである。

さらに、日本近代の軍国主義に表されるような「日本の近代の本質をなす愚劣さ」の象徴としての羊は、過去の遺物ではなく現在にも引き継がれているものとして、羊男の姿となって描かれる。羊男は、十二滝町の「鼠」の別荘で「僕」の前に姿を現す。彼は全身に羊の皮をまとい、森の中の山菜や小動物を食べて暮らしていた。羊男は、自分が山奥に隠れて住むようになった経緯について、次のように「僕」に語る。

「どうしてここに隠れて住むようになったの？」[中略]

「誰にも言わない？」

「誰にも言わないよ」

「戦争に行きたくなかったからさ」

我々はそのまましばらく黙って歩いた。並んで歩いていると、羊男の頭が僕の肩先で揺れた。

「どこの国との戦争？」と僕は訊ねてみた。

「知らないよ」羊男はこんこんと咳をした。「でも戦争に行きたくないんだ。だから羊のままでいるんだよ。羊のままでここから動けないんだ」(331)

羊男は、戦争に行くことを拒み隠れて生活するようになっており、忘れ去られていた戦争の残滓として『羊をめぐる冒険』に登場するのである。村上は、後述するように、戦争がとうの昔に忘れ去られたような高度資本主義の社会を描く一方で、羊男を登場させるこ

とにより、日本が葬り去った軍国主義の歴史が過去と現在をつないでいることを示そうとしている。

戦争を避けるために羊となった羊男は、『羊をめぐる冒険』で「戦争の話は聞いたかい？」(332)と「僕」に尋ねたように、『ダンス・ダンス・ダンス』においてもまた、羊男は戦争が終わったかどうか、また新しい戦争が起こっていないかどうか質問する。羊男が「繋げる」ものは、「僕」を取り囲む人物、彼らが存在する場所だけではない。戦争の記憶を呼び起こすことで、過去から連綿と続く歴史という時間軸そのものを「繋げる」役割を果たしている。

以上、村上春樹は羊の表象の歴史性を意識し、夏目漱石の『三四郎』の羊を念頭に置いて『羊をめぐる冒険』の羊を描き、羊が日本近代の軍国主義に関与した動物として描かれていることを論じた。続く第4節から第6節では、羊は近代から継承された現代日本の権力を象徴していることを明らかにしていく。

#### 第4節 羊博士の「羊つき」——憑き物から精神病へ

本章第2節で述べたように、日本における羊は国家の政策や経済動向に左右され、レジャーや余暇として消費される対象となっていた。しかし、『羊をめぐる冒険』では、羊はこのような人間の価値観に翻弄されてきた「可哀想な動物」(146)としての立場だけではなく、残忍な支配者としての立場を占めることがある。それは、羊による人間の身体と精神のコントロールという作用である。背中に星の斑紋のある伝説の羊は、ジンギスカンに取り憑き世界征服をはかり、そして羊博士に乗り移って日本に渡来した。このように、羊が人間の身体と精神を支配するという構造が形成されているが、その背景には精神病とそれを患う人間を狂気として封じ込め疎外する近代権力の発展がみられるのである。本節では、羊博士を襲った「羊つき」(365)の現象と、それが精神病に取り込まれ狂気とみなされるようになった経緯について論じる。

『羊をめぐる冒険』で探し求められる羊は、先に述べたように、13世紀に広大なモンゴル帝国を築き上げた「世界の征服者」、ジンギスカンに取り憑いたという伝説の羊であった。その羊が、緬羊増産計画のため1935年に「満洲」に渡った羊博士に乗り移る。ここで、まず、『羊をめぐる冒険』第7章「いるかホテルの冒険」「羊博士おいに食べ、おいに

語る」での記述を中心に、羊博士が羊と出会うまでの道程を辿りたい。

羊博士は、1905年に仙台に生まれ、幼少時から「仙台の街では知らぬものもない神童」(229)と称されていた。羊博士は東京帝国大学農学部に入學し、その後も才能は衰えず人望もあり、「文句のつけようもないエリート」(230)であった。大學を首席で卒業後、農林省に入省する。二年間本省で実績を積んだ後、朝鮮半島に渡り稲作の研究を行った。そして、1934年に東京に呼び戻され、陸軍の若い将官と出会い、中國大陸北部における軍用の羊毛自給政策に関わり始める。これが彼と羊との最初の出会であったが、彼にとって人生の「転落」(231)の始まりとなる。現地視察のため「満洲」に渡った羊博士の体内に羊が入り込み、翌年1936年2月、羊博士は本土に召喚され本省資料室の配置となり「東亜の農政の中樞から追放」(233)される。やがて農林省を辞した彼は北海道の僻地で牧羊業を開始し、かつてのエリートとしての面影を見せることなく余生を送る。羊と出会ったことにより、彼の人生は一転してしまったのである。

ここで、羊博士の人生を左右することになった「羊つき」の現象について検証しよう。本土と「満洲」、モンゴルにおける緬羊増産計画の大綱をまとめた後、博士は1935年、「満洲国」建国宣言翌年の春に「満洲」へと渡る。その年の7月、緬羊視察に出かけた羊博士は満蒙国境付近で行方不明になり、搜索活動によっても見つからず、人々が諦めかけた一週間後に顔に傷を負いやつれ果てた姿で帰ってきた。彼は道に迷い馬が怪我をしたために戻れなかったのだと言い、人々もその理由に納得した。しかし、それから一ヶ月が経過した頃、役所内で奇妙な噂が流れ始める。それは、彼が羊との間に「特殊な関係を持った」(231)というものであった。上司は彼を呼び出し、その関係についての事実を問い正す。以下、上司と羊博士との対話である。

Q「特殊な関係とは性行為のことであるのか？」

A「そうではありません」

Q「説明をしてほしい」

A「精神的行為であります」

Q「説明になっていない」

A「うまい言葉が見つかりませんが、交霊というのが近いかと思います」[中略]

Q「交霊は研究事項とは認められない。以後謹んでもらいたい。そもそも貴君は東

京帝国大学農学部を優秀な成績で卒業し、入省後も秀れた勤務成績を残している、  
いわば将来の東亜の農政を担うべき人物である。それを認識すべきである」

A「わかりました」

Q「交霊のことは忘れたまえ。羊はただの家畜だ」

A「忘れることは不可能であります」

Q「事情を説明してもらいたい」

A「羊が私の中にいるからです」(232-233)

羊博士と羊との間に築かれた「特殊な関係」とは、本論文第3章で扱ったらしやめんの語源となったような獣姦行為、すなわち動物との性行為を示すものではない。彼の言葉によれば、「精神的行為」であり「交霊」であったという。羊博士はその経緯を次のように詳細に語っている。彼と羊との関係は夢の中で築かれたものであり、身体的な接触を介するものではなかった。

私は満蒙国境近くで放牧の調査中に道に迷い、偶然目についた洞窟にもぐりこんで一夜を過した。夢の中に羊が現われて、私の中に入ってもいいか、と訊ねた。かまわん、と私は言った。[中略]それはこれまでに見たことのない種類の羊だった。[中略]こんな羊はどこにもいない。だからこそ私はその羊に私の体の中にはいってもかまわんと言ったんだ。羊の研究者としてもそのような珍種の羊を見逃したくはなかったしね  
(240)

羊博士によると、このように羊が人間の体内に入るという現象は、中国北部やモンゴル地域では珍しいことではなく「神の恩恵」(241)と考えられていたという。人間の体内に入る羊の目的は、「羊的思念の具現」(244)であり、羊は「人間と人間の世界を一変させてしまうような巨大な計画」(242)を目論んでいた、と羊博士は推測している。

人間の体内に侵入することのできる羊は不死であり、入り込まれた人間もまた永遠の生を享受できるといわれていた。しかし羊は自由にその宿主を変えることができ、羊が体内から抜け出した人間は「羊抜け」(241)の現象に襲われる。羊博士の体内に入り込んだ羊は日本に渡り、先生へとその宿主を変えるが、博士は「羊抜け」の地獄のような苦しみに

苛まれる。「羊抜け」の様子は次のように述べられる。

「ある朝目が覚めるともう羊の姿はなかった。その時になって私はやっと『羊抜け』というのがどういうものを理解することができた。地獄だよ。羊は思念だけを残していくんだ。しかし羊なしにはその思念を放出することはできない。これが『羊抜けだ』(243)

羊博士は羊が抜け出た 1936 年の春以降、そのような「地獄」のような苦境から脱するために、「四十二年にわたって何もかもを捨てて」(238) その羊の行方を探していたのである。

以上が羊博士と羊との出会い、そして羊が彼の体内に入り込みやがて抜け出していった経緯である。そこには、動物が人間の身体に「憑く」という現象を、精神病として社会から排除し管理するようになった社会構造の変遷が反映されている。この点について、以下で明らかにしていこう。

羊博士と羊との間に交わされた「精神的行為」「交霊」は、憑き物の現象として解釈することが可能である。『羊をめぐる冒険』の書評においても、羊が憑き物の主体として描かれていることを指摘した論がある。例えば高橋英夫は、この作品を「キツネつきならぬ羊つきの形をとった「輪廻転生」<sup>45</sup>の物語として紹介している。ここで言及されている「狐憑き」に代表される憑き物とは、日本国内の憑き物にまつわる伝承を民俗学研究の立場から分析した板橋作美によれば、動物や霊が人間の身体を支配しその動物や霊のように振舞う行動のことである<sup>46</sup>。憑き物では、取り憑かれた人間がその動物に類似した行動、性向を示す点が特徴的である。例えば、狐が取り憑いた人間は、四足で歩く、油揚げを要求する、犬を恐がるというように、狐に似た行動を示すという<sup>47</sup>。

村上がこのような憑き物現象を取り扱った理由としては、彼の民俗学への興味が挙げられる。動物や霊が人間に「憑く」という現象は世界各地にみられるが<sup>48</sup>、日本の憑き物の場合には、憑かれる現象が血縁関係や婚姻関係によって永続的に感染するという民間信仰の一つとして重要であった<sup>49</sup>。以下のインタビューでの村上の応答からは、彼自身、そのような日本の民間信仰を念頭におき羊を描いたことがうかがえる。『羊をめぐる冒険』をはじめ他の作品にも登場する羊男について、村上は「地霊的なもの」を意識していたという。

羊男ってのは、ぼくはいちばん気に入ってるんですよ。あれは、なんていうか、“地霊”みたいなものをイメージして書いた〔中略〕ぼくの場合、都会的な小説というふうにかテゴライズされてるけど、でもね、都会的なものを意識すればするほど、その対極にあるものが、どうしても浮かび上がってくると思うんですよ。だからある種の地霊的なものに、すごく興味がありますね。<sup>50</sup>

羊男は、都会的な要素の対極にある「地霊的なもの」として浮かび上がり、村上によって好んで描かれた人物であったことがわかる。

村上が羊男に「地霊」のイメージを重ねていたように、民間信仰としての憑き物現象については、「土俗神」との関連がみられる。かつて人間の身体に取り憑いた存在は、「物の怪」など視覚化できない霊であることが多かった。しかし、中世から近世へ移行すると、そのような「物憑き」から「動物憑き」へと取り憑く主体が大きく変遷し、その中の動物霊の多くはある地域に固有の「土俗神」であったと、昼田源一郎は論じている<sup>51</sup>。

羊博士の憑き物において興味深い点は、その動物が羊であるということである。『羊をめぐる冒険』で描かれる憑き物が、「狐憑き」ではなく「羊つき」である点には、日本から「満洲」に渡った羊博士の地理的な移動が関与している。

日本の民間信仰において憑き物となる動物は、狐や狸といった日本人の生活にとって身近な存在の動物が中心である<sup>52</sup>。憑き物だけではなく、日本で占いや呪いにおいて言及される動物についても、蛇や烏、犬、狐、狸といった、「文化が作る分類秩序からはずれる、あるいは曖昧な位置に」<sup>53</sup>あり、動物でありつつも人間の領域である居住地に入り込むなど、変則的・両義的な存在の動物が多い<sup>54</sup>。「満洲」の地において羊博士に羊が取り憑いたということは、第4章で「満洲」の農業移民の生活について考察したように、羊が人間にとって身近な動物として、人間と動物との境界が曖昧な存在であったということである。

羊博士と羊との出会いは、前述したように、1934年に陸軍の若い将官から羊毛増産のための調査を依頼されたときであった。羊博士は緬羊増産計画の大綱を完成させた後、「満洲」に渡り実際の羊と関わることになる。それ以前には羊と接点のなかった彼に羊が取り憑いたということは、「満洲」の地でその存在が身近なものとなり、羊が彼の生活や意識に影響を与えていたということである。日本で古来民間信仰の対象となってきた狐や狸などの動



物とともに、ここでは羊が日本人である羊博士の心性に影響を及ぼす動物となっているのである。本論文でも繰り返し述べてきたように、羊は日本に生息していた動物ではなく、「土俗神」や、村上が述べる「地霊的なもの」ではなかった。「満洲」で日本軍が進めた緬羊増産計画による羊の増殖が、やがて日本人の信仰の一つであった「動物憑き」現象に入り込み、その身体・精神を脅かすことになったのである。ここに、羊が人間の身体を支配する者へと変容している姿をみてとることができる。

次に、憑き物の現象が、民間信仰から「病」としてみなされるようになる過程を、羊博士の経緯と合わせて検証しよう。まずは、「満洲」で羊を民俗学的に研究していた羊博士の言葉を引用したい。

「私は羊が体内に入ってからずっとそういった羊に関する民俗学や伝承を研究し始めた。現地の人々の話を聞いたり、古い書物を調べてみた。そのうちに連中のあいだに私に羊が入ったという噂が広まり、それが私の上司のもとにまで届いた。私の上司にはそれが気に入らなかったんだ。そして私は『精神錯乱』というレッテルを貼られて本国に送り帰された。いわゆる植民地呆けというやつだな」(241)

羊に取り憑かれ、「羊に関する民俗学や伝承」の研究に没頭していた羊博士は、憑き物に憑かれた者としてよりも「精神錯乱」者とみなされ、本国に送還されたのである。

現在、憑き物現象については、医学的見地から統合失調症と同一視されることがある<sup>55</sup>。統合失調症は、思春期から青年期にかけて発症する神経系の慢性疾患であり、幻聴、被害妄想、精神不安定などの症状が特徴的にみられる<sup>56</sup>。日本の民間信仰の一つであり、村上が「地霊」的なものとも考えていた憑き物は、身体と自意識が分離するという医学的見地から解釈することも可能なのである。

日本の民間信仰における憑き物は、周囲との関係や目には見えない神々・祖先との関連性の中で引き起こされるものであり、必ずしも忌避される対象ではなかった。むしろ、取り憑かれた人間が神と同一視されたり、耐え難い現実からの救済という価値を担うこともあり<sup>57</sup>、憑き物が肯定的に受け入れられる場合もあったのである。また、憑き物の原因は地域社会における問題や先祖の祟りとされており、憑かれた本人の過失とは考えられていなかった。そのため、憑き物は憑かれた人間をめぐる関係性を修復することによって回復

に向かうとされ、僧侶や巫者への加持祈祷、滝打ち・温泉などの水治療法といった、当地の民俗療法を通して治癒可能なものであった<sup>58</sup>。

しかし、憑き物が近代精神医学に包含されるようになると、その特徴の一つであった地域や家族・先祖とのつながりは失われ、憑かれた人間個人の人格に障害があるとされ、精神病患者として周囲から疎外され管理の対象となっていく。民間信仰の一つとして捉えられていた憑き物が精神病として取り扱われたのは、近代以降、西洋医学の受容が開始されたときである。来日した西洋人医師達は、日本の民間信仰であった憑き物は単なる迷信に過ぎず、その地域の文明や教育が発達すれば自然になくなるものと考えた<sup>59</sup>。憑き物はもはや「土俗神」とつながる心や靈魂の問題としてではなく、病人の心理的・生理的状态に起因するものとして、観察の対象となっていく<sup>60</sup>。

憑き物をめぐる認識の枠組みが、民間信仰から近代精神医学へと変化したとき、動物に憑かれた人間への態度も変容する。動物などの憑く主体を心身から排除することによって治癒可能なものとされていた現象は、近代には神経や脳の器官障害として解釈され、これらの精神病患者を治療不能な狂気として危険視・排除し、管理する権力が生じていく。狐に取り憑かれたとして奇怪な行動を取る者は警察によって精神病院に連行されたように<sup>61</sup>、憑き物に憑かれた者は精神病患者と同一視され、かつてのように滝打ちや温泉などの民間治療に赴くのではなく、精神病院に収容されるようになったのである。

日本における近代精神医学の発展と憑き物に対する見解を並行してみたとき、『羊をめぐる冒険』で羊博士が羊に取り憑かれ本国に送還された点には、憑き物を精神病と同一視し、狂気とみなす認識の転換がうかがえる。周囲から一目置かれるほどの能力を発揮していた羊博士が羊に取り憑かれて戻ってきたとき、人々は彼を蔑み、差別と嫌悪の視線でみつめていた。周囲の者は博士に『精神錯乱』というレッテル(241)を貼り、政治の中枢から追放する。そこには、明治時代以降近代精神医学を取り入れ、憑き物を個人に内在する人格に起因した精神病とみなす見地が定着していたことがうかがえる。小説の中で、羊博士が羊に取り憑かれるまでの経歴が年号とともに長きにわたって記述されている点は、病因を個人の症歴や生活歴に見出そうとする精神病治療の特質と重ね合わせられるだろう。

羊が体内から抜け出た後、羊博士は牧羊を営みいるかホテルの一室に引き籠り密かに生活していた。いるかホテルの上階に位置する博士の部屋は、「電灯はほの暗く、廊下の隅にはほこりがたまって」(236)おり、「古い紙の匂いと体臭があたりに漂って」(236)いる。

そこはまるで暗い精神病院の一室のようである。1935年に羊に取り憑かれて以来、羊博士は、精神病を狂気とみなす社会によって監禁された日々を送っていたのである。

このような監禁の様相は、第4章で論じた安部公房の『緑色のストッキング』において、草食動物の腸を移植する実験のために病院に幽閉される男の姿にも類似している。女性の下着にフェティシズムを抱き、盗癖のある男の病棟は、「周囲をすっかりコンクリートで固め」<sup>62</sup>られた「気違いの部屋」<sup>63</sup>と称されていたのである。

兵頭晶子は、歴史学研究の立場から憑き物が精神病として包含された経緯を論じているが、その変化はまさに日本近代の歴史的転換であったと次のように指摘する。

治癒可能な病から危険かつ不治の病へ、あるいは取り憑かれる身体から監禁される身体へ——このように、狐憑きの意味が大きく書き換えられたとき、病者をめぐる処遇も大きく変化した。民間治療場での治病や一時的な監禁の代わりに、精神病院への収容や恒常的な監禁が取って代わったのである。それはまさに、人々の心身観や世界観をめぐる歴史的転換と呼ぶに相応しい変化だった。<sup>64</sup>

「羊つき」の現象によって羊博士が精神病者とみなされ、監禁にも近い人生を送ったことは、このような精神医学の近代化の過程を映し出している。精神医学は理性と狂気とを隔て、両者の対話をもはや成立させないとミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926–1984）が述べるように<sup>65</sup>、狂気とみなされた羊博士は、彼に精神錯乱というレッテルを貼った農林省官僚と対等に語る言葉を持たなかった。羊博士の「羊つき」と、いかホテルの暗い一室に閉じ籠る彼のその後の人生は、精神医学の権力による社会からの排除を意味している。

羊が次なる標的として先生の体に移るとき、人間の身体と精神を操作するものとして、羊は現代の科学テクノロジーを表象する存在となっていく。その過程を次節で考察していきたい。

## 第5節 先生の「羊つき」——身体と精神のコントロール・テクノロジー

まず、『羊をめぐる冒険』第6章「羊をめぐる冒険II」「2 奇妙な男の奇妙な話（2）」

から、先生に羊が乗り移った経緯とその後の展開についてみていきたい。先生<sup>66</sup>は 1913 年に北海道十二滝町の貧農の三男として生まれ、12 歳の時に朝鮮に渡るがうまくゆかず、帰国後東京で右翼としての活動を開始した。1932 年、要人殺害計画で投獄され、警察の拷問により強度の不眠症に罹る。1936 年の春、不眠症が完全に回復すると同時に強い頭痛に襲われ始め、脳内に血瘤が発生する。羊博士が「満洲」で羊に取り憑かれ、本国に召還されたのがこの年の 2 月であるため、この期間に羊は羊博士の体を借りて大陸から日本へ渡り、先生に乗り移ったことがわかる。

この 1936 年の春を境に、先生は「べつの人間」(153)へと生まれ変わる。彼は 6 月に出獄すると同時に、右翼として頂上の座を占めるようになる。「人心を掌握するカリスマ性、綿密な論理性、熱狂的な反応を呼びおこす演説能力、政治的な予知能力、決断力、そして何よりも大衆の持つ弱点をてこにして社会を動かしていける能力」(153)を彼は手に入れたのである。そして、中国大陆に渡り諜報ルートを築き上げ巨万の富を手にし、ソ連が参戦する二週間前に日本に引揚げてきた。

戦後、先生は 1946 年に A 級戦犯として逮捕される。彼の血瘤が発見されるのは、東京裁判を控えたこのときのアメリカ軍医師による健康調査によってであった。巨大な血瘤を脳内に抱えつつ常人以上に活動している人間が存在することを知り衝撃を受けた医師は、一年間に渡り詳しい診察を行ったが、血瘤の原因については突き止められなかった。このような症状にアメリカ軍部も興味を持ち、情報部による徹底的な極秘調査が開始される。なぜ一個人の血瘤の調査に米国情報部が関与することになったのか、その理由は明らかにされていないが、スタンフォード大学出身で 1968 (昭和 48) 年から先生のもとで働いている秘書は、次のように想定される理由を挙げる。

第三の可能性は『洗脳』に関するものだ。脳に一定の刺激波を送ることによって特定のリアクションを引き出せるんじゃないかという発想だな。その当時はそういうことがはやってたんだ。事実アメリカには当時そういった洗脳研究グループが組織されていたことが明らかになっている。(152)

彼が提示した血瘤と洗脳との関連性については、「脳に一定の刺激派を送ることによって特定のリアクションを引き出せるんじゃないかという発想」や、当時のアメリカの「洗脳

研究グループ」という言葉から示唆されるような、精神治療技術の発展の時代背景からその仮説を裏付けることができる。

1930年代、精神病の治療法として、ロボトミー（前頭葉白質切除）と電気ショック療法が発見された<sup>67</sup>。ロボトミーは、羊博士が「満洲」に渡り羊に取り憑かれた1935年に開発され、精神分裂症など様々な症状に劇的な効果をもたらす治療法として急速に普及した。ロボトミーが発見された翌年には、電気ショックで人工的に発作を起こし、精神分裂症を治癒する電気ショック療法がイタリアで考案される。電気ショック療法は、ローマ警察が保護した精神分裂症患者と思われる男性を被験者とした人体実験によって実証が試みられた。このようにして、電気ショック療法は「警察の協力のもとに、被験者の同意なしに行われた人体実験によって完成した」<sup>68</sup>点について、宮本陽一郎は次のように論じている。

電気ショック療法は、精神医学における新たな試みであったのみならず、社会統治の方法として、まさにその誕生の瞬間から警察機構との密接な連携を持っていたのである。異常者や犯罪者の精神構造を、電気ショックあるいは前頭葉白質の切除によって一瞬のうちに書き換えて、それにより社会に順応させてしまうこと——それは例えば監獄と懲罰による社会統治という形態を、すべて過去のものとしてしまう可能性を秘めたテクノロジーとして受けとめられることになる。<sup>69</sup>

先生が羊に取り憑かれたのは、宮本が論じるような「異常者や犯罪者の精神構造を」「一瞬のうちに書き換えて、それにより社会に順応させてしまう」技術が誕生する時期に相当している。ロボトミーや電気ショック療法が開発された1930年代頃には、前節で述べたような明治以降に行われた「監護と懲罰による社会統治」が、もはや「過去のもの」と化しつつあったのである。

ロボトミーと電気ショック療法が普及を見せるのは、1940～50年代のアメリカにおいてであった。ロボトミーは奇跡の治療法として大々的に宣伝され、特に、終戦後1946年から1949年にかけてはロボトミーの最隆盛期であり、日本にも紹介された。このような急速な普及の背景には、大戦後の精神障害者激増への対応や、マッカーシズムに代表されるような、精神異常者や共産主義者を封じ込めようとした冷戦構造形成の社会風潮が反映されている<sup>70</sup>。

第二次世界大戦や冷戦を背景に、ロボットミー、ショック療法だけではなく、マインド・コントロールや洗脳の技術も開発されていた。1942年には、アメリカ中央情報局（Central Intelligence Agency, CIA）の前身である戦略情報局（Office of Strategic Services, OSS）において、マインド・コントロールの極秘プロジェクトが発足していた。この計画は、自白誘導剤の研究に着手していたナチス・ドイツの化学者を招き、戦後 CIA によって継続されることになる。この技術開発の発端は、ソ連の諜報活動に対抗するためのものであった<sup>71</sup>。

ここで『羊をめぐる冒険』の羊へ目を向けると、先生の血瘤に多大な興味を抱きアメリカ人医師が徹底的な調査を行った目的は、洗脳に関するものであると秘書は推測している。そして、「脳に一定の刺激波を送ることによって特定のリアクションを引き出」（152）す実験について、「その当時はそういうことがはやってた」「事実アメリカには当時そういった洗脳研究グループが組織されていた」（152）と秘書は述べているが、これは、上記のようなアメリカのロボットミーやショック療法、マインド・コントロール技術開発のプロジェクトを示唆しているのではないだろうか。血瘤が発見され先生が病院に移送されたのは1946年のことであるが、この4年前にアメリカはマインド・コントロールの極秘プロジェクトを開始している。

先生の秘書が「僕」に、「君は脳医学についてどの程度知っている？」（149）と質問するが、この一文はそのまま読者にも問いかけられているだろう。羊博士から先生へと移行する「羊つき」の過程は、ロボットミー、ショック療法、洗脳など、精神医学の発達と並行しているのである<sup>72</sup>。

洗脳や脳医学など、村上が身体や精神のコントロール・テクノロジーに言及するとき、それは科学の発展への賛美ではなく、むしろそれが戦争や政治的イデオロギーと関わっていることを描出し、暴力の歴史を見出している。科学の進歩が軍の戦略によって促されたものであり、それが人間の身体や精神をコントロールするという脅威の存在へと変化していく過程は、決して過去だけのものではない。進行中である科学テクノロジーの発展も、人間の生命を脅かすような予想外の事態に陥る可能性が大いにありうる。

『羊をめぐる冒険』における羊は、そのような科学技術の恐怖の可能性を体現する動物である。前章では安部公房が羊腸人類を「化物」と称していたように、より高度な科学技術として発展するバイオテクノロジーによって怪物のような存在と化していく羊の姿を、村上の他の作品も合わせてみていきたい。

アメリカの1940年代後半から50年代初頭に勃興したロボットミーやショック療法の精神治療技術について、その後の変容を宮本は以下のように論じている。

封じ込め時代のアメリカ社会が管理社会を維持する最終兵器として取り入れたショック療法そして精神病院は、[中略] それとは裏腹な最も管理しにくい反体制的な文化の温床として転用されていった。そして六〇年代のドラッグ・カルチャーにおける知覚とライフスタイルの一発変換的な革命から、八〇年代のサイバーパンクに見られる神経とコンピュータの接合、あるいはオーム真理教のヘッドギアに至るまで、精神をダイレクトに加工するテクノロジーへの関心は、ポストモダンの文化につきまとう。<sup>73</sup>

軍部や諜報組織によって発見されたマインド・コントロールの技術は、やがて神経とコンピュータの接合といったポストモダン文化の象徴となっていったことを宮本是指摘する。羊博士や先生の「羊つき」現象が、精神医学の近代化を象徴するものであったのに対し、やがて身体や精神のコントロール・テクノロジーの発展は「脱近代化」したポストモダンの文化を形成していく。この過程は、村上の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）においても示唆されている。この作品では、主人公は「博士」が築いた「シャフリング」という思考回路を用いて、その脳内で生み出された空間に生きている。主人公の次の言葉をみてみよう。

複雑すぎて僕にも何が何だかよくわからない。世界はどんどん複雑になっていく。核とか社会主義の分裂とかコンピュータの進化とか人工授精とかスパイ衛星とか人工臓器とかロボットミーとかね。車の運転のパネルだって何がどうなってるのかわかりやしない。僕の場合は簡単に説明すれば情報戦争にまきこまれちゃっているんだ。要するにコンピュータが自我を持ち始めるまでのつなぎさ。<sup>74</sup>

『羊をめぐる冒険』で羊とともに描かれた身体や精神のコントロール技術は、コンピュータによるより高度で複雑な人工テクノロジーの萌芽でもあった。このようなテクノロジーの発展に対する村上の認識は、羊によって象徴されているといえる。『羊をめぐる冒険』が発表された1982年は、リドリー・スコット（Ridley Scott, 1937-）監督による映画『ブ

レードランナー』(*Blade Runner*, 1982) が日本で公開された年であった。この映画については、村上の『アフターダーク』(2004) の中で、コンピューター・テクノロジーの進化した近未来的な世界として言及されている<sup>75</sup>。この『ブレードランナー』の原作が、フィリップ・K・ディック (Philip K. Dick, 1928–1982) の『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』(*Do Androids Dream of Electric Sheep?* 1968) であることは周知の通りである。ディックはこの作品で、人間以外の生物種が絶滅し、高度な科学技術によって創り出された機械仕掛けの生物が生きる 2021 年の世界を描いている。村上が『ブレードランナー』を近未来の典型として捉える姿勢は、その原作である「電気羊」と結び付き、羊こそが高度なコンピューター・テクノロジーが支配する社会の象徴として意識されているのではないだろうか。

この「電気羊」の誕生と時期を同じくして、羊は 1997 (平成 9) 年のクローン羊ドリー (Dolly) の誕生に至る高度な遺伝子組み換え技術の体現者となる道を歩んでもいた。ドリーの誕生でその結実を示したクローン技術の発端は、「バイオテクノロジー」(生命工学) という語が盛んに使用され始めた 1970 年代に遡る<sup>76</sup>。1982 年にはラットの成長ホルモン遺伝子を導入され、通常のマウスの二倍の大きさに成長した遺伝子組み換えマウスがアメリカで作出された<sup>77</sup>。『羊をめぐる冒険』が発表されたのはまさにこの年であり、生物学界ではやがてドリーの誕生に至る哺乳類の核移植技術が着実にその歩みを進め、マスメディアでも取り上げられるようになっていた時期であった。

これらの遺伝子操作テクノロジーは、人類史において蒸気機関や原子力と同程度に重要な技術的移行であり、人類は新たな時代へ突入するという期待が述べられた<sup>78</sup>。しかし、原子力のような科学技術は、精神治療技術と同じく戦争によって目覚ましい発展を遂げたものである。人類にとっての新たな時代の構築を目的に進められているバイオテクノロジーもまた、将来、人類の生命を脅かす暴力となる可能性がないとはいえない。

その懸念はすでにクローン羊誕生の際に表出していた。羊は遺伝子情報を操作するテクノロジー、また、クローン人間をも創り出しかねない科学の急激な発展と関連して、人間の生命存在を脅かす怪物的な動物としての印象を担い始めていたのである。例えば、ドリーの誕生を告げる当時の報道記事をみると、そこには誇大な憶測や空想を反映した羊の姿が見受けられる<sup>79</sup>。例えば、『タイム』(*Time*, 1997) 誌の記事では、ドリー開発の研究チームを率いたウィルマットが、怪物の創造主であるフランケンシュタインに喩えられてい



る<sup>80</sup>。他にもドリーの報道に関しては、ドリーは肉食で群れの仲間や小羊を食い殺すといった、根拠のない言説がみられるという<sup>81</sup>。

人間の手によって一方的にクローン化された羊であったが、ドリーの誕生によって、生命をコントロールする遺伝子操作の発展の恐怖を体現する動物となった。哺乳類の核移植はマウスなどでも進められていたが、初めてクローニングに成功した哺乳類が羊であった理由は、卵子の培養期間や妊娠・出産期間など羊の生殖機能の特徴の他に、実験で羊を用いることの効率性によっている。バイオテクノロジーが元来人間にとって有益な生命操作の技術開発を目的としているように、クローニングでは、肉牛や乳牛として世界最大の産業を構成する牛の遺伝子操作が最終目的とされている。しかし、牛を実験の材料とするには巨額の資金が必要となり、個体の大きさも問題である。そのため、より安価に入手でき実験の材料としても扱いやすい羊を、牛のモデル動物として用いたのである<sup>82</sup>。『羊をめぐる冒険』の中で、先生の秘書が「羊は競走馬と同じで種つけがポイント」（147）と言っているように、羊は羊毛の品質向上という人間の利便性と経済効率の問題から身体を改造されてきた。緬羊飼育だけにとどまらず、世界の生物工学の現場でもまた、羊は経済的価値観から利用されているのである。

このように羊博士から先生へと宿主を変えて乗り移った羊は、医学的・科学的な身体と精神のコントロール・テクノロジーの発展を反映させている。羊博士を精神病患者として管理し苦しめた近代の権力は、現代において、人間や動物の種や生命そのものを脅かしコントロールするものへとその力を増している。先生の生命を脅かす羊の姿は、発展を続ける生命操作テクノロジーの恐怖と暴力性を体現しているのである。

先生の身体と精神を脅かした羊は、やがて先生を捨て「鼠」へと乗り移る。しかし「鼠」は羊を体内に宿したまま自殺し、伝説の羊も消滅する。次節では、「鼠」の「羊つき」の現象と羊の消滅についての解釈を提示していきたい。

## 第6節 「鼠」の「羊つき」——高度資本主義社会へのアンチテーゼ

『羊をめぐる冒険』の羊に関する論考において顕著な解釈は、羊は何かを象徴しているのではなく、観念であるという立場である。例えば川本三郎は、『羊をめぐる冒険』の羊は「何かのメタ<sup>メタ</sup>フォ<sup>ー</sup>ではなくメタフォ<sup>ー</sup>のメタフォ<sup>ー</sup>」「観念」<sup>83</sup>であるとする。山川健一

も、この作品の羊は何であるのかという問いそのものに疑問を投げかけ、羊は「形あるなにものかを象徴しているのではない」<sup>84</sup>と述べている。

このように、メタファーとしての役割を越え、観念として存在する『羊をめぐる冒険』の羊は、高度資本主義の中で抽象的なイメージとしての価値を付加されたものである。本章第2節で論じたように、羊はレジャーや余暇の一部として消費される対象となった。高度資本主義の世界ではモノの使用価値が失われ、記号やイメージが支配的となるが、羊もまたそのような経済社会に取り込まれていったのである。

『羊をめぐる冒険』の「僕」は、羊に記号としての価値を与えるような社会の形成において主力となる産業に従事していた。それは、「僕」が友人と開業した広告業である。村上の作品では、主人公が翻訳家やフリーライターとして、広告業界やメディア産業に携わっている場合が多い。彼らの業務は、川本が「何物も生産しない虚業そのもの」<sup>85</sup> というように、高度の抽象性を伴うものであったが、このような事業こそが現代社会の転換期に台頭していったのである。

広告産業で利益を上げたのは、「僕」と友人の会社だけではない。先生もまた、広告業界を牛耳ったことによりその力を強めた人物である。「僕」の友人は、広告の絶対的な権力について次のように語っている。

「さて、彼[先生]は巣鴨から出てくると、どこかに隠しておいた財宝をふたつにわけ、その半分で保守党の派閥をまるごと買い取り、あとの半分で広告業界を買い取った。まだ広告業なんてのがちらしくらいにしか考えられてなかった時代にだぜ[中略] 広告業界と政権政党の中枢を握っていれば、できないことはまずないからね。広告を押えるというのがどういうことか君にはわかるか？」

「いや」

「広告を押えるというのは出版と放送の殆んどを押えたことになるんだ。広告のないところには出版と放送は存在しない。水のない水族館のようなもんさ。君が目にする情報の九十五パーセントまでは既に金で買われて選りわけられたものなんだ」

(83-84)

ここで友人が語るような、「ちらしくらいにしか考えられていなかった時代」から情報社

会を牛耳るまでに至った広告業の発達を概略しよう。戦後の経済復興期から 60 年代にかけて、個人消費向けの大量生産体制が整い始めた頃には、広告が積極的に消費者の欲望喚起を担うよう位置付けられ、ラジオやテレビといったマスメディアの普及とともに広告投下量も著しく拡大した。一方、1970 年代は、広告会社としての機能の一層の強化を迫られた時期である。高度成長に陰りがみえ始め、1973 年のオイルショックを機に環境保護と資源の節約志向がうたわれ、商品や企業とは直接関係のないメッセージを提示する広告が増加した。この時期の広告は「自然回帰」「ゆとり」「安全」「節約」をテーマとしたものとなっており、動植物や自然をモチーフにした広告が多く見受けられる。「僕」の事務所が製作した生命保険会社の広告も、「北海道の平凡な風景写真——雲と山と羊と草原、そしてどこかから借用したあまりぱっとしない牧歌的な詩」(80) を掲載しており、そのような例の一つということができるだろう。

このような動向を契機に、広告のメッセージは商品販売促進というマーケティング上の機能よりも、シンボルとして表現されたメッセージの伝達というコミュニケーション上の機能へとシフトしていく。広告のメッセージによって生活意識が導かれるようになり、単に商品の需要を促進するものから、人間の思想や生活形態に影響を及ぼす存在となった<sup>86</sup>。

以上のような歴史を踏まえ、1970 年代を舞台とする『羊をめぐる冒険』において、「僕」と友人が営んでいる広告会社の発展についてみていきたい。「僕」は 1970 年前後に大学を卒業し、友人と二人で小さな翻訳事務所を開き、「二人で借金を抱えて翻訳の仕事を集めてまわったり、駅前でビラを配」(72) っていた。三年前の 1975 年頃からは PR 誌や広告関係の事業にも着手し、営業成績は順調に伸びていた。「おかげで広い事務所には引越せたし」「三十にしちゃ金のある方だと思う」(72) と友人は語っている。情報誌の創刊に代表されるように、当時は日本が消費社会へと足を踏み入れていく最初の時期であり<sup>87</sup>、70 年代初期に設立され PR 雑誌とも連携していた「僕」の会社は、この潮流に乗って規模を拡大していったニュービジネスの一つということができる。

広告産業は都市だけではなく、全国に限なく勢いを広げていた。この事実は、「全国で三位の赤字線」(271) という北海道の十二滝町へ向かう支線沿線にでさえ広告産業の影響を見出した「僕」の言葉によって示される。

道路に沿って並んだ広告版はがらんとした空白に向けてあてのないメッセージを送り

つづけていた。僕は退屈しのぎに次から次へと現れるスマートで都会的な匂いのする  
広告版を眺めていた。[中略] 広告産業という名の新しい開拓者たちは実に手際よくそ  
の大地を切り開いているようだった。(268)

「手際よくその大地を切り開く」ように地方都市にも進出し始めていた広告が現実世界  
で影響力を持っていたのと同様、『羊をめぐる冒険』でも、「冒険」を起動させるものとし  
て広告が重要な機能を果している。それは、先にも挙げた、「冒険」のきっかけとなった生  
命保険会社の広告である。羊のいる風景写真を掲載したその広告は、「どこでもいいから人  
目につくところにもちだしてほしい」(111)と「鼠」から依頼された「僕」が作成した広  
告である。広告業界を牛耳る先生の秘書がこの広告をすぐに破棄してほしいと願い出るこ  
とは、大勢の人間の目に触れる一枚の広告が持つ影響力の大きさを示している。

「何物も生産しない虚業そのもの」であった広告産業は、80年代以降さらなる発展をみ  
せていく。しかしそのような実体のないものが蔓延る世界には、不安や危機感も生じてい  
た。広告業界の関係者として情報産業を担う立場に置かれ始めていた「僕」やその共同経  
営者の友人であるが、より高度化する資本主義の潮流を快く受け入れていたわけではなか  
った。自ら広告産業に従事しながらも、自分達の仕事が生み出す利益と結果に違和感と危  
機感を抱いていたのである。

二人が営む翻訳事務所は、翻訳の仕事に加え PR 誌や広告にも事業を拡張し、会社の収  
益は増加していた。事業を拡大したのは友人の案によるものであったが、友人は生活のペ  
ースや考え方といった様々な物事が変化してしまったと後悔している。「俺たちが本当にど  
れだけもうけているのか、俺たち自身にさえわからない」(72)という不可解な状況に表  
されるように、過去と比較した際の仕事のやり辛さは、「いろんなところから少しずつ」「搾  
取してるみたいな気がする」(73)ためであると彼は語る。彼がいう「搾取」とは、広告  
業に関わっている自分が、実体のない空虚な内容の仕事であるにも拘らず大きな利益を挙  
げていることへの彼の疑心の表現である。彼は会社で担当したマーガリンの広告制作を例  
に挙げ、自分では何の魅力も感じない商品売り出す意義を見出せず疑問に思っているこ  
とを、「少くとも昔の俺たちはきちんと自信の持てる仕事をして、それが誇りでもあったん  
だ。それが今はない。実体のないことばをただまきちらしているだけさ」(74)と話す。

これに対して、「僕」は、実体のない言葉によって利益を得ることに友人のような違和感

や不安を抱いていないように見える。自分達の仕事が虚偽であったことを認めるが、「実体のあることば」「誠実な仕事」(74) はもうどこにも存在しないと割り切っている。しかし、彼の意識の中には、そのような実体のなさがまかりとおる社会への危惧が生まれていた。先生の秘書が、「先生は国家という巨大な船の船底を一人で支配しているわけさ。彼が栓をぬけば、船は沈む」(154) というように、その組織には限界があることを「僕」は察知していたのである。そして、羊探索の冒険に出かけるため、「僕」は出発前に友人に仕事を任せて旅立つ。「僕」は事業の規模を縮小し、「昔やってた産業革命以前の翻訳手仕事」(189) に戻ることを友人に勧める。東京に戻って来たら一緒に仕事をしようと約束するが、その前に友人は会社を解散させており、「僕」も以前の仕事に戻ることはない。

先生の秘書が「僕」の前から永久に姿を消すとき、「広告産業はこれからもっと伸びるぜ」(366) という言葉を残したように、広告業はその後さらに発展し、高度資本主義社会が形成されていく。80年代後半のバブル経済期を背景に描かれた村上春樹の『国境の南、太陽の西』(1992)の中で、主人公のハジメは、60～70年代を次のように振り返っている。

僕らは六〇年代後半から七〇年代前半にかけての、熾烈な学園闘争の時代を生きた世代だった。[中略] ごくおおまかに言うならそれは、戦後の一時期に存在した理想主義を呑み込んで貪っていくより高度な、より複雑でより洗練された資本主義の論理に対して唱えられたノオだった。[中略] でも今僕がいる世界は既に、より高度な資本主義の論理によって成立している世界だった。結局のところ、僕は知らず知らずのうちにその世界にすっぽりと呑み込まれてしまっていたのだ。<sup>88</sup>

ハジメと同様、60年代から70年代の学園闘争の時代を生きた世代である『羊をめぐる冒険』の「僕」やその友人も、無意識のうちに資本主義の論理が支配する世界に取り込まれていたのである。

しかし、『羊をめぐる冒険』には、この論理を否定し自ら命を絶った人物がいた。それが「鼠」である。

『羊をめぐる冒険』の「鼠」について分析するために、「鼠」の経歴を『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』と合わせて彼の経歴を振り返ってみよう。「僕」と同郷の友人である「鼠」は、「僕」が大学進学を機に故郷を離れたのに対し、三年前に地元の大学を退学

していたことが『1973年のピンボール』において語られる<sup>89</sup>。ここからは、彼が大学を去ったのが1973年の三年前、つまり1970（昭和45）年であることがわかる。この年の前後は、1968年の東京大学安田講堂の占拠に代表されるように、「熾烈な学園闘争の時代」であった。『羊をめぐる冒険』で、この時代を東京の大学で過ごした「僕」は、当時の様子を次のように述べている。

六九年の冬から七〇年の夏にかけて、[中略] 大学は閉鎖とロックアウトをくりかえしていた [中略]

七〇年の秋に僕がその店 [大学近くの喫茶店] を訪れた時、客の顔ぶれはもうすっかり変わっていて、知った顔は彼女ひとりという有様だった。あいかわらずハードロックこそかかっていたものの、あのピリピリとした空気はもう消え失せていた。[中略]

彼らの多くは大学をやめていた。一人は自殺し、一人は行方をくらませていた。そんな話だ。(17)

大学を追放され放浪生活を始め、やがて自殺した「鼠」は、「僕」がここで語るような大学を辞して自殺し、行方不明になっていた者の一人であることがわかる。

村上自身を含む「僕」や「鼠」が大学生活を送った1960年代後半から70年代は、柴田勝二が指摘するように、「反体制・反権力を標榜し、それをイデオロギーよりも肉体や情念の次元で実現しようとする青年達が世界的なうねりを形成していった」<sup>90</sup>時代であった。

しかし、このように絶対的な権力として立ち上がる資本主義の論理に対して否定を唱えた学生運動家達は、やがて「僕」やその共同経営者のように、資本主義の世界に包含されていくことになる。むしろ、彼らがこのような社会を自ら形成する主体となったのである。学生運動の時代を背景とする『ノルウェイの森』（1987）で描かれるように、大学を辞めて自殺したり、行方をくらますことのなかった運動家の多くは、大学を卒業して企業に就職した。『ノルウェイの森』では、主人公トオルと同じ大学に通う縁によって、学生運動家の欺瞞性が次のように語られている。

そのとき思ったわ、私。こいつら [学生運動を率いるフォーク音楽サークルの男子学生達] みんなインチキだって。[中略] 四年生になったら髪の毛短かくして三菱商事だ

のTBSだのIBMだの富士銀行だのにさっさと就職して、マルクスなんて読んだこともないかわいい奥さんもらって子供にいやみったらしい凝った名前つけるのよ。何が産学協同体粉碎よ。おかしくって涙が出てくるわよ。<sup>91</sup>

革命運動の目的の一つとして、産学協同など大学の世俗化と資本化を批判していた学生達であったが<sup>92</sup>、その大学にはすでに「大量の資本が投下されて」<sup>93</sup>おり、その目的が果たされることはなかった。そして、大学を卒業した彼らは、金融業やサービス、情報を操作する企業に就職していく。小熊英二が指摘するように、学生運動を率いた者達こそが、80年代には「大衆消費社会文化の作り手として活躍」<sup>94</sup>していくのである。

しかし「鼠」は、このような学生達とは異なる道を歩んだ。『風の歌を聴け』の中で、大学には戻らないのかという「僕」の質問に対し、「鼠」は「時が来ればみんな自分の持ち場に結局は戻っていく。俺だけは戻る場所がなかったんだ」<sup>95</sup>と答える。闘争の時代を終え大学に戻り就職していった学生達に対し、「鼠」はその後の自分の居場所を定めることができなかった。このときから、「鼠にとって時の流れがその均質さを少しずつ失い始め」<sup>96</sup>る。そして、この年に「鼠」は街を出て、長い放浪生活を送っていたことが、『羊をめぐる冒険』の「僕」に宛てられた手紙からわかる。その放浪生活の終着点が、かつて「鼠」の父親が別荘として使っていた十二滝町の山小屋であった。ここで彼は羊に取り憑かれ、命を絶つ。学生闘争を経験した「鼠」のこのような経緯から、川本は『羊をめぐる冒険』の「鼠」に「あの時代に「革命思想」にひかれ、「死んでいった」「連合赤軍」の死者」<sup>97</sup>としての像を見出している。

「政治家と情報産業と株という三位一体の上に鎮座ましましてい」(85)た先生の中に取り憑いていた羊であるが、「鼠」に乗り移り、彼が自殺をしたことによって同時にその存在を失ってしまった。羊が目的としていた「完全にアナーキーな観念の王国」(356)の創造は、決して実現されることはなかった。高度資本主義によって形成される「観念の王国」の到来に、「鼠」は抵抗を示したのである。

しかし、そのような「鼠」の反抗にもかかわらず、消費社会はさらに発展していき、資本の権力はそれに抵抗していた者をも取り込んでいった。『羊をめぐる冒険』が発表された1983年を舞台とする『ダンス・ダンス・ダンス』では、「巨大な蟻塚のような高度資本主義社会」<sup>98</sup>が描かれる。ここでは「僕」はフリーライターとして「PR誌や企業パンフレッ

トの穴埋め記事の仕事」<sup>99</sup>を行っており、さらに「実体のない言葉」を撒き散らして生計を立てている。しかしそこには、『羊をめぐる冒険』でみられたような資本の権力に対しての疑念はない。仕事は必要があれば効率よく済ませられるべきものとして受け止められており、「我々は高度資本主義社会に生きているのだ。そこでは無駄遣いが最大の美德なのだ」「それがとにかく我々の生きている社会なのだ」<sup>100</sup>と語られる。この二つの作品の間にあたる十年には、土地と株式の投機的運用を中心とするバブル経済が進行していた<sup>101</sup>。先生が残した「王国」が、「権力から反権力に至る全て」(154)を巻き込む組織であったように、そこでは権力と反権力の境界さえもが崩壊する世界が展開されていった。

## 第7節 終わりに

以上、本章では、村上春樹『羊をめぐる冒険』における羊について、高度経済成長を主とする社会的背景との関係から考察を行った。羊毛生産の必要性がなくなった日本では、観光牧場の誕生に伴い、羊は余暇やレジャーの行為の中でイメージとして消費されるものとなった。しかし村上は、そのような羊の表象だけではなく、『三四郎』の「迷羊」の表象を継承し、日本近代の軍国主義の歴史を象徴する動物としても描き出している。

『羊をめぐる冒険』で描かれる、羊博士から先生へと移行する「羊つき」の過程は、ロボトミーやショック療法、洗脳など、脳医学・精神医学の発達に対応する。それは戦争やイデオロギー対立によって生み出されたものであり、自らの作品の中で身体や精神のコントロール・テクノロジーに言及する村上は、科学テクノロジーの暴力の歴史と恐怖を示唆している。また、『羊をめぐる冒険』の舞台である1970年代は、クローン羊の誕生に結実するバイオテクノロジーが芽生えた時代でもあった。「羊つき」という現象と、羊に憑かれた者のその後の経緯からは、精神病とそれを患う人間を狂気として封じ込め疎外する精神医学、そしてこのような狂気を管理するための身体と精神をコントロールするテクノロジーの発展の歴史がうかがえる。

『羊をめぐる冒険』の中で、羊は、「徹底して管理された動物」(147)として描かれる。先生の秘書は、明治以降日本に輸入された羊は政府によって一頭一頭厳重に種付けを検査された動物であることを説明する。また、「僕」が牧舎の中で目にした羊達は、耳にプラスチックのチップをはめられ、「背中にもカラー・マーカで大きなしるしをつけられていた」



(276)。このように「徹底して管理された動物」は、羊だけではない。クローン羊の実験の成功がクローン人間の創造の不安を喚起したように、人間もまた、テクノロジーによって管理される動物として存在している。

「僕」が勤めていた翻訳会社の事業が拡大していった『羊をめぐる冒険』の舞台は、1980年代に爛熟する高度消費社会の萌芽期でもあった。羊に取り憑かれた「鼠」は、記号と観念によって支配される高度な資本主義社会の到来を阻止しようとした。それにもかかわらず、「鼠」の死後、権力も反権力をも取り込む社会が発展していくことになる。『羊をめぐる冒険』の羊は、精神病者を狂気として囲い込む権力、暴力を伴って進展する科学テクノロジー、資本の論理といった、現代社会に蔓延るこのような権力を行使する主体として存在している。

第1章で述べたように、羊はヨーロッパにおける資本主義の発展に関与していた。そして、日本においてもまた、羊は経済産業の発展と密接に関わってきた。経済復興期には羊毛、羊肉としての羊の使用価値が重視されたが、第三次産業の発展によりやがて羊の需要は減少し、羊は急速に姿を消していく。その代わりに、記号が支配する高度資本主義の社会では、羊はイメージ、観念として消費されるようになった。「資本」という語の源流である羊は、ヨーロッパにおける資本主義社会の勃興だけではなく、現代日本の高度資本主義化を象徴する動物ともなっていたのである。

## 注

---

<sup>1</sup> 大垣、前掲書、213 頁。

<sup>2</sup> 久居つばき・くわ正人『村上春樹の読み方——キーワードの由来とその意味』(雷韻出版、2003 年) 111-200 頁。ここでは、村上作品に描かれる動物の中でも、特に象、牛、羊、一角獣についての考察が試みられている。

<sup>3</sup> 同上、136 頁。

<sup>4</sup> 村上春樹「ノモンハンの鉄の墓場」(『辺境・近境』新潮社、1998 年) 145 頁。

<sup>5</sup> 村上春樹『風の歌を聴け』(『村上春樹全作品 1979～1989① 風の歌を聴け・1973 年のピンボール』講談社、1990 年) 65 頁。

<sup>6</sup> 村上春樹「街と、その不確かな壁」(『文学界』第 34 巻 9 号、文化公論社、1980 年 9 月)

---

99 頁。

7 久居・くわ、前掲書、140–155 頁。

8 村上春樹の『羊男のクリスマス』（1985）・『不思議な図書館』（2005）という二冊の絵本にも羊男が登場し、ここでは佐々木マキ（1946–）がイラストを担当している。

9 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』（『村上春樹全作品 1979～1989⑦ ダンス・ダンス・ダンス』講談社、1991 年）130 頁。

10 例えば、『海辺のカフカ』では、「ヒツジ年の執事は手術の必需品だ」という早口言葉がある（村上春樹『海辺のカフカ 下』新潮社、2002 年、194 頁）。

11 電通一〇〇年史編集委員会編『電通一〇〇年史』（電通、2001 年）189 頁。

12 以上、高度経済成長期とそれ以降の羊の歴史については、日本緬羊協会編、羊をめぐる未来開拓者共働会議編、各前掲書を参照した。

13 「一書一会＝ブック・インタビュー」（『幻想文学』季刊 3 号、幻想文学会出版局、1983 年 4 月）8 頁。

14 前田久吉は、産経新聞などフジサンケイグループの創業者であり、テレビ電波塔の構想に着手し東京タワーの設立を計画した人物である。参議院議員となり、政治家としても活動した（マザー牧場編『マザー牧場 50 周年記念誌』マザー牧場、2012 年、9 頁）。

15 同上、8–11 頁。

16 日本緬羊協会編、前掲書、3 頁。

17 小岩井農場は、1891（明治 24）年、日本鉄道会社副社長の小野義真（<sup>ぎしん</sup>1839–1905）、三菱社社長の岩崎弥之助（1851–1908）、内閣鉄道局長の井上勝（1843–1910）によって、畜産振興を担う総合農場経営を目的に設立された（日本経営史研究所編『小岩井農場百年史』小岩井農牧、1998 年、2–3 頁）。

18 同上、405 頁。

19 同上、273–274、470–477 頁、マザー牧場編、前掲書、14、18 頁。

20 総理府内閣総理大臣官房広報室編『国民生活に関する世論調査 1983 年調査』（総理府内閣総理大臣官房広報室、1983 年）。

21 ジャン・ボードリヤール『シミュラクルとシミュレーション』（竹原あき子訳、法政大学出版局、1984 年）16 頁。

- 
- <sup>22</sup> 同上、18 頁。
- <sup>23</sup> 1946～1997 年における都道府県別緬羊飼育戸数及び飼育頭数統計による（日本緬羊協会編、前掲書、122–127 頁）。
- <sup>24</sup> 村上春樹「自作を語る 新しい出発」（『村上春樹全作品 1979～1989② 羊をめぐる冒険』講談社、1990 年）IV 頁。
- <sup>25</sup> 柴田勝二、前掲書、151–152 頁。
- <sup>26</sup> 夏目金之助『三四郎』（『漱石全集 第五巻』前掲書）297 頁。
- <sup>27</sup> 村上春樹・河合隼雄『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』（『村上春樹全作品 1990～2000⑦ 約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いにいく』講談社、2003 年）370–371 頁。河合による二作品の比較については、河合の『青春の夢と遊び』（1994）においても述べられている（河合隼雄『青春の夢と遊び』岩波書店、1994 年、50–56 頁）。
- <sup>28</sup> 三浦雅士『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』（新書館、2003 年）等。
- <sup>29</sup> 村上春樹『やがて哀しき外国語』（講談社、1994 年）258 頁。
- <sup>30</sup> 村上・河合、前掲書、275 頁。
- <sup>31</sup> 村上『やがて哀しき外国語』前掲書、259 頁。
- <sup>32</sup> 村上・河合、前掲書、301 頁。
- <sup>33</sup> 村上春樹「村上春樹氏、区切りの年を語る」『朝日新聞』1989 年 5 月 2 日夕刊第 7 面。
- <sup>34</sup> 村上春樹『スプートニクの恋人』（『村上春樹全作品 1990～2000② 国境の南、太陽の西 スプートニクの恋人』講談社、2003 年）280 頁。
- <sup>35</sup> 村上春樹『海辺のカフカ 上』（新潮社、2002 年）180 頁。
- <sup>36</sup> 同上、191 頁。
- <sup>37</sup> 半田淳子『村上春樹、夏目漱石と出会う——日本のモダン・ポストモダン』（若草書房、2007 年）154–156 頁。
- <sup>38</sup> Haruki Murakami, “The (Generally) Sweet Smell of Youth,” introduction, *Sanshirō*, by Natsume Sōseki, trans. Jay Rubin (London: Penguin Books, 2009) xxvi.
- <sup>39</sup> Murakami xxvi.
- <sup>40</sup> ジェイ・ルービン『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（畔柳和代訳、新潮社、2006 年）107 頁。

- 
- 41 松枝、前掲書、64 頁。
- 42 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』（『村上春樹全作品 1990～2000⑤ ねじまき鳥クロニクル 2』講談社、2003 年）233-234 頁。
- 43 川村二郎「'82 文芸時評（九）」（『文芸』第 21 巻 9 号、河出書房新社、1982 年）21 頁。
- 44 ルイ・アンビス『ジンギスカン——征服者の生涯』（吉田順一・安斎和雄共訳、白水社、1974 年）9 頁。
- 45 高橋英夫「文芸時評＜上＞」（『読売新聞』1982 年 7 月 27 日夕刊第 7 面）。
- 46 板橋作美「動物がもたらす禍福 占い、呪い、祟り、憑き物」（中村生雄・三浦祐之編『人と動物の日本史 4 信仰のなかの動物たち』吉川弘文館、2009 年）173-174 頁。
- 47 昼田源四郎「狐憑きの心性史」（小松和彦編『怪異の民俗学① 憑きもの』河出書房新社、2000 年）280 頁。
- 48 I・M・ルイス『エクスタシーの人類学 憑依とシャーマニズム』（平沼孝之訳、法政大学出版局、1985 年）6-18 頁。
- 49 板橋、前掲書、173 頁。
- 50 「一書一会＝ブック・インタビュー」前掲書、9 頁。
- 51 昼田、前掲書、285 頁。
- 52 板橋、前掲書、160-161 頁、中西裕二「動物憑依の諸相——佐渡島の憑霊信仰に関する調査中間報告——」（小松編、前掲書）135 頁。
- 53 板橋、前掲書、160-161 頁。
- 54 同上、160 頁。
- 55 同上、174 頁。
- 56 仙波純一・石丸昌彦編『精神医学』（放送大学教育振興会、2006 年）33 頁。
- 57 昼田、前掲書、283 頁。
- 58 兵頭晶子『精神病の日本近代 憑く心身から病む心身へ』（青弓社、2008 年）388-389 頁。
- 59 同上、53 頁。
- 60 川村邦光「狐憑きから「脳病」「神経病」へ」（小松編、前掲書）76 頁。

- 
- 61 兵頭、前掲書、104 頁。
- 62 安部『緑色のストッキング』前掲書、158 頁。
- 63 同上、168 頁。
- 64 兵頭、前掲書、34 頁。
- 65 ミシェル・フーコー『狂気の歴史——古典主義時代における』（田村俣訳、新潮社、1975 年）103 頁。
- 66 先生のモデルについて、坪井秀夫は、右翼界の大物であった児玉誉士夫（1911–1984）であると指摘している（坪井秀夫「プログラムされた物語——『羊をめぐる冒険』論」『国文学 解釈と教材の研究』第 43 巻 3 号、学灯社、1998 年 2 月、73 頁）。児玉は各種右翼団体に属し、戦中には中国各地で大量の戦略物資を調達して莫大な資産を得た。戦後 A 級戦犯として巣鴨拘置所に収容されたが、釈放後政財界の舞台裏で暗躍した。作品の舞台である 1978 年にはロッキード事件で起訴されていたが、脳梗塞のため療養中であった（日外アソシエーツ編『20 世紀日本人名事典 あ～せ』日外アソシエーツ、2004 年、1021 頁）。
- 67 イヴ・ペリシエ『精神医学の歴史』（三好暁光訳、白水社、1974 年）171 頁。
- 68 宮本陽一郎「ショック療法時代の文学と文化——マインド・コントロール・テクノロジーとポストモダン——」（鷺津浩子・森田孟編著『アメリカ文学とテクノロジー』筑波大学アメリカ文学会、2002 年）182 頁。
- 69 同上、182 頁。
- 70 同上、183 頁。
- 71 以上、精神医学の歴史については、ペリシエ、前掲書、小俣和一郎『近代精神医学の成立——「鎖解放」からナチズムへ』（人文書院、2002 年）、ジャック・オックマン『精神医学の歴史 [新版]』（阿部恵一郎訳、白水社、2007 年）を参照した。
- 72 『羊をめぐる冒険』を脳医学と関連付けた論としては、布施英利「脳 村上春樹と脳をめぐる冒険」（栗坪良樹・拓植光彦編『村上春樹スタディーズ 02』若草書房、1992 年）や、リチャード・パワーズ「ハルキ・ムラカミ—広域分散—自己鏡像化—地下世界—ニューロサイエンス流—魂シェアリング・ピクチャーショー」（柴田元幸・藤井省三他編『世界は村上春樹をどう読むか』文芸春秋、2009 年）がある。
- 73 宮本、前掲書、192 頁。

- 
- 74 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（『村上春樹全作品 1979～1989』④『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』講談社、1990年）530頁。
- 75 『アフターダーク』では、監視カメラの映像から暴力事件の犯人を暴こうと試みるホテルの従業員が、その映像技術を「まるで『ブレードランナー』みたい」（村上春樹『アフターダーク』講談社、2004年、109頁）と言っている。この他にも、村上春樹と『ブレードランナー』については、映画評論家の四方田犬彦が、『アフターダーク』冒頭のカメラアイが都市の俯瞰から一人の人間に接近していく手法について、『ブレードランナー』のような映画でコード化し定式化されたものであると指摘している（四方田犬彦「村上春樹と映画」柴田・藤井他編、前掲書、164頁）。このような指摘からは、村上作品における『ブレードランナー』の影響がうかがわれる。
- 76 今井裕『クローン動物はいかに創られるのか』（岩波書店、1997年）9頁。
- 77 イアン・ウィルマット、ケイス・キャンベル他『第二の創造：クローン羊ドリーと生命操作の時代』（牧野俊一訳、岩波書店、2002年）157頁。
- 78 同上、23頁。
- 79 同上、300–303頁。
- 80 “Special Report: The Age of Cloning,” *Time* 10 March 1997: 28–29.
- 81 同上、301頁。
- 82 同上、181、188頁。
- 83 川本三郎「文芸時評八月 村上春樹をめぐる解釈」（『文学界』第46巻9号、文芸春秋、1982年8月）294頁。
- 84 山川健一「書味三昧」（『中央公論』第97巻12号、中央公論社、1982年11月）315頁。
- 85 川本、前掲書、290頁。
- 86 以上、戦後における広告・広告業界の歴史については、電通一〇〇年史編集委員会編、前掲書、須藤春夫編『広告 広告は市民とマスコミの敵か味方か』（大月書店、1997年）、寺田信之介『よく分かる広告業界』（日本実業出版、2002年）、電通出版事業部編『電通広告年鑑』（電通、1976–1983年）を参照した。
- 87 大塚英志『「彼女たち」の連合赤軍 サブカルチャーと戦後民主主義』（角川書店、1994

---

年) 172-173 頁。

88 村上春樹『国境の南、太陽の西』(『村上春樹全作品 1990～2000② 国境の南、太陽の西 スプートニクの恋人』前掲書) 79-80 頁。

89 村上春樹『1973 年のピンボール』(『村上春樹全作品 1979～1989① 風の歌を聴け・1973 年のピンボール』前掲書) 151 頁。

90 柴田勝二『中上健二と村上春樹 <脱六〇年代>的世界のゆくえ』(東京外国語大学出版会、2009 年) 8 頁。

91 村上春樹『ノルウェイの森』(『村上春樹全作品 1979～1989⑥ ノルウェイの森』講談社、1991 年) 260 頁。

92 小熊英二『1968<下> 叛乱の終焉とその遺産』(新曜社、2009 年) 779 頁。

93 村上『ノルウェイの森』前掲書、72 頁。

94 小熊、前掲書、774 頁。

95 村上『風の歌を聴け』前掲書、90 頁。

96 村上『1973 年のピンボール』前掲書、151 頁。

97 川本、前掲書、151 頁。

98 村上『ダンス・ダンス・ダンス』前掲書、33 頁。

99 同上、42-43 頁。

100 同上、44 頁。

101 柴田勝二「受動的な冒険」前掲書、148 頁。

## 結章

以上、本論文では、日本近現代文学における羊の表象を、緬羊飼育の文化的・社会的文脈との関連から考察した。日本では明治時代以前には羊はほとんど存在していなかったが、西欧文化から羊に関する知識やイメージを受容し、それを各時代の日本社会の様相に当てはめた羊の表象が形成されてきた。第1章から第5章を通して、1900年代から1980年代にわたる期間に発表された作品を考証することにより、各章で明らかになった点は次の通りである。

第1章では、夏目漱石の『三四郎』の中で「迷羊」として表された羊の表象を解釈した。そこでは、羊は平和や長閑さの象徴としてではなく、空想上の動物であるかのような異質性を備えたものとして羊が登場する。本論文では、『三四郎』の「迷羊」を『新約聖書』の「迷い出た羊のたとえ」と同一視することはせず、“stray sheep”という言葉の初出であるフィールドニングの『トム・ジョウズ』と比較対照を行った。これにより、『三四郎』の羊は、性モラルを逸脱し社会から排除された女性、特に当時の社会言説で喧伝された「墮落女学生」を暗示するものであったことを立証した。キリスト教では羊は敬虔な信者を表し神から救済される存在であるが、『三四郎』で羊に擬えられた女性美禰子は、自ら選択した結婚に罪の意識を抱き、救われる者として描かれてはいない。漱石は、日本に定着していなかった羊に関する知識や表現を英文学を通して受容するだけではなく、それを明治時代の社会描写へと応用し、救われざる羊というキリスト教とは異なる意味を羊の表象に与えたのである。

第2章では、江馬修の『羊の怒る時』の中で、関東大震災時に朝鮮人虐殺を行う暴徒と化した日本人民衆が、羊として表象されていることを明らかにした。これまで十分な検証が行われていなかった江馬のプロレタリア作家としての経緯や、『台湾日日新報』に作品が連載された背景を調査することにより、『羊の怒る時』には検閲に付された社会主義者弾圧事件を暗に伝える側面があったことがわかった。江馬は、朝鮮人暴動の噂に流されるままになった「愚衆」としての日本人労働者だけではなく、それを傍観する無力な知識人や、人々を意のままに操作する軍隊や警察といった権力機関を非難している。江馬もまた、漱石と同様に西欧文化に素養のあった作家であり、群れるものとしての羊のイメージを受容していた。『羊の怒る時』では、民衆と権力機構が羊と羊飼いの関係に擬えられるとともに、



従順な羊の群れという表現が逆説的に用いられ、国家や警察の策謀により朝鮮人虐殺に関与する日本人群衆の暴力性が強調されている。

第3章では、らしゃめんの変容の歴史と戦後占領期を舞台とする作品の分析を通して、羊がジェンダーとナショナリティの構造の中で、被支配下に置かれ女性化された存在を表象していることを解明した。18世紀後期において羊を示す語であったらしゃめんは、19世紀半ばの開国期には、西洋人男性と性的関係を持つ日本人女性を蔑む語として広まった。唐人お吉のようならしゃめんをめぐる物語は、戦後占領期にはアメリカ兵を相手に性的サービスを行ったパンパンと呼ばれる日本人女性の言説へと当てはめられた。その一方で、高見順の『敗戦日記』や大江健三郎の「人間の羊」のように、戦後占領期を描いた日本人男性作家の作品では、日本人女性は羊に擬えられてはいない。ここではむしろ、政治的かつ性的に無力となった日本人男性が去勢された羊に喩えられている。羊の比喻によって表された男性は、男性性を剥奪され、らしゃめんとして羊の表象に付随した女性性を与えられているのである。

第4章では、植民地政策として進められた「満洲」における緬羊飼育の歴史性に着目し、「詩人の生涯」を中心とする安部公房作品の羊の表象の解釈を行った。下丸子文化集団のサークル誌に掲載されたプロレタリア詩との関係からは、羊毛製品や糸紡ぎの行為が、大規模機械産業に対峙する手工業的性質を備えたものとして把握されていることがわかった。「満洲」で少年期の多くの時間を過ごした安部の経歴を考慮すれば、このような意識の背景には、羊のいる「満洲」の風景を郷愁と憧憬の対象として捉えた、日本内地人の視点が共有されていることがうかがえる。羊や草食動物の腸の移植というテーマが描かれた「盲腸」「羊腸人類」『緑色のストッキング』では、「満洲」の農事試験場で実施された羊の品種改良実験のように、羊は高度な科学技術を象徴する動物となりうる可能性を提示していた。本論文で取り上げた他の作家達と比較するならば、安部公房は、緬羊飼育が日常的に行われていた「満洲」で育った者、そして大陸の放牧とは異なる形態で畜農業として緬羊が飼育されていた戦後内地へ引揚げてきた者という、二つの立場から羊を描いた作家として位置付けることができる。

第5章では、村上春樹の『羊をめぐる冒険』にみられる羊の表象が、第1章から第4章で論じた日本文学における羊の表象をどのように継承し、さらに新しい意義を生じさせているのかについて考察した。1950年代後半から60年代の高度経済成長期を経て、羊は羊

毛生産としての物質的価値が問われる動物から、観光牧場の誕生にみられるようにレジャーや余暇の概念と結び付き、イメージとして消費される動物へと変化していた。しかし村上は、漱石の『三四郎』の「迷羊」を念頭に置き、明治時代以降の軍国主義政策と緬羊飼育の歴史を詳細に記述することで、このような羊のイメージを相対化して描いている。1970年代後半を舞台とするこの作品に関しては、羊博士・先生・「鼠」の三人の登場人物を襲う「羊つき」の現象を、民間信仰であった憑き物と比較することにより、羊は狂気を管理・監護する精神医学の権力や、暴力を伴って進展する科学テクノロジーの恐怖を表すものであることを論証した。羊に取り憑かれたまま自殺する「鼠」の行動からは、『羊をめぐる冒険』で高度に抽象化して描かれる羊は、政策や経済動向によってその生命を左右させられるものではなく、1970年以降の高度資本主義社会における資本の権力の象徴でもある。

以上のように、日本近現代文学に描かれた羊は、実在しない空想としての動物から、近代化政策と植民地主義を担う動物となり、戦後には再びイメージとして消費される動物へと変化していった。本論文で取り上げた作家達は、イギリス文学やフランス文学、アメリカ文学に関する知識があり、英語やフランス語からの翻訳活動を行った人物でもある。彼らが自らの作品の中で羊の比喻を用い、羊を登場させた背景には、それらの読書体験の影響がうかがえる。しかし、本論文で論じた作品では、西欧文化における羊の表象の意義がそのまま用いられてはおらず、各時代の日本における羊のイメージや緬羊飼育の状況が投影されている。日本近現代文学における羊の表象の考察を通して、文学作品の受容を通じた異文化との接触から、表象や比喻がどのように変遷していったのか、その一例を論じることができた。

日本における羊の表象として特徴的である点の一つは、江馬修の『羊の怒る時』のように、羊を群れとみなす視点がみられる一方で、群れではなく一匹の羊として捉えた表現が多くみられることである。このことは、日本内地では羊の放牧が定着せず、少数の羊が農家で飼育されたという日本の緬羊飼育をめぐる状況を反映させているだろう。『三四郎』の美禰子や、らしゃめんとしての唐人お吉は、複数ではなく一匹の羊に擬えられており、『羊をめぐる冒険』で羊博士や先生、「鼠」に取り憑く羊もまた一匹であり、羊男も森の中で一人で暮らしている。このような群れをなさない一匹の羊は、群れから離れた人間、つまり社会や共同体から排除された者を示している。

また、羊は明治時代以降本格的に日本に輸入された動物として、19世紀半ばの開国期や明治時代には西欧文化を象徴する新しい事物であった。らしゃめんという語は、異文化との遭遇を示すこのような背景から西洋人男性と性的関係のある日本人女性を示したが、本論文第1章・第3章では、『三四郎』の美禰子や唐人お吉、戦後占領期のパンパンといった女性が羊に擬えられたことを論じた。性的逸脱を非難する意味合いで羊の表象が用いられつつも、彼女達のように、外国語能力を備え、西洋文化やアメリカ文化をいち早く取り入れた女性が、羊の比喻によって表象されてきたのである。日本においては、このように、新しい海外文化と接触した女性が羊に擬えられており、このような羊の表象は、羊の飼育の歴史が長く定着している文化圏ではみられない独自のものである。

牧畜の起源から家畜として人類と生活をともにし、羊毛産出や食肉消費など人間社会の要請によって品種改良を重ねられた羊は、野生動物として生息することは難しく、人間によってその生命のあり方を形づくられている。そして1990年代にクローン技術の成功を体現した羊は、最も高度な人間の科学テクノロジーを象徴する動物となった。このような人間と羊の関わりを考えれば、羊という動物が歩んだ歴史とその表象を考察することは、羊をどのように利用するかという、社会的・経済的動機に基づいた人間の思想倫理と技術の歴史を理解することにつながる。本論文では特に、日本近現代文学における羊の表象を考察することによって、次の側面における人間の文化的営為の把握を可能にした。

第一に、羊と羊飼という二者のメタファーを解釈することにより、それに擬えられた支配関係、及びそれを構成する社会構図を解明した。羊と羊飼の関係は、労働者と資本家の階級対立や、ジェンダー上の支配関係、植民地と宗主国といった国家間の権力構造を描き出すだけでなく、それらが幾重にも絡まり合う重層性を示している。羊の表象はこのような構図を反映させるとともに、その関係性の転覆を示唆するものでもある。群れをなす羊は人間の共同体に喩えられるが、従順な羊の群れは、ときには「よき羊飼」を失い迷走する暴力的な民衆のメタファーとなり、マジョリティの集団の凶暴性を表している。日本近現代文学における羊の表象は、群れから迷い出た羊が、犠牲者としてのマイノリティや救済されるべき存在として「犠牲の羊」「あわれな小羊」と称されるような、常套句的な表現には包含されない多義的な象徴性を備えている。

第二に、本論文では日本の羊の歴史を「満洲」を射程に入れて捉え直すことにより、ポストコロニアルの視点から日本近現代における羊のイメージの構築の過程を辿った。日本

における羊の表象は、西欧文化の受容から形成されただけではなく、戦前の「満洲」の牧歌的風景への憧憬や郷愁を包含している。羊は平和で牧歌的なイメージを連想させることが多いが、日本の綿羊飼育の歴史を振り返れば、かつてそのような羊の放牧風景が日本内地で定着したことはない。羊の群れが逍遙する風景は、日本が植民地として開拓した「満洲」の地にみられ、そこでは羊は綿羊飼育の軍事目的とは乖離した平和と穏やかさのイメージを構築していった。羊にまつわるこのような心象風景は、1960年代以降の観光牧場の展開にも継承されているといえるだろう。

日本では大量の羊毛製品が消費されているにも拘らず、日本内地では一部の地域を除き羊は身近な動物であったことはなく、それゆえに、存在しないものに対する憧れや非現実性が羊の表象に投影されてきたといえるだろう。第5章で論じたように、村上春樹は、羊を日本近代の象徴であると主張した。しかし、日本の歴史上一貫して存在しないものの象徴性を、文学作品や文化的素材によって構築してきたのは、本論文で取り上げた作家達である。現前しない動物を「表象」することは、まさにこれら文学者達の営為であった。本論文では、日本近現代文学における羊の表象を考察することにより、文学作品が、作家の想像力と同時代の社会的・文化的文脈の中から生まれた構築物であることを明らかにした。

最後に、羊の表象を考察するにあたり、本論文では十分に検討できなかった点について、今後の研究課題として提示する。

第一に、日本における羊の表象に影響を与えたと想定される英文学作品の羊について、第1章の夏目漱石の指摘に見受けられたように、農業や土地所有の政策との関係から考察を行うことである。イギリスは世界の羊毛生産を牽引した国家であり、その旧植民地であるオーストラリアやニュージーランドを含め、現在でもなお世界の羊毛市場の中心的な役割を担っている。囲い込み運動や産業革命、世界的規模での植民地政策を通して、文学作品に描かれた羊や牧場の風景とその象徴性はどのように変化していったのだろうか。漱石が参照していた18世紀の小説や牧歌詩にみられる、羊と牧歌的風景の表象を今後の分析の対象としたい。

この点に関連して、上記の英文学作品や西欧の牧歌が、日本ではどのように受容され、そして同様のテーマが日本文学の創作においてどのように模倣され変容していったのかという問題にも取り組む必要があるだろう。その際には、本論文第1章と第2章で言及した、明治時代の翻訳作品や大正期の詩作品を中心にさらなる分析が求められる。日本における

牧歌的なイメージの変遷については、第5章で述べた戦後のレジャー文化や観光牧場の発展についても着目すべきである。

文学作品における動物の表象を研究することでさらに検討したい点は、文学研究が動物の保護や環境破壊といった社会問題にいかに関与していけるかということである。序章でも述べたように、文学研究はアカデミックな世界に留まり環境問題には無縁であるという非難に対して、1970年代以降には地球規模での環境問題にアプローチするエコクリティシズムやアニマル・スタディーズの手法が試みられている。ここでは、文学テキストだけではなく、自然科学分野の研究成果も考慮した学際的な立場から研究が行われ、自然環境への意識を促すことが目的とされている<sup>1</sup>。羊の大量放牧による砂漠化の進行や、反芻動物のメタンガス排出<sup>2</sup>など、羊もまた近年の環境問題と無縁ではない。文学作品と羊の表象を考察するにあたり、人間の社会的・文化的行為が自然環境に影響を与えているということ、そのような背景の中で動物や自然の表象が常に変容をみせていることを、これから解明していきたい。

## 注

---

<sup>1</sup> Glotfelty xxiv.

<sup>2</sup> Dave Reay, Pete Smith, and André van Amstel, *Methane and Climate Change* (London: Earth Scan, 2010) 136–137.

## 参考文献一覧

### 【凡例】

1. 日本語文献については著者姓または編者姓の五十音順、欧文文献については著者姓または編者姓のアルファベット順に配列する。
2. 同一者による複数の著書の場合、発刊年度が早い順に配列する。ただし、同年に発刊された作品は、タイトルを基準に五十音順に配列する。
3. 同一者が編集を行っている文献については、最後に配列する。また、同一者が共著を行っている文献については、共著者姓の五十音順に配列し、発刊年度が早い順に配列する。
4. 著者、編者が特定できない文献については、文献の最後に配列し、タイトルの五十音順またはアルファベット順に配列する。

#### <日本語文献>

アガンベン、ジョルジョ『開かれ 人間と動物』岡田温司・多賀健太郎訳、平凡社、2011年

安部公房「赤い繭」『安部公房全集 2』新潮社、1997年、492-494頁

——「いかに生きべきか」『安部公房全集 4』新潮社、1997年、53-57頁

——「S・カルマ氏の犯罪」『安部公房全集 2』新潮社、1997年、378-451頁

——『終りし道の標べに』[真善美社版]『安部公房全集 1』新潮社、1997年、271-390頁

——『飢餓同盟』『安部公房全集 4』新潮社、1997年、93-224頁

——「事業」『安部公房全集 2』新潮社、1997年、510-514頁

——「詩人の生涯」[小説]『安部公房全集 3』新潮社、1997年、73-83頁

——「序にかえて——高島青鐘詩集『埋火』」『安部公房全集 3』新潮社、1997年、535頁

——『どれい狩り』[戯曲]『安部公房全集 5』新潮社、1997年、97-182頁

- 「魔法のチョーク」『安部公房全集 2』新潮社、1997 年、499–509 頁
- 「盲腸」『安部公房全集 5』新潮社、1997 年、65–77 頁
- 「砂漠の思想」『安部公房全集 8』新潮社、1998 年、108–114 頁
- 「詩人の生涯」[ラジオドラマ]『安部公房全集 12』新潮社、1998 年、445–459 頁
- 『第四間氷期』『安部公房全集 9』新潮社、1998 年、9–174 頁
- 「羊腸人類」『安部公房全集 16』新潮社、1998 年、401–413 頁
- 「安部公房年譜」『安部公房全集 19』新潮社、1999 年、128–130 頁
- 「内なる辺境」『安部公房全集 22』新潮社、1999 年、205–229 頁
- 『終りし道の標べに』[冬樹社版]『安部公房全集 19』新潮社、1999 年、377–475 頁
- 「後記——『夢の逃亡』」『安部公房全集 22』新潮社、1999 年、37 頁
- 『他人の顔』[講談社版]『安部公房全集 18』新潮社、1999 年、321–495 頁
- 『箱男』『安部公房全集 24』新潮社、1999 年、9–141 頁
- 『緑色のストッキング』『安部公房全集 25』新潮社、1999 年、151–200 頁
- 安部公房スタジオ編『安部公房の劇場 七年の歩み』創林社、1979 年
- 天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』春秋社、1985 年
- 『血の九月』あとがき『在日文芸 民涛』第 8 号、影書房、1989 年 9 月、380–382 頁
- 『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』春秋社、1989 年
- 「江馬修の著作年表と参考文献目録——その開拓精神と多様な活動を中心に——」『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』第 45 巻、美作女子大学、2000 年、107–123 頁
- あらかわそおべえ『角川外来語辞典 第 2 版』角川書店、1977 年
- 荒木誠三『らしゃめん』大陸書房、1982 年
- 荒木正純『芥川龍之介と腸詰<sup>ソーセージ</sup>め：「鼻」をめぐる明治・大正期のモノと性の文化誌』悠書館、2008 年
- 有山輝雄「明治末期の新聞メディアと漱石」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第 5 号、翰林書房、1995 年 11 月、86–97 頁
- 有吉佐和子「亀遊の死」『別冊文芸春秋』第 76 巻、文芸春秋社、1961 年 7 月、140–159 頁

頁

——『ふるあめりかに袖はぬらさじ』中央公論社、1970 年

アンビス、ルイ『ジンギスカン——征服者の生涯』吉田順一・安斎和雄共訳、白水社、1974 年

飯田裕三編『ミレー画集』講談社、1979 年

井口賢三『満洲国に於ける畜牛と緬羊』北海道帝国大学満蒙研究会、1937 年

池上良正『死者の救済史——供養と憑依の宗教学』角川書店、2003 年

石川秀雄『桜島——噴火と災害の歴史——』共立出版、1992 年

石田戢『現代日本人の動物観 動物とのあやしげな関係』ビーイング・ネット・プレス、2008 年

石牟礼道子「存在の根底を照らす月明り——『羊の怒る時』(江馬修)」『群像』第 45 巻 4 号、講談社、1990 年 4 月、344-345 頁

板橋作美「動物がもたらす禍福 占い、呪い、祟り、憑き物」中村生雄・三浦祐之編『人と動物の日本史 4 信仰のなかの動物たち』吉川弘文館、2009 年、159-181 頁

市川房枝編『日本婦人問題資料集成 第一巻 人権』ドメス出版、1978 年

李貞熙<sup>イ・テイ・キ</sup>「安部公房の小説における〈変身〉のモチーフをめぐって——初期作品を中心として」『国際日本文学研究集会会録』第 19 回、国文学研究資料館、1996 年 10 月、87-110 頁

稲賀繁美「十二支 未——「牧畜の異郷」の家畜 日本美術における羊と、その代理としての山羊」『あいだ』第 219 号、『あいだ』の会、2015 年 3 月、18-23 頁

稲垣瑞穂『夏目漱石と倫敦留学』吾妻書房、1990 年

井之川巨編『鋼鉄の火花は散らないか 江島寛・高島青鐘の詩と思想』社会評論社、1975 年

——「下丸子文化集団——一九五〇年代、労働者詩人の群像」思想の科学研究会編『共同研究集団——サークルの戦後思想史』平凡社、1976 年、181-191 頁

猪俣浩「漱石とシェイクスピアの《雲》——主に『三四郎』と『ハムレット』について——」『研究年報』第 20 号、学習院大学、1973 年、249-266 頁

今井裕『クローン動物はいかに創られるのか』岩波書店、1997 年

井村哲郎『満洲グラフ』と満鉄の弘報活動 財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第 15 巻、



- ゆまに書房、2009 年、117–122 頁
- 岩井大慧「わがシャマニズム研究の回顧」『民族学研究』第 14 卷、日本民族学協会、1949 年 1 月、51–56 頁
- 岩佐純『兵庫・風雪二十年』兵庫新聞社、1996 年
- 岩崎稔・上野千鶴子他編『戦後日本スタディーズ①–③』紀伊国屋書店、2008–2009 年
- ヴィガレロ、ジョルジュ『強姦の歴史』藤田真利子訳、作品社、1999 年
- ウィルマット、イアン、ケイス・キャンベル他『第二の創造：クローン羊ドリーと生命操作の時代』牧野俊一訳、岩波書店、2002 年
- ヴィンセント、ジェームス・キース「大江健三郎と三島由紀夫の作品におけるホモファシズムとその不満」竹内孝宏訳『批評空間』第 II 期、第 16 号、太田出版、1998 年 1 月、129–154 頁
- 上田穂積「田村カフカはなぜ「坑夫」を読むのか——漱石・直哉そしてハルキ」『徳島文理大学紀要』第 79 号、徳島文理大学、2010 年 3 月、35–43 頁
- 上野千鶴子「オリエンタリズムとジェンダー」加納実紀代編『母性ファシズム——母なる自然の誘惑』学陽書房、1995 年、108–131 頁
- 「「国民国家」と「ジェンダー」——「女性の国民化」をめぐる」『現代思想』第 24 卷 12 号、青土社、1996 年 10 月、8–45 頁
- ヴェルナー、フロリアン『牛の文化史』臼井隆一郎訳、東洋書林、2011 年
- 鶴澤和宏「肉食の変遷」西本豊弘他編『人と動物の日本史 1 動物の考古学』吉川弘文館、2009 年、147–175 頁
- 内田康「回避される「通過儀礼」——村上春樹『羊をめぐる文学』論——」『台湾日本語文学報』第 34 集、台湾日本語文学会、2013 年 12 月、27–52 頁
- 英米文化学会編『英文学にみる動物の象徴』彩流社、2009 年
- 海老池俊治「漱石と英文学——『虞美人草』と『三四郎』の場合」『言語文化』第 2 巻、一橋大学、1965 年 11 月、89–98 頁
- 江馬修「或る作家の手紙」『檜の葉』新潮社、1920 年、109–147 頁
- 「お牧」『小説倶楽部』第 7 号、民衆文芸社、1921 年 7 月、2–29 頁
- 『訪るゝ女 五幕の悲劇』新潮社、1922 年
- 『極光 上・下』新潮社、1924 年

- 『羊の怒る時』聚芳閣、1925 年
- 「ミレーの芸術」『文芸戦線』第 2 巻 5 号、文芸戦線社、1925 年 9 月、5 頁
- 『追放』新潮社、1926 年
- 『延安賛歌』新日本出版社、1964 年
- 「ゆらぐ大地」『延安賛歌』新日本出版社、1964 年、129-206 頁
- 『受難者』『江馬修作品集 4 受難者 他』北溟社、1973 年、3-316 頁
- 『一作家の歩み』日本図書センター、1989 年
- 『血の九月（上）』『在日文芸 民涛』第 7 号、影書房、1989 年 6 月、302-345 頁
- 『血の九月（下）』『在日文芸 民涛』第 8 号、影書房、1989 年 9 月、330-379 頁
- 『羊の怒る時』影書房、1989 年
- 『阿片戦争』ゆまに書房、2004 年
- 奥<sup>オ</sup>ミ<sup>ミ</sup>ン<sup>ン</sup>チ<sup>チ</sup>ョ<sup>ョ</sup>ン<sup>ン</sup> 呉美 姫『安部公房の＜戦後＞——植民地経験と初期テクストをめぐって』クレイン、2009 年
- 大内輝雄『羊蹄記——人間と羊毛の歴史』平凡社、1991 年
- 大江健三郎「後記」『死者の奢り』文芸春秋新社、1958 年、302-303 頁
- 「運搬」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、157-170 頁
- 「偽証の時」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、65-97 頁
- 「奇妙な仕事」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、5-18 頁
- 「共同生活」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、317-348 頁
- 「後退青年研究所」『大江健三郎全作品（第 I 期）4』新潮社、1994 年、5-20 頁
- 『個人的な体験』『大江健三郎全作品（第 I 期）6』新潮社、1994 年、203-370 頁
- 「飼育」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、99-138 頁
- 「死者の奢り」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、19-48 頁
- 「他人の足」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、49-64 頁
- 「人間の羊」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、139-156 頁
- 「鳩」『大江健三郎全作品（第 I 期）1』新潮社、1994 年、171-198 頁
- 「不意の唾」『大江健三郎全作品（第 I 期）2』新潮社、1994 年、37-50 頁
- 『万延元年のフットボール』『大江健三郎全作品（第 II 期）1』新潮社、1994 年、5-268 頁

——『芽むしり仔撃ち』『大江健三郎全作品（第Ⅰ期）1』新潮社、1994年、199–315  
頁

大岡昇平『歴史小説の問題』文芸春秋、1974年

大垣さなゑ『ひつじ～羊の民俗・文化・歴史～』まろうど社、1990年

大島丈志「『人間の羊』論——単行本「後記」から新たな読みの可能性へ——」『近代文学  
研究』第21号、日本文学協会近代部会、2004年3月、43–57頁

太田玉茗「小羊」川戸道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集〈新聞雑誌編〉34』大空社、  
1998年、369–370頁

太田久好『横浜沿革誌』東洋社、1892年

大塚英志『「彼女たち」の連合赤軍 サブカルチャーと戦後民主主義』角川書店、1994年

大手拓次「野の羊へ」『大手拓次全集 第一巻』白鳳社、1970年、154頁

大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第24集、労働旬報社、1970年

大東和重「（書評）工藤貴正著『中国語圏における厨川白村現象 隆盛・衰退・回帰と継続』  
『比較文学』第53巻、日本比較文学会、2011年3月、129–134頁

大本達也「『英文学』研究者としての漱石・夏目金之助——明治期における「文学」の形成  
過程をめぐる国民国家論・2——」『鈴鹿国際大学紀要 Campana』第11号、鈴鹿大学、  
2005年3月、81–93頁

岡庭昇『花田清輝と安部公房』第三文明社、1980年

岡本直茂「夏目漱石「三四郎」論——〈迷える羊〉への自覚」『阪神近代文学研究』第  
9号、阪神近代文学会、2008年6月、27–40頁

岡本正行『緬羊と羊毛』有誠堂、1936年

荻原桂子「『三四郎』論——「迷<sup>ストレイ Sheep</sup>羊」について」『九州女子大学紀要 人文・社会科学  
編』第36巻3号、九州女子大学・九州女子短期大学、2002年2月、111–120頁

小熊英二『1968<上> 若者たちの叛乱とその背景』新曜社、2009年

——『1968<下> 叛乱の終焉とその遺産』新曜社、2009年

小倉脩三「『森の女』と「迷<sup>ストレイ Sheep</sup>羊」——『三四郎』論 その一——」『国文学ノート』第  
24号、成城大学、1987年3月、67–86頁

小栗風葉『青春』『明治大正文学全集 第十七巻』春陽堂、1928年、1–342頁

——『恋慕ながし』『明治大正文学全集 第十七巻』春陽堂、1928年、343–492頁

- 尾崎秀樹・菊池昌典『歴史文学読本 人間学としての歴史学』平凡社、1980 年
- 小田切進「解説」『種蒔く人 復刻版別冊』日本近代文学館、1961 年、8-12 頁
- 『昭和文学の成立』勁草書房、1965 年
- 小田島本有「『三四郎』論——「迷<sup>ストレイシブ</sup>羊」をめぐる——」『釧路工業高等専門学校紀要』  
第 25 号、釧路工業高等専門学校、1991 年 12 月、207-214 頁
- 小谷一明他編『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版、2014 年
- オックマン、ジャック『精神医学の歴史 [新版]』阿部恵一郎訳、白水社、2007 年
- 小俣和一郎『近代精神医学の成立——「鎖解放」からナチズムへ』人文書院、2002 年
- 外米えり子「日給百七十五円」『東京南部サークル雑誌集成 第 1 巻』不二出版、2009 年、  
51-52 頁
- 角田旅人「「安部公房」断章——「詩人の生涯」その他——」『東書高校通信国語』第 131 号、東京書籍、1974 年 6 月、12-14 頁
- 桂川寛『桂川寛作品集<戦後から世紀末へ>1950~1994』アートギャラリー環、1994 年
- 加藤卓『<広告制作者>の歴史社会学——近代日本における個人と組織をめぐる揺らぎ』  
せりか書房、2014 年
- 加藤典洋『村上春樹 イエローページ』荒地出版社、1996 年
- 『村上春樹 イエローページ PART2』荒地出版社、2004 年
- 加藤文三『亀戸事件——隠された権力犯罪——』大月書店、1991 年
- 金子準二編『続日本狐憑史資料集成 (随筆編)』牧野出版社、1975 年
- 金田静雄「光と翳——安部公房 詩人の生涯」『浜松短期大学論集』第 56 号、浜松短期大  
学、2000 年 12 月、301-326 頁
- 亀井俊介『『文学論』の講義と内容の展開』『漱石全集 第十四巻』月報 16、岩波書店、1995  
年 8 月、13-16 頁
- 柄谷行人『漱石論集成』第三文明社、1992 年
- 河合隼雄『青春の夢と遊び』岩波書店、1994 年
- 川上勉『高見順 昭和の時代の精神』萌書房、2011 年
- 川崎寿彦『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』名古屋大学出版会、1983  
年

——『分析批評入門—新版』明治図書出版、1989 年

川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア翻訳文学書全集 37 『ハムレット』 坪内逍遙訳』  
大空社、2000 年

河野豊「サー・トマス・ブラウンと夏目漱石——『三四郎』をめぐって——」『別府大学紀  
要』第 48 号、別府大学文学部、2007 年 2 月、A17-A26 頁

川端俊一郎「明治初期の牧羊業と羊毛価格支持政策」『北海学園大学経済論集』第 31 卷 2  
号、北海学園大学経済学会、1984 年 1 月、27-47 頁

川村邦光『幻視する近代空間——迷信・病気・座敷牢、あるいは歴史の記憶』青弓社、1990  
年

——「狐憑きから「脳病」「神経病」へ」小松和彦編『怪異の民俗学① 憑きもの』河出  
書房新社、2000 年、73-126 頁

川村二郎「82 文芸時評（九）」『文芸』第 21 卷 9 号、河出書房新社、1982 年、20-25  
頁

川村湊「「帝国」の漱石」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第 5 号、翰林書房、1995 年、  
28-38 頁

川本三郎「文芸時評八月 村上春樹をめぐる解釈」『文学界』第 46 卷 9 号、文芸春秋、1982  
年 8 月、289-295 頁

カンドクサン  
姜徳相『関東大震災・虐殺の記録』青丘文化社、2003 年

——・クムビョンドン 琴秉洞編『関東大震災と朝鮮人』みすず書房、1963 年

菊苑老人『美那登能波奈横浜奇談』錦港堂、1861-1865 年頃

喜田川守貞『守貞漫稿』朝倉治彦編、東京堂出版、1973 年

城戸昇「詩と状況・激動の 50 年代 敗戦から 60 年安保闘争まで」『現代思想』第 35 卷  
17 号、青土社、2007 年 12 月、230-311 頁

キムイルミョン  
金一勉『遊女・からゆき・慰安婦の系譜』雄山閣出版、1997 年

キム ジョン  
金志映「有吉佐和子の「アメリカ」——『亀遊の死』（戯曲『ふるあめりかに袖は濡らさじ』）  
を中心に——」『比較文学』第 51 卷、日本比較文学会、2009 年 3 月、7-20 頁

キムジョンファン  
金正勲『漱石と朝鮮』中央大学出版部、2010 年

木村信一「解説」高見順『敗戦日記』中央公論新社、2005 年、463-470 頁

木村陽子『安部公房とは誰か』笠間書院、2013 年

- 木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』皓星社、2000 年
- キーン、ドナルド「解説」安部公房『水中都市・デンドロカカリヤ』新潮社、2011 年、318–325 頁
- クッツェー、ジョン・M『動物のいのち』森祐希子・尾関周二訳、大月書店、2003 年
- クムミョンドン 琴秉洞編『朝鮮人虐殺に関する知識人の反応 2』緑蔭書房、1996 年
- 栗坪良樹「大江健三郎の＜戦争・戦後＞序説 「人間の羊」を手掛りにして」『評言と構想』第 8 巻、評言と構想社、1970 年 9 月、10–16 頁
- ・拓殖光彦編『村上春樹スタディーズ 01』若草書房、1999 年
- クレベール、ジャン＝ポール『動物シンボル事典』竹内信夫他訳、大修館書店、1992 年
- 黒岩裕市「大江健三郎『喝采』の男性同性愛表象」『フェリス女学院大学文学部紀要』第 47 号、フェリス女学院大学、2012 年 3 月、151–164 頁
- 経済企画庁編『現代日本経済の展開：経済企画庁 30 年史』経済企画庁、1976 年
- 小杉天外『魔風恋風』『明治大正文学全集 第十六巻』春陽堂、1930 年、1–300 頁
- 小林敦子『生としての文学——高見順論』笠間書院、2010 年
- 小林英夫『「満洲」の歴史』講談社、2008 年
- 小松和彦『憑霊信仰論——妖怪研究への試み』講談社、1982 年
- 「憑きもの 解説」小松和彦編『怪異の民俗学① 憑きもの』河出書房新社、2000 年、415–442 頁
- 小宮豊隆『漱石・寅彦・三重吉』角川書店、1951 年
- 小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001 年
- 西條八十「羊」『西條八十全集 第六巻』国書刊行会、1992 年、28 頁
- 西條八十全集編集委員編『西條八十全集 別巻』国書刊行会、2014 年
- 財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第 1–15 巻、ゆまに書房、2008–2009 年
- サイード、エドワード・W『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1987 年
- 齊藤愛「被害者か、英雄か——「唐人お吉」の旅、日本、ヨーロッパ、そして日本へ——」『文学研究論集』第 31 号、筑波大学比較・理論文学会、2013 年 2 月、17–33 頁
- 斎藤美奈子『妊娠小説』筑摩書房、1994 年
- 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』若草書房、1998 年

- 酒井敏「「お吉」探索——十一谷義三郎『唐人お吉』など・諸書の陰影（4）」『中京大学図書館学紀要』第14号、中京大学、1993年3月、1-14頁
- 坂本武「夏目漱石の英文学（序）——比較文学研究的覚え書き」『英文学論集』第47号、関西大学、2007年12月、9-23頁
- 坂本満津夫『評伝・高見順』鳥影社、2011年
- 佐々木基一「解説」安部公房『壁』新潮社、1988年、254-260頁
- 佐々木亨監修『文部省 教育統計・調査資料集成 第三三巻 全国高等女学校・実科高等女学校ニ関スル諸調査 第一巻』大空社、1989年
- 佐々木幸喜「安部公房『箱男』試論——ティンベルヘン『動物のことは』との関わりをめぐって——」『国語国文』第78巻10号、中央図書出版社、2009年10月、19-36頁
- 佐相勉『溝口健二・全作品解説8 『唐人お吉』から『満蒙建国の黎明』へ』近代文芸社、2010年
- 佐藤忠男「対米感覚の戦後史——らしゃめん映画考——」『思想の科学』第5次、第80号、思想の科学社、1968年10月、93-102頁
- 佐藤智美「『三四郎』——「迷羊」の意味するもの——」『弘前大学国語国文学』第17号、弘前大学、1995年3月、19-33頁
- 佐藤靖編『朝日歴史写真ライブラリー 戦争と庶民④進駐軍と浮浪児』朝日新聞社、1995年
- 柴田勝二「受動的な冒険——『羊をめぐる冒険』と＜漱石＞の影——」『東京外国語大学論集』第74号、東京外国語大学、2007年7月、141-161頁
- 『中上健二と村上春樹 ＜脱六〇年代＞的世界のゆくえ』東京外国語大学出版会、2009年
- 柴田元幸・藤井省三他編『世界は村上春樹をどう読むか』文芸春秋、2009年
- 柴田芳男『映画館ものがたり 第2部』精文館、1958年
- 十一谷義三郎『時の敗者 唐人お吉』新潮社、1930年
- 『時の敗者 唐人お吉（続編）』新潮社、1930年
- 『唐人お吉』十一谷義三郎・田畑修一郎・北條民雄・中島敦『現代日本文学全集 79 十一谷義三郎・田畑修一郎・北條民雄・中島敦集』筑摩書房、1956年、84-125頁
- シンガー、ピーター『動物の権利』戸田清訳、技術と人間、1986年

- 『動物の解放』戸田清訳、技術と人間、1988年
- 桂秀実「折り返された「未来」 村上春樹『羊をめぐる冒険』、高橋源一郎『さようなら、ギャングたち』をめぐる」『すばる』第5巻7号、集英社、1983年7月、250-259頁
- 杉浦明平「小羊をねらう狼」『新日本文学』第9巻5号、新日本文学会、1954年10月、139-143頁
- スキヤブランド、アーロン『犬の帝国：幕末ニッポンから現代まで』本橋哲也訳、岩波書店、2009年
- 鈴木直子「一九五〇年代をジェンダー・メタファーで読みかえる」川村湊編『「戦後」という制度——戦後社会の「起源」を求めて』インパクト出版会、2002年、219-222頁
- ステューブ、千種キムラ『「三四郎」試論——『オルノーコ』の意味』『国文学 解釈と鑑賞』第47巻12号、至文堂、1982年11月、193-199頁
- 「「三四郎」試論——続——迷羊について」『国文学 解釈と鑑賞』第48巻8号、至文堂、1983年5月、158-164頁
- 『「三四郎」の世界 漱石を読む』翰林書房、1995年
- 須藤春夫編『広告 広告とは市民とマスコミの敵か味方か』大月書店、1997年
- セジウィック、イヴ・K『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年
- 仙波純一・石丸昌彦編『精神医学』放送大学教育振興会、2006年
- 宗新悟「安部公房「詩人の生涯」論——〈モノ〉とその形」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第14巻、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、2011年3月、391-403頁
- 総理府内閣総理大臣官房広報室編『国民生活に関する世論調査 1983年調査』総理府内閣総理大臣官房広報室、1983年
- 台湾日日新報社編『台湾日日三十年史 附台湾の言論界』ゆまに書房、2004年
- 高石啓一「羊肉料理「ジンギスカン」の一考察」『畜産の研究』第50巻6号、養賢堂、1996年6月、709-716頁
- 「羊肉料理「成吉思汗（ジンギスカン）」の正体を探る」『畜産の研究』第57巻10号、養賢堂、2003年10月、1135-1144頁
- 高階秀爾・馬淵明子編『25人の画家 現代世界美術全集 第4巻 ミレー』講談社、1981年



- 高島青鐘「母をみつめて」井之川巨編『鋼鉄の火花は散らないか 江島寛・高島青鐘の詩と思想』社会評論社、1975年、205-232頁
- 「糸車」『東京南部サークル雑誌集成 第1巻』不二出版、2009年、8頁
- 高野斗志美「安部公房の作品を読む(11) 「詩人の生涯」 <赤いジャケツ>のおはなし——大人のための寓話」『郷土誌あさひかわ』第37巻2号、あさひかわ社、1996年2月、74-78頁
- 高橋ハープさゆみ「屋根裏の狂男——『三四郎』における女性作家・帝国・クィア文学——」『文学』第15巻6号、岩波書店、2014年11月、124-140頁
- 高橋英夫「文芸時評<上>」『読売新聞』1982年7月27日夕刊第7面
- 高橋元弘「ページ」『贗月報 安部公房全集3 サブ・ノート』『安部公房全集3』新潮社、1997年
- ・高橋須磨子・望月新三郎・長田謹三・城戸昇「〔座談会〕下丸子時代の安部公房——一九五一年芥川賞受賞前後」『わが町あれこれ 東京南部ネットワーク誌』第6号、わがまちあれこれ社、1995年6月、36-41頁
- 高橋由貴「大江健三郎のアルバイト小説」『日本文芸論叢』第19巻、東北大学文学部国文学研究室、2010年3月、42-54頁
- 「「人間の羊」における沈黙を囲む饒舌——大江健三郎と遅れてきた戦争(下)——」『日本文芸論叢』第20巻、東北大学文学部国文学研究室、2011年3月、53-62頁
- 高見順『高見順日記 第五-六巻』勁草書房、1965年
- 『深淵』『高見順全集 第三巻』勁草書房、1974年、275-503頁
- 「反時代的考察」『高見順全集 第十八巻』勁草書房、1974年、7-34頁
- 「ヒツジの共食ひ」『高見順全集 第十九巻』勁草書房、1974年、710-711頁
- 『敗戦日記』中央公論新社、2005年
- 高群逸枝『高群逸枝全集 第10巻 火の国の女の日記』理論社、1965年
- 武市銀治郎『富国強馬 ウマからみた近代日本』講談社、1999年
- 竹内洋「教養知識人の運命——三四郎と実人生」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第5号、翰林書房、1995年11月、136-145頁
- 『立身出世主義 [増補版] ——近代日本のロマンと欲望』世界思想社、2005年
- 竹下修子「日本人女性と外国人男性の関係の歴史——らしゃめんとオンリーの比較から」

- 『歴史民俗学』第11巻、批評社、1998年7月、178-195頁
- 『国際結婚の社会学』学文社、2000年
- 武田勝彦他編『大江健三郎文学 海外の評価』創林社、1987年
- 武田悠一「まなごしの帝国主義——ロンドンの漱石／漱石の満州」佐々木英昭編『異文化への視点』名古屋大学出版会、1996年、219-235頁
- 竹葉丈「絵画の効果、写真の機能——写真家・淵上白陽と『満洲グラフ』」財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第15巻、ゆまに書房、2009年、129-144頁
- ・三浦乃利子監修・編集『異郷のモダニズム 淵上白陽と満州写真作家協会』名古屋市美術館・毎日新聞社、1994年
- 竹村和子編著『欲望・暴力のレジーム 揺らぐ表象／格闘する理論』作品社、2008年
- 田崎英明『売る身体／買う身体 セックスワーク論の射程』青弓社、1998年
- 田中貢太郎『会談』玄文社、1919年
- 田中裕之『安部公房の研究』和泉書院、2012年
- 谷真介『安部公房評伝年譜』新泉社、2002年
- 谷泰『神・人・家畜——牧畜文化と聖書世界』平凡社、1997年
- 『牧夫の誕生——羊山羊の家畜化の開始とその展開』岩波書店、2010年
- 谷川健一他編『日本庶民生活資料集成 第28巻』三一書房、1980年
- 田村一郎『羊毛の需給と満洲緬羊の将来』松山房、1934年
- ダワー、ジョン『敗北を抱きしめて 上・下』三浦陽一・高杉忠明訳、岩波書店、2001年
- <sup>チェジェチョル</sup>崔在哲「彷徨する青春——『三四郎』を読む——」『国文学 解釈と鑑賞』第62巻6号、至文堂、1997年6月、44-49頁
- <sup>チェミョンスク</sup>崔明淑「夏目漱石『満韓ところどころ』——明治知識人の限界と「朝鮮・中国人」像——」『国文学 解釈と鑑賞』第62巻12号、至文堂、1997年12月、87-92頁
- 茶園敏美『パンパンとは誰なのか キャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』インパクト出版会、2014年
- 辻本庸子・福岡和子編『あめりかいきものがたり 動物表象を読み解く』臨川書店、2013年
- 津田恒之『牛と日本人——牛の文化史の試み——』東北大学出版会、2002年

土屋忠良『V・D』学究社、1948 年

坪井秀夫「プログラムされた物語——『羊をめぐる冒険』論」『国文学 解釈と教材の研究』

第 43 巻 3 号、学灯社、1998 年 2 月、69–75 頁

出口保夫・アンドリュー・ワット編著『漱石のロンドン風景』研究社、1985 年

デッケルス、ミダス『愛しのペット 獣姦の博物誌』伴田良輔監修、堀千恵子訳、工作舎、  
2000 年

寺田信之介『よく分かる広告業界』日本実業出版、2002 年

デリダ、ジャック『ジャック・デリダ講義録 獣と主権者 I』西山雄二他訳、白水社、2014  
年

——『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』マリ＝ルイズ・マレ編、鶴飼哲訳、  
筑摩書房、2014 年

電通出版事業部編『電通広告年鑑 昭和 51–58 年版』電通、1976–1983 年

電通一〇〇年史編集委員会編『電通一〇〇年史』電通、2001 年

ドイツ社会主義統一党中央委員会附属マルクス＝レーニン主義研究所編『マルクス＝エン  
ゲルス全集 第 24 巻』大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1965 年

鳥羽耕史「『デンドロカカリヤ』と前衛映画——安部公房の「変貌」をめぐる」『日本近  
代文学』第 62 集、日本近代文学会、2000 年 5 月、98–111 頁

——『『人民文学』総目次』『言語文化研究』第 12 巻、徳島大学、2005 年 2 月、A91–A159  
頁

——『運動体・安部公房』一葉社、2007 年

——編『安部公房 メディアの越境者』森話社、2013 年

トーマス、ロジャー『『人間の羊』の人物論』武田勝彦他編『大江健三郎文学 海外の評価』  
創林社、1987 年、21–28 頁

富山太佳夫『ポパイの影に 漱石／フォークナー／文化史』みすず書房、1996 年

友田善行『戦後前衛映画と文学——安部公房×勅使河原宏』人文書院、2012 年

中里機庵『幕末開港綿羊娘情史』赤炉閣、1931 年

中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房、2005 年

中西裕二「動物憑依の諸相——佐渡島の憑霊信仰に関する調査中間報告——」小松和彦編  
『怪異の民俗学① 憑きもの』河出書房新社、2000 年、136–154 頁

- 永平和雄「江馬修と「血の九月」」『在日文芸 民涛』第7号、影書房、1989年6月、304–305頁
- 『江馬修論』おうふう、2002年
- 中村生雄『日本人の宗教と動物観——殺生と肉食——』吉川弘文館、2010年
- 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』青弓社、2013年
- 中山和子『差異の近代——透谷・啄木・プロレタリア文学』翰林書房、2004年
- 中山太郎『愛欲三千年史』パルトス社、1985年
- 夏目金之助『それから』『漱石全集 第六巻』岩波書店、1993年、1–344頁
- 『吾輩は猫である』『漱石全集 第一巻』岩波書店、1993年
- 「小羊物語に題す十句」『漱石全集 第十六巻』岩波書店、1994年、23–26頁
- 『三四郎』『漱石全集 第五巻』岩波書店、1994年、271–608頁
- 『彼岸過迄』『漱石全集 第七巻』岩波書店、1994年
- 「満韓ところどころ」『漱石全集 第十二巻』岩波書店、1994年、227–351頁
- 『門』『漱石全集 第六巻』岩波書店、1994年、345–610頁
- 「英国詩人の天地山川に対する概念」『漱石全集 第十三巻』岩波書店、1995年、21–60頁
- 『英文学形式論』『漱石全集 第十三巻』岩波書店、1995年、21–60頁
- 『文学評論』『漱石全集 第十五巻』岩波書店、1995年
- 『文学論』『漱石全集 第十四巻』岩波書店、1995年
- 『漱石全集 第二十一–二十七巻』岩波書店、1996–1997年
- 波形昭一「解題」台湾日日新報社編『台湾日日三十年史 附台湾の言論界』ゆまに書房、2004年、1–14頁
- 波瀾剛『越境のアヴァンギャルド』NTT出版、2005年
- 成田龍一・道場親信・鳥羽耕史・池田雅人「討議 戦後民衆精神史」『現代思想』第35巻17号、青土社、2007年12月、205–229頁
- 仁科邦男『犬たちの明治維新 ポチの誕生』草思社、2014年
- 西本豊弘他編『人と動物の日本史 1–4』吉川弘文館、2009年
- 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典 あ～せ』日外アソシエーツ、2004年

- 日本学術振興会編『満洲の牧羊』日本学術振興会、1937 年
- 日本近代文学研究所編『種蒔く人』第 1 号、日本近代文学研究所、1961 年 7 月
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第一一十三巻』小学館、2000–2002 年
- 日本経営史研究所編『小岩井農場百年史』小岩井農牧、1998 年
- 日本緬羊協会編『日本緬羊協会史 58 年の歩み』日本緬羊協会、2003 年
- 農林省畜産局編『畜産発達史 本篇』中央公論事業出版、1966 年
- 農林省農務局編『本邦内地ニ於ケル緬羊事情』農林省農務局、1919 年
- 野田公夫編『日本帝国圏の農林資源開発—「資源化」と総力戦体制の東アジア—』京都大学学術出版会、2013 年
- 野間宏「詩誌『列島』発刊について」『野間宏全集 第 16 巻』筑摩書房、1970 年、218–219 頁
- 長谷川啓「解説」江馬修『阿片戦争』ゆまに書房、2004 年、1–6 頁
- 畑本秋一「蚊軍と争闘しつゝ——いまはもう既に眠れる唐人お吉を考へる」牧野守監修『戦前映像理論雑誌集成 第五巻 劇場街 (2)』ゆまに書房、1989 年、225–228 頁
- 波戸岡景太『ピンチョンの動物園』水声社、2011 年
- 原子朗「大手拓次研究」原子朗・林宏太郎『大手拓次全集 別巻』白鳳社、1971 年、5–276 頁
- ハラウェイ、ダナ他『サイボーグ・フェミニズム 増補版』巽孝之他訳、水声社、2001 年
- 原田弘『MP のジープから見た占領下の東京』草思社、1994 年
- 原田平作「日本人とミレー」山梨県立美術館編『ミレー展ボストン美術館蔵開催記念シンポジウム報告書』山梨県立美術館、1986 年、7–19 頁
- ハリス、タウンSEND『日本滞在記 上・下』坂田精一訳、岩波書店、1980 年
- パワーズ、リチャード「ハルキ・ムラカミ広域分散—自己鏡像化—地下世界—ニューロサイエンス流—魂シェアリング・ピクチャーショー」柴田元幸・藤井省三他編『世界は村上春樹をどう読むか』文芸春秋、2009 年、33–84 頁
- 半澤健市「関東大震災とリスボン大震災——天譴論・内村鑑三・ヴォルテール——」『日韓相互認識』第 5 号、「日韓相互認識」研究会、2012 年 2 月、99–121 頁

- バーンズ、スーザン「取り憑かれた身体から監禁された身体へ——精神医学の発生」「江戸の思想」編集委員会編『身体／女性論』ペリかん社、1997年、48–62頁
- 半田淳子『村上春樹、夏目漱石と出会う——日本のモダン・ポストモダン』若草書房、2007年
- 日影丈吉「300万人の大学 61 アテネ・フランセ」『朝日ジャーナル』第22巻24号、朝日新聞社、1980年6月、40–46頁
- 久居つばき・くわ正人『村上春樹の読み方——キーワードの由来とその意味』雷韻出版、2003年
- 肥田琢司・肥田琢司遺稿刊行会編『政界追想——日本終戦秘史とわが生涯』肥田琢司遺稿刊行会、1964年
- 羊をめぐる未来開拓者共働会議編『羊は未来を拓く——記録集・羊シンボ'89・盛岡』羊をめぐる未来開拓者共働会議、1990年
- 兵頭晶子『精神病の日本近代 憑く心身から病む心身へ』青弓社、2008年
- 平井和子『日本占領とジェンダー 米軍・売買春と日本女性たち』有志舎、2014年
- 平石典子「「墮落」する女学生——「女学生神話」を巡る考察（二）——」『文芸言語研究 文芸篇』第40号、筑波大学文芸・言語学系、2001年3月、75–90頁
- 「明治の「煩悶青年」たち」『文芸言語研究 文芸篇』第41号、筑波大学文芸・言語学系、2002年3月、15–49頁
- 「明治東京の「宿命の女」」『文芸言語研究 文芸篇』第51号、筑波大学文芸・言語学系、2007年3月、129–148頁
- 平岡篤頼「安部公房・人と作品」石川淳・三島由紀夫・武田泰淳・安部公房『昭和文学全集 第15巻』小学館、1987年、1043–1049頁
- 平野謙「解説」『大江健三郎集 新潮日本文学 64』新潮社、1973年、525–536頁
- 平山秀介『めん羊——有利な飼育法——』農山漁村文化協会、1982年
- 屋田源四郎「狐憑きの心性史」小松和彦編『怪異の民俗学① 憑きもの』河出書房新社、2000年、267–290頁
- フーコー、ミシェル『狂気の歴史——古典主義時代における』田村俣訳、新潮社、1975年
- 『精神医学の権力——コレージュ・ド・フランス講義 1973–1974 年度』慎改康之

- 訳、筑摩書房、2006 年
- フィールディング、ヘンリー『トム・ジョウズ 1-4』朱牟田夏雄訳、岩波書店、1975 年
- 風来山人『風来六々部集』国民図書株式会社編『近代日本文学大系 第二十三卷』国民図書株式会社、1926 年、709-836 頁
- フォントネ、エリザベート・ド『動物たちの沈黙』石田和男・小幡谷友二・早川文敏訳、彩流社、2008 年
- 布施英利「脳 村上春樹と脳をめぐる冒険」栗坪良樹・拓植光彦編『村上春樹スタディーズ 02』若草書房、1992 年、144-168 頁
- ブラウン、サー・トマス『医師の信仰・壺葬論』生田省吾・宮本正秀訳、松柏社、1998 年
- フロム、ハロルド、ポーラ・G・アレン、ローレンス・ビュエル他『緑の文学批評——エコクリティシズム』伊藤詔子・横田由里・吉田美津他訳、松柏社、1998 年
- ベイン、アフラ『オルノーコ・美しい浮気女』土井治訳、岩波書店、1988 年
- ペリシエ、イヴ『精神医学の歴史』三好暁光訳、白水社、1974 年
- 保坂和夫「詩人の生涯 安部公房のお母さんの質問」『郷土誌あさひかわ』第 37 巻 1 号、あさひかわ社、1996 年 1 月、68-73 頁
- 北海道緬羊協会編『北海道緬羊史』北海道緬羊協会、1979 年
- ボードリヤール、ジャン『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳、法政大学出版局、1984 年
- 本田和子『女学生の系譜』青土社、1990 年
- 本多秋五「歴史小説論の一齣」『すばる』第 2 巻 6 号、集英社、1980 年 6 月、198-221 頁
- 前田勇編『江戸語大辞典』講談社、1974 年
- 前田富祺監修『日本語源大辞典』小学館、2005 年
- 前田ヒサ『マザー牧場誕生物語』産経新聞出版、2014 年
- マザー牧場編『マザー牧場 50 周年記念誌』マザー牧場、2012 年
- 松枝誠「羊をめぐる冒険」論——北海道から満州、そして戦後——『論究日本文学』第 86 号、立命館大学日本文学会、2007 年 5 月、55-66 頁

- 松尾尊兌『大正時代の先行者たち』岩波書店、1993 年
- 真山青果『唐人お吉』『真山青果全集 第六巻』講談社、1976 年、5-144 頁
- 『唐人お吉と攘夷群』『真山青果全集 第六巻』講談社、1976 年、145-286 頁
- 丸山哲史『帝国の亡霊 日本文学の精神地図』青土社、2004 年
- 三浦綾子『ひつじが丘』『ひつじが丘 病めるときも 三浦綾子作品集 第三巻』朝日新聞社、1983 年、3-226 頁
- 三浦雅士『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』新書館、2003 年
- 三浦玲一『村上春樹とポストモダン・ジャパン——グローバル化の文化と文学』彩流社、2014 年
- 水沢不二夫「「三四郎」の＜水＞と＜<sup>ストレイシーブ</sup>迷羊＞」『言語と文芸』第 111 号、おうふう、1995 年 1 月、75-95 頁
- 道場親信「下丸子文化集団とその時代 五十年代東京南部サークル運動研究序説」『現代思想』第 35 巻 17 号、青土社、2007 年 12 月、38-101 頁
- 南満洲鉄道株式会社調査部『満洲・五箇年計画立案書類 第三編第一巻 極秘 農畜産部門関係資料』龍溪書舎、1980 年
- 宮崎昭『食卓を変えた肉食』日本経済評論社、1987 年
- 宮本陽一郎「ショック療法時代の文学と文化——マインド・コントロール・テクノロジーとポストモダン——」鷺津浩子・森田孟編著『アメリカ文学とテクノロジー』筑波大学アメリカ文学会、2002 年、179-195 頁
- ミルワード、ピーター『聖書の動物事典』中山理訳、大修館書店、1992 年
- 村上克尚「動物とファシズム——大江健三郎「奇妙な仕事」論」『日本近代文学』第 79 集、日本近代文学会、2008 年 11 月、108-122 頁
- 「言葉を奪われた動物——大江健三郎「飼育」をめぐる江藤・三島の批評の問題点」『日本文学』第 59 巻 6 号、日本文学協会、2010 年 6 月、34-43 頁
- 「ファシズムに抵抗する語り——大江健三郎「セヴンティーン」における動物的他者の声」『昭和文学研究』第 67 集、昭和文学会、2013 年 9 月、39-50 頁
- 村上春樹「街と、その不確かな壁」『文学界』第 34 巻 9 号、文化公論社、1980 年 9 月、46-99 頁
- 『日出る国の工場』平凡社、1987 年



- 『風の歌を聴け』『村上春樹全作品 1979～1989① 風の歌を聴け 1973年のピンボール』講談社、1990年、5-120頁
- 「自作を語る 新しい出発」『村上春樹全作品 1979～1989② 羊をめぐる冒険』講談社、1990年、I-VIII頁
- 「シドニーのグリーン・ストリート」『村上春樹全作品 1979～1989③ 短篇集 I』講談社、1990年、177-203頁
- 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『村上春樹全作品 1979～1989④ 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』講談社、1990年
- 『1973年のピンボール』『村上春樹全作品 1979～1989① 風の歌を聴け 1973年のピンボール』講談社、1990年、121-255頁
- 「図書館奇譚」『村上春樹全作品 1979～1989⑤ 短篇集 II』講談社、1990年、175-210頁
- 『羊をめぐる冒険』『村上春樹全作品 1979～1989② 羊をめぐる冒険』講談社、1990年
- 「彼女の町と、彼女の緬羊」『村上春樹全作品 1979～1989⑤ 短篇集 II』講談社、1991年、51-58頁
- 「自作を語る 羊男の物語を求めて」『村上春樹全作品 1979～1989⑦ ダンス・ダンス・ダンス』講談社、1991年、I-VIII頁
- 『ダンス・ダンス・ダンス』『村上春樹全作品 1979～1989⑦ ダンス・ダンス・ダンス』講談社、1991年
- 『ノルウェイの森』『村上春樹全作品 1979～1989⑥ ノルウェイの森』講談社、1991年
- 『やがて哀しき外国語』講談社、1994年
- 「メイキング・オブ・『ねじまき鳥クロニクル』」『新潮』第92巻11号、1995年11月、270-288頁
- 「ノモンハン鉄の墓場」『辺境・近境』新潮社、1998年、135-191頁
- 『海辺のカフカ 上・下』新潮社、2002年
- 『アンダーグラウンド』『村上春樹全作品 1990～2000⑥ アンダーグラウンド』講談社、2003年

- 『国境の南、太陽の西』『村上春樹全作品 1990～2000② 国境の南、太陽の西 ス  
プートニクの恋人』講談社、2003 年、1-236 頁
- 『スプートニクの恋人』『村上春樹全作品 1990～2000② 国境の南、太陽の西 ス  
プートニクの恋人』講談社、2003 年、237-476 頁
- 『ねじまき鳥クロニクル』『村上春樹全作品 1990～2000④ ねじまき鳥クロニク  
ル 1』『村上春樹全作品 1990～2000⑤ ねじまき鳥クロニクル 2』講談社、2003  
年
- 『アフターダーク』講談社、2004 年
- ・河合隼雄『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』『村上春樹全作品 1990～2000⑦  
約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いにいく』講談社、2003 年、245-374 頁
- ・佐々木マキ『羊男のクリスマス』講談社、1985 年
- ・——『ふしぎな図書館』講談社、2005 年
- ・松村映三『辺境・近境 写真篇』新潮社、1998 年
- 村瀬士郎<sup>プロセス</sup>「過程としての「三四郎」——<sup>ストレイシープ</sup>迷羊へ、「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」から——」『国語国文学研  
究』第 84 号、北海道大学国語国文学会、1989 年 12 月、36-55 頁
- 村松春水『唐人お吉を語る』十一谷義三郎『唐人お吉』万里閣書房、1929 年、183-246  
頁
- モア、トマス『ユートピア』平井正穂訳、岩波書店、1992 年
- モラスキー、マイク『占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ』鈴木直子訳、  
青土社、2006 年
- 森田草平『続夏目漱石』甲鳥書林、1943 年
- 柳田国男「巫女考（抄）」小松和彦編『怪異の民俗学① 憑きもの』河出書房新社、2000  
年、9-26 頁
- 山内久明「漱石と英文学研究」『漱石全集 第十三巻』月報 13、岩波書店、1995 年 2 月、  
13-16 頁
- 山川健一「書味三昧」『中央公論』第 97 巻 12 号、中央公論社、1982 年 11 月、315-316  
頁
- 山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺—その国家責任と民衆責任』創史社、2011 年
- 編『関東大震災朝鮮人虐殺関連新聞報道史料 第 1-4・別巻』緑蔭書房、2004 年

- 山田博光「安部公房——反共同体の文学」『社会文学』第 11 号、日本社会文学会、1997 年 6 月、128-135 頁
- 山根章弘『羊毛の語る日本史——南蛮渡来の洋服はいかに日本文化に組み込まれたか』PHP 研究所、1983 年
- 『羊毛文化物語』講談社、1989 年
- 山室信一『キメラ 満洲国の肖像』中央公論社、2004 年
- 山本晴彦『満洲の農業試験研究史』農林統計出版、2013 年
- 山本有三『女人哀詞 唐人お吉物語』『山本有三全集 第二巻』岩波書店、1940 年、459-663 頁
- 矢本貞幹『夏目漱石——その英文学的側面』研究社、1971 年
- 横田哲治『天皇の牧場を守れ 鳥インフルエンザとの攻防』日経 BP 社、2006 年
- 横浜市役所編『横浜市史稿 風俗編』横浜市役所、1932 年
- 吉田常吉『唐人お吉——幕末外交秘史』中央公論社、1966 年
- 吉見周子『売娼の社会史』雄山閣出版、1992 年
- 吉本隆明「わが『転向』」『文芸春秋』第 72 巻 5 号、文芸春秋、1994 年 4 月、322-331 頁
- 四方田犬彦「聖杯伝説のデカダンス」『新潮』第 82 巻 1 号、新潮社、1983 年 1 月、286-287 頁
- 「村上春樹と映画」柴田元幸・藤井省三他編『世界は村上春樹をどう読むか』文芸春秋、2009 年、161-180 頁
- リクター、フレデリック「恥の環——『人間の羊』をめぐる」武田勝彦他編『大江健三郎文学 海外の評価』創林社、1987 年、243-252 頁
- 李<sup>リショウキ</sup>承機「データにみる植民地台湾ジャーナリズムの発展」『アジア遊学』第 48 号、勉誠出版、2003 年 2 月、22-29 頁
- ルイス、I・M『エクスタシーの人類学 憑依とシャーマニズム』平沼孝之訳、法政大学出版局、1985 年
- ルービン、ジェイ『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』畔柳和代訳、新潮社、2006 年
- ロルフ、ロバート『『飼育』に於ける無垢の喪失』渡辺美紀・中島顕治訳、武田勝彦他編『大江健三郎文学 海外の評価』創林社、1987 年、232-242 頁
- 渡辺広士「解説」安部公房『R62 号の発明・鉛の卵』新潮社、1983 年、287-292 頁

「一書一会＝ブック・インタビュー」『幻想文学』季刊 3 号、幻想文学会出版局、1983 年 4 月、4-14 頁

『旧新約聖書 文語訳』日本聖書協会、1996 年

『群像』第 65 巻 7 号、講談社、2010 年 7 月

『現代思想』第 35 巻 17 号、青土社、2007 年 12 月

『現代思想』第 37 巻 8 号、青土社、2009 年 7 月

『国文学 解釈と教材の研究』第 39 巻 12 号、学灯社、1994 年 10 月

「商品の知識 マトン（羊肉）」『朝日新聞』1963 年 6 月 9 日夕刊第 4 面

『台湾日日新報』1923 年 9 月 1 日-1944 年 3 月 31 日

『東京朝日新聞』1908 年 9 月 1 日-12 月 31 日

『東京南部サークル雑誌集成 第 1 巻』不二出版、2009 年

『緑色のストッキング』公演パンフレット、1974 年

「村上春樹氏、区切りの年を語る」『朝日新聞』1989 年 5 月 2 日夕刊第 7 面

『ユリイカ臨時増刊号 村上春樹の世界』青土社、1989 年 6 月

『ユリイカ臨時増刊号 村上春樹を読む』青土社、2000 年 3 月

「羊肉売り出す 豚の半値に人気集まる」『朝日新聞』1959 年 12 月 13 日朝刊第 4 面

<欧文文献>

- Beetz, Andrea M., and Anthony L. Podberscek, eds. *Bestiality and Zoophilia: Sexual Relations with Animals*. West Lafayette, IN: Purdue UP, 2005. Print.
- Behn, Aphra. *Oroonoko; or, the Royal Slave*. Eds. Catherine Gallagher and Simon Stern. Boston: Bedford/St. Martin's, 2000. Print. Bedford Cultural Edition.
- Boggs, Colleen Glenney. *Animalia Americana: Animal Representations and Biopolitical Subjectivity*. New York: Columbia UP, 2013. Print. Critical Perspectives on Animals: Theory, Culture, Science, and Law.
- Broglio, Ron. "Sheep, Fairies, and Hogg: Biopolitics of the Ettrick Shepherd." *Essays in Romanticism* 21.2 (2014) 125-140. Print.
- Chapple, Christopher Key. *Nonviolence to Animals, Earth, and Self in Asia*. Albany,

- NY: State U of New York P, 1993. Print. SUNY Ser. in Religious Studies.
- Cho, Yu-Fang. *Uncoupling American Empire: Cultural Politics of Deviance and Unequal Difference 1890–1910*. Albany: State U of New York P, 2013. Print. SUNY Ser. in Multiethnic Lit.
- Dekoven, Marianne. “Guest Column: Why Animal Studies Now?” *PMLA* 124.2 (2009) 361–369. Print.
- Derrida, Jacques. *The Animal That Therefore I Am*. Ed. Marie-Louise Mallet. Trans. David Wills. New York: Fordham UP, 2008. Print. Perspectives in Continental Philos.
- Fielding, Henry. *Tom Jones*. Eds. John Bender and Simon Stern. Introd. John Bender. Oxford: Oxford UP, 2008. Print. Oxford World’s Classics.
- Glotfelty, Cheryll. “Literary Studies in an Age of Environmental Crisis.” Introduction. *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology*. Eds. Cheryll Glotfelty and Harold Fromm. Athens, GA: U of Georgia P, 1996. xv–xxxvii. Print.
- Harris, Townsend. *The Complete Journal of Townsend Harris: First American Consul General and Minister to Japan*. Introd. and notes by Mario Emilio Cosenza. Garden City, NY: Doubleday, 1930. Print.
- Huggan, Graham, and Helen Tiffin. *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment*. 2nd ed. London: Routledge, 2015. Print.
- Kalof, Linda. *Looking at Animals in Human History*. London: Reaktion Books, 2007. Print.
- Lundblad, Michael. “From Animal to Animality Studies.” *PMLA* 124.2 (2009) 496–501. Print.
- Murakami, Haruki. “The (Generally) Sweet Smell of Youth.” Introduction. *Sanshirō*. By Natsume Sōseki. Trans. Jay Rubin. London: Penguin Books, 2009. xxiii–xxxvi. Print.
- Pflugfelder, Gregory M., and Brett L. Walker, eds. *JAPANimals: History and Culture in Japan’s Animal Life*. Ann Arbor, MI: Center for Japanese Studies, U of Michigan, 2005. Print. Michigan Monograph Ser. in Japanese Studies 52.

- Reay, Dave, Pete Smith, and André van Amstel. *Methane and Climate Change*. London: Earth Scan, 2010.
- Rosenthal, Laura J. "Oroonoko: Reception, Ideology, and Narrative Strategy." *The Cambridge Companion to Aphra Behn*. Eds. Derek Hughes and Janet Todd. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 151–165. Print. Cambridge Companion to Lit.
- Rothfels, Nigel. "Zoos, the Academy, and Captivity." *PMLA* 124.2 (2009) 480–486. Print.
- , ed. *Representing Animals*. Bloomington: Indiana UP, 2002. Print. Theories of Contemporary Culture.
- Rubin, Jay. "Sanshiro and Soseki: A Critical Essay." *Sanshiro, A Novel*. Natsume Soseki. Trans. Jay Rubin. Tokyo: U of Tokyo P, 1997. 213–248. Print.
- Shakespeare, William. *The Tragedy of Hamlet*. Ed. Edward Dowden. London: Methuen, 1899. Print. The Works of Shakespeare.
- Southerne, Thomas. *Oroonoko*. Eds. Maximillian E. Novak and David Stuart Rodes. Lincoln: U of Nebraska P, 1976. Print. Regents Restoration Drama Ser.
- Stone, George Winchester, Jr. and George M. Kahrl. *David Garrick: A Critical Biography*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1979. Print.
- Tüür, Kadri, and Morten Tønnessen, eds. *The Semiotics of Animal Representations*. Amsterdam: Rodopi, 2014. Print. Nature, Culture, and Lit. 10.
- Weil, Kari. *Thinking Animals: Why Animal Studies Now?* New York: Columbia UP, 2012. Print.
- "Special Report: The Age of Cloning." *Time* 10 March 1997: 28–29. Print.
- The Bible*. Introd. and notes by Robert Carroll and Stephen Prickett. Oxford: Oxford UP, 1998. Print. Oxford World's Classics. Authorized King James Vers.

## 図版一覧

〔 〕は本論文におけるページ数を示す。

【図 1】〔16 頁〕 『和漢三才図会』（1712）の羊

谷川健一他編『日本庶民生活資料集成』第 28 巻（三一書房、1980 年）518 頁。

【図 2】〔18 頁〕 『三四郎』連載時の挿絵

『東京朝日新聞』1908 年 10 月 26 日第 5 面。

【図 3】〔18 頁〕 『三四郎』連載時の挿絵

『東京朝日新聞』1908 年 10 月 29 日第 3 面。

【図 4】〔18 頁〕 メリノ種

農林省畜産局編『畜産発達史 本篇』（中央公論事業出版、1966 年）916 頁。

【図 5】〔18 頁〕 コリデール種

同上、916 頁。

【図 6】〔61 頁〕 ミレー『晩鐘』（1857–1859）

高階秀爾・馬淵明子編『25 人の画家 現代世界美術全集 第 4 巻 ミレー』（講談社、1981 年）図版 32。

【図 7】〔62 頁〕 ミレー『夕暮れに羊の群れを連れ帰る羊飼ひ』（1857–1860）

同上、図版 34。

【図 8】〔62 頁〕 ミレー『羊飼ひの少女』（1863–1864）

同上、図版 44。

【図 9】〔63 頁〕 ミレー『種播く人』（1850）

同上、図版 17。

【図 10】〔63 頁〕 『種蒔く人』第 1 号表紙（1921 年 2 月）

日本近代文学研究所編『種蒔く人』第 1 号（日本近代文学研究所、1961 年 7 月）表紙。

【図 11】〔148 頁〕 『満洲グラフ』第 3 巻 4 号表紙（1935 年 7 月）

財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第 1 巻（ゆまに書房、2008 年）71 頁。

【図 12】〔150 頁〕 寺島万治『風景』（1937）

財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第 4 巻（ゆまに書房、2008 年）157 頁。

【図 13】〔153 頁〕 『緑色のストッキング』の舞台（1974 年 11 月 9 日初演於紀伊国屋ホール）

安部公房スタジオ編『安部公房の劇場 七年の歩み』（創林社、1979 年）7 頁。

【図 14】〔161 頁〕 「蒙古羊」の改良の様子

財団法人満鉄会監修『満洲グラフ』第 13 巻（ゆまに書房、2009 年）163 頁。

【図 15】〔174 頁〕 羊男の挿絵

村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989② 羊をめぐる冒険』（講談社、1990 年）314 頁。



## 卷末資料

【巻末資料 1】 江馬修「新しい」と言ふこと」

『台湾日日新報』1921年12月31日第6面

[illegible]

## 初出一覧

各章のもとになった既発表論文・口頭発表は以下の通りである。いずれも大幅な加筆・修正を施した。

### 第1章 夏目漱石『三四郎』——「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」の英文学的背景とその解釈——

- ・原題：「『三四郎』における「<sup>ストレイシープ</sup>迷羊」の起源と解釈：『トム・ジョウンズ』との比較を通して」『文学研究論集』第29号、筑波大学比較・理論文学会、2011年2月、105–119頁
- ・原題：“Reception and Domestication of English Literature in Meiji Era Japan: Representation of “Stray Sheep” in *Sanshirō* and *Tom Jones*.” *Journal of English and American Studies* 9 (2010): 113–133. Print.

### 第2章 江馬修『羊の怒る時』——関東大震災における怒れる民衆としての羊——

- ・原題：「江馬修『羊の怒る時』と関東大震災における社会主義者弾圧：『台湾日日新報』との関係からの考察」『文学研究論集』第32号、筑波大学比較・理論文学会、2014年2月、33–46頁

### 第3章 らしゃめんの変容——唐人お吉物語と戦後占領期における羊の表象——

- ・原題：「らしゃめんをめぐる物語の変遷——ジェンダー化された羊の表象に関する一考察」『比較文化研究』第115号、日本比較文化学会、2015年2月、113–123頁
- ・原題：「らしゃめんの変容と戦後占領期文学における羊の表象——高見順『敗戦日記』・大江健三郎「人間の羊」を中心に——」『文学研究論集』第33号、筑波大学比較・理論文学会、2015年2月、25–40頁

### 第4章 安部公房作品における羊の表象

——「満洲」の緬羊政策と牧歌的風景の構築——

- ・口頭発表：「安部公房作品における羊の表象——満洲における牧歌的風景の構築と緬羊

飼育との関係から——」日本比較文学会第 77 回全国大会、立命館大学、京都、2015  
年 6 月

第 5 章 村上春樹『羊をめぐる冒険』——「迷羊」の継承と三人の「羊つき」——

- ・ 原題：“The Representation of Sheep in Modern Japanese Literature from Natsume Sōseki to Murakami Haruki.” *The Semiotics of Animal Representations*. Eds. Kadri Tüür and Morten Tønnessen. Amsterdam: Rodopi, 2014. 217–238. Print.